

高柳遺跡

—高柳遺跡調査報告書—

本文・写真図版編



1995年3月

仙台市教育委員会

序 文

私達の生活している仙台市には、祖先の残した多くの文化財があります。これらの文化財は豊かな自然環境と長い歴史の中で、私達の祖先が創造し育んできたものであり、これを愛護し活用するとともに、後世の子孫に伝えていくことは、私達の重要な責務です。

現在仙台市では、地域経済の発展・交通体系の整備・住宅問題への対応のため各種の事業計画が具体的に進展しています。こうした問題に、広域的に対応できる行政体制の整備として、昭和63年には政令都市となりました。また、こうした体制整備に呼応して各種の地域開発も活発になってまいりました。

仙台市教育委員会は、文化財保護のため、開発にあたっては関係機関と充分な協議を行い調整を図っていますが、やむなく現状のまま保存することができない場合、記録保存のための発掘調査を実施しております。

当高柳遺跡も、縄文時代の遺跡として知られていたが、高速鉄道の延伸に伴う建設予定地となつたため、関係機関と協議の結果、発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、縄文時代中期の人々が使った大量の土器や石器等が発見されました。土器の中には高さが70cmもある大型の深鉢のものや、小型の浅鉢に台が付くものなど大きさも形も様々なものが出土しています。さらに土器に付けられた文様や突起などはダイナミックで、当時の人々の土器作りに対する情熱とエネルギーが感じられ圧倒される思いがします。また石器も大小様々のものが多く出土していますが、これもまた緻密で繊細な技術に驚かされます。当時のままで出土した土笛の音色を聞くと、自然と調和しながら生きていた縄文時代の人々の姿が目の前に浮かんできます。このように、高柳遺跡から出土した大量の遺物からこの周辺には大きな集落があったことが想像できます。

今日、市街地においては様々な開発の進展に伴い、年々往時の景観を見ることができなくなりつつあります。こうした状況の中で、本書が私ども祖先の生活の一端を振り返る貴重な資料となることを期待するとともに、多くの方々に活用され、また、文化財に対する愛護精神の高揚に資することができますれば、望外の喜びとするところです。

最後になりましたが、調査の主旨をよくご理解いただき、献身的に発掘調査や整理作業にご協力いただいた多くの方々、ならびに本報告書刊行にあたり、ご指導・ご助言をいただきました方々に対し、心より感謝申し上げます。

平成7年3月

仙台市教育委員会

教育長 坪山 茂

例　　言

1. 本報告書は、仙台市高速鉄道（仙台市営地下鉄）延伸建設に伴う高柳遺跡（県登録番号19049）の発掘調査報告書であり、既に公表された現地説明会資料等に優先するものである。
2. 出土遺物・図面等の整理は、佐藤好一・工藤信一郎が担当し、本報告書の編集及び執筆は佐藤好一が担当した。
3. 発掘調査及び報告書の作成にあたり、下記の方々から指導・助言を賜った。（敬称略）
藤原妃敏・森 幸彦（福島県立博物館）、阿部 明彦（山形県埋蔵文化財センター）、千田 和文（盛岡市教育委員会）
4. 縄文土器・剝片石器の実測用写真撮影は、「シン技術コンサル株式会社」に委託した。
5. 図版用遺物写真の撮影は、「御写真館ともの」の友野 武氏に委託した。
6. 花粉分析は、東北大学理学部の守田益宗氏に委託し、付属に収めた。
7. 土壌に残存する脂肪の分析は、「株式会社 ズコーシャ総合科学研究所」に委託し、付属に収めた。
8. 石器の石材鑑定は東北大学理学部蟹澤聰史氏にお願いした。
9. 陶器・磁器については、文化財課 佐藤 洋の教示によった。
10. 本調査に関わる遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

凡　　例

1. 本報告書中の土色は、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
2. 遺構等の断面図中の水系レベルは海拔高を示す。
3. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の2.5万分の1地形図「仙台東北部」・「仙台西北部」である。
4. 遺構の略語として便宜的に以下の記号を使用した。

S B：掘立柱建物、S D：溝、S E：井戸、S K：土壌、S I：堅穴、S N：配石、S M：墓壙、
S X：風倒木痕

5. 本書における実測図の縮尺は、遺構実測図は1/60、遺構全体図は1/200、遺物実測図のうち、土器・砾石器は1/3、土製品・磨製石器・石製品は1/2、剝片石器は2/3である。

調査要項

1. 遺跡名 **高柳遺跡** (県登録番号19049)
2. 遺跡所在地 仙台市泉区七北田字高柳
3. 調査期間 野外調査 平成1年5月1日～平成1年10月7日
室内調査 平成2年9月8日～平成7年3月24日
4. 調査対象面積 1,211 m²
5. 調査面積 1,600 m²
6. 調査主体者 仙台市教育委員会
7. 調査担当 野外調査 仙台市教育局社会教育部文化財課
課長 早坂 春一
調査第2係 係長 加藤 正範
〃 教諭 佐藤 好一
〃 主事 工藤信一郎
〃 主事 篠原 信彦
〃 主事 吉岡 恵平
〃 主事 荒井 格
〃 教諭 高倉 祐一
〃 主事 渡部 紀
室内調査 仙台市教育局社会教育部文化財課
課長 早坂 春一 (2～3年度)
〃 白鳥 良一 (4～6年度)
調査第1係 係長 佐藤 隆 (2年度)
〃〃 加藤 正範 (3～4年度)
〃〃 田中 則和 (5～6年度)
〃 教諭 佐藤 好一 (2～6年度)
〃 主事 工藤信一郎 (2～4年度)

8. 野外調査参加者

(調査補助員) 斎藤 彩裕

永野次郎・遠藤栄治・本間春美・高橋喜子・相沢美佐子・加藤久・佐々木匡・熊谷きぬ子・斎藤喜恵子・進藤まさ子・高橋照江・高橋明美・小泉幸子・盤井由美子・熊谷友治・橋野恭子・津田則子・山村よし子・熊谷京子・熊谷清・横田正治・奈須野とよみ・佐藤よし子・後藤幸子・浅野千賀・名古圭子・熊谷キミ子・松浦せい子・山本美代子・伊藤礼子・高橋弘子・若生洋子・斎藤慶子・鈴木京子・関内久子・平照子・堀篠幸子・村本茂子・佐藤和夫・渡辺まさ子・青木よし子・佐藤啓子・筒井尚美・小野妙子・佐藤 久・菅原玲子・昆イヨ・佐藤悦子・村田りつ子・大友とし子・須藤敬子・柴田啓子・小坂千里・金沢君代・砂金よしえ・田中つや子・村山よし子・石川かつ子・白鳥たか子・菊地房江・塩野礼子・服部珠枝・阿部多津子・須佐文恵・石井多賀子・大平いちみ・荒場せい子・西東雅子・千葉きよ子・阿部聰子・中島いく子・湯浅ます枝・吉川隅子・東海林智子・岩崎由美子・佐々木昇子・近藤裕子

(学生) 水沢教子・日下和寿・近藤悟・古澤勝子・石井浩一・高橋裕之・遠藤千穂・鈴木和生子・佐藤裕美・須藤真紀子・板橋美佳・鈴木正道・山浦文彦・高杉禪・斎藤康博・村上光哉・相馬和男・大森統子・阿部健太郎・森麻子・大槻純子・小林恵理子・工藤幹生・日野範彦・早坂清和・佐々木淳・黒田真治

9. 室内調査参加者

(調査補助員) 森 剛男

本間春美・高橋喜子・相沢美佐子・熊谷きみ子・斎藤喜恵子・小泉幸子・山村よし子・奈須野とよみ・佐藤よしこ・熊谷キミ子・松浦せい子・高橋弘子・若生洋子・斎藤慶子・堀笠幸子・村本茂子・渡辺まき子・筒井尚美・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・田中つや子・村山よし子・石川かつ子・塩野礼子・東海林智子・澤田敏子・丸屋浪子・田中世津子・南部節子・坂本千枝・大内節子・佐藤紀子・及川のり子・大友とし子・佐藤優子・鈴木広子・菅原さち子・鶴田和子・千田祐美恵・佐々木昇子・菊地銀子・名古圭子・逆瀬尚子・高橋明美・津田則子・結城次郎・熊谷友治・佐々木匡・加藤久・横田正治・佐藤和夫・佐藤久・高橋照江・阿部聰子・白鳥たか子・進藤まさき子

(学生) 日下和寿・近藤悟・幡野寛治・佐々木淳・遠藤千穂・須藤真紀子・須藤佳代子・三塚里香・阿部健太郎・荒川悦子・和山歌子・西塚真衣子・岡真里子・高橋牧・佐藤浩樹・山口雅子・竹田真帆・大羽美香・菅原操・中西千晶・土屋陽子・寺島学・栗田昌幸・藤原泰弘・古田匠・工藤伸枝・島本香織・管野英幸・萩山田夏江

10. 室内調査作業分担

(遺物写真)

友野武(委託)

(遺構図トレース)

本間春美・若生洋子・高橋弘子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子

(縄文土器断面観察)

森 剛男

(縄文土器接合・復元)

森剛男・熊谷きみ子・奈須野とよみ・佐藤よしこ・熊谷キミ子・斎藤慶子・村山よし子・熊谷きみ子・斎藤喜恵子・石川かつ子・村本茂子・堀笠幸子・相沢美佐子・松浦せい子・澤田敏子・佐藤紀子・佐藤優子・菅原さち子・鶴田和子

(縄文土器展開図用拓本・縄文土器拓本)

森剛男・熊谷きみ子・奈須野とよみ・佐藤よしこ・熊谷キミ子・斎藤慶子・村山よし子・熊谷きみ子・斎藤喜恵子

(縄文土器展開図作成)

昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

(縄文土器実測用写真撮影)

シン技術コンサル株式会社(委託)

(縄文土器実測図作成)

本間春美・石川かつ子・村本茂子・堀笠幸子・相沢美佐子・松浦せい子・澤田敏子・佐藤紀子・佐藤優子・菅原さち子・船田和子

(縄文土器トレース)

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・鈴木広子・高橋喜子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・相沢美佐子・松浦せい子・澤田敏子・佐藤紀子・佐藤優子・菅原さち子・鶴田和子・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

(縄文土器観察表作成)

石川かつ子・村本茂子・堀笠幸子

(剥片石器実測用写真撮影)

シン技術コンサル株式会社 (委託)

(剥片石器実測図作成)

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・鈴木広子・高橋喜子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・昆イヨ・
佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子・鈴木広子・千田祐美恵

(剥片石器トレース)

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・鈴木広子・高橋喜子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子
(砾石器実測図作成)

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・
南部節子・渡辺まき子・山村よし子・筒井尚美・田中つや子・塩野礼子・田中世津子・大内節子

(砾石器トレース)

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・
南部節子・渡辺まき子・山村よし子・筒井尚美・田中つや子・塩野礼子・田中世津子・大内節子・鈴木広子・千
田祐美恵

(土・石製品実測)

昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

(土・石製品トレース)

昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

本文目次

序文・例言・凡例・調査要項

第I章 調査に至る経過	1
第II章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的位置と自然環境	3
第2節 歴史的環境	6
1 旧石器時代	6
2 繩文時代	6
3 弥生時代	7
4 古墳～奈良・平安時代	7
5 中世	8
6 近世	10
第III章 調査の経過と方法	13
第1節 野外調査の経過と方法	13
1 野外調査の経過	13
2 野外調査の方法	14
A 調査区の設定	
B 調査の方法	
第2節 室内調査の経過と方法	16
1 室内調査の計画と経過	16
2 室内調査の方法	16
A 遺物の洗浄	
B 遺物の記名	
C 遺物の接合	
D 遺物の登録	
E 遺物の実測	
F 遺物のトレース	
G 遺物の計測	
H 遺物の重量計測	
I 石材の鑑定	
第IV章 繩文時代の遺構と遺物	29
第1節 基本層位	29

第2節 配石遺構（S N）	30
第3節 土壙（S K）	30
第4節 遺物包含層	39
1 遺物出土状況	39
2 包含層出土の遺物	40
A 繩文土器	40
(1) 第Ⅰ群土器	40
(2) 第Ⅱ群土器	40
【土器の観察】	40
1. 成形技法	
2. 文様	
3. 文様帯の構成	
4. 口縁部文様帯	
5. 脊部文様帯	
6. 口縁部文様帯と脊部文様帯との関係	
7. 器種	
8. 器形	
【土器の分類】	61
B 土製品	113
(1) 土偶	
(2) 土笛	
(3) 土製腕輪	
(4) 土製耳飾	
(5) 土製垂飾品	
(6) 三角擣形土製品	
(7) 男根形土製品	
(8) 三角形土製品	
(9) バイプ形土製品	
(10) 鞘形土製品	
(11) 不明土製品	
(12) 円盤状土製品	
C 剥片石器	124
(1) 石鎌	
(2) 石匙	
(3) 石錐	
(4) 石箒	
(5) 尖頭器	
(6) 不定形石器	
(7) 模形石器	

(8) 石核	
D 磨製石器	13
(1) 磨製石斧	
(2) 石棒	
(3) 石刀	
E 石製品	16
(1) 岩偶	
(2) 有孔石製品	
(3) 舟形状石製品	
(4) 石斧状有孔垂飾品	
(5) 輻石状石製品	
(6) 砥石状石製品	
(7) 篦状石製品	
(8) 棒状石製品	
F 磨石器	16
 第V章 古代以降の遺構と遺物	19
第1節 古代の遺構と遺物	19
1 穹穴遺構 (SI)	19
2 溝 (SD)	19
第2節 近世の遺構と遺物	151
1 基壙 (SM)	151
2 井戸 (SE)	170
3 掘立柱建物跡 (SB)	170
4 1・2層出土遺物	170
 第VI章 考察	155
第1節 第II群土器の編年的位置	155
1 県内出土土器群との比較	155
2 編年的位置	152
第2節 その他の遺物の年代	153
引用・参考文献	
付編1 「高柳遺跡の花粉分析」	東北大学理学部生物学教室 守田益宗
付編2 「高柳遺跡の脂肪酸分析」	㈱ズコーシャ総合科学研究所 帯広畜産大学生物資源化学科

挿 図 目 次

第1図	仙台市高速鉄道北部路線図	1
第2図	七北田川中流域地形区分図	2
第3図	泉区七北田周辺遺跡分布図	4
第4図	室内調査行程フローチャート図	17・18
第5図	遺物計測基準	27
第6図	基本層位図	29
第7図	配石遺構(1)	30
第8a図	配石遺構(2)	31
第8b図	I 区土壤断面図	32
第9図	I 区土壤平面図	33・34
第10a図	調査区全体図	35・36
第10b図	第I群土器集成図	41
第11図	口縁部粘土紐積み上げ法	43
第12図	胸部粘土紐積み上げ法	44
第13図	口縁部と胴部の接合方法	45
第14図	底部底面の痕跡	46
第15図	底部と胴部の接合方法	47
第16図	単位文様(1)	50
第17図	単位文様(2)	51
第18図	土器文様帶分類	53
第19図	深鉢形土器口縁部文様帶分類(1)	54
第20図	深鉢形土器口縁部文様帶分類(2)	55
第21図	深鉢形土器胴部文様帶分類(1)	58
第22図	深鉢形土器胴部文様帶分類(2)	59
第23図	深鉢形土器胴部文様帶分類(3)	60
第24図	深鉢形土器口縁部形態分類	64
第25図	深鉢形土器突起分類	65
第26図	深鉢形土器器形分類	66
第27図	樽形土器器形分類	66
第28図	鉢形土器器形分類	66
第29図	浅鉢形土器器形分類	66
第30図	台付浅鉢形土器器形分類	66
第31図	深鉢形土器器形・文様帶分類(1)	67
第32図	深鉢形土器器形・文様帶分類(2)	68
第33図	深鉢形土器器形・文様帶分類(3)	69
第34図	深鉢形土器器形・文様帶分類(4)	70
第35図	深鉢形土器器形・文様帶分類(5)	71
第36図	樽形土器分類	77
第37図	鉢形土器分類(1)	78
第38a図	鉢形土器分類(2)	79
第38b図	台付浅鉢分類	79
第39図	浅鉢形土器分類	80
第40図	深鉢形土器A群(1)	81
第41図	深鉢形土器A群(2)	82
第42図	深鉢形土器B群(3)	83
第43図	深鉢形土器B群(1)	84
第44図	深鉢形土器B群(2)	85
第45図	深鉢形土器B群(3)	86
第46図	深鉢形土器B群(4)	87
第47図	深鉢形土器B群(5)	88
第48図	深鉢形土器B群(6)	89
第49図	深鉢形土器D群(1)	90
第50図	深鉢形土器C群・D群(2)	91
第51図	深鉢形土器D群(3)・E群(1)	92
第52図	深鉢形土器E群(2)	93
第53図	深鉢形土器E群(3)	94
第54図	深鉢形土器E群(4)	95
第55図	深鉢形土器E群(5)・F群(1)	96
第56図	深鉢形土器F群(2)	97
第57図	深鉢形土器F群(3)	98
第58図	深鉢形土器G群(1)	99
第59図	深鉢形土器G群(2)・I群(1)	100
第60図	深鉢形土器I群(2)	101
第61図	深鉢形土器J群(1)	102
第62図	深鉢形土器J群(2)	103
第63a図	深鉢形土器J群(3)・K群(1)	104
第63b図	深鉢形土器K群(2)	105
第64図	樽形土器 A I～III・B I類	106
第65a図	鉢形土器 A I～V・B I類	107
第65b図	鉢形土器 B II・C I～III・D	
	浅鉢形土器 A I類	108
第65c図	浅鉢形土器 A I～III・B I類	109

第66a 図 浅鉢形土器 B I類	110
第66b 図 浅鉢形土器 B II・C I～IV類	111
第66c 図 注口・有孔・壺・台付浅鉢形土器 A I～B II類	112
第67図 石器分類	125
第68図 石匙分類	128
第69図 石錐分類	130
第70図 尖頭器分類	130
第71図 石箋分類	132
第72図 不定形石器分類(1)	134
第73図 不定形石器分類(2)	135
第74図 石核分類	137
第75図 模形石器分類	137
第76図 穴空遺構平面図	156
第77図 墓墳群平面図	157・158
第78図 墓墳群断面図	159・160
第79図 墓墳群出土遺物(1)	161
第80図 墓墳群出土遺物(2)	162
第81図 墓墳群出土遺物(3)	163
第82図 墓墳群出土遺物(4)	164
第83図 墓墳群出土遺物(5)	165
第84図 墓墳群出土遺物(6)	166
第85図 墓墳群出土遺物(7)	167

第86図 墓墳群出土遺物(8)	168
第87図 墓墳群出土遺物(9)	169
第88図 井戸跡平・断面図	170
第89図 III区ピット群	171
第90図 1・2層出土遺物(1)	172
第91図 1・2層出土遺物(2)	173
第92図 青島貝塚出土土器群	177
第93図 長者原貝塚出土土器群	178
第94図 上野遺跡出土土器群(1)	179
第95図 上野遺跡(2)・大木田貝塚・大松沢貝塚(1) 出土土器群	182
第96図 大松沢貝塚出土土器群(2)	183
第97図 勝負沢遺跡出土土器群(1)	186
第98図 勝負沢遺跡出土土器群(2)	187
第99図 中ノ内B遺跡出土土器群	189

付録2 採団目次

図1 土壤試料採取地点	24
図2 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成	25
図3 試料に残存する脂肪のステロール組成	25
図4 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状 構造図	26

挿表

第1表 泉区七北田周辺遺跡地名表	5
第2表 遺物トレース基準	24
第3表 磨石器計測値検証資料	25
第4表 深鉢形土器の出土状況(1)	37
第5表 深鉢形土器の出土状況(2)	38
第6表 深鉢形土器の出土状況(3)	39
第7表 深鉢形土器の口縁部文様帯 胴部文様帯相関表(1)	62
第8表 深鉢形土器の口縁部文様帯 胴部文様帯相関表(2)	63
第9表 深鉢形土器の口縁部文様帯 胴部文様帯相関表(3)	57

目次

第10表 深鉢形土器の器形・文様帶構成 口縁部文様相関	72
第11表 深鉢形土器の器形・文様帶構成 口縁部文様分類(1)	73
第12表 深鉢形土器の器形・文様帶構成 口縁部文様分類(2)	74
第13表 土偶残存部位・分類一覧表	116
第14表 磨製石斧残存部位・分類一覧表	140
第15表 磨石器素材形態分類	148
第16表 磨石器分類	148
第17表 墓墳集成	155

写真図版目次

図版1	高柳遺跡航空写真	207	図版36	14区4層出土土器(土-4)	202
図版2	調査風景	208	図版37	10・14区3~5層出土土器(土-5)	203
図版3	航空写真・基本層位・配石遺構(1)	209	図版38	14~33区2~5層出土土器(土-6)	204
図版4	配石遺構(2)	210	図版39	15区5層出土土器(土-7)	205
図版5	配石遺構(3)	211	図版40	15区5層出土土器(土-8)	206
図版6	土壤(1)	212	図版41	15区5層出土土器(土-9)	207
図版7	土壤(2)	213	図版42	15区4・5層出土土器(土-10)	208
図版8	土壤(3)	214	図版43	15区4層出土土器(土-11)	209
図版9	土壤(4)	215	図版44	15区4層出土土器(土-12)	210
図版10	土壤(5)	216	図版45	15区4層出土土器(土-13)	211
図版11	土壤(6)	217	図版46	15区4層出土土器(土-14)	212
図版12	土壤(7)	218	図版47	15・16区4・5層出土土器(土-15)	213
図版13	遺物出土状況(1)	219	図版48	15区1~5層出土土器(土-16)	214
図版14	遺物出土状況(2)	220	図版49	15・16区1~5層出土土器(土-17)	215
図版15	遺物出土状況(3)	221	図版50	16区5層出土土器(土-18)	216
図版16	遺物出土状況(4)	222	図版51	16区5層出土土器(土-19)	217
図版17	遺物出土状況(5)	223	図版52	16区4・5層出土土器(土-20)	218
図版18	遺物出土状況(6)	224	図版53	16区4・5層出土土器(土-21)	219
図版19	遺物出土状況(7)	225	図版54	16区4層出土土器(土-22)	220
図版20	遺物出土状況(8)	226	図版55	16区4層出土土器(土-23)	221
図版21	遺物出土状況(9)	227	図版56	16区4層出土土器(土-24)	222
図版22	遺物出土状況(10)	228	図版57	16区4層出土土器(土-25)	223
図版23	遺物出土状況(11)	229	図版58	16区4層出土土器(土-26)	224
図版24	竪穴遺構・掘立柱建物跡(1)	230	図版59	16区4層出土土器(土-27)	225
図版25	掘立柱建物跡(2)・井戸跡(1)	231	図版60	16区4層出土土器(土-28)	226
図版26	井戸跡(2)・墓壙群(1)	232	図版61	16区2・4層出土土器(土-29)	227
図版27	墓壙群(2)	233	図版62	16区4層出土土器(土-30)	228
図版28	墓壙群(3)	234	図版63	16区4層出土土器(土-31)	229
図版29	墓壙群(4)	235	図版64	16区4層出土土器(土-32)	230
図版30	墓壙群(5)	236	図版65	16区4層出土土器(土-33)	231
図版31	墓壙群(6)	237	図版66	16区3・4層出土土器(土-34)	232
図版32	墓壙群(7)	238	図版67	16区3層出土土器(土-35)	233
図版33	4~14区1~5層出土土器(土-1)	239	図版68	16区3・5層出土土器(土-36)	234
図版34	13・14区2~5層出土土器(土-2)	240	図版69	16区2・3層出土土器(土-37)	235
図版35	14区4・5層出土土器(土-3)	241	図版70	16区1・2層出土土器(土-38)	236

图版71	17区 5 层出土土器 (土-39)	27	图版110	18区 2 • 3 层出土土器 (土-76)	316
图版72	17区 5 层出土土器 (土-40)	28	图版111	18区 3 层出土土器 (土-77)	317
图版73	17区 5 层出土土器 (土-41)	29	图版112	18区 1 • 2 层出土土器 (土-78)	318
图版74	17区 5 层出土土器 (土-42)	30	图版113	19 • 20区 4 ~ 6 层出土土器 (土-79)	319
图版75	17区 5 层出土土器 (土-43)	31	图版114	19区 4 • 5 层出土土器 (土-80)	320
图版76	17区 5 层出土土器 (土-44)	32	图版115	19区 4 层出土土器 (土-81)	321
图版77	17区 5 层出土土器 (土-45)	33	图版116	19区 4 层出土土器 (土-82)	322
图版78	17区 4 • 5 层出土土器 (土-46)	34	图版117	19区 4 层出土土器 (土-83)	323
图版79	17区 4 • 5 层出土土器 (土-47)	35	图版118	19区 4 层出土土器 (土-84)	324
图版80	17区 4 层出土土器 (土-48)	36	图版119	19区 4 • 6 层出土土器 (土-85)	325
图版81	17区 4 层出土土器 (土-49)	37	图版120	19区 3 层出土土器 (土-86)	326
图版82	17区 4 层出土土器 (土-50)	38	图版121	19区 4 层出土土器 (土-87)	327
图版83	17区 4 层出土土器 (土-51)	39	图版122	19区 3 层出土土器 (土-88)	328
图版84	17区 4 层出土土器 (土-52)	39	图版123	19区 3 层出土土器 (土-89)	329
图版85	17区 3 • 4 层出土土器 (土-53)	39	图版124	19区 2 层出土土器 (土-90a)	330
图版86	17区 4 层出土土器 (土-54)	39	图版125	19区 2 层出土土器 (土-90b)	331
图版87	17区 4 层出土土器 (土-55)	39	图版126	19区 2 • 3 层出土土器 (土-91)	332
图版88	17区 4 层出土土器 (土-56)	39	图版127	19区 1 ~ 3 层出土土器 (土-92)	333
图版89	17区 3 • 4 层出土土器 (土-57)	39	图版128	19区 1 ~ 4 层出土土器 (土-93)	334
图版90	17区 3 层出土土器 (土-58)	39	图版129	20区 5 层出土土器 (土-94)	335
图版91	17区 3 层出土土器 (土-59)	39	图版130	20区 3 ~ 5 层出土土器 (土-95)	336
图版92	17区 2 ~ 4 层出土土器 (土-60)	39	图版131	20区 4 层出土土器 (土-96)	337
图版93	17区 2 ~ 5 层出土土器 (土-61)	39	图版132	20区 4 • 5 层出土土器 (土-97)	338
图版94	17区 1 ~ 4 层出土土器 (土-62)	39	图版133	20区 3 • 4 层出土土器 (土-98)	339
图版95	18区 5 层出土土器 (土-63)	39	图版134	20区 3 • 4 层出土土器 (土-99)	340
图版96	18区 4 • 5 层出土土器 (土-64)	39	图版135	20区 3 • 4 层出土土器 (土-100)	341
图版97	18区 4 • 5 层出土土器 (土-65)	39	图版136	20区 3 层出土土器 (土-101)	342
图版98	18区 4 层出土土器 (土-66)	39	图版137	20区 3 层出土土器 (土-102)	343
图版99	18区 4 层出土土器 (土-67)	39	图版138	20区 3 层出土土器 (土-103)	344
图版100	18区 4 • 5 层出土土器 (土-68)	39	图版139	20区 2 • 3 层出土土器 (土-104)	345
图版101	18区 4 层出土土器 (土-69)	39	图版140	20区 1 ~ 3 层出土土器 (土-105)	346
图版102	18区 4 层出土土器 (土-70)	39	图版141	21区 3 ~ 5 层出土土器 (土-106)	347
图版103	18区 4 层出土土器 (土-71)	39	图版142	21区 1 ~ 5 层出土土器 (土-107)	348
图版104	18区 3 • 4 层出土土器 (土-72)	39	图版143	21区 4 层出土土器 (土-108)	349
图版105	18区 3 • 4 层出土土器 (土-73a)	39	图版144	21区 4 • 5 层出土土器 (土-109)	350
图版106	18区 3 层出土土器 (土-73b)	39	图版145	21区 2 ~ 4 层出土土器 (土-110)	351
图版107	18区 3 层出土土器 (土-73c)	39	图版146	21区 1 ~ 4 层出土土器 (土-111)	352
图版108	18区 3 层出土土器 (土-74)	39	图版147	21区 2 ~ 4 层出土土器 (土-112)	353
图版109	18区 3 层出土土器 (土-75)	39	图版148	17 • 21区 2 ~ 4 层出土土器 (土-113)	354

图版16	22区4层出土土器(土-114)	35
图版16	22区4层出土土器(土-115)	36
图版16	22区4层出土土器(土-116)	37
图版16	22区4层出土土器(土-117)	38
图版16	22区4层出土土器(土-118)	39
图版16	22·23区2~4层出土土器(土-119)	39
图版16	22区1~4层出土土器(土-120)	40
图版16	23区4层出土土器(土-121)	42
图版16	23区4层出土土器(土-122)	43
图版16	23区4层出土土器(土-123)	44
图版16	23区4层出土土器(土-124)	45
图版16	23区4层出土土器(土-125)	46
图版16	23区3·4层出土土器(土-126)	47
图版16	23区1~4层出土土器(土-127)	48
图版16	23·24区1~4层出土土器(土-128)	49
图版16	24区4层出土土器(土-129)	50
图版16	24区4层出土土器(土-130)	51
图版16	24区4层出土土器(土-131)	52
图版16	24区4层出土土器(土-132)	53
图版16	24区4层出土土器(土-133)	54
图版16	24区1~3层出土土器(土-134)	55
图版16	24区1~3层出土土器(土-135)	56
图版16	25区4层出土土器(土-136)	57
图版16	25区4层出土土器(土-137)	58
图版16	25区4层出土土器(土-138)	59
图版16	25区4层出土土器(土-139)	60
图版16	25区3·4层出土土器(土-140)	61
图版16	25区3·4层出土土器(土-141)	62
图版16	25区4层出土土器(土-142)	63
图版16	25区4层出土土器(土-143)	64
图版16	25区5层出土土器(土-144)	65
图版16	25区3·4层出土土器(土-145)	66
图版16	26区2~4层出土土器(土-146)	67
图版16	26区4层出土土器(土-147)	68
图版16	26区4·5层出土土器(土-148)	69
图版16	26区4层出土土器(土-149)	70
图版16	26区3·4层出土土器(土-150)	71
图版16	26区4层出土土器(土-151)	72
图版16	26区2~4层出土土器(土-152)	73
图版16	26区4层出土土器(土-153)	74
图版16	26区4层出土土器(土-154)	75
图版16	27区4·5层出土土器(土-155)	76
图版16	27区4层出土土器(土-156)	77
图版16	27区4层出土土器(土-157)	78
图版16	27区4层出土土器(土-158)	79
图版16	27区4层出土土器(土-159)	80
图版16	27区4层出土土器(土-160)	81
图版16	27区4层出土土器(土-161)	82
图版16	27区4层出土土器(土-162)	83
图版16	27区4层出土土器(土-163)	84
图版16	27区4层出土土器(土-164)	85
图版16	27区3·4层出土土器(土-165)	86
图版16	27区4层出土土器(土-166)	87
图版16	27区4层出土土器(土-167)	88
图版16	27区4层出土土器(土-168)	89
图版16	27区4层出土土器(土-169)	90
图版16	27区3·4层出土土器(土-170)	91
图版16	27区1~4层出土土器(土-171)	92
图版16	27区2层出土土器(土-172)	93
图版16	28区4·5层出土土器(土-173)	94
图版16	28区4·5层出土土器(土-174)	95
图版16	28区4层出土土器(土-175)	96
图版16	28区4层出土土器(土-176)	97
图版16	28区4层出土土器(土-177)	98
图版16	28区4层出土土器(土-178)	99
图版16	28区4层出土土器(土-179)	100
图版16	28区4层出土土器(土-180)	101
图版16	28区4层出土土器(土-181)	102
图版16	28区4层出土土器(土-182)	103
图版16	28区4·5层出土土器(土-183)	104
图版16	28区4层出土土器(土-184)	105
图版16	28区4层出土土器(土-185)	106
图版16	28区4层出土土器(土-186)	107
图版16	28区4层出土土器(土-187)	108
图版16	28区3·4层出土土器(土-188)	109
图版16	28·29区4层出土土器(土-189)	110
图版16	28区4层出土土器(土-190)	111
图版16	28区1~4层出土土器(土-191)	112

図版27	28区2~4層出土土器(土-192)	43	図版26	土製品(土-7)	42
図版28	28~29区1~5層出土土器(土-193)	44	図版27	土製品(土-8)	43
図版29	29区4~5層出土土器(土-194)	45	図版28	円盤状土製品(円-1)	44
図版30	29区3~4層出土土器(土-195)	45	図版29	円盤状土製品(円-2)・石製品(石-1)	45
図版31	29区3~4層出土土器(土-196)	47			
図版32	29区2~3層出土土器(土-197)	48	図版30	石製品(石-2)	46
図版33	30区4~5層出土土器(土-198)	49	図版31	石製品(石-3)	47
図版34	30区4層出土土器(土-199)	49	図版32	石製品(石-4)	48
図版35	30~31区3~4層出土土器(土-200)	49	図版33	石鏃(鏃-1)	49
図版36	31区4層出土土器(土-201)	49	図版34	石鏃(鏃-2)・石匙(匙-1)	49
図版37	31区4層出土土器(土-202)	49	図版35	石匙(匙-2)	51
図版38	31~32区3~4層出土土器(土-203)	49	図版36	石匙(匙-3)	52
図版39	30~32区1~4層出土土器(土-204)	49	図版37	石匙(匙-4)	53
図版40	32区4層出土土器(土-205)	49	図版38	石匙(匙-5)	54
図版41	32区4層出土土器(土-206)	49	図版39	石匙(匙-6)	55
図版42	32区4層出土土器(土-207)	49	図版40	石匙(匙-7)	56
図版43	26~32区4層出土土器(土-208)	49	図版41	石錐(錐-1)	57
図版44	32~33区2~4層出土土器(土-209)	49	図版42	尖頭器(尖-1)	58
図版45	33区4層出土土器(土-210)	51	図版43	石箇(箇-1)	59
図版46	33区4層出土土器(土-211)	52	図版44	石箇(箇-2)	59
図版47	33~35区3~4層出土土器(土-212)	53	図版45	石箇(箇-3)・石核(核-1)	60
図版48	34~35区4層出土土器(土-213)	54	図版46	石核(核-2)	61
図版49	33~35区4層出土土器(土-214)	55	図版47	石核(核-3)	61
図版50	2~15区遺構出土土器(土-215)	56	図版48	石核(核-4)	61
図版51	表探・遺構出土土器(土-216)	57	図版49	楔形石器(楔-1)	65
図版52	土偶(偶-1)	58	図版50	不定形石器(不-1)	66
図版53	土偶(偶-2)	59	図版51	不定形石器(不-2)	67
図版54	土偶(偶-3)	60	図版52	不定形石器(不-3)	68
図版55	土偶(偶-4)	61	図版53	不定形石器(不-4)	69
図版56	土偶(偶-5)	62	図版54	不定形石器(不-5)	70
図版57	土偶(偶-6)	63	図版55	不定形石器(不-6)	71
図版58	土偶(偶-7)	64	図版56	不定形石器(不-7)	72
図版59	土偶(偶-8)	65	図版57	不定形石器(不-8)	73
図版60	土製品(土-1)	66	図版58	不定形石器(不-9)	74
図版61	土製品(土-2)	67	図版59	不定形石器(不-10)	75
図版62	土製品(土-3)	68	図版60	不定形石器(不-11)	76
図版63	土製品(土-4)	69	図版61	不定形石器(不-12)	77
図版64	土製品(土-5)	70	図版62	不定形石器(不-13)	78
図版65	土製品(土-6)	71	図版63	不定形石器(不-14)・磨製石斧(斧-1)	79

图版34 磨製石斧(斧-2)	50	图版34 磨石器(砾-19)	53
图版35 磨製石斧(斧-3)	51	图版35 磨石器(砾-20)	53
图版36 碾石器(砾-1)	52	图版36 碾石器(砾-21)	53
图版37 碾石器(砾-2)	53	图版37 碾石器(砾-22)	53
图版38 碾石器(砾-3)	54	图版38 碾石器(砾-23)	54
图版39 碾石器(砾-4)	55	图版39 碾石器(砾-24)	55
图版40 碾石器(砾-5)	56	图版40 碾石器(砾-25)	56
图版41 碾石器(砾-6)	57	图版41 碾石器(砾-26)	57
图版42 碾石器(砾-7)	58	图版42 碾石器(砾-27)	58
图版43 碾石器(砾-8)	59	图版43 碾石器(砾-28)	59
图版44 碾石器(砾-9)	59	图版44 碾石器(砾-29)	59
图版45 碾石器(砾-10)	59	图版45 碾石器(砾-30)	59
图版46 碾石器(砾-11)	59	图版46 碾石器(砾-31)	59
图版47 碾石器(砾-12)	59	图版47 碾石器(砾-32)	59
图版48 碾石器(砾-13)	59	图版48 碾石器(砾-33)	59
图版49 碾石器(砾-14)	59	图版49 碾石器(砾-34)	59
图版50 碾石器(砾-15)	59	图版50 碾石器(砾-35)	59
图版51 碾石器(砾-16)	59	图版51 碾石器(砾-36)	59
图版52 碾石器(砾-17)	59	图版52 墓墳群出土遺物(1)	59
图版53 碾石器(砾-18)	59	图版53 墓墳群出土遺物(2)	59
		图版54 墓墳群, 1・2層出土遺物(3)	59

第Ⅰ章 調査に至る経過
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境



第Ⅰ章 調査に至る経過

仙台市は、宮城県の中心都市として多くの都市機能が集中し、人口の増加とともに都市としての機能は市域を越えて成長し続け、現在では東北地方の中心都市としての機能を持つに至っている。しかし、人口の増加に伴う市街地の拡大は、交通量の増加による交通渋滞等快適な都市生活を送る上で大きな障害となってきた。

このような状況の中で、仙台都市圏の基幹交通として登場して来たのが仙台市高速鉄道南北線である。21世紀に向けて躍進する仙台の原動力として大きな期待と役割を担って、昭和63年7月富沢～八乙女間が運行を開始した。

仙台市教育委員会は、高速鉄道建設に先立ち、路線内及びその周辺の分布調査を行った。その結果、南部の富沢・大野田地区に多くの遺跡が分布することが判明した。このため、路線にかかる遺跡の発掘調査を、昭和56年4月から開始し、昭和61年12月の調査をもって完了した。

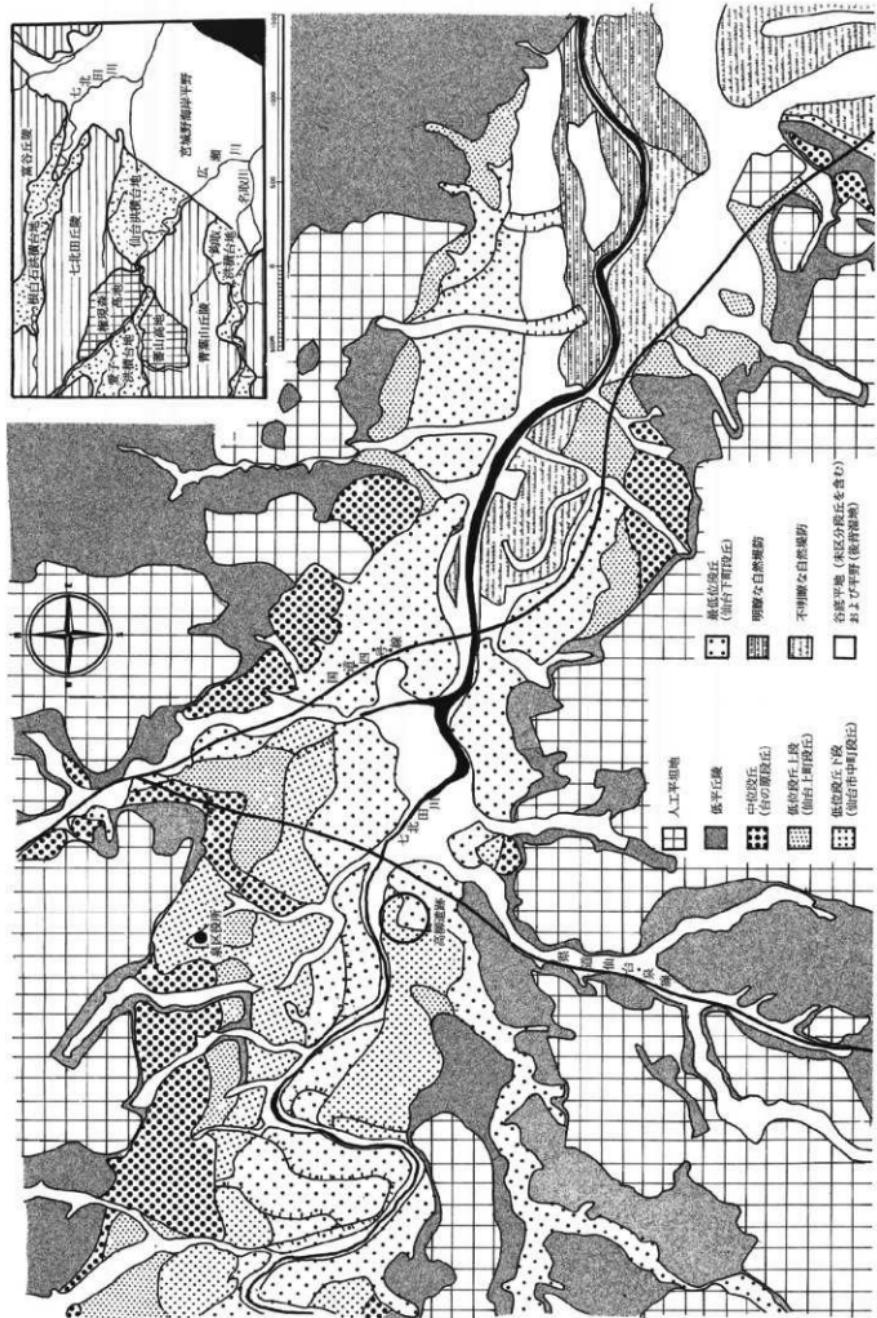
その後、八乙女～泉中央間の延伸が計画され、計画路線上に泉区七北田字高柳に所在する高柳遺跡がかかることが判明した。平成元年3月10日付けで仙台市交通局から、高柳遺跡の発掘通知が提出された。計画によると遺跡の中心部をほぼ南北に高架橋を建設するものであった。仙台市教育委員会は、事前に仙台市交通局と協議を重ねた結果、記録保存を前提とした発掘調査を実施する運びとなり、平成元年5月1日から発掘調査を開始した。調査の結果遺物を大量に包含する遺物包含層が発見されたため、調査期間を当初の8月末から2ヶ月延長し、10月21日に野外調査の一切を完了した。出土遺物はテンバコで約1,000箱という極めて多量なものであった。室内調査は平成2年9月から着手し、7年3月で完了し報告書を刊行するという運びとなった。



第1図 仙台市高速鉄道北部路線図

中川・石田 1985年「仙台市地形区分図」仙台市地形区分図

第2図 七北田川流域地形区分図



第II章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的位置と自然環境

1. 地理的位置

宮城県仙台市は、東北地方中部太平洋岸に位置する人口958,705人、面積 788.05 km²(1994年10月1日現在)の都市である。1889年(明治22年)4月、市町村制が施行され県内初の市として誕生した。その間、周辺市町村との編入・合併を繰り返し1987年、隣接する宮城町と、1988年には泉市・秋保町と合併し、1989年に政令指定都市に移行し現在にいたっている。東西 50.4 km、南北 31.2 km の市域は地勢の面でも変化に富み、西部は急峻な奥羽山脈を中心とした山岳地帯、中央部はなだらかな丘陵地帯および台地、そして東部には低平な沖積平野が広がり、海岸線の長大な砂浜をもって太平洋に面している。気候は温帯湿润気候下にあり、太平洋岸型気候区に属している。仙台管区気象台の観測による年平均気温の年平均値は11.9°C、年降水量は1,200 mmである。

高柳遺跡は、仙台市北部にある泉区の七北田字高柳地内に所在する。当地は泉区市役所から南西0.8 kmの地点にあり、北緯38°18'40"、東経140°52'35"に位置している。

2. 自然環境

本遺跡が所在する仙台市と、その北部に位置する泉区の地形と地質を概観してみる。

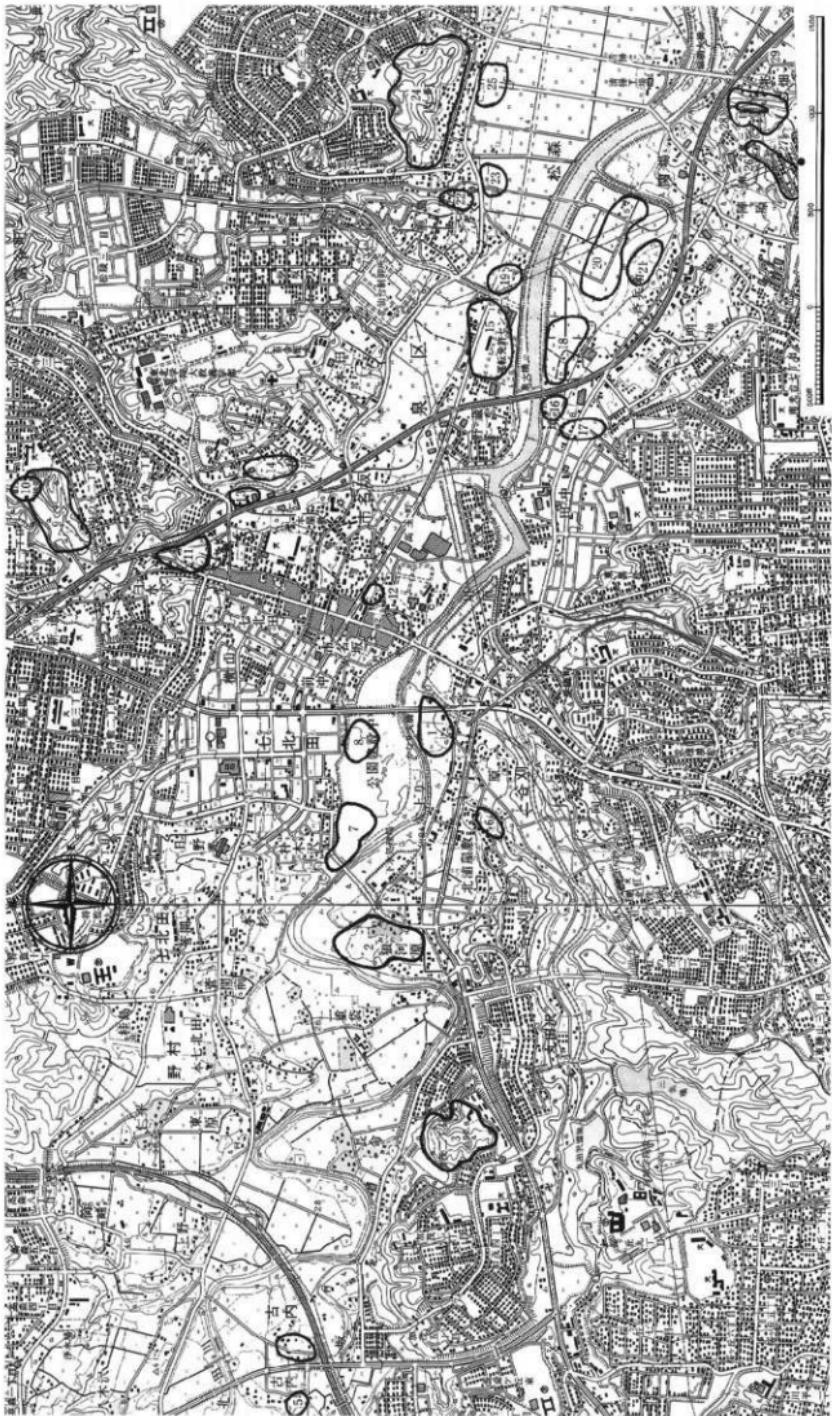
仙台市は地学的に東北日本弧外帯に位置し、仙台市域とその周辺の地形は、西から東にかけて山地・丘陵地・低地のおおむね3つに大別できる。山地は、東北地方を南北に縦走する奥羽脊梁山脈の一部をなしており、新第三紀後期以降第四紀にかけての隆起帶で、第四紀火山を頂部にのせている。この山地は北西部を占める船形連峰とこれに連なる二口連峰とからなり、七北田川・名取川・広瀬川はここに源を発し仙台湾に注いでいる。これらの河川やその支流は山地内で深く谷を刻んでいるため、険峻な地形を呈している。

山地と低地の中間に位置する丘陵地は、起伏が比較的ゆるやかで、稜線の高度も良く揃っている。この丘陵地は西から東にかけて緩やかに高度が低くなり、丘陵地を刻む谷も西部から東部にかけて浅くなり、谷底面や河岸段丘面がより広く発達する傾向にある。丘陵地は6つに区分することができるが、泉区に分布する七北田丘陵と富谷丘陵をみてみると、富谷丘陵は七北田川左岸、仙台市と黒川郡の境界付近に位置し、主として新第三紀上部の堆積岩類・火碎岩類で構成されている。分水界が南に偏っているため丘陵を開析する小河川の多くは黒川郡の吉田川に注いでいる。七北田丘陵は、七北田川右岸部の東西に連なる丘陵である。主な地質は東部が仙台層群、西部が秋保層群からなっている。丘陵はかなり開析され、七北田川と広瀬川の分水界が著しく南側に位置することから小河川の多くは七北田川の支流となっている。七北田川は上流部では南流するが、実沢付近で流路を東にかえ泉区の中央部を蛇行しながら流下し、蒲生付近で太平洋に注ぐ。

七北田川の流域には、第四紀中期更新世以降に形成された河岸段丘面が発達している。中流域では河岸段丘が中位(台ノ原段丘)・低位上段(仙台上町段丘)・低位下段(仙台中町段丘)・最低位(仙台下町段丘)の4段が認められる。高柳遺跡はこの七北田川中流右岸の低位段丘(仙台中町段丘)上に立地している。

*本節は仙台市史編さん委員会(1994)：「仙台市史 特別編 1 自然」を多く参照した。

第3図 溝区七北田周辺道路分布図



第1表 泉区七北田周辺遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	高柳遺跡	泉区七北田字高柳	段丘	包含地	縄文・近世
2	沼遺跡	泉区上谷刈字沼・達世堂・塚	段丘	集落跡	縄文中期・近世
3	長命館跡	泉区賀茂二丁目	丘陵	城館跡	中世
4	宮下遺跡	泉区古内字宮下	沖積地	集落跡	奈良・平安
5	間の上遺跡	泉区古内字間の内	段丘	散布地	縄文
6	貴富祢遺跡	泉区上谷刈字貴富祢	丘陵	散布地	縄文・平安
7	赤生津遺跡	泉区七北田字赤生津	段丘	包含地水田跡	縄文晚期・弥生・平安
8	柳遺跡	泉区七北田字柳・矢下	沖積地	散布地	古代
9	洞雲寺遺跡	泉区山の寺二丁目	丘陵	散布地	縄文晚期
10	山の寺廃寺跡	泉区山の寺二丁目	丘陵斜面	寺院跡	中・近世
11	新道遺跡	泉区市名坂字新道	段丘	散布地	縄文
12	石止遺跡	泉区市名坂字石止	段丘	散布地	平安
13	鳥居原遺跡	泉区市名坂字鳥居原	段丘	散布地	縄文
14	天神沢遺跡	泉区市名坂字天神沢	段丘	散布地	縄文
15	鹿島遺跡	泉区市名坂字鹿島	自然堤防	集落跡	平安
16	境A遺跡	泉区七北田字境	沖積地	散布地	古代
17	境B遺跡	泉区七北田字境	段丘	散布地	縄文中期
18	上河原遺跡	泉区松森字上河原	沖積地	散布地	古代
19	竹之内遺跡	泉区市名坂字竹之内	自然堤防	集落跡	奈良・平安
20	館遺跡	泉区松森字館	沖積地	散布地	古代・中世
21	新庄遺跡	泉区松森字新庄	沖積地	散布地	平安
22	本町遺跡	泉区市名坂字本町	段丘	散布地	縄文
23	岡本前遺跡	泉区松森字岡本	沖積地	散布地	縄文・古代
24	松森城跡	泉区松森字内町	丘陵	城館跡	中世
25	城前遺跡	泉区松森字城前	沖積地	散布地	古代
26	長岫遺跡	泉区松森字長岫・南光台東三丁目	丘陵	集落跡	旧石器・縄文・弥生・古代
27	松森焰硝藏跡	泉区南光台東二丁目	丘陵	藏跡・散布地	縄文・古代・近世
28	住吉遺跡	泉区南光台東三丁目	段丘	包含地	旧石器・縄文早期・近世
29	住吉塚群	泉区南光台東三丁目	段丘	塚	不明

第2節 歴史的環境

高柳遺跡の所在する泉区を中心とした七北田川中流域の歴史的環境を、主に遺跡のあり方から概観することとする。

1. 旧石器時代

現在のところ泉区最古の遺跡は、松森地区の住吉遺跡（第3図28）である。昭和60年泉市教育委員会が実施した調査（泉市教委：1987）で、21点の旧石器時代前期の石器と晚期・後期の石器約200点が出土している。表土下の褐色火山灰層上から円形スクレイパー・尖頭器・石刃等の晚期旧石器が出土し、「下層の灰白色火山灰の下位からは後期旧石器が出土している。さらに下層の水成堆積層の上部からは前期旧石器が出土した（仙台市）。住吉遺跡に隣接する長崎遺跡（第3図26）の調査（泉市教委：1985）では、後期旧石器時代と考えられる5点の尖頭器と1点の細石刃核が出土している。他に局部磨製石斧が1点出土している。福岡地区の西上野原遺跡でも石刃が発見されている（大塚・竹内：1987）。旧石器時代の遺跡は、他に3ヶ所知られているが詳細は明らかでない。

2. 繩文時代

縄文時代になると、七北田川流域の河岸段丘上には多くの遺跡が営まれるようになる。調査が行われた遺跡には上流から上鳥井原遺跡・柴山遺跡・沼遺跡・高柳遺跡・赤生津遺跡・長崎遺跡がある。

上鳥井原遺跡では、中期の竪穴住居跡が4軒発見されているが詳細は不明である。

柴山遺跡の調査（柴山遺跡発掘調査班：1977）では、早期～前期の土器や石器とともに3棟の竪穴住居跡と5基の集石遺構が検出されている。竪穴住居跡は保存状態が悪いため規模や炉・柱穴など不明であるが、3棟とも円形の平面形とおもわれる。集石遺構は比較的大型の河原石を円形に配置したものであるが、下部の造構などは不明である。

沼遺跡（第3図2）の調査（仙台市教委：1992）では、中期末の大木10式期の竪穴住居跡が8棟と中期前半・末頃の遺物包含層・土坑40基が発見されている。これら竪穴住居跡の平面形は円形のものが多いが、ややつぶれた楕円形のものや、隅丸方形のものもある。床の面積は最小が9.5 m²、最大が19.6 m²で平均すると14 m²程度である。中心となる柱の数は、4本柱のもの、3本柱のもの、2本柱のものの3種類があり、それぞれ数本の補助柱がつく。これら竪穴住居跡の炉はいずれも、土器埋設石組部・敷石石組部・掘り込み部とからなる複式炉である。土器埋設部は炉の長軸上の頂点にあり、土器を正立した状態で埋設し、土器のまわりを偏平な小さい河原石で一・二重に囲んでいる。敷石石組部は、平面形が長方形で、断面形は逆台形状になっている。床面からの深さは20～30 cmである。偏平でほぼおなじ大きさの河原石を用いているが、埋設土器に接する奥壁には大きな一枚石を据えている。掘り込み部は住居の壁に接して作られ、平面形は正方形で深さが敷石石組部より浅い。炉全体の長軸は1.9～2.7 mと長大で竪穴住居跡のほぼ半径に相当する。

高柳遺跡の対岸にある赤生津遺跡（第3図7）の調査（仙台市教委：1990）では、遺跡西端部で遺物包含層と土壤6基・焼土遺構6基が発見されている。遺物包含層は、第3層と第4層に分層された。第4層からは、中期初頭～前期初頭、中期の大木7・9・10式、後期の宝ヶ峯式が出土している。第3層からは晩期最終末の大洞A'式期の土器が比較的まとまって出土しており、この時期の土器編年を考える上で良好な資料となっている。

長崎遺跡（第3図26）の調査（泉市教委：1985）では、晩期末の竪穴住居跡1棟、中期末～前期初頭の竪穴造構1基、土壤9基が発見されている。竪穴住居跡は東半分を欠くが円形を基調とした平面形で、地床炉がある。竪穴造構は東半分を欠くが不整形の平面形であった。土壤の平面形には、円形基調のものと方形基調のものが認めら

れている。うち1基から大洞A～A'の深鉢形土器が出土している。他に滑石製で、平面が円形の狹状耳飾が1点出土している。形態から前期のものと推定されている。

洞雲寺遺跡（第3図9）からは、長軸180cm・短軸35cm・深さ56～70cmの落とし穴が発見されている。

3. 弥生時代

現在、弥生時代の遺跡としては赤生津遺跡と長袖遺跡だけである。

長袖遺跡（第3図26）の調査（泉市教委：1985）では弥生時代中・後期の土器とともに大型船刃石斧が出土しているが、遺構は検出されていない。

赤生津遺跡（第3図7）の調査（仙台市教委：1990）では、弥生時代後期の天王山式期の土壙1基と焼土遺構1基を検出している。土壙は長軸176cm、短軸54cm以上で深さ16cmあり、隅丸の長方形を基調とした平面形である。遺物は出土していないが、確認面の層位から天王山式期と考えられる。焼土遺構は残存長34×26cmの焼面で、中央部がやや凹み周辺に炭化物が分布していた。この周辺から4点の石器や陶片が出土した。土壙同様確認面の層位から天王山式期のものと考えられる。他に弥生時代後期と考えられる河川跡も発見されている。

4. 古墳～奈良・平安時代

A 集落跡

古墳時代～奈良・平安時代の遺跡は、七北田川流域の自然堤防上を中心として分布している。昭和57・58年に宮城県教育委員会が発掘調査（宮城県教委：1984）を実施した鹿島（第3図15）・竹之内遺跡（第3図19）からは、平安時代の堅穴住居跡が3棟・掘立柱建物跡が2棟・柱列跡が2基・溝跡7基・土壙が5基発見されている。これらの遺構は、出土遺物から9世紀中葉から10世紀前葉の時期と11世紀前半の2つの時期があるようである。遺構の堆積土からは土師器・須恵器の外に鐵錠が3点、刀子が4点、鍛造工具と考えられる半月形鉄製品が1点出土している。岡遺跡は連続する自然堤防上に立地しており、恐らく周辺の低地は水田として利用されていたものと考えられる。

当遺跡の西方2.5kmにある宮下遺跡（第3図4）からも、昭和48年の調査（宮城県教委：1980）で、平安時代の堅穴住居跡が1棟と年代不明の焼土遺構1基が発見された。堅穴住居跡の床面上からは、側面形が「く」の字形を呈し鉢が2～3個つく、へら状の鉄製品が2点出土している。鞍金具の一部と考えられている。住居内のピットからは刀子が1点出土している。また、住居内の貯蔵穴からは「林」の墨書のある土師器が6点、須恵器が1点出土している。「林」名の名字・地名には「林連廣山（常陸国司）」・甲斐国山梨郡の「林部」・「林戸」がみられ、これらの地との関わりを考えると興味深いものがある。

長袖遺跡（第3図26）の調査（泉市教委：1985）では奈良・平安時代の堅穴住居跡5棟と焼土遺構15基が検出されている。平面形はいずれも方形を基調とした隅丸のもので、カマドをもっており、この時期の一般的な集落と考えられる。

B 水田跡

七北田川中流左岸の最低位段丘（仙台下町段丘相当）上に立地している赤生津遺跡（第3図7）の調査（仙台市教委：1990）では、10世紀前半に降下した灰白色火山灰におおわれた水田跡が発見された。約16000m²の調査面積中、3,400m²以上におよぶ水田跡を検出した。畦畔によって区画された38区画の水田跡が検出されているが、平面形は方形基調・三角形・台形・不定形と規則性に欠けバラエティに富んでいる。面積も最小の59.9m²から最大の495.8m²のものまで様々である。一方、畦畔の配列をみると、南北方向の畦畔は真北から0°～10°の範囲で西にずれるだけで規則性があるのに対し、これに取りつく東西方向の畦畔は地形の傾斜に沿って作られている。従って、南北方向

の畦畔は磁北方向を十分意識した規則性のある条里型の地割りと考えられる。

灰白色火山灰層の最も厚く堆積しているところで 40 cm 程であった。この層は 7 層に細分することができ最下層の 3 cm 程が火山灰降下の一次堆積と考えられ、降下直後の雨などによって二次堆積した結果、厚く堆積したものと考えられている。本市南部の宮沢遺跡（仙台市教委：1984）等では火山灰を翻込んで耕作を継続している痕跡があるが、赤生津遺跡では火山灰降下直後の厚い二次堆積のため、水田を放棄してしまったと考えられる。

C 寺院跡

宮城郡と黒川郡との郡界付近にある標高 252.3 m の堂庭山山頂南斜面にある堂庭庵寺跡は、昭和43年の調査（泉市教委：1968）によって、10世紀と推定される宝塔跡が発見された。方形の瓦積基壇があり、基壇上から12基の躰石および、躰石下の根石・堀方が発見された。これらは、ほぼ 1.50 m の等間隔で直線にはならず、円周をなすように並んでおり十二角形の建物（宝塔）が想定されている。年代は基壇出土の瓦および周辺出土の土師器・須恵器から10世紀前半と考えられている。

5. 中世

鎌倉時代後期、実沢・小角・西田中地区は山村とよばれ鎌倉御家人高柳氏が地頭職を有していた。領家は不明だが、現地の管理は代官郡司太郎が行っていたようである。南北朝期には山村の地に、山村城が築かれ、後醍醐天皇の皇子山村宮を擁する南朝方大河戸隆行らの拠点となった。観応の乱以後、宮城郡東部を留守氏、西部を国分氏が支配した。こうして現在の泉区は国分氏の領地となり戦国期に至った。国分氏は天文頃に松森城に移るが、やがて伊達氏に攻められ、天正16年頃に松森城は伊達氏家臣の領地になった。このころ泉区一帯も伊達氏の支配下に入ったと考えられる。文献資料が乏しいため以下遺跡・遺物で泉区の中世の歴史を補足することとする。

A 館跡

泉区内には、12ヶ所の館跡が知られている。主な館跡について概観する。

西田中地区にある杭城館跡は、七北田川支流田中川をさかのぼった最奥部、白木峠の分水嶺から東に延びた丘陵の一支脈杭城山にあり、沖積地から約 4 km も隔たる山中に立地している。昭和54年の測量調査（泉市教委：1980）の結果、東西約 800 m、南北約 400 m、面積約 30 ha の大規模で保存良好な館跡であることが判明した。これら遺構群は、最西辺に位置し最高所から南側に延びる遺構群（西郭）とこれに接続して東西・南北の尾根に展開する遺構群（中央郭）、東辺に位置し尾根の鞍部全体に広がる遺構群（東郭）の 3 つからなっている。東郭は東西 250 m × 南北 200 m の規模で、南北は急斜面となって谷に面し、東西は土塁によって区画されている。中央郭は中央部がくびれた東西 90 m × 南北 30 m の細長い平場を主体としている。西郭は南北に延びる細長い尾根上に遺構を配置している。「仙台領古城書立之覚」・「仙台領古城書上」・「封内風土記」・「安永風土記」には山野内城（山邑城）の須藤刑部（須藤刑部少輔）が結城七郎に攻め落とされたため、杭城に立籠ったとある。城名の由来についても、杭を建て櫓として防備したためとある。この後、天正12年（1584）須藤刑部は福岡の首藤坂で落命したと伝えられ、首藤坂には刑部の供養碑（中央に「南無地蔵大菩薩」右側に「大内五兵衛・天正十二年・首藤刑部少輔定信墓」と2行あり左には「七月四日桜田彦六母」とある）が、実沢の林泉寺には墓碑（中央に「常景母堂經定大禪定門」右側に「天正十二年七月初四日」左に「首藤刑部少輔定信墓」）がある。本城の特色は、経済基盤となるべき沖積地から隔離し、交通上の要地とも考えられない山中に立地している点にある。自然地形を生かしながら、平場・土塁・空掘等が巧みに配置されており、とても杭を建てて櫓とするような仮の城ではない。本地域は、南北朝期には争乱の一拠点であったことから、戦国期より以前から存在していた（藤沼・小井川他：1981）と考えた方が理解しやすい。

上谷刈地区的長命館跡（第3図3）は、近世以来「吾妻鏡」に記載される「国府中山物見岡」の跡と伝えられてきた。七北田川中流域右岸の河岸段丘上に立地して、東西 250 m × 南北 300 m 程の規模で前面は急斜面、側面は谷

によって西され、背後は丘陵に続くが空掘で尾根を切っている。内部は空掘によって区画された5つの郭から構成されている。これらの郭は、北から南を経て東へと弧状に配置され、全体として「C」状を呈している。泉市教育委員会の発掘調査（泉市教育委：1986）によると、13～15世紀の遺物しか出土せず、平安時代末～鎌倉時代初期には遙かのぼらないことが明らかになった。戦国期には、国分氏の家臣団に編入された長命氏の館跡と推定されている。

松森地区にある松森城跡（第3図24）は七北田川左岸の標高90mの独立峰上に立地し、2つの平場や空掘・土塁などの遺構が認められる。「仙台領古城書立之覚」には「古城 東西四十五間南北十六間、南に堀幅十六間、長百四十間、右城主国分彦九郎盛重小泉村ヨリ取移、天正年中迄居住申由」とあり「二ノ丸 東西十六間、南北十六間、右城主高平大学ト申者御座候、右大学ト申者ハ國分彦九郎盛重家来之由申伝候」とある。

宍沢地区にある山野内城跡（山村館・山岳館）は、七北田川の右岸の断崖絶壁上に築かれている。北部は比高50mの段丘崖で冲積地に望み、南側は小さな沢によって画され、西側は堀切によって分断された東西300m×南北100m程の規模で、3つの郭からなっている。東郭は径20mの円形平場を最高所に配し、下段にも平場や腰郭を巡らしている。中央郭は北部が失われているが、腰郭を2～3段巡らし、南側からの谷が中央郭につきあたる部分の斜面に平場を配している（藤沼・小井川他：1981）。「仙台領古城書上」には、「城主 山内須藤刑部少輔 永禄年中迄居住 相州鎌倉山内殿末孫ト申伝候」とあり、杭城の項には、「須藤刑部少輔 結城七郎ニ山野内城ヲ被賣落」とある。大槻文彦は「伊達行朝勅皇事歴」のなかで、「白河文書」や「石川文書」にみえる山村館を山村官の在所と考えた。

根白石地区にある白石城は、東西100m、南北80mのほぼ方形に近い平場があり、背後の北・西から東へと高さ3mの土塁が鉤形に巡り、外周に深さ3m、幅10mの空掘がある。「仙台領古城書立之覚」には「白石三河ト申者御座候、其子孫白石勘助ト申者御座候」とある。

福沢城跡は「仙台領古城書上」には「東西七十五間、南北二十五間」とあり、城主は近江の弟、古内重広である。「宮城郡誌」には、「横40間、長さ25間。溝あり、巾2間半、深さ7尺」とある。

朴沢古城跡は、「仙台領古城書上」には「東西50間、南北30間」「風土記」には「山ノ内西館」として「東西50間、南北20間」とある。「宮城郡誌」には「八乙女館」として「長さ60間、横50間。溝の深さ丈余、巾2間」とある。

福岡地区にある福岡館跡は、標高170mの尾根を中心に東西南北の各方向に延びた尾根上に配置されており、その規模は東西250m×南北300mほどである。最高部には、東西80m×南北30m程の平場がある。この平場の西の尾根には、空掘によって画された小規模な郭がある。北側も狭い尾根を3条の空掘で断ち切った2つの細長い小さな平場がある。南側の尾根上にも2つの平場があり平場縁に土塁と空掘を配し、空掘で尾根を切っている。東側の尾根上には、高い段によって画された細長い平場が約30m程延び空掘によって切られている。ここから300m程離れた尾根続きの東端部に土塁・空掘を持つ小平場がある（藤沼・小井川他：1981）。「仙台領古城書立之覚」には記載がなく、唯一「宮城郡誌」に「葛西清重十一代の孫左京太夫の弟大崎隼人清宗の居館。清宗後鶴田に改む。その子若狭天正年間來たりてこの地に拠る」とあるが典拠は明らかでない。

『鬼柳文書』文和5年（1353）正月日の和賀義綱軍忠状によると、同月18日北朝方の吉良貞經・和賀義綱らは「小曾沼城」・「一名坂城」を落とし、翌日「山村城」へ向かい、南部氏・浅利氏らを降している。「一名坂城」は現在の市名坂周辺にあったと考えられ、「小曾沼城」も市名坂の高玉町付近と考えられるが、いずれも場所を特定できない。「山村城」も宍沢の山野内城とする説もある。

B 寺院跡

洞雲寺の縁起は、境内にある重興洞雲御寺碑によると、慶雲年間定恵の開基という。暦応年間に領主国分盛胤が明峰素吉押師を招請し、再興したといわれている。その後、応永年間に領主国分盛行の援助を受けた梅国祥三が堂塔を新替したといわれている。中世に洞雲寺が存在したことを確実に裏付ける資料としては、同寺所有の銅鐘（宮

城県指定文化財)がある。永正15年(1518)の紀年とともに龍門山洞雲禪寺の名が記されている。

平成4年の仙台教育委員会による発掘調査(仙台市教委:1993)の結果、中世の遺構は検出されなかったが、13~14世紀の中国産の天目茶碗や16~17世紀の中国産染付けの磁器、15世紀以降と考えられる遺物が出土しており、付近に中世の遺構が存在する可能性がある。

C 集落・水田跡

館跡以外の遺跡からも中世の遺構や遺物が発見されている。鹿島(第3図15)・竹之内遺跡(第3図19)(宮城県教委:1984)からは、常滑窯と考えられる壺の副部破片が1点出土しており、鎌倉時代と考えられている。

赤生津遺跡(第3図7)の調査(仙台市教委:1990)では、10世紀前半に降下した灰白色火山灰に被われた水田跡の上層に中世の水田があった可能性が高い。また土壙が3基検出されている。遺物では、13世紀前半以前の山茶碗系のもの、13~14世紀の中国産の青磁皿・白磁や北宋錢が出土している。

D 板碑

15基の板碑がある(泉市:1986)。七北田地区の永仁の碑1基(「パク」永仁2年)、松森地区の松森薬師堂板碑1基(「パン」)、西田中地区的神屋敷板碑1基(「ア」)、根白石地区的弘安の碑1基(「パク」弘安8年)、新坂下板碑群2基(「キリク」乾元2年・「ア」)、館下板碑群3基(「キリク」・「キリク」延慶・「種子不明」)、福岡地区的慶庵の碑1基(「キリク・サ・サク」の弥陀3尊)、小山板碑群2基(「パン」嘉元4年・「キリク」)、東泉板碑群3基(「ア」・「サ」・「種子欠」)である。移動し原位置をとどめないものも多くあると考えられるが、板碑群の付近になんらかの中世の遺構の存在が考えられる。

6. 近世

A 近世の七北田村

現在の泉区には、松森・市名坂・七北田・野村・上谷刈・古内・実沢・小角・田中・根白石・福岡・朴沢の12ヶ村があり、すべて宮城郡亘山根通に所属していた。

本遺跡から、近世の建物跡と井戸・屋敷墓が発見されているので、近世の七北田村周辺の様子を概観してみることとする。

「正保輝帳」には七北田宿と記載され、田26貫753文、畠35貫888文、新田633文とある。「元禄郷帳」には七北田村宿とあり、727石36斗とある。「天保郷帳」(内閣文庫「大保郷帳 蘭奥 十四」)には、1605石5斗8升とある。「七北田村安永風土記」では田76貫964文、畠42貫188文で、内100貫356文が蔵入地で18貫796文は給所である。

当村に田宅を持つ100石の番士以上の者は、「伊達世臣家譜」(平:1978)から拾うと小島氏(950石)・小島氏(105石)・大塚氏(130石)・白土氏(虎間番士 364石8斗3升)の4家であった。また、「宮城郡亘山根敷銘委帳」(多賀城市:1988)によると、当村に居・侍屋敷を持つ藩士は、白土三左衛門(1軒)・古内木奎兵衛(3軒)・犬飼銘(1軒)・小島庄三郎(1軒)・錦戸秀治(1軒)・安倍留一郎(1軒)の6人である。また、市名坂二柱神社の社家金剛院の寄進帳(七北田村:1966)によると、寛文10年には、藩士39名、同家中67名、文化8年には、藩士25名、同家中12名の名がみえる。また、明治9年の「宮城県地誌」によると七北田村には土族6戸(人口114人)とある。さらに、明治20年の戸籍には(七北田村:1978)、犬飼清長・沢崎直行・古内義尾・犬飼成美・錦戸景訓・岡影行・高田短重・佐藤吉・古川雅次・斎藤行明・白土愛次郎・佐々木広保・松田官藏ら13人の名がみえる。また、「七北田村安永風土記」には八乙女の阿弥陀堂は、犬飼清蔵の知行所の内とある。また同書には須益御林が以前、錦戸治太夫・犬飼多利之丞の御預林だったとある。

次に農民をみていくことにする。寛文11年の「松森熊野堂建立勅進帳」(七北田村:1978)に見えた寄進者数は50人である。明和9年の「封内風土記」には人頭85戸、安永3年の「七北田村安永風土記」によると人頭69人で浄満

寺1人、家数96軒（名子・借屋を含む）、男女都合485人、内男266人、女219人、馬76疋とある。天明元年の「市名坂金剛院書出」（七北田村：1978）には人頭67、借家28、文化8年「市名坂金剛院神社明細帳」（七北田村：1978）には人頭54、文政12年の「市名坂金剛院書出」（七北田村：1978）には人頭60、借家10とある。

これら農民の内、代数有之百姓・品替百姓は「七北田村安永風土記」によると17人である。これらはいずれも町屋敷に住居し、代数有之百姓には、検断の新三郎・組頭の山三郎・与三郎・五兵衛・小肝入の覺左衛門、並御百姓の七右衛門・三治・弥左衛門・新助・権兵衛・文八郎・甚兵衛・八五郎・平六・新兵衛・勘右衛門、品替百姓には、検断の新三郎の高祖父重兵衛である。他に名が見えるのは、肝入の仲四郎・雷神社の地主で町屋敷に居住する百姓圓之助、熊野三社の地主で町屋敷の百姓清三郎・薬師堂の地主で町屋敷の百姓嘉吉・孝子として山守屋敷の久兵衛・よね兄妹の名がある。また「七北田村安永風土記」によると小名として、赤坂・中新田・赤生津・須塙・前沖・口向坂・白水坂・狐沢・丹波沢・大久新田・柏方・東裏・苔ノ田とともに高柳という名がみえる。屋敷名としては町屋敷が57軒・八乙女屋敷が5軒・山守屋敷が2軒・台屋敷が2軒・西原屋敷が2軒とある。

B 近世の遺跡

近世の遺跡としては、昭和57年に調査（泉市教委：1984）を実施した松森焰硝蔵跡（第3図27）がある。現在のところ初出の文献は、正徳5年（1715）の「軍器秘教」で、仙台藩焰硝蔵として砂押御蔵・若林御蔵・鷺ヶ森御蔵・山中御蔵・辰ノ口御蔵とともに松森蒲田御蔵の名が見える。宝暦6年（1756）の「藩秘録」には若林を欠く5ヶ所の名がある。

残存していた3基の内、2基の調査が行われ1基は保存されている。調査の結果（泉市教委：1982）1号焰硝蔵跡は、東西約45m×南北約31mの規模で、内部は15.5m×17.0mの長方形を呈し土壘を巡らしている。この土壘は、下端5.3~8.4m、上端0.9~2.0m、高さ2.3~2.9mの大規模なものである。内部には梁間15尺、桁行30尺で3間×5間の建物が1棟ある。掘り方底面に石を置き、その上に根石を敷き礎石を据えるという堅固な下部構造となっている。建物を取り壊して敷石があり、入口まで続いている。敷石の周りには溝を巡らしており、排水溝と考えられる。これら建物跡・敷石・溝の下から14×17mの不整形で断面が摺鉢型で深さが1.6mある穴が検出された。火薬の爆発によって生じた爆発穴と考えられる。建物跡・敷石・排水溝は爆発後に生じた爆発穴を埋めて構築されたものである。建物跡周辺や溝からは、模瓦・片切平瓦・軒瓦・丸瓦・棟瓦・熨斗瓦等が出土しており模瓦等と考えられる。1号焰硝蔵跡の北隣にある2号焰硝蔵跡は、東西約32m×南北約19mの規模で内部に11.4×13.6mの不整形で断面が摺鉢型の穴があり1号焰硝蔵跡と同様爆発穴と考えられている。2号焰硝蔵跡は、爆発後廃棄されたと考えられる。2号焰硝蔵跡の北隣にある3号焰硝蔵跡は、もっとも保存状態が良いため保存されており、現存する仙台藩焰硝蔵跡唯一のものである。東西40m×南北27mの規模で高さ3.3m以上の土壘を巡らしている。これら焰硝蔵跡の創建年代は「軍器秘教」や「仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調」から元禄5~6年以降、正徳5年以前と考えられている。爆発年代・再建年代とも不明であるが、明治初期には廃絶している。

平成4年の仙台市教育委員会による洞雲寺遺跡の発掘調査（仙台市教委：1993）の結果、安永4年に建立され、昭和18年に焼失した開山堂の礎石が検出された。開山堂を構築するための地業は、斜面を削平し斜面下に盛土をして平場を造成しており、山地形を大きく改変するものだった。平場に礎石を据えるための掘り方を掘り、根石を數いて礎石を設置している。斜面を削平して岩盤が露出している部分の礎石は小さく、盛土をして地盤の弱い部分には大きめの礎石を据える等の地業の工夫が見られる。礎石下部に敷かれた根石の中には墨書きのあるものが9点出土しているが性格は不明である。現廟裏東方の平場から土壌を27基検出している。土壌の壁が焼けているものや堆積土中に焼土があるものがあり、古錢・煙管や骨片が出土しているので、火葬に関わる土壌と考えられている。

第Ⅲ章 調査の経過と方法



第III章 調査の経過と方法

第1節 野外調査の経過と方法

1. 野外調査の経過

平成元年5月1日(月)より、調査員佐藤・工藤とスタッフ33名の体制で調査を開始した。調査地点は居久根の杉林と近世の墓地跡、これらの南の畠地、北の水田であった。北側の水田をI区、杉林をII区、畠をIII区として調査を進めることとした。調査開始時点では杉林は伐採が完了し、墓地は地表に露出している墓石は撤去が終わっていた。杉林の伐採後の下枝を搬出して清掃したところ、地表面で多量の土器片を採取することができ、良好な遺物包含層の存在が予想できた。そのため杉林の抜根作業は慎重を要するため、七北田川に隣接する調査区北部の水田であるI区から調査を開始することとした。水田耕作土を除去した地山面で、土壤や堅穴遺構、溝などを検出した。南の杉林のII区寄りにわずかに包含層が残存していた。

水田のI区の遺構検出・精査と一部並行して、5月11日より杉林のII区の抜根作業を行った。抜根にはツンドラ地帯の構掘機に使われているツインヘッダーで根の大きい部分を粉碎してチップ状にし、細い根はチェンソーおよびノコギリを使った。

5月22日からバックホーによってII・III区の表土除去作業に取りかかった。その結果、表土中から多くの礫が出土し、しかも規則的に配置されているものであることが判明した。これら礫群は墓地があった場所と略一致しているため、墓石下の石組と判断された。

6月12日からは、地表の遺物散布状況からもっとも多量に遺物を包含していると推定されるII区の状況を知るためにII区南端の28・29区を先行して調査することとした。その結果、1層表上下には遺物を多量に包含する4つの層が存在することが明らかになった。しかもこの包含層はII区を中心にIII区までひろがることも判明した。

6月30日には水田地区の精査が終了したため、II区に主力を注ぐこととし、近世墓壙群を除いたII区北半の表土下の包含層の精査にかかった。毎日出土遺物が増えていった。

7月5日、北仙台小学校第6学年PTAの父兄24名が体験学習として発掘調査に参加した。

7月10日から近世墓壙群の石組の実測を開始する。石組の観察の結果、約31組の石組があることが判明し、それぞれの石組下部に墓壙の存在が予想された。

当初想定したよりも良好な遺物包含層が存在し、出土遺物も多量であるため、調査計画を再検討する必要が出てきた。そこで、8月9日に交通局高速鉄道部と調査日程について再協議を行った。当初の計画では8月末に調査完了の予定であったが、10月21日までに調査を完了するということになった。

8月10日から石組をはずしながら下部の墓壙の検出作業と精査を開始する。

9月12日に近世墓壙群の精査を完了し実測にとりかかった。合計34基の墓壙群であった。近世墓壙群の実測と並行して、II区南半の包含層の精査にとりかかった。

9月18日からは調査員2名(古岡・荒井)を増員し、III区の精査にとりかかった。III区はII区の包含層の遺物の出土量は多くないが、近世の井戸とピット群を検出した。

さらに、9月26日から調査員2名(高倉・渡部)、10月2日から調査員1名(篠原)を増員し、10月は調査員計7名、スタッフ98名の体制で調査を進めた。

10月5日には調査の略全容が明らかになつたので報道機関に公開し、7日に一般市民を対象に現地説明会を実施した。一般市民・研究者約100名の参加があった。

10月21日には、土層断面図・調査区全景写真・花粉分析及び脂肪酸分析用の土壤サンプリングを行い調査的一切を完了した。5月1日からの実働日数106日であった。

2. 野外調査の方法

A 調査区の設定

八乙女駅から北上する高速鉄道の計画路線は、遺跡内をやや東にカーブしながら北上している。そこで調査区の設定にあたっては、工事に係る与点IP-3とIP-4の線上に任意の点③と④を設定し、③の点で直交する①・②・③・④を設けて基準線とした。標高は与点の水準点 No301（標高 22.356 m）を基準とした。各点の国家座標及び標高は以下の通りである。

X座標	Y座標	標 高
①-187,269.482	4,493.380	21.841
②-187,238.275	4,482.651	21.954
③-187,212.742	4,473.873	21.972
④-187,184.372	4,464.119	22.171
⑤-187,156.002	4,454.366	22.012
⑥-187,208.841	4,485.221	22.229

これら点③～⑥と、これに直交する点①～②～④～⑤を基準線として3m区画のグリッドを設定した。地区名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し両者の組み合わせで呼ぶこととし、点③の南東の区をAE21区と定めた。また南北に長い調査区なので、水田のある13区以北をI区、杉林のある14～29区をII区、II区をさらに20区以北のII区北半と21区以南のII区南半とし、30～38区をIII区として調査を進めることとした。II・III区に分布する3層以下の各層については3m区画のグリッドを1.5m区画の小グリッドに4分割して遺物を取り上げた。それぞれの小グリッドは、北西をa区とし時計回り方向にそれぞれb・c・d区とした。

B 調査の方法

【遺構調査の方法】

検出した遺構は、下記のように遺構の種類毎にアルファベットの記号を使い、発見順にアラビア数字の番号を付けて登録した。

各遺構の堆積土の精査にあたっては、廃絶後の周辺からの土砂流入状況を把握するため、4分割もしくは2分割した断面観察用のベルトを残して調査した。

S B : 挿立柱建物	S D : 溝	S E : 井戸	S I : 積穴遺構
S K : 土壙	S N : 配石遺構	S M : 墓壙	S X : 風倒木痕

【遺物の取り上げ方法】

出土した遺物は遺物カードに必要事項を記入して取り上げた。左側は切り取り遺物と一緒に収納し、右側を「出土遺物台帳」とした。最終的には遺物番号No1～10025まで取り上げた。

遺構のうち、積穴遺構(SI)・井戸(SE)・風倒木痕(SX)については4分割し、土壙(SK)・墓壙(SM)は2分割して、それぞれ分割した小区ごとに取り上げた。

包含層出土の遺物については、比較的まとまりがある状態で出土した縄文土器は1/10の平面図を作成し、ナンバ

ーを付して取り上げた。その他の小破片の繩文土器は、区・層ごとにまとめて取り上げた。

遺跡名	89高柳	遺物番号	
年月日		種別	
地区名		遺構名	
層位	層	細部	
出土状況			
・			
遺存状況			
・			
その他の			
写真	無・有 [MC · RD]		
実測	無・有 [No · No]		
報告場所			

遺跡名89高柳
遺物番号
年月日
地区名
細部
層位
層

[実測図の作成方法]

(断面図)

各遺構の堆積状況を観察するために残したベルトの断面図を1/20で作成した。堆積土の色調・土質・土性の特徴を合わせて記録した。

(平面図)

国家座標の確定している点①～⑥を基準点とした簡易な遺り方測量によって平面図を作成した。平面図にはそれぞれ標高を記入してある。遺構および調査区内の平面図は1/20で作成したが、包含層の遺物出土状況および遺構内の遺物出土状況については1/10とした。

[写真記録の方法]

写真記録としては、35mm版モノクロ写真と35mm版カラーリバーサル写真(スライド用)を併用した。重要な記録の一部は、6×4.5インチ版モノクロ写真・6×7インチ版モノクロ写真・6×7インチ版カラー写真を適宜使い分けて記録した。空中写真は委託とし、ラジコンヘリコプターを使って6×4.5インチ版モノクロ写真と6×4.5インチ版カラー写真を撮影した。

35mm版カラーリバーサル写真は遺構ごと、包含層遺物出土状況は地区ごとに整理してスライドファイルに収納した。重要なものについてはデュープレして保存した。カラーリバーサル以外のモノクロ写真は、すべてベタ焼きしネガアルバムに収納した。

各遺構については原則として、検出面での確認状況写真、断面観察用のベルトの堆積状況写真、完掘状況写真を撮影し、適宜細部写真や遺物出土状況写真を撮影した。

遺物包含層については、出土状況を実測したものと土偶などの特殊な遺物の出土状況を撮影した。その他必要と判断されたものについては適宜撮影し記録した。

[その他の記録方法]

調査経過や調査内容中重要なものは、調査日誌に記録した。

第2節 室内調査の経過と方法

1 室内調査の計画と経過

膨大な遺物量のため室内調査は困難が予想された。そこで効率的な室内調査を運営するため、計画的な室内調査を実践するよう努めた。5年間を通じた「長期計画」・年度毎の「中期計画」・月毎の「短期計画」をそれぞれ年度当初・月当初に策定し調査を進めた。月毎の「短期計画」は実績記録としての性格となり、実績記録を基に「中期計画」を修正しながら「長期計画」実現を計った。

また室内調査を実施するにあたっては、それぞれの調査工程の流れを視覚的に把握することを主なねらいとし、第4図のようなフローチャートを作成して進めた。当初の「長期計画」とは行程の細部で違いが出てきたが、最終的な期間と予算は略当初策定した「長期計画」通りであった。

2 室内調査の方法

A 遺物の洗浄

【縄文土器】

平箱約1,000箱、総重量約4.9t(洗浄後)という多量の縄文土器の洗浄作業には膨大な時間と予算を要する。限られた時間と予算の中で効率的な洗浄作業を進めるには、どんな方法が効率的なのかを検討した。

洗浄方法についての実験

(実験目的)

従来から実施しているブラシ使用の洗浄方法と、高圧洗浄機による洗浄法の作業量、及び土器の状態(乾湿の有無)の違いによる作業量を比較検討してみた。

(実験方法)

〔1〕洗浄対象

酸性の強い包含層出土のもので保存状態は良好とはいえない。比較資料の均質化を計るため、任意に抽出した縄文土器(保存状態の良・不良、破片の大小関係なく)を洗浄対象とした。

〔2〕作業量の比較方法

洗浄した縄文土器の重量で作業量を比較する方法をとった。

〔3〕洗浄方法

(1) 手洗い 輸入天然軟毛のブラシを使用し、2~3人1組となって洗浄した。

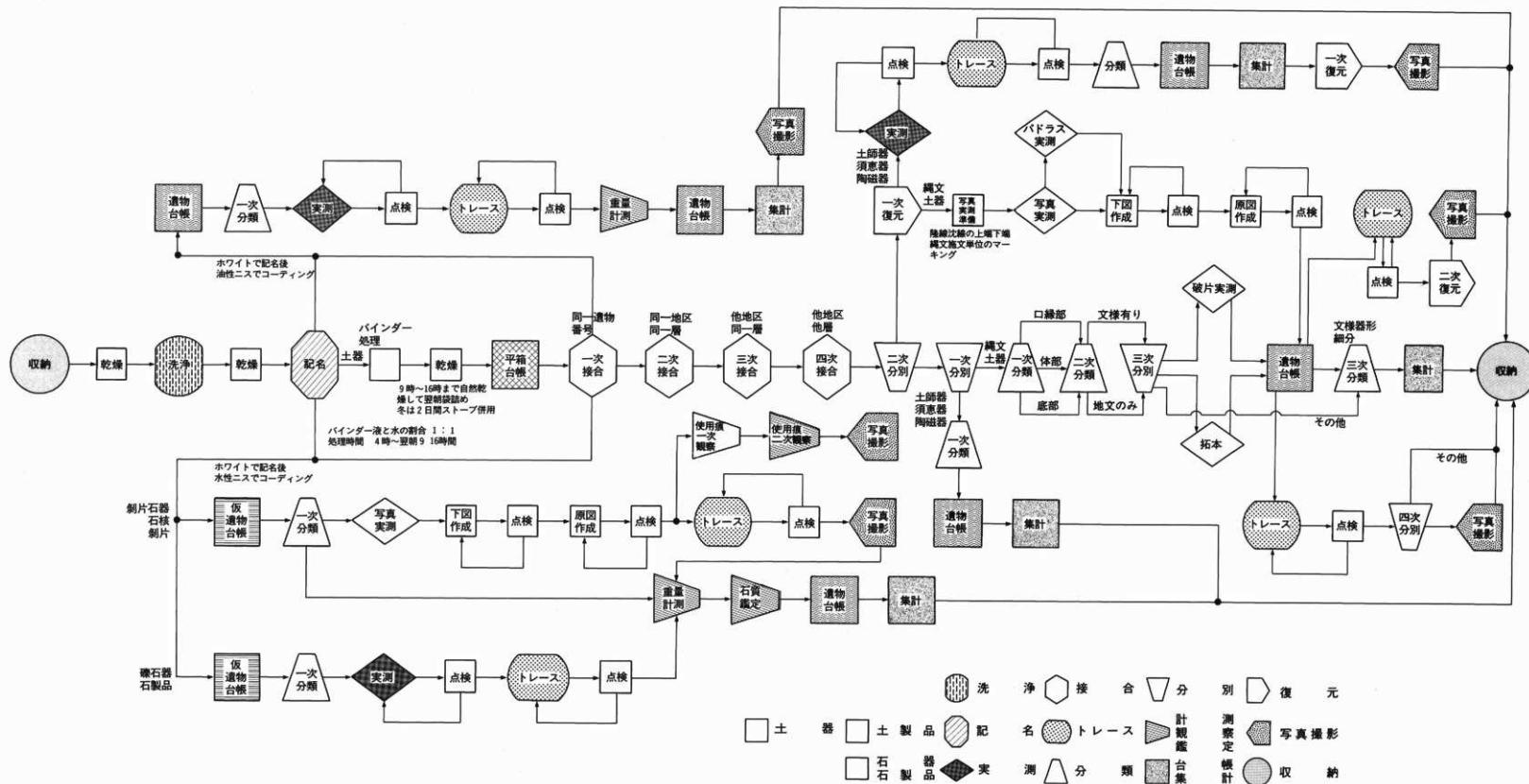
(2) 高圧洗浄機 5人1組とし、1台の洗浄機に3つのノズルをつけそれぞれ一人づつ3人があたった。

残り2人は保存状態が悪く、高圧洗浄機の使用に耐えられないものや高圧洗浄機で落ちないものを手洗いで補助洗浄をした。

機器仕様	全長 680 mm・全幅 423 mm・全高 800 mm・重量 28 Kg
ポンプ圧力 30~35 Kgf/cm ² ・回転数 1720~1430 rpm	
「スカッシュ HPJ 8 鶴見製作所製」	

〔4〕洗浄者

土器洗浄の経歴年数が同じ女子のなかから10名を抽出して実験することにした。10名を5人1班のA・Bの2班としできるだけ各班が洗浄機と手洗いを交互に作業できるようにした。



第4図 室内調査行程フローチャート図

[5] 土器の状態

以下のような3つの状態でそれぞれ作業量を比較することとした。

「普通」——出土時そのままポリ袋に収納した状態で若干湿っている状態。

「乾燥」——天日に約1日(9時~3時)干して乾燥した状態。

「水付け」——水に略2昼夜浸した状態。

(実験結果)

実験1~18まで実施したが、詳細については省略する。

(結果の分析)

[1] 作業量の個人(グループ)差について

班間の作業量を比較してみた。高圧洗浄機使用・手洗い、土器の状態が普通・乾燥・水付けいずれの場合もA班がB班を上回る作業量であり、班間の間に作業量の差が見られた。しかし、手洗いの場合には作業量の差が大きいが、高圧洗浄機使用の場合には小差である。個人差の少ない高圧洗浄機による洗浄方法は積算する上で都合がよい。

洗浄方法	土器の状態	A班			B班			A班対B班の比率 A:B
		総洗浄量	延人數	一人あたり洗浄量	総洗浄量	延人數	一人あたり洗浄量	
高圧洗浄機	普通	94.46 kg	20人	4.72 kg	41.93 kg	10人	4.19 kg	1.1:1
	乾燥	37.82 kg	5人	7.56 kg	64.67 kg	10人	6.47 kg	1.2:1
使用	水付け	31.79 kg	5人	6.36 kg	24.10 kg	5人	4.82 kg	1.3:1
手洗い	普通	45.03 kg	14人	3.22 kg	38.03 kg	18人	2.10 kg	1.5:1
	乾燥	27.50 kg	6人	4.68 kg	15.68 kg	5人	3.14 kg	1.5:1

[3] 高圧洗浄機と手洗い、土器の状態の相違による作業量について

高圧洗浄機使用と手洗いを比較した場合、高圧洗浄機の作業量が上回り、約1.8倍の効率化がはかる。土器の状態によっても作業量の効率化がはかれることもわかった。水付けの場合、普通状態よりも効率が良いが保存の悪い土器が溶け出したため中止した。普通状態と乾燥状態のものでは、乾燥した土器を洗浄した方が1.5倍の効率化がはかる。

	高圧洗浄機使用			手洗い			比率
	総洗浄量	延人數	一人あたり洗浄量	総洗浄量	延人數	一人あたり洗浄量	
普通	136.39 kg	30人	4.55 kg	83.06 kg	32人	2.60 kg	1.8:1
乾燥	102.49 kg	15人	6.83 kg	43.18 kg	11人	3.92 kg	1.7:1

全 体	238.88 kg	45人	5.31 kg	126.24 kg	43人	2.94 kg	1.8 : 1
水付け	55.83 kg	10人	5.88 kg	/	/	/	/
普通：乾燥	1 : 1.5			1 : 1.5			

[4] 効率的な高圧洗浄機の活用法

手洗いよりも高圧洗浄機（5人1組で内2名が手洗いによる補備洗浄）による洗浄がより効率的で、さらに縄文土器が普通状態（温っている）よりも乾燥状態の土器を洗浄した方が効率化を計ることが明確になった。次に高圧洗浄機と手洗い洗浄（機械洗浄の補備洗浄）の組合せによって、全体の作業量を向上するための実験を実施した。その結果土器が乾燥状態の場合、最終的には高圧洗浄機1台による1日の洗浄量が100Kgまで可能で、補備手洗いの人数も15人位で充分なことが分かった。18人1組で1台の高圧洗浄機（ノズルに3名）と15人位の補備手洗いで、手洗いだけの作業量の1.7倍の効率化はかかる。実験以前の方法（手洗いで土器が普通状態の場合）とでは2.5倍の効率化がかかることが明らかとなった。

[5] 土器の洗浄状態

保存状態の悪い土器については、高圧洗浄機による洗浄時に注意を要するが（補備手洗いにまわす）、全体的に手洗いと比較して遜色はない。むしろ、凹凸の多い土器や断面の洗浄には高圧洗浄機の方がよりきれいに洗浄できる。

（まとめ）

- (1) 大量に出土した縄文土器の洗浄法は、従来の手洗いよりも高圧洗浄機による方法が効率的である。
- (2) 保存の良好でない包含層出土の縄文土器の洗浄は、高圧洗浄機と手洗いの組合せ方式が効率的である。
- (3) 縄文土器の洗浄にあたっては、出土時のやや温った状態よりも、乾燥させた方がより効率的である。
- (4) 手洗洗浄には個人差が大きいが、高圧洗浄機にはあまりない。

上記実験結果を踏まえ、縄文土器の洗浄は天日で1日乾燥させ、高圧洗浄機と手洗い（保存状態が悪く高圧洗浄機の使用に耐えられないものや、高圧洗浄機で汚れの落ちないものは手洗いで補備洗浄した）の組み合せで洗浄した。

また、全体的に保存が良好とはいえないでの、洗浄後すべてバインダー-25による強化処置を行った。バインダー-25を水で半分に希釈し、一夜浸漬した。

【縄文土器以外の遺物】

土製品・剝片石器・石製品等は縄文土器よりも数が少ないので、従来通り手洗いで洗浄した。礫石器は点数が多いので縄文土器と同じように高圧洗浄機と手洗いの組み合せで洗浄した。

B 遺物の記名

【縄文土器】

すべての破片に遺跡名・調査年次・地区名・層位・遺構名を記入することとした。膨大な作業量になるため、効率的な記名作業を進めるための方法を検討してみた。

遺物記名の実験

(実験目的)

從来から実施している筆を使った手作業による記名法と、ゴム印を使った記名法の作業量を比較することによって、どの程度の効率化を進めることができるのか比較検討してみた。

(実験方法)

[1] 記名対象

比較資料としての均質化を計るため、任意に抽出した縄文土器（保存状態の良・不良、破片の大小関係なく）を記名対象とした。

[2] 作業量の比較方法

作業量は記名した破片の点数で比較する方法をとった。流れ作業の場合は1人あたりの作業量を破片点数でだした。1日を通しての作業量の比較が困難であったため、1時間単位の作業量を比較することとした。

[3] 記名方法

A 手作業

B ゴム印+手作業（B 1 - 1人による作業・B 2 - 2人による流れ作業・B 3 - 3人による流れ作業）

(1) 手作業

面相筆を使い、ポスターカラーのホワイトで記名した。記名後水性ニスでコーティング処理した。

(2) ゴム印+手作業

保存状況が悪く土器の表面がざらざらしているためゴム印のインクがのりにくかったり、色調が黒の土器片については、手書きで記名した。記名後水性ニスでコーティング処理した。ゴム印用のインクには強着スタンプ台多目的タイプ（油性顔料系黒）を使用したが耐久性に問題はなかった。ゴム印には6号明朝体（数字・英文字）を加工して使った。文字間隔を密にし、土器の曲面に対応できるようにゴム印の長軸の両側面を削り落とし、手で持つ側をゴム印側よりも薄く加工して使った。更に小さい7号で捺印すると文字がつぶれてしまう。

(実験結果)

33回の実験を実施したが、詳細については省略する。

(結果の分析)

[1] 作業量の個人差について

手書きの場合には、明らかに個人差があり、最大と最小の比率は1:2.3となる。

	手 書 き				手 書 き		
	1人1時間あたり	回数	平均		1人1時間あたり	回数	平均
A 氏	277点	2回	139点	E 氏	134点	1回	134点
B 氏	313点	2回	157点	F 氏	94点	1回	94点
C 氏	212点	1回	212点	総計	1140点	9回	127点
D 氏	110点	1回	110点				

〔2〕習熟の度合いについて

手書きは熟練を要するが、ゴム印方式は熟練を要しないので習熟にさほど時間は必要でない。

〔3〕手書きとゴム印方式による作業量について

手書き方式よりも、ゴム印方式の方が1.6倍効率的であることがわかった。しかも、2～3人組合せの流れ作業方式よりも1人での作業が効率的である。

作業方法	総記名点数	延べ人数	1人1時間点数	比率
手書き	1140点	9人	127点	／
ゴム印				手書き：ゴム印
1人	2000点	10人	200点	1:1.6
2人流れ作業	2563点	20人	128点	1:1.0
3人流れ作業	1337点	12人	111点	1:0.9

〔4〕記名文字の状態

保存状態が良好なものは、ゴム印の文字が鮮明で仕上がりが良好であるが、保存の悪いものは手書きによる手直しが必要である。また、バインダー処理前より処理後の方がインクのりが良好である。更に保存が悪いものはバインダー処理後水性ニスでコーティングした後の方が良好である。

(まとめ)

全般的に実験データーが不足しているが、今回の実験の結果から、従来の手書き方式よりもゴム印方式が効率的で初心者でも簡単に作業ができる。また手書き方式よりも作業の疲労度が極めて少ない。

上記実験結果を踏まえ、縄文土器の記名作業は手書き方式とゴム印方式を併用して実施した。

〔縄文土器以外の遺物〕

他の遺物の記名は従来通り毛筆による手書きとした。

C 遺物の接合

〔縄文土器〕

膨大な量と、限られた作業空間という制約のため以下のように4段階にわけて接合作業を実施した。一次接合と二次接合は十分にできたが三次接合と四次接合は十分とは言い難かった。

一次接合	二次接合	三次接合	四次接合
同一遺物番号	⇒ 同一地区同一層	→ 他地区同一層	⇒ 他地区他層

〔土製品・石製品・礫石器〕

いずれも個体数がかぎられているので、それぞれの接合作業を実施した。

〔剝片石器〕

剥片を含めると膨大な数量のため、接合作業を実施することができなかった。

D 遺物の登録

遺物の登録にあたっては便宜的に以下の記号を使用し、全ての遺物を登録台帳に記載して登録した。ただし縄文土器については膨大な量のため、図上復元可能なものと、立体的な突起をもつもの、大型の破片、特徴ある文様を持つもの以外は登録しなかった。

〔縄文土器〕

P：縄文土器

〔縄文土器以外の土器〕

A：土師器 B：須恵器 C：赤焼土器 D：陶磁器 E：その他

〔土製品〕

A：土偶 B：円板状土製品 C：袖珍土器 D：その他の土製品

〔礫石器〕

A：凹石 B：敲凹石 C：敲石 D：敲磨石 E：石皿 F：磨石 G：その他

〔石製品〕

A：石製品 G：磨製石斧 H：珪化木製 (B～F は欠番)

〔剝片石器〕

A：石鐵 B：石匙 C：石錐 D：石窓 E：尖頭器 F：不定形石器

G：楔形石器 H：二次加工剝片 I：微細剝離痕ある剝片 J：石核 K：剝片 L：その他

E 遺物の実測

遺物の数量が多いため、実測図作成の効率化を計る必要があつたため、以下のような方式を遺物の特性に応じて使い分けた。

〔写真実測〕 ————— 大型・中型の縄文土器、剝片石器

〔ニシオグラフによる実測〕 —— 小型の縄文土器、縄文土器の破片・土製品・石製品

〔手実測〕 ————— 矽石器・無文の縄文土器と断面図

〔縄文土器〕

膨大な数量のため、大型や中型の土器はスリット撮影方式で正射投影撮影した写真から実測図を作成した。写真撮影は委託とし、原寸大に焼き付けた写真から1/1の実測図を作成した。小型の土器及び立体的突起や把手を持つものはニシオグラフで実測し1/1の実測図を作成した。無文の土器及び断面図はいずれも手実測で作成した。

写真実測したものは、マイラー（トレーシングフィルム）に鉛筆を使って原図を作成した。縄文土器の原図には地文の施文原体の種別 (RLR・LRL・RL・LR・R・L・r・l) と施文方法 (方向・工程) と箇の単位を線描し、縄文はトレースの段階で入れた。

文様展開が複雑なため、実測したものについてはできるだけ展開図を作成するよう努めた。展開図は文様構成が理解できることに主眼を置くこととし、展開拓影図を作成しこの拓影図から1/2の展開図を作成した。

図上復元が不可能な大型の破片や、特徴のある文様を持つ縄文土器片については拓影図を作成した。拓影図は隆

帯・隆線と沈線の区別が付くようコピーした拓影図を黒ペンで補正している。

[剥片石器]

縄文土器と同じように、スリット撮影方式で正射投影撮影した写真から実測図を作成した。写真撮影は委託とし2倍に焼き付けた写真から2/1の実測図を作成した。

[土製品・石製品]

ニシオグラフで実測し1/1の実測図を作成した。

[礫石器]

標素材の形態と使用痕跡に重点を置いた実測図を作成した。素材の輪郭と使用痕跡の範囲のみを実測した。

F 遺物のトレース

それぞれの遺物の特性に応じて以下のようにトレース基準を定めた。

第2表 遺物トレース基準

縄文土器 縮尺1/3	土製品 縮尺1/2	剥片石器 縮尺2/3
外形線	0.8	外形線 0.6
欠損部	0.1	折損部 0.4
隆線 上端	0.6	剝離痕 0.3
下端	0.1	リング 丸ペン
沈線 上端	0.3	フィッシャー 丸ペン
下端	0.1	バルブ 丸ペン
縄文	0.2	バルバースカーフ 丸ペン
		穂面 ドット 0.1
		節理面 スクリートン
		焼面 スクリートン
		バティナ スクリートン
礫石器 縮尺1/3	磨製石斧 縮尺2/3	石製品 縮尺2/3
外形線	0.6	外形線 0.6
欠損部 外形 範囲	0.3 0.4	欠損部 外形 範囲 丸ペン 0.3 稲線
凹痕	ドット 0.1	リング 丸ペン
敲凹痕	ドット 0.1	フィッシャー 丸ペン
敲打痕	ドット 0.1	穂線 0.3
磨痕 領輪磨痕	0.1	敲打痕 研磨以前 ドット 0.1
	スクリートン	スクリートン
剥離痕	0.1	研磨以後 ドット 0.1
	スクリートン	
その他	スクリートン	
敲痕跡 範囲	0.1	
ヒビ痕	スクリートン 0.1	

G 遺物の計測

各遺物の特性に応じた計測基準を定めて計測作業を進めた。数量が多い遺物は、計測者も多数で実施したため、計測誤差が懸念された。そこであらかじめ測定誤差を調査した上で計測作業を行った。各遺物について測定誤差を検証したが、ここでは礫石器の測定値の資料を取り上げる。

計40個の礫石器を8名が計測した計測値をまとめたのが第3表である。それぞれ1個について8名が計測した値の最大値と最小値の差をしめしている。長さの最大が3.2 mm・最小が0.2で平均1.10 mmである。幅の最大が3.1 mm・最小が0.3 mmで平均1.08 mm、厚さの最大が4.7 mm・最小が0.4 mmで平均1.61 mmであった。礫石器の計測値上問題がないと判断した。尚、正確を期すため、1個の礫石器を2名が計測しその平均値を計測値し、2名の計測値が3 mm以上のものは、再計測した。他の遺物についても同様の方法をとった。

第3表 磨石器計測値検証資料

登録番号	長さ	幅	厚さ	登録番号	長さ	幅	厚さ	登録番号	長さ	幅	厚さ	登録番号	長さ	幅	厚さ
A1	1.2	0.7	1.1	A11	0.4	0.5	2.4	A21	0.4	2.0	0.8	A31	1.7	0.9	1.1
A2	0.9	0.9	0.8	A12	0.8	1.2	4.3	A22	0.5	0.5	0.6	A32	0.7	0.9	1.8
A3	1.1	0.8	1.1	A13	0.4	1.5	1.5	A23	1.0	0.9	0.7	A33	2.9	2.2	2.0
A4	0.7	1.0	1.0	A14	0.6	0.9	2.2	A24	2.6	0.9	1.2	A34	1.4	1.8	0.8
A5	0.7	1.0	1.2	A15	0.2	0.2	0.9	A25	3.2	0.3	3.7	A35	0.6	0.4	1.5
A6	0.8	0.6	0.9	A16	0.8	1.6	1.2	A26	1.2	0.5	0.4	A36	0.3	0.3	0.9
A7	0.8	0.7	4.7	A17	1.6	1.6	0.8	A27	0.9	0.9	1.4	A37	0.9	0.9	3.0
A8	0.9	0.9	1.2	A18	0.9	1.2	3.8	A28	0.6	2.0	0.4	A38	0.7	0.5	1.4
A9	0.3	1.0	1.1	A19	0.4	1.1	2.4	A29	0.7	0.6	3.1	A39	0.7	3.1	2.1
A10	1.3	0.9	0.5	A20	0.9	0.6	0.8	A30	1.6	1.7	1.6	A40	1.4	2.9	1.2
												平均	1.10	1.08	1.61

[縄文土器]

第5図の要領で口縁部径・口縁部最大径・口頸部径・腹部径・底部径・器高を計測した。図上復元した計測値は括弧でくった。

[土製品]

それぞれの種別ごと第5図の要領で計測した。

[剣片石器]

それぞれの器種ごと第5図の要領で計測した。

【礫石器】

礫石器の長・幅・厚、敲磨の痕跡をもつものは敲磨長・敲磨幅を計測した。

【磨製石斧】

第5図の要領で計測した。

H 遺物の重量計測

【縄文土器】

縄文土器出土量を客観的に捉えることを目的に重量を計測した。洗浄・記名が終わった段階で全ての縄文土器の重量を計測した。重量計測には台秤を使用した。

【土製品・剝片石器】

重量計測には電子天秤を使用した。

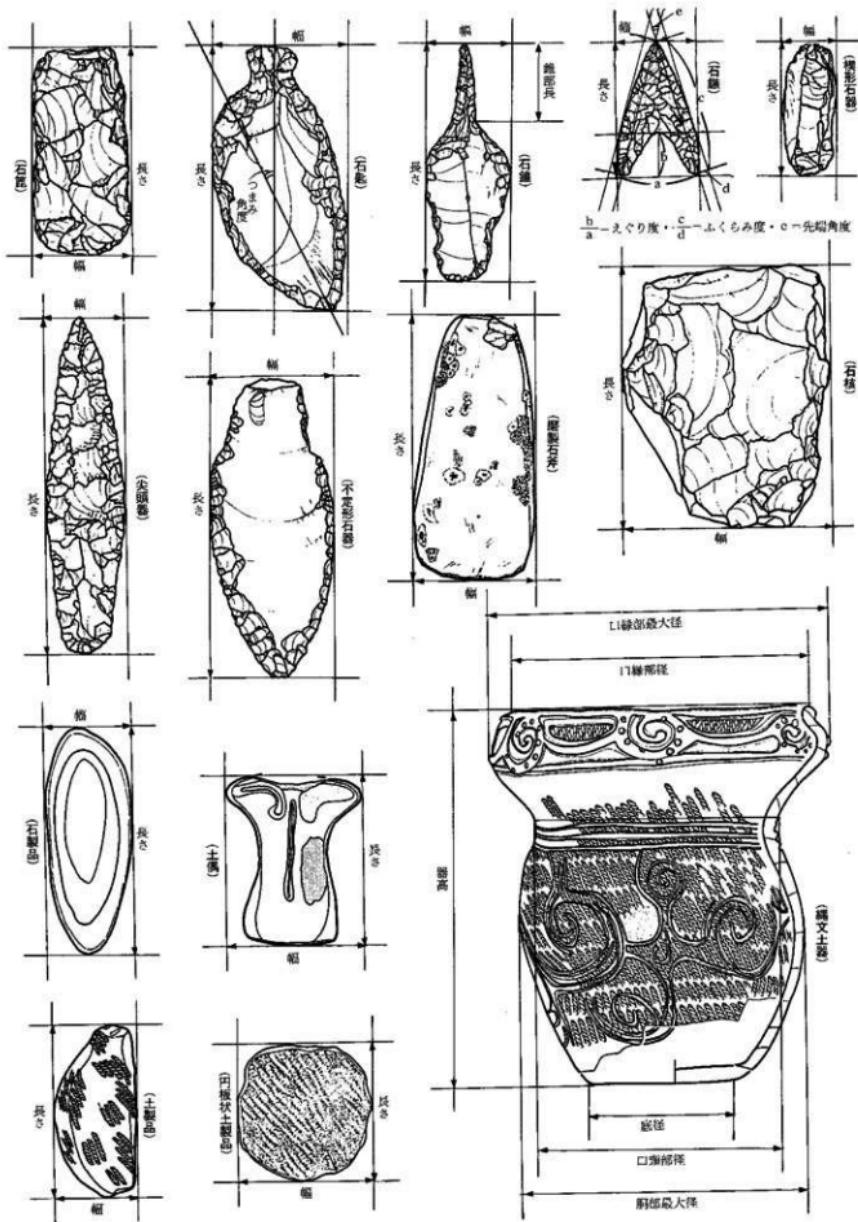
【礫石器・石製品】

重量計測には台秤を使用した。

I 石材の鑑定

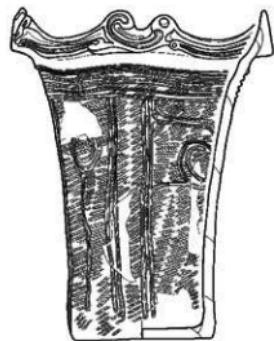
【剝片石器】・【礫石器】・【石製品】

剝片石器・礫石器・石製品とも膨大な点数のため、石材鑑定にあたっては、肉眼観察で違う石材と想定されるものをサンプリングし、東北大学の蟹沢聰史氏に鑑定を依頼した。サンプリングにあたっては、剝片石器を72点、礫石器を48点抽出した。その結果21種類の石材で構成されていることが判明した。



第5図 遺物計測基準

第Ⅳ章 繩文時代の遺構と遺物



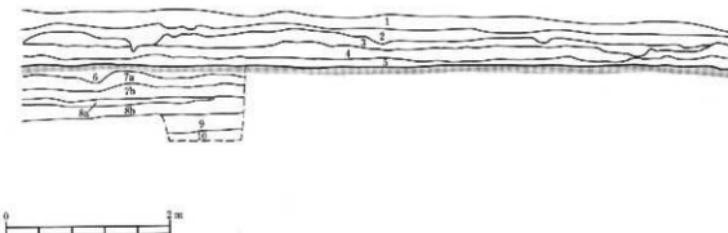
第IV章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 基本層位

本遺跡の基本層位は以下のような層によって構成されている。

- 1 層——暗褐色 (10YR3/3) シルト層。I区の水田地区を除いた、調査区の略全域に分布している。
縄文時代から古代・近世の遺物を包含する層。
- 2 層——黒褐色 (10YR2/3) シルト層。I区の水田地区を除いた、調査区の略全域に分布している。
縄文時代から古代・近世の遺物を包含する層。
- 3 層——黒褐色 (10YR2/2) シルト層。I区の水田地区を除いた、調査区の略全域に分布している。
縄文時代の遺物を多量に包含する遺物包含層。
- 4 層——黒 色 (10YR2/1) シルト層。I区の水田地区を除いた、調査区の略全域に分布している。
縄文時代の遺物を多量に包含する遺物包含層。
- 5 層——黒 色 (7.5YR2/1) シルト層。I区の水田地区を除いた、調査区の略全域に分布している。
縄文時代の遺物を包含する遺物包含層。
- 6 層——にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト層。
- 7 a層——黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト層。無遺物層。
- 7 b層——黄褐色 (10YR5/8) 粘土質シルト層。無遺物層。
- 8 a層——灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト層。無遺物層。
- 8 b層——灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト層。無遺物層。
- 9 層——にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂層。無遺物層。
- 10 層——砂疊層。無遺物層。

6~10層の各層とも遺物を包含していない。調査区内の一部を深掘りをして確認している。



第6図 基本層位図 (AG 15区~18区東壁)

第2節 配石遺構 (SN)

合計8基の配石遺構を検出した。SN 1～5は、比較的小さい河原石を配した遺構であるが、SN 6～8は扁平で比較的大きな河原石を配しており、SN 8は列状の配石遺構である。

【検出面】SN 1～7は、4層中で検出したが、SN 8は5層上面で検出している。

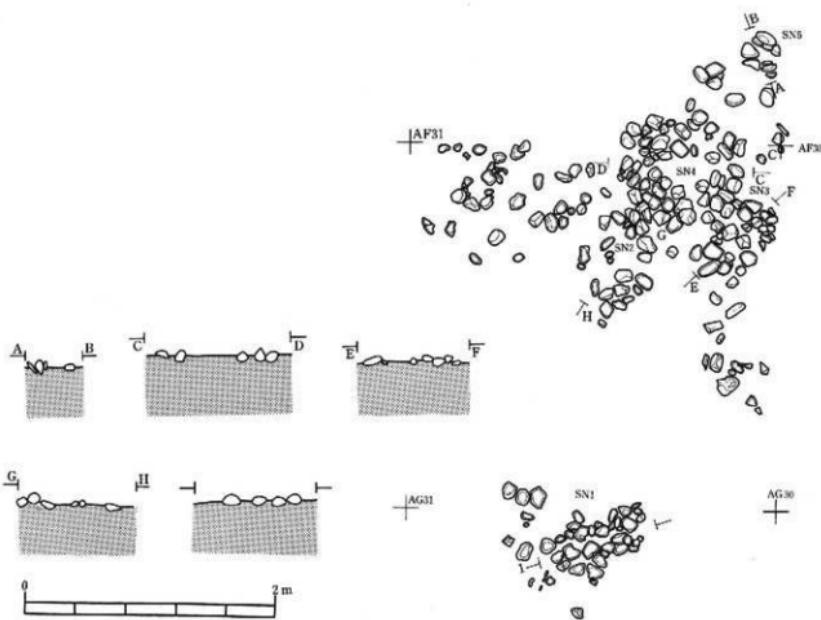
【配石の状況】SN 2～5は、重複しているため平面形が明瞭ではないが、これらと重複しないSN 1は、河原石を椭円状に配している。SN 6・7は規模が小さい。SN 8は、比較的大きな河原石を列状に6.2m程配しているが調査区外に延び、部分的に2列になっている。

【配石下の状況】SN 1～6・8の配石下からは、何らの遺構を検出することはできなかったが、SN 7の配石下からは、 52×44 cmで、深さが19 cmの土壙を検出した。

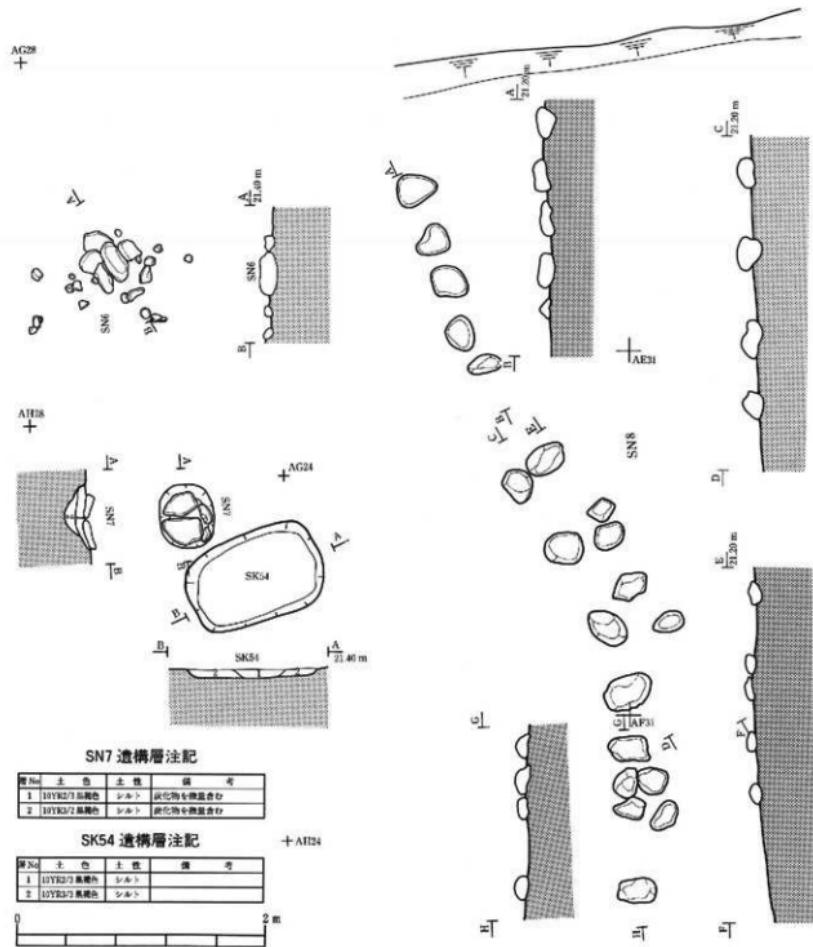
【遺構の年代】包含層出土遺物の年代から、SN 1～8はいずれも繩文時代中期中葉の大木8式期と考えられる。

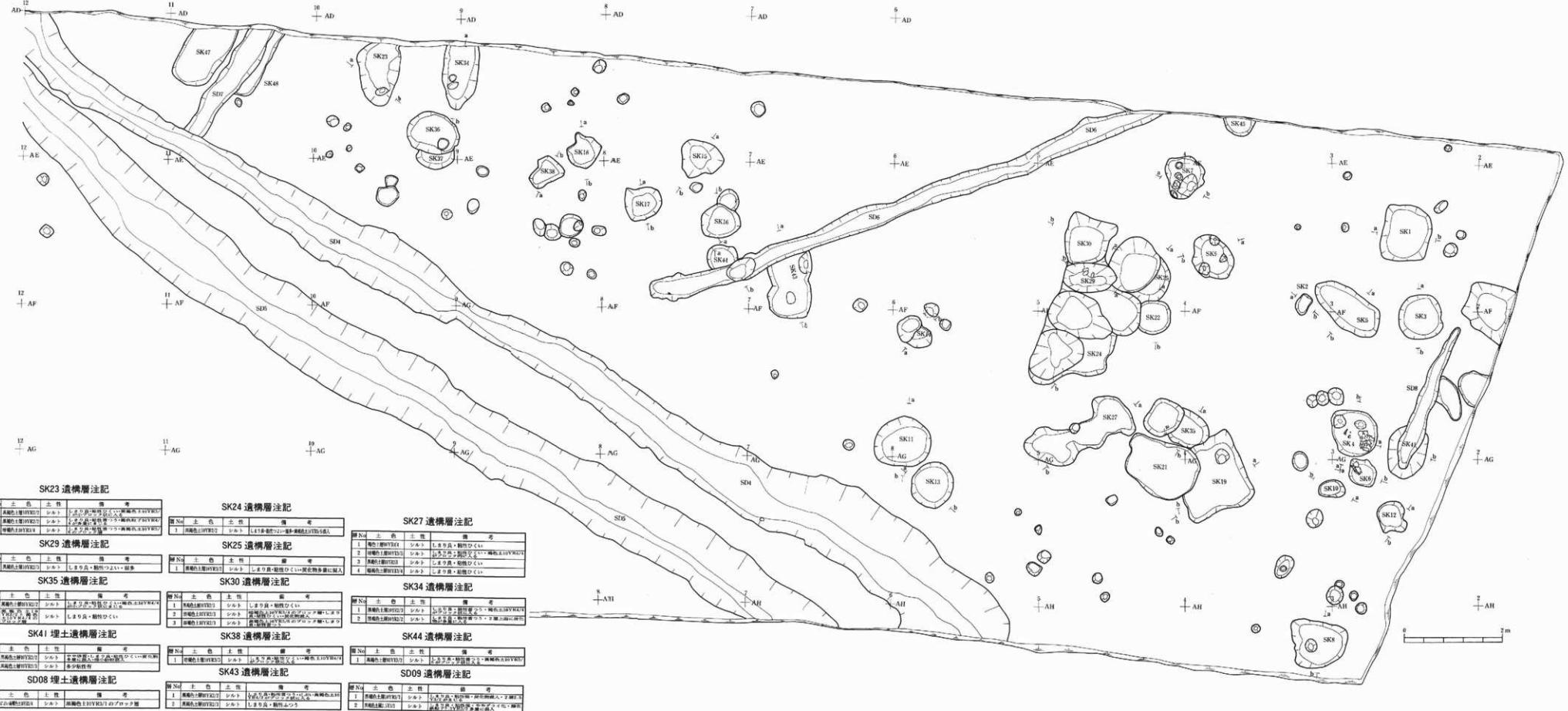
第3節 土壙 (SK)

合計55基の土壙を検出しており、I区に集中していた。平面形態は円形を基調としているが、規模は様々である。SK 4・6の堆積土中からはまとまった土器が出土しているが、大半の土壙の出土遺物は細片である。包含層出土の土器と同じ特徴からこれら土壙の年代は、いずれも繩文時代中期中葉と考えられる。

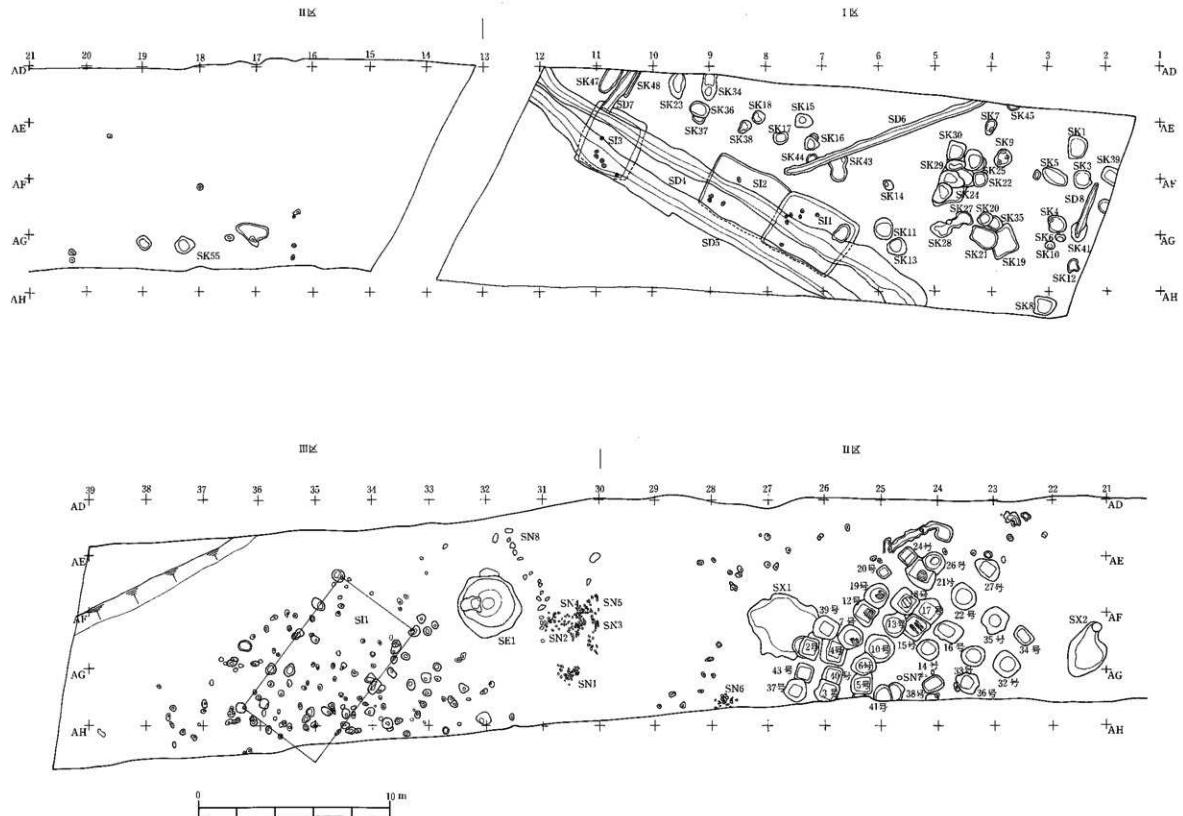


第7図 配石遺構1)





第9図 I区土壤平面図



第10a図 調査区全体図

第4表 深鉢形土器の出土状況

A群 狹小な口縁部文様帯 (A~G)		1~2層	3層	4層	5層	遺構
A類	文様帯3類 Dd			●		
B類	文様帯1類 A-			●		
B類	文様帯3類 Cd・Gf			●●		
D類	文様帯1類 Aa・Ad・Ah・Ax・Bk・Cr	●●	●	●●●	●	
D類	文様帯2類 C地・E地・			●		
D類	文様帯3類 Br・Dw・Gk・Gh	●	●●	●		
D類	文様帯4類 Gf				●	
D類	文様帯5類 A地・C地・E地			●●●	●	
E類	文様帯1類 Aa・Ae・Ah・Ar・At・Dw			●●●●●●	●	
E類	文様帯2類 Dr・			●		
E類	文様帯3類 Ae・Bl	●		●●●		
E類	文様帯4類 Ed・Gi		●	●		
E類	文様帯5類 A地・B地・C地・E地	●		●●●●	●	
F類	文様帯2類 Dt			●		
F類	文様帯3類 E-		●			
F類	文様帯4類 As・Cd・Ek・Gd・Gh			●●●	●	
F類	文様帯5類 C地・E地	●●		●●●●●		
B群 口縁部文様帯が複数 (H)						
A類	文様帯7類 Hp・Hw・H-		●●	●●●	●●●	
A類	文様帯8類 Hh・Ht・Hx・H-・Nd			●●●●	●	
A類	文様帯10類 Hi・Hp			●●	●	
A類	文様帯11類 H地	●●		●●	●	
B類	文様帯7類 Hk・Hm・Ho・H-・Nf	●		●●●●●●	●	
B類	文様帯8類 Hf・Hp・Hl	●	●	●●●		
B類	文様帯9類 Hd・Hf・Hh・Hk・Hl・Hm・Ho・H-	●●	●	●●●●●●	●	
B類	文様帯11類 H地			●●●		
D類	文様帯7類 Ha・Hm・Hn・H-			●●●●	●●	● SK3
D類	文様帯8類 Hi・Hl・Hm			●●●●		
D類	文様帯9類 Hd・Hl・Hm	●		●●	●●	
D類	文様帯10類 Hp			●		
D類	文様帯11類 H地		●	●●		
E類	文様帯7類 H-				●	
E類	文様帯9類 Hd・Hf・Hl・Ht			●●	●●	
E類	文様帯10類 Hf			●		
E類	文様帯11類 H地	●		●●●●	●	
F類	文様帯7類 Hn			●		
F類	文様帯8類 Hn・H-			●●		
F類	文様帯9類 Hd・Hlf・Hl・H-	●	●	●●●		
F類	文様帯10類 Hi		●			
F類	文様帯11類 H地	●		●		
F類	文様帯12類 H無			●		

第5表 深鉢形土器の出土状況(2)

D群 口縁部文様帯が単帶(沈・隆線系)(I~O)		1~2層	3層	4層	5層	遺構
A類 文様帯1類	Ja・Jh・Js・J-・Lh・Ll・Lr L-・M-・Nh・Nk・Nr	●●	●●	●●●●●	●●●●	
A類 文様帯2類	L地・M地			●	●	
A類 文様帯3類	Ja・Jh・J-・L-・Mh・N- Oh	●	●●	●●	●●	
A類 文様帯4類	Ib・Ik・Ko・Nf・Nk・Oh	●		●●●	●●	
A類 文様帯5類	J地・K地・L地・M地・N地 O地	●	●	●●●●●	●	
A類 文様帯6類	M無			●		
B類 文様帯4類	Nf			●		
C類 文様帯3類	Ko			●		
C類 文様帯5類	J地・K地			●	●	
E群 口縁部文様帯が単帶(隆沈線系)(P~U)						
A類 文様帯1類	Pa・Ph・Px・P-・Qa・Qb Ql・Qw・Q-・Ra・Ru・R- Sa・Se・St・Su・S-・Ta・Te Th・Tk・Tl・Tt・Tw・T-	●●●	●●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●	●●	
A類 文様帯2類	R地・S地・T地		●●	●●●●●		
A類 文様帯3類	Ph・Qa・Q-・T-	●	●●●	●		
A類 文様帯4類	Q-・Rh・U1		●●●			
A類 文様帯5類	P地・Q地・T地		●●●●●			
C類 文様帯1類	Pt・Q-・Re・Sh・Sr	●	●●●●●			
C類 文様帯3類	Pk		●			
F群 口縁部文様帯が単帶(沈刻状隆沈線系)(V)						
A類 文様帯1類	Va・Vc・Ve・Vu・Vv・Vx V-	●	●●●●●	●●●●●●●●●●		
A類 文様帯3類	Vc・Vu		●●			
D類 文様帯3類	Vt		●			
G群 口~脣部展開型(y・z)						
A類 文様帯13類	-z	●	●	●	●	
D類 文様帯13類	-y・-z		●●●●●●●	●●●●●●●		
E類 文様帯13類	-z		●			
G類 文様帯13類	-z		●			
I群 口縁部文様帯が突起付無文帯(X)						
B類 文様帯1類	X-			●●		
B類 文様帯2類	X地			●●		
B類 文様帯4類	Xo				●	
D類 文様帯1類	Xh・Xv・Xx・X-	●	●●			
D類 文様帯4類	Xd				●	
E類 文様帯1類	Xk				●	
E類 文様帯4類	Xh				●	
F類 文様帯1類	X-			●		

第6表 深鉢形土器の出土状況(3)

J群	口縁部文様帯がその他(Y)	1~2層	3層	4層	5層	遺構
A類	文様帯3類 Yk			●		
A類	文様帯4類 Yd			●		
A類	文様帯5類 Y地			●●●●		
A類	文様帯6類 Y無			●		
B類	文様帯2類 Y地			●		
B類	文様帯3類 Yt			●		
B類	文様帯4類 Yf			●		
B類	文様帯5類 Y地	●	●●●	●●		
B類	文様帯15類 Yi			●		
B類	文様帯16類 Yd			●		
C類	文様帯4類 Yh	●				
C類	文様帯5類 Y地			●		
D類	文様帯1類 Yw			●		
D類	文様帯5類 Y地	●●	●●			
D類	文様帯6類 Y地			●		
E類	文様帯5類 Y地	●		●		
E類	文様帯6類 Y無				●	
F類	文様帯1類 Yd			●		
F類	文様帯4類 Yf		●●			
F類	文様帯6類 Y無			●		
G類	文様帯1類 Y-			●		
G類	文様帯5類 Y地			●		
K群	口縁部文様帯が無文・地文					
D類	文様帯16類 無g			●		
D類	文様帯17類 無地				●	
E類	文様帯16類 無l		●			
E類	文様帯17類 無地			●		
F類	文様帯16類 無c		●			
F類	文様帯17類 無地			●		
G類	文様帯16類 無n		●			
G類	文様帯17類 無地		●			

第4節 遺物包含層

1 遺物出土状況

第1節の基本層位でのべたように、第3~5層は、廃棄時の原位置を保った状況で縄文時代の遺物が多量に出土する遺物包含層である。第1~2層からも縄文時代の遺物が多量に出土しているが、陶磁器なども出土しており廃棄時の原位置を保ってはいない。しかし、第1~2層と第3~5層とも縄文時代中期中葉の遺物である。ここでは遺物のなかでも特に縄文土器の深鉢形土器を取り上げ層位的な出土状況を検討することとした。深鉢形土器の各類型と出土層位をまとめたのが第4~6表であるが、分析・検討まではいたらなかった。各類型の内容については後述した。

2 包含層出土の遺物

遺物包含層からは、縄文時代中期中葉の縄文土器・土偶等の土製品・剥片石器・砾石器・磨製石斧等の磨製石器・岩偶等の石製品等が多量に出土した。これらはいずれも中期中葉のものであり、1・2層やその他の遺構から出土したものも、包含層出土のものと同時期のものである。従って以下遺物個々の分類では包含層と1・2層やその他遺構出土のものも一括して扱うこととした。

A 縄文土器

(1) 第I群土器（第10b図）

第I群土器は各地区の基本層位1～5層などから深鉢・浅鉢の口縁部・胸部破片が出土しているが、第II群土器と比較して極めて少なく、出土状況にもまとまりが見られなかった。これらは文様の特徴から大木7式（144図2～211図5）と大木9式（174図8～114図3）に位置付けられる。

(2) 第II群土器

本群は今回の調査において、遺物包含層から主体的に出土した土器群である。ここでは第II群土器の成形技法・文様表現技法・文様帶の構成・口縁部文様帶のあり方・胸部文様帶のあり方・器種・器形の特徴について観察することからその特性を明らかにし、主に器形・文様に基づいて分類することとする。年代的位置付けやその他の問題点についてはVI章の考察の項で検討することとする。

【土器の観察】

1 成形技法

土器の大まかな形を整えるまでの成形技法について観察した。土器の割れ口を観察すると、成形の際の接合部分が剥がれて曲面の状態を示しているものがあり、これらを観察することにより土器の成形技法を明らかにすることできる。土器の成形の順序は、底部の製作の後に粘土紐を長い帯状にして巻き上げていく方法と、粘土紐を輪状にして積み上げていく方法が考えられるが、いずれの方法をとったのかを明らかにできるような資料はなかった。口縁部・胴部・底部の成形技法とそれぞれの接合方法を観察した。

(1) 口縁部の成形技法（第11図）

口縁部の形態には内彎・内反するものと、外彎・外反するものとに大きく2つに分けられる。これらの断面観察の結果、6種類の粘土紐の積み上げ方法があることが分かった。

A類 内側に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの

B類 外側に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの

C類 中央に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの

D類 中央に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの

E類 外側に粘土紐の丸味を残して反り、内側が下がるもの

F類 粘土紐の丸味を内外側に残し、内外側が下がるもの

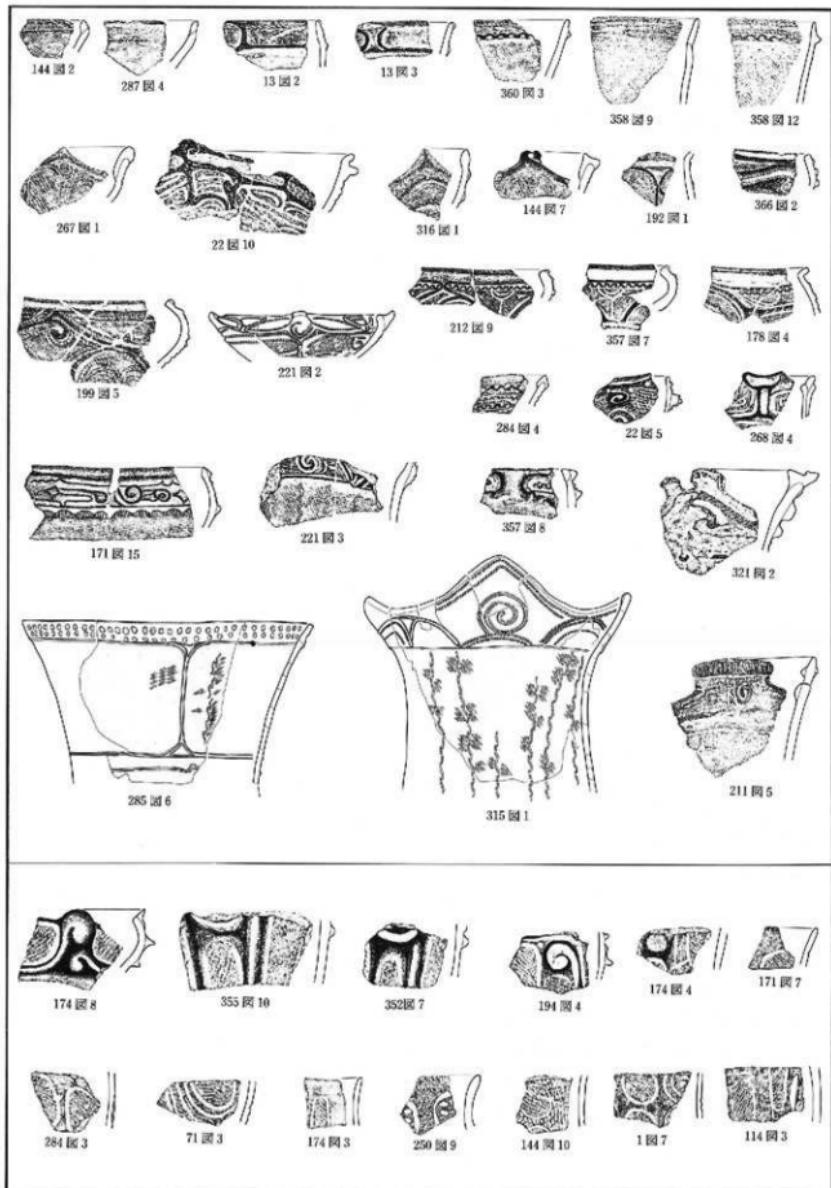
内彎・内反するものには6種類すべてが認められたが、外彎・外反するものにはD類とE類を欠く4種類がある。数量的に比較すると、内彎・内反するものはA類・C類が略同数で全体の約80%を占めるが、外彎・外反するものはC類が圧倒的に多く約70%を占める。器形に関係なく全体的にみると、外側が下がるA類・C類が圧倒的に多く全体の約80%を占めている。

(2) 胴部の成形技法（第12図）

胴部の粘土紐積み上げ方法は略口縁部の粘土積み上げ方法と同様であるが、若干違うものも認められた。

A類 内側に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの

B類 外側に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの



第10b図 第1群土器集成図

- C類 中央に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの
- D類 中央に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの
- E類 中央に粘土紐の下向きの丸味を残して反り、内側が下がるもの
- F類 中央に粘土紐の丸味を残し、内外側が下がるもの

数量的にはC類が圧倒的に多く約70%を占め、A類が約20%でこれに次いでいる。外側に下がるA類・C類が圧倒的に多く全体の約90%を占めている。口縁部の粘土紐積み上げ方法と比較しても、外側に下がるもののが圧倒的に多く、口縁部・胸部とも一貫した粘土紐積み上げ方法を何うことが出来る。

(3) 口縁部と胸部の接合方法（第13図）

口縁部と胸部の接合方法を観察した結果、様々な接合方法が認められた。胸部から口縁部へ屈曲するものと、屈曲しないものとでは、接合方法が大きく違っている。両者合わせて10種類の接合方法が認められた。A～E類は屈曲するもので、F～J類は屈曲しないものである。

- A類 上の粘土紐を下の粘土紐の端部側辺に接合したもの
- B類 下の粘土紐を上の粘土紐の端部側辺に接合したもの
- C類 上下の粘土紐の端部を接合したもの
- D類 上下の粘土紐の端部を接合し内側に粘土紐を補強したもの
- E類 上下の粘土紐の端部側辺を接合し、上の粘土紐を外側に折り曲げたもの
- F類 上下の粘土紐の端部を接合したもの
- G類 上下の粘土紐の端部をややずらして接合したもの
- H類 上下の粘土紐の端部側辺を接合したもの
- I類 上下の粘土紐の端部を接合し、内側に粘土紐を補強したもの
- J類 上下の粘土紐の端部を接合し外側に粘土紐を補強したもの

数量的に比較してみると、屈曲するものではA類が全体の約70%を占め、屈曲しないものではF類がほとんどであった。

(4) 底部の成形技法（第14図）

口縁部や胸部の断面観察で見られるような接合部分の剥がれ面が見られず、底部がどのようにして成形されたものか明らかに出来る資料はなかった。しかし、このことは底部が大きな粘土塊によって成形されたためと考えられる。底部底面には刺代痕・木葉痕・無文（ナデ・ケズリ・ミガキ痕）があり、これらは底部成形時に粘土塊の下に敷いた敷材の痕跡と考えられる。

(5) 底部と胸部の接合方法（第15図）

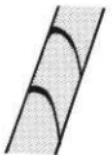
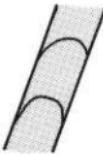
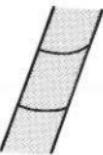
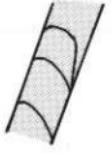
底部と胸部下端との剥離し、接合方法を推定できる資料がかなりの数であった。これらを観察した結果、以下のようない3種類の接合方法を推定することが出来た。

- A類 円板状の底部の周縁の真上に粘土紐を積み上げ、底部と胸部を接合したもの
 - B類 円板状の底部の周縁の端部に斜めの角度で粘土紐を積み上げ、底部と胸部を接合したもの
 - C類 円板状の底部の側縁の真横に粘土紐を接合して、底部と胸部を接合したもの
- これら3種類の方法で接合された胸部・底部の中には、接合部分の内側や外側に粘土紐を貼付して補強しているものも認められた。これらを仔細に観察すると、接合部の内側を補強したもの、外側を補強したもの、接合部の反対側の底部を補強したもの、内側と接合部の反対側の底部を補強したものとが認められた。

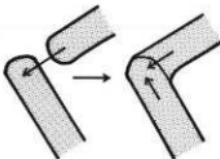
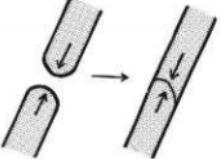
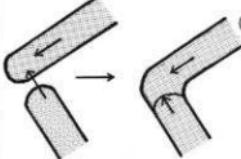
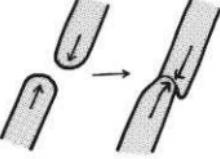
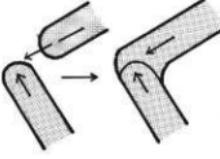
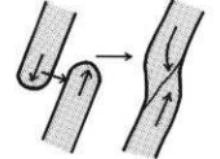
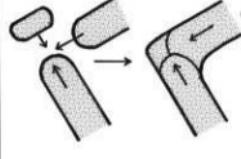
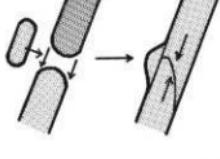
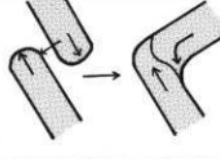
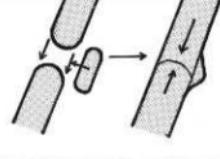
第11図 口縁部粘土紐積み上げ法

類型	粘土紐接合方法	内側・内反するもの	外側・外反するもの	
A類	内側に粘土紐の丸味を残し外側が下がる	 140点 (38%)	 26点 (24%)	166点 (34%)
B類	外側に粘土紐の丸味を残し内側が下がる	 29点 (8%)	 5点 (5%)	34点 (7%)
C類	中央に粘土紐の丸味を残し外側が下がる	 149点 (40%)	 77点 (71%)	226点 (47%)
D類	中央に粘土紐の丸味を残し内側が下がる	 37点 (10%)	0点 (0%)	37点 (8%)
E類	外側に粘土紐の丸味を残して反り内側が下がる	 3点 (-%)	0点 (0%)	3点 (1%)
F類	粘土紐の丸味を内外側に残し内外側が下がる	 15点 (4%)	 1点 (-%)	16点 (3%)
小計		373点 (100%)	109点 (100%)	482点 (200%)

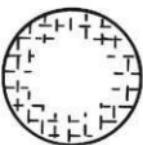
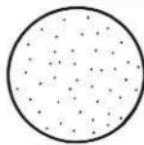
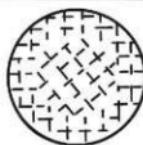
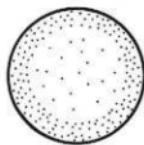
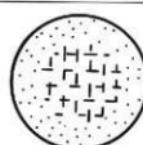
第12図 脣部粘土紐積み上げ法

A類	内側に粘土紐の丸味を残し外側が下がる		34点 (19%)	D類	中央に粘土紐の丸味を残し内側が下がる		6点 (3%)
B類	外側に粘土紐の丸味を残し内側が下がる		6点 (3%)	E類	中央に粘土紐の下向きの丸味を残して反り内側が下がる		3点 (2%)
C類	中央に粘土紐の丸味を残し外側が下がる		126点 (72%)	F類	中央に粘土紐の丸味を残し内外側が下がる		2点 (1%)
合計							177点 (100%)

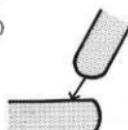
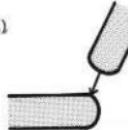
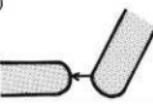
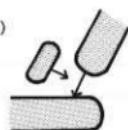
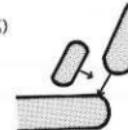
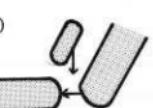
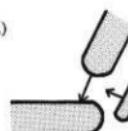
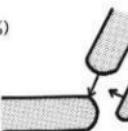
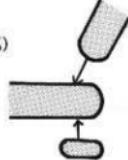
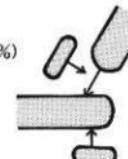
第13図 口縁部と胴部の接合方法

類型	胴部から口縁部へ屈曲するもの	類型	胴部から口縁部へ屈曲しないもの		
A類 上の粘土紐を下の粘土紐の端部側辺に接合		26点 (72%)		401点 (98%)	
B類 下の粘土紐を上の粘土紐の端部側辺に接合		4点 (11%)		4点 (1%)	
C類 上下の粘土紐の端部を接合		3点 (8%)		3点 (1%)	
D類 上下の粘土紐の端部を接合し内側に細い粘土紐を補強		1点 (3%)		1点 (-%)	
E類 上下の粘土紐の端部側辺を接合し上の粘土紐を外側に折り曲げる		2点 (6%)		2点 (-%)	
合計		(100%) 36点	合計		(100%) 411点

第14図 底部底面の痕跡

種別	痕跡の状態		種別	痕跡の状態									
網代痕	底部底面の全面に網代痕があるもの		木葉痕	底部底面の全面に籠状の木葉痕があるもの									
	底部底面の周縁に網代痕があるもの			底部底面の全面にナデ痕跡があるもの									
	底部底面の周縁と内部の網代痕の方向が違うものの			底部底面の全面にナデ痕跡があり周縁がやや盛り上がるるもの									
木葉痕	底部底面の内部に網代痕があり周縁が無文のもの		文	底部底面の全面にケズリ痕跡があるもの									
	底部底面の全面に木葉痕と網代痕が重複するものの（網代の下に木葉を敷く）			底部底面の全面にナデ痕跡とミガキ痕跡があるもの									
	底部底面の全面に一枚の木葉による木葉痕（広葉）があるもの												
	底部底面の全面に複数の木葉による木葉痕があるもの												
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>網代痕</th> <th>木葉痕</th> <th>無文</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>73点 (37%)</td> <td>7点 (4%)</td> <td>115点 (59%)</td> <td>195点 (100%)</td> </tr> </tbody> </table>				網代痕	木葉痕	無文	計	73点 (37%)	7点 (4%)	115点 (59%)	195点 (100%)
網代痕	木葉痕	無文	計										
73点 (37%)	7点 (4%)	115点 (59%)	195点 (100%)										

第15図 底部と胴部の接合方法

	A類 周縁真上	B類 周縁斜め	C類 側縁真横	小計
補強なし	198点 (72%) 	61点 (22%) 	1点 (-%) 	260点 (94%)
内側補強	1点 (-%) 	6点 (2%) 	2点 (1%) 	9点 (3%)
外側補強	1点 (-%) 	2点 (1%) 	0点 (0%)	3点 (1%)
底部補強	4点 (2%) 	0点 (0%)	0点 (0%)	4点 (2%)
内側と底部補強	1点 (-%) 	0点 (0%)	0点 (0%)	1点 (-%)
小計	205点 (74%)	69点 (25%)	3点 (1%)	277点 (100%)

2 文様

(1) 文様表現技法

縄文土器の文様には様々なものが認められた。これらは文様を表現する技法から、地文・押圧縄文・刺突文・沈線文・隆線文・隆沈線文の6つに分けられる。

[地文]

(縄文)

繊維の束を搓り合わせた網を回転させて施文したもので、回転縄文（原体：LRL・RLR・LR・RL・L・R）と、撚糸文（原体：L・R）とがあり、いずれも地文として施文されている。

(条線文)

串もしくは刷毛状の工具で施文したもので回転縄文や撚糸文と同様に地文としている。

[押圧縄文]

縄の側面を圧したもので、縦・横位に直線的に圧したものと、曲線状に圧したものがある。原体には LR・RL・L・R がある。

[刺突文]

ヘラ状もしくは棒状の工具を連続的に突き刺して施文したもので、工具の形状や刺突する角度から角形・円形・橢円形のものがある。また縦・横位に連続して刺突したものや、交互に刺突を繰り返すものもある。また他の文様表現技法によって描かれた文様に付加したり、隆線の上に刺突を加え装飾効果を高めるためのものもある。さらに他の文様で描かれた区画内に刺突文を充填的に加えるものもある。

[沈線文]

刺突文と同じようにヘラ状もしくは棒状の工具を器面に突き刺して、そのまま一定方向に移動しながら粘土を削り取って凹状に施文した文様である。工具移動の際に内面に軽い段状の付くものと、一定の凹面を保ち凹面の底面が平滑なものとがある。縦・横位の移動によって様々な形状の文様を作りだしている。このような沈線文のなかには他の文様に付加して文様効果を高めたり、区画内を充填したりするものもある。また、縦位・横位に連続させたり、連結したりして一見複雑な文様を構成するものもある。

[隆線文]

細い紐状にした粘土紐を貼付したものや、貼付後調整を加えた凸状のものである。粘土紐貼付後に指頭で押圧したものもある。沈線文と同様に縦・横位に貼付することにより様々な形状の文様を作り出している。

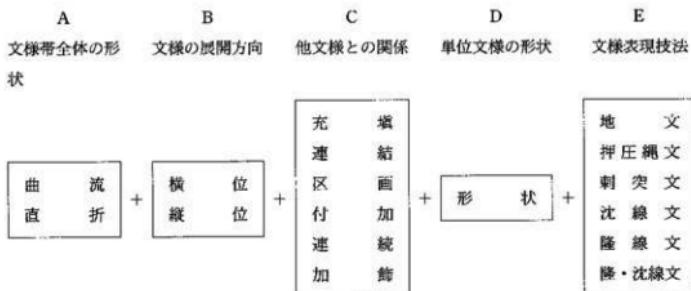
[隆沈線文]

沈線文と隆線文が一体となったものである。沈線文・隆線文と同様に縦・横位に展開して様々な形状の文様を作り出している。

(2) 単位文様

各文様表現技法によって様々な文様を描き、これらが組み合って全体の文様を構成している。これを整理すると、個々の文様が単独で文様を構成するものと、いくつかの文様が組み合って文様を構成するものがある。文様が組み合わさるものには全体の文様構成が曲流しながら展開するものと、クランク状に上下左右に折れ曲がりながら展開するものがある。文様が縦位や横位に展開しながら、文様体を区画したり、この区画内を充填するものもある。さらに他の文様に付加したり、加飾することにより文様の装飾効果を高めるものもある。一見複雑な第II群土器の文様も単位となる個々の文様に分解して分析を進めることができる。ここではやや繁雑にはなるが、最上位に文様帯の全体形状、以下文様の展開方向、他文様との関係、単位文様の形状、文様表現技法の順に該当するものの名称を組み合わせて以下のように呼称することにした。

またA(文様帶の全体の形状)をのぞいたB+C+D+Eの組み合わせからなる単位文様は第16・17図のようになる。



3 文様帶の構成

個々の文様が土器の表面に施文され、文様の集合体としての文様帶が形成されている。このような文様帶には、配置される部位や文様帶の構成方法に規則性が認められた。

口縁部には沈・隆・隆沈線によって様々な文様を施した口縁部文様帶を構成しているものと、地文帶のもの、無文帶のものがある。この口縁部文様帶には2つ以上の文様帶が複合して構成される複帯型のものと、1つの文様帶で構成される単帶型がある。

口縁部下の頸部には地文帶のものと、無文帶の2種類がある。頸部文様帶を形成しないものは、口縁部文様帶と胴部文様帶が接している。

頸部文様帶下もしくは口縁部文様帶と接する胴部には、沈・隆・隆沈線によって様々な文様を施文して胴部文様帶を構成しているものと、地文帶のもの、無文帶のものがある。この胴部文様帶には2つ以上の文様帶が複合して構成される複帯型のものと、単帶として構成される単帶型がある。

さらに、口縁部・頸部・胴部とそれぞれの部位の個々の文様帶が独立せず、口縁部から胴部へと連続して文様が展開するものもある。また、口縁部・頸部・胴部全面が地文帶か無文帶のものもある。これら文様帶の構成のあり方をまとめたのが第18図である。

4 口縁部文様帶

口縁部文様帶の構成を観察すると、口縁部文様帶が狭小なものと、一定の幅をもって展開するものと大きく2つに分けられる。狭小な口縁部文様帶を持つものは単帶のみであるが、一定幅を持つものには単帶のものと複帯のものとが認められる。これらはそれぞれ刺突文・押圧縄文・沈線文・隆線文・隆沈線文によって様々な文様が施文されている。これら口縁部文様帶の文様のあり方をまとめたのが第19・20図である。狭小な口縁部文様帶を構成する文様はほとんど単位文様であるが、単帶の幅広口縁部文様帶は単位文様が連結して文様帶を構成しているため文様の内容について説明する。

〔独立横位渦巻隆線文・隆沈線文〕

口縁部文様帶の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、2本の隆線・隆沈線文が横位渦巻文を描き他の横位渦巻文と連結せずに独立しているもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接するものがある。縦位付加隆線・隆沈線文をともなうものもある。なかには上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接する縦位区画状の縦位付加隆線文・隆沈線文を持つものもある。上下端の横位区画隆線文・隆

第16図 単位文様(1)

縦位連続押圧繩文 (縦位押圧繩文)	横位押圧繩文	横位連続山形状押圧繩文 (山形状押圧繩文)
横位連続弧状押圧繩文 (連弧状押圧繩文)	格子目状押圧繩文	角押文
充填刺突文	付加刺突文	横位連続刺突文 (連続刺突文)
横位連続交互刺突文 (横位交互刺突文)	加飾刺突文	クランク状沈線文
付加菱形状沈線文 (菱形状沈線文)	横位付加C字状沈線文 (C字状沈線文)	縦位付加C字状沈線文 (C字状沈線文)
付加渦巻沈線文	付加刺先状沈線文 (刺先状沈線文)	縦位付加沈線文
縦位付加7字状沈線文 (付加7字状沈線文)	縦位付加L字状沈線文 (付加L字状沈線文)	充填沈線文
縦位連続短沈線文 (短沈線文)	横位連続山形状沈線文 (山形状沈線文)	三角形状沈線文
縦位連続波状沈線文 (縦位波状沈線文)	横位連続斜沈線文 (斜沈線文)	クランク状隆沈線文

第17図 単位文様(2)



沈線文は、上下各1本のものが多いが上1本下2本、上下2本のものもある。

[直線状連結横位渦巻隆線文・隆沈線文]

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、1～2本の隆線・隆沈線文が横位渦巻文として直線状に連結して横位に展開するもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するものがある。縦位付加隆線・隆沈線をともなうものが多い。隆線・隆沈線自体が渦巻文を描くものが多いが隆線間の沈線が沈刻状に渦巻文を描くものもある。沈刻状の渦巻文のものは縦位付加隆沈線文も沈刻状である。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は、上下各1本のものが多いが上1本下2本のものもある。

[波状連結横位渦巻隆線文・隆沈線文]

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、2本の隆線・隆沈線文が波状に横位に展開し、部分的に横位渦巻隆線文・隆沈線文になっているもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するもの、接続しないものがある。縦位付加隆線・隆沈線文をともなうものが多い。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は、上下各1・2・3本のもの、上1本下2本、上2本下1・3本、上3本下2本のものなど様々である。

[小単位連結横位渦巻隆線文・隆沈線文]

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、1～2本の隆線・隆沈線文によって構成される2つ以上の横位渦巻文が連結して、小単位の横位渦巻文を構成している。それぞれの小単位は連結せず、独立した文様単位となっている。縦位付加隆線・隆沈線文をともなうものもある。隆線・隆沈線自体が渦巻文を描くものが多いが、隆線間の沈線が沈刻状に渦巻文を描くものもある。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するものがある。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は、上下各1本のものが多いが、上下各2本のものもある。

[直折隆線文・隆沈線文]

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、横位に展開する1～2本の隆線・隆沈線文が直線もしくは直角状に折れ曲がりながら直折的に隆線・隆沈線文が展開するもの。上下端の横位区画隆沈線文の両方に接続するものと片方だけに接続するものがある。縦位付加隆線文のなかには上下端の横位区画隆線文の両方に接する縦位区画状の縦位付加隆線・隆沈線文を持つものもある。上下端の横位区画隆沈線文は、上下各2本のものが多いが、上下各1本のものや、上2本下3本のものもある。

[横位波状隆線文・隆沈線文]

口縁部文様帯の上・下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、横位に1～2本の隆線・隆沈線文が波状に展開するもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は上下1本のものが多いが、2本のものもある。

[連結横位渦巻隆沈線文]

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆沈線文で区画された中を、横位に2本の隆沈線文が連結して横位渦巻文が展開するもので、連結の仕方に規則性がみられないもの。上下端の横位区画隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するものがある。上下端の横位区画隆沈線文は、上下各1本のものが多いが、上下各2本のものや、上1本下2本のものもある。

[横位沈刻状隆沈線文]

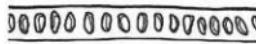
口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆沈線文で区画された中を、横位に1～2本の隆沈線文が横位渦巻文を展開するもの。他の渦巻隆線・隆沈線文は隆線・隆沈線自体が渦巻文となっているが、横位沈刻状隆沈線文は2本の隆沈線間の沈線部分が大きく渦巻文を刻むようになっている。さらにこの隆沈線によって区画された部分が、変形橢円状を呈している。

第18図 土器文様帯分類

1類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		11類 口縁部文様帯（複帯） —— 胴部地文帯	
2類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部地文帯		12類 口縁部文様帯（複帯） —— 胴部無文帯	
3類 口縁部文様帯（単帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）		13類 口縁部～胴部文様帯	
4類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部文様帯（単帯）		14類 口縁部地文帯 —— 胴部文様帯（単帯）	
5類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部地文帯		15類 口縁部地文帯 —— 胴部文様帯（複帯）	
6類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部無文帯		16類 口縁部無文帯 —— 胴部文様帯（単帯）	
7類 口縁部文様帯（複帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		17類 口縁部無文帯 —— 胴部地文帯	
8類 口縁部文様帯（複帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）		18類 地 文のみ	
9類 口縁部文様帯（複帯） —— 胴部文様帯（単帯）		19類 無 文のみ	
10類 口縁部文様帯（複帯） —— 胴部文様帯（複帯）		胴部の横位区画沈・隆・隆沈線だけのものも胴部文様帯（単帯）とした。	

胴部の横位区画沈・隆・隆沈線だけのものも胴部文様帯（単帯）とした。

第19図 深鉢形土器口縁部文様帶分類(1)

狭小な口縁部文様帶	単帶型	沈線系	A 橫位沈刻状渦巻沈線文 	B 縦位短沈線文 
		隆線系	C 小波状隆線文 	D 橫位隆線文 
		押圧繩文系	E 縦位押圧繩文 	F 山形状押圧繩文 
		刺突文系	G 刺突文 	
			H	
一定の幅がある口縁部文様帶	複帶型	沈線系	H	
		隆線系	H	
		押圧繩文系	H	
		刺突文系	H	
		沈線系	I 弧状沈線文 	

第20図 深鉢形土器口縁部文様帶分類(2)

一定の幅がある口縁部文様帶	隆線系	J	独立横位渦巻隆線文	K	直線状連続横位渦巻隆線文
		L	波状連続横位渦巻隆線文	M	小単位連続横位渦巻隆線文
		N	直折隆線文	O	横位波状隆線文
	隆沈線系	P	独立横位渦巻隆沈線文	Q	波状連続横位渦巻隆沈線文
		R	連続横位渦巻隆沈線文	S	直線状連続横位渦巻隆沈線文
		T	小単位連続横位渦巻隆沈線文		
		U	直折隆沈線文	V	横位沈刻状隆沈線文
	その他	W	横位連続梢円文	X	突起付無文帶
		Y	その他		

[横位連続楕円文]

隆線の区画内が楕円状の形状のもので、横位に連続するもの。

5 胸部文様帯

胸部文様帯の構成を観察すると、口縁部文様帯から独立するものと、口縁部文様帯と連結して胸部文様帯として展開するものと大きく2つに分けられる。さらにそれぞれ単位文様の表現技法から沈線文系・隆線文系・隆沈線文系のものがある。ただし口縁部文様帯と連結する胸部文様帯のものには隆線文系のものはない。これらは文様展開が胸部全面に展開するものと、縦位区画内で展開するもの、縦・横位区画内で展開するものとに分けられる。胸部全面に展開するものは、構成する文様によってさらに細分した。これらをまとめたのが第21・22・23図である。胸部全面に展開するものは単位文様が連結して文様を構成しているため主な文様の内容について説明する。

[曲流横位渦巻沈線文]

頸部と胸部文様帯を区画する横位区画沈線文から出発し、曲流しながら沈線文で大きく渦巻文を描くもの。渦は右巻きと左巻きがある。右巻きのものは、横位区画沈線からやや下降しながら渦を巻くが、左巻きのものはいちど下に屈曲して渦を巻くものが多い。この主文様である渦巻文に「7」字状や直線状に垂下する沈線文が付加して文様全体を構成しており、かなり定型化している。主文様である横位の沈線渦巻文や付加する沈線文は3本単位の沈線が多いが2本単位のものもある。

[曲流横位渦巻隆沈線文]

曲流横位渦巻沈線文と同様に、頸部と胸部文様帯を区画する横位区画沈線文から出発し、曲流しながら隆沈線文で大きく渦巻文を描くものであるが、曲流横位渦巻沈線文ほど定型化せず様々なバリエーションのものがある。2本隆線と3本沈線のものが多いが、1本隆線と2本沈線のものもある。

[曲流横位変形渦巻沈線文]

曲流横位渦巻沈線文のように頸部と胸部文様帯を区画する横位区画沈線文と連結せず、独立した渦巻文のもの。

[連結曲流横位渦巻沈線文]

曲流しながら横位に展開する渦巻沈線文であるが、縦横位に連結して胸部全面に展開するもの。3本単位の沈線が多いが、2本単位のものもある。

[連結曲流横位渦巻隆沈線文]

曲流しながら横位に展開する渦巻隆沈線文であるが、縦横位に連結して胸部全面に展開するもの。2本の隆線間の沈線部分が大きく渦巻文を刻むような沈刻状のものもある。さらに隆沈線が複雜に縦横位に連結しているため、隆沈線の区画内が変形楕円文状を呈しているものもある。

[直折渦巻沈線文]

横位区画沈線文に連結しないで独立し、直角状垂下して完結している渦巻沈線文。

[連結直折渦巻沈線文]

2～3本単位の沈線が渦巻文を描きながら直角状に折れ曲がって連結して展開するもの。

[連結直折沈線文]

2～3本単位の沈線が直角状に折れ曲がりながら連結して展開しているもの。

6 口縁部文様と胸部文様との関係

4・5でそれぞれ口縁部文様帯と胸部文様帯の文様のあり方を観察したのでここでは、それぞれの文様帯の文様がどのような関係にあるのかを見ることにする。口縁部文様帯と胸部文様帯の文様の相關関係をまとめたのが第7表である。繁雑なので整理したのが第8表である。これら多數の文様のなかで、数量が多いものや特徴的なものを抜き出して凡そその傾向を整理してみたのが第9表である。

口縁部文様帯が狭小な口縁部文様A～Gには、胴部文様の胴部全面展開型ではa（曲流横位渦巻沈線文）も若干あるが直折沈線系のd・e・fが多い。直折沈線系のd（連結直折渦巻文）は狭小な口縁部文様帯のものにしか認められない。区画内展開型の沈線系ではb・l・k・l、隆線系ではr・s・t、隆沈系ではw・xがある。

口縁部文様帯が一定の幅がある複帶の口縁部文様Hには、胴部文様の胴部全面展開型ではa（曲流横位渦巻沈線文）も若干あるが直折沈線系のd・e・fや直折隆線系のm・nが多い。直折隆線系のm（連結直折渦巻隆線文）・n（連結直折隆線文）は口縁部文様H（複帶）にしかみられない。区画内展開型の沈線系ではh・i・k・l、隆線系ではo・p・r・t、隆沈系ではw・xがある。隆線系のp（縱模位区画内展開隆線文）は口縁部文様Hだけにしかない。

口縁部文様帯が一定の幅があり単帶で隆線系の口縁部文様J～Oには、胴部文様の胴部全面展開型では沈線系のfのみである。区画内展開型の沈線系ではh・k・l、隆線系ではo・r・s、隆沈系はない。

口縁部文様帯が一定の幅がある単帶で隆沈線系の口縁部文様P～Uには、胴部文様の胴部全面展開型では沈線系のa・eと隆沈線系のu・vが多い。区画内展開型の沈線系ではh・k・l、隆線系ではrのみで、隆沈系ではw・xがある。

口縁部文様帯が一定の幅があり単帶で隆沈線系の口縁部文様V（横位沈刻状隆沈線文）には、胴部文様の胴部全面展開型では沈線系のa・c・e、と隆沈線系u・vが多い。沈線系c（連結曲流横位渦巻沈線文）は口縁部文様Vにしかない。区画内展開型の沈線系のものではなく、隆線系のtと、隆沈線系のxである。

口縁部から胴部に連絡する文様帯は、胴部文様y・zのみである。

口縁部文様帯の文様を、狭小な口縁部文様帯（A～G）のもの・複帶型のもの（H）・単帶型で隆線系のもの（J～O）・単帶型で隆沈線系のもの（P～U）・単帶型で沈刻状隆沈線系のもの（V）・口～胴部展開系のものと大きく5つに分けて胴部文様帯のあり方を検討してみた。その結果、口～胴部展開系の文様は沈刻状隆沈線系Vの胴部文様に類似し（Y口～胴部連絡曲流横位渦巻沈線文とc連結曲流渦巻沈線文、Z口～胴部連絡曲流横位渦巻隆沈線文とv連結曲流渦巻隆沈線文）口縁部文様帯と胴部文様帯が分離しているかどうかの違いだけである。こうした胴部文様帯の類似、非類似の度合いをそれぞれ検討してみた。

第9表 深鉢形土器の口縁部文様帯・胴部文様帯相関表(3)

胴部文様		沈線系		隆線系		隆沈線系	
		全面展開型	区画内展開型	全面展開型	区画内展開型	全面展開型	区画内展開型
狭小型	A～G	a d e f	h i k l			r s t	
複帶型	H	a d e f	h i k l	m n	o p r t		w x
単帶型	隆線系 J～O	f	h k l		o r s		
隆沈線系	P～U	a e	h k l		r s	u v	w x
沈刻状隆沈線系	V	a c e			r s	u v	x
口～胴部展開型		v				z	

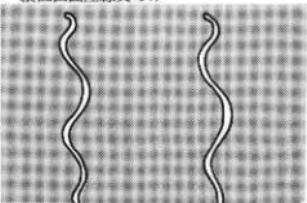
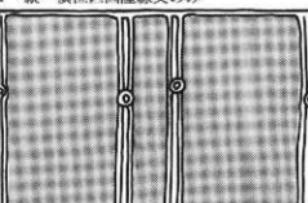
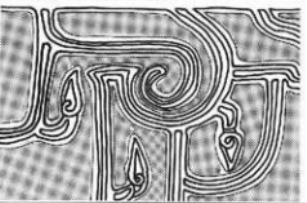
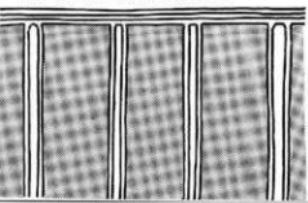
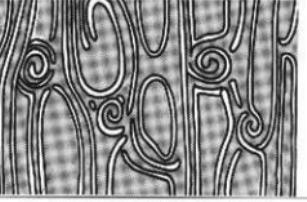
第21図 深鉢形土器胴部文様帶分類(1)

口 縁 部 文 様 帶 か ら 独 立 す る 胴 部 文 様 帶	胴 部 全 面 展 開 型	a 曲流横位渦巻沈線文	b 曲流横位変形渦巻沈線文
		c 連結曲流横位渦巻沈線文	d 連結直折渦巻沈線文
		e 直折渦巻沈線文	f 連結直折沈線文
	沈 線 文 系	g 連弧状沈線文	
		h 縦位区画内展開沈線文	i 縦・横位区画内展開沈線文
	区 画 内 展 開 型		

第22図 深鉢形土器腹部文様帶分類(2)

口 縁 部 文 様 帶 か ら 独 立 す る 脇 部 文 様 帶	沈 線 文 系	区 画 内 展 開 型	j 横位区画内展開沈線文	k 横位区画沈線文のみ
		l 縦・横位区画沈線文のみ		
		m 連結直折渦巻隆線文	n 連結直折隆線文	
	脇 線 文 系	区 画 内 展 開 型	o 縦位区画内展開隆線文	p 縦・横位区画内展開隆線文
		q 横位区画内展開隆線文	r 横位区画隆線文のみ	

第23図 深鉢形土器胴部文様帯分類(3)

口 縁部 文様 帶 から 独立 する 胴部 文様 帶	隆 線 文 系	s 縦位区画隆線文のみ		t 縦・横位区画隆線文のみ	
		u 曲流横位渦巻隆沈線文		v 連結曲流渦巻隆沈線文	
	区画内展開型	w 縦位区画内展開隆沈線文		x 縦・横位区画線壁沈線文のみ	
口 縁部 から 胴部 文様 帶 に連 結す る文 様帶	沈 線 文 系	y 口～胴部連結曲流横位渦巻沈線文			
	隆 沈 線 文 系	z 口～胴部連結曲流横位渦巻隆沈線文		z'	口～胴部連結渦巻隆沈線文

7 器種

器種には、深鉢形土器・樽形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・台付浅鉢形土器・壺形土器・注口土器・有孔鉢形土器の8器種が認められた。このうち深鉢形土器は口径と器高の比が1以上のもので、鉢形土器は1未満1/2以上のものの、浅鉢形土器は1/2未満とした。深鉢形土器のうち胴部上半から口縁部にかけて内彎し、最大径が胴部にあり全体形状が樽形でまとまりのある一群のものを樽形土器として独立させた。さらに浅鉢形土器のうち注口を持つものを注口土器とした。鉢形土器の中で全体が無文で口縁直下に小孔を連続して持つ特殊なものを有孔鉢形土器とした。

8 器形

器形は、口縁部形態と口縁部の傾きの状態、胴部の傾きの状態によって構成されている。口縁部形態には平口縁のものと波状口縁のものと大きく2つある。平口縁は平坦な単純口縁で突起をもつものもある。波状口縁には波頂部に突起を持つものもある。波頂部の数や波頂部の突起の数も様々である。これをまとめたのが第24図である。

深鉢形土器は平口縁・波状口縁のものがあるが、樽形土器・鉢形土器・壺形土器・注口土器・有孔鉢形土器はすべて平口縁である。浅鉢形土器と台付浅鉢形土器にはわずかに波状口縁状のもの(66図1, 213図2)がある。

また平坦な単純口縁に突起を持つものや、波頂部に突起を持つものが多いので突起についてまとめる。突起には口縁部文様帶として連続しながら展開するものと、胴部文様帶と連結して展開するもの、独立して突起が付くものとがある。これらには橋状のものと非橋状のものとがある。また大きさや突起の全体的形状から立体的空洞突起・大型立体突起・立体的突起・単純突起・S字状突起・3字状突起のものがある。これら突起についてまとめたのが第25図である。連続型の橋状の単純突起の一部や非橋状の立体的空洞突起の一部と非橋状の単純突起、連結型の非橋状の立体的空洞突起の一部、独立型の非橋状で立体的空洞突起の大部分は単純平口縁につくものである。その他のものは波状口縁の波頂部となっている。

深鉢形土器には立体的空洞突起・大型立体突起・立体的突起・単純突起・S字状突起・3字状突起のいずれもあるが、樽形土器・壺形土器・注口土器・有孔鉢形土器は突起がない。鉢形土器には単純突起状のもの(55図1)がある。浅鉢形土器には橋状型の単純突起を持つもの(29図5)や単純突起やS字状突起を持つもの(194図4)がある。台付浅鉢形土器にも単純突起を持つものがある。

口縁部形態と突起形状をいれて器形を分類すると繁雑になるので、口縁部の傾きと胴部の傾きとで分類したのが第26図である。

【土器の分類】

第二群土器には、深鉢形土器・樽形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・台付浅鉢形土器・壺形土器・注口土器・有孔鉢形土器の8器種が認められた。これらのうち数量の少ない壺形土器・注口土器・有孔鉢形土器をのぞいた5器種について分類した。

1 深鉢形土器分類

8器種中最も数量が多いのは深鉢形土器である。観察の8「器形」の項で述べたように深鉢形土器の器形は、口縁部が内彎しキャリバー形のもの(A類)と、口縁部が内彎するが胴部の屈曲の緩やかなもの(B類)、胴部が外傾し口縁部がやや内彎するもの(C類)、口縁部が外傾するもの(D類)、胴部から口縁部にかけて外傾するもの(E類)、口縁部が直立するもの(F類)、胴部から口縁部が大きく内彎するもの(G類)の7器形に分類した。これらはそれぞれ文様帶のあり方から第31~35図のように細分できる。また器形と文様帶、口縁部・胴部文様の関係をまとめたのが第10表である。これをもとに口縁部文様帶を中心としてA群~K群の11群に分類したのが第11表である。各群の年代的位置付けは第VI章の考察の項で行うこととする。

第7表 深鉢形土器の口縁部文様帶・胴部文様帶相関表(1)

口縁部文様帶	胴部文様帶		
A 狹小單帶横位沈刻状 満巻沈線文	a 曲流横位満巻沈線文 h 縦位区画内展開沈線文 r 横位区画隆線文のみ x 縦横位区画隆沈線文のみ	d 連結直折満巻文 i 縦横位区画内展開沈線文 s 縦位区画隆線文のみ t 縦横位区画隆線文のみ	c 直折満巻沈線文 I 縦横位区画沈線文のみ r 横位区画隆線文のみ
B 狹小單帶縦位短沈線文	k 横位区画沈線文のみ	I 縦横位区画沈線文のみ	r 横位区画隆線文のみ
C 狹小單帶小波状隆線文	d 連結直折満巻沈線文	r 横位区画隆線文のみ	地文のみ
D 狹小單帶横位隆線文	d 連結直折満巻沈線文 w 縦位区画内展開沈線文	r 横位区画隆線文のみ	t 縦横位区画隆線文のみ
E 狹小單帶押圧繩文	d 連結直折満巻沈線文	k 横位区画沈線文のみ	地文のみ
F 狹小單帶山形狀押圧繩文	地文のみ		
G 狹小單帶刺突文	d 連結直折満巻沈線文 i 縦横位区画内展開沈線文	f 連結直折沈線文 k 横位区画沈線文のみ	h 縦位区画内展開沈線文
H 幅有複帶沈線文・隆線系 押圧繩文系・刺突文系	a 曲流横位満巻沈線文 h 縦位区画内展開沈線文 l 縦横位区画沈線文のみ o 縦位区画内展開隆線文 t 縦横位区画隆線文のみ	d 連結直折満巻沈線文 i 縦横位区画内展開沈線文 m 連結直折満巻沈線文 p 縦横位区画内展開隆線文 w 縦位区画内展開隆沈線文	f 連結直折沈線文 k 横位区画沈線文のみ n 連結直折隆線文 r 横位区画隆線文のみ x 縦横位区画隆沈線文のみ
I 幅有单帶弧状沈線文	b 曲流横位横位変形満巻沈 線文	k 横位区画沈線文のみ	
J 艇有单帶独立横位満巻隆 線文	h 縦位区画内展開沈線文	s 縦位区画隆線文のみ	
K 艇有单帶直線状連結横位 満巻隆線文	o 縦位区画内展開隆線文		
L 幅有单帶波状連結横位満 巻隆線文	h 縦位区画内展開沈線文 地文のみ	I 縦横位区画沈線文のみ r 横位区画隆線文のみ	
M 幅有单帶小單位連結横位 満巻隆線文	h 縦位区画内展開沈線文 無文のみ	r 横位区画隆線文のみ	地文のみ
N 艇有单帶直折隆線文	f 連結直折沈線文 r 横位区画隆線文のみ	h 縦位区画内展開沈線文	k 横位区画沈線文のみ
O 幅有单帶横位波状隆線文	h 縦位区画内展開沈線文	t 縦横位区画隆線文のみ	地文のみ
P 艇有单帶独立横位満巻隆 沈線文	a 曲流横位満巻沈線文 t 縦横位区画隆線文のみ	h 縦位区画内展開沈線文 k 横位区画沈線文のみ	地文のみ
Q 艇有单帶波状連結横位満 巻沈線文	a 曲流横位満巻沈線文 w 縦位区画内展開隆沈線文	h 縦位区画内展開沈線文 x 縦横位区画隆沈線文のみ	I 縦横位区画沈線文のみ 地文のみ
R 幅有单帶連結横位満巻隆 沈線文	a 曲流横位満巻沈線文 地文のみ	c 直折満巻沈線文	h 縦位区画内展開沈線文
S 艇有单帶直線状連結横位 満巻隆沈線文	h 縦位区画内展開沈線文 v 曲流横位満巻隆沈線文	i 横位区画隆線文のみ 地文のみ	t 縦横位区画隆線文のみ
T 艇有单帶小單位連結横位 満巻隆沈線文	a 曲流横位満巻沈線文 k 横位区画沈線文のみ u 曲流横位満巻隆沈線 地文のみ	c 直折満巻沈線文 I 縦横位区画沈線文のみ w 縦位区画内展開隆沈線文	h 縦位区画内展開沈線文 t 縦横位区画隆線文のみ x 縦横位区画隆沈線文のみ
U 幅有单帶直折隆沈線文	l 縦横位区画沈線文のみ		
V 艇有单帶横位沈刻状隆沈 線文	a 曲流横位満巻沈線文 t 縦横位区画隆線文のみ x 縦横位区画隆沈線文のみ	c 連結曲流横位満巻沈線文 u 曲流横位満巻隆沈線文	e 直折満巻沈線文 v 連結曲流満巻隆沈線文
W 幅有单帶横位連続横円文	地文のみ		
X 艇有单帶突起付無文帯	k 横位区画沈線文のみ o 縦位区画内展開隆線文	d 連結直折満巻沈線文 地文のみ	h 縦位区画内展開沈線文
Y その他	d 連結直折満巻沈線文 i 縦横位区画内展開沈線文 w 縦位区画内展開沈線文	f 連結直折沈線文 k 横位区画沈線文のみ 地文のみ	h 縦位区画内展開沈線文 t 縦横位区画隆線文のみ

第8表 深鉢形土器の口縁部文様帶・胴部文様帶相関表(2)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	
	口 縁 部 文 様 帶 分 類																									
a	●							●								●	●	●	●	●	●	●	●			
b									●																	
c																					●					
d		●	●	●	●	●			●	●															●	
e	●																									
f																										
g																										
h	●									●	●															
i	●										●															
j																										
k		●									●															
l		●	●								●															
m																										
n																										
o																										
p																										
q																										
r	●	●	●	●	●																					
s	●																									
t	●		●																							
u																										
v																										
w																										
x																										
y																										
z																										
地文のみ	●		●	●	●	●	●									●	●									
無文のみ																		●								

第24図 深鉢形土器口縁形態分類

平口縁	平坦な単純口縁	
波状 口縁	波頂部があるもの	1つの波状口縁
		2つの波状口縁
		3つの波状口縁
		4つの波状口縁
		5つの波状口縁
		6つの波状口縁
		波頂部が4つの突起のもの
		波頂部が5つの突起のもの
		波頂部が8つの突起のもの

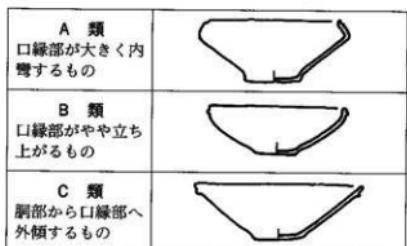
第25図 深鉢形土器突起分類

連続型 口縁部文様帶として連続して展開する突起	橋状型	口縁部文様帶全体構成の立体的中空突起	口縁部文様帶全体構成の単純突起
		口縁部第1文様帶構成の立体的中空突起	
	非橋状型	立体的中空突起	単純突起
連結型 胴部文様帶と連結して展開する突起	橋状型	立体的中空突起	
	非橋状型	立体的中空突起	
独立型	橋状型	立体的中空突起	単純突起
	非橋状型	立体的中空突起	立体的突起
		大型立体突起	単純突起
		S字状突起	3字状突起

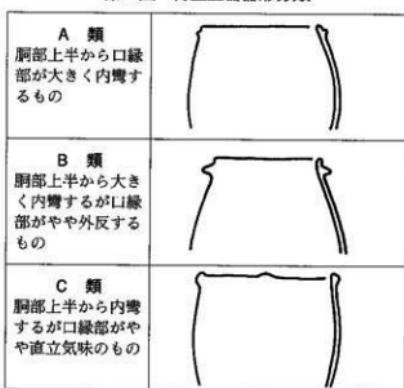
第26図 深鉢形土器器形分類



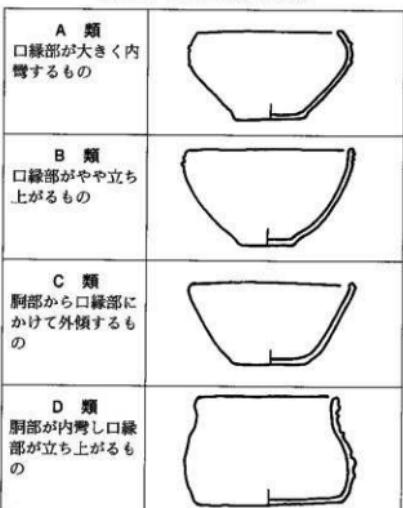
第29図 浅鉢形土器器形分類



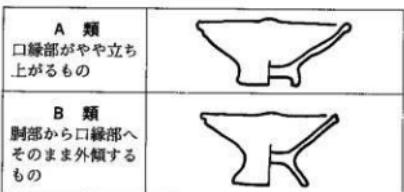
第27図 檜型土器器形分類



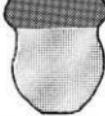
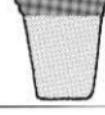
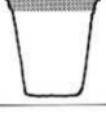
第28図 鉢形土器器形分類



第30図 台付浅鉢形土器器形分類



第31図 深鉢形土器器形・文様帶分類(1)

文様帶 の有無	器 形	文 様 带			
文様帶 のあるもの	A 類 口縁部が内彎し、 キャリバー形のも の	A 1類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胴部文様帶(単帶)		A 2類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胴部地文帶	
		A 3類 口縁部文様帶(単帶) 頸部地文帶 胴部文様帶(単帶)		A 4類 口縁部文様帶(単帶) —— 胴部文様帶(単帶)	
		A 5類 口縁部文様帶(単帶) —— 胴部地文帶		A 6類 口縁部文様帶(単帶) —— 胴部無文帶	
		A 7類 口縁部文様帶(複帶) 頸部無文帶 胴部文様帶(単帶)		A 8類 口縁部文様帶(複帶) 頸部地文帶 胴部文様帶(単帶)	
		A 11類 口縁部文様帶(複帶) —— 胴部地文帶		A 13類 口縁部文様帶～ 胴部文様帶	
	B 類 口縁部が内彎する が、胴部の屈曲の 緩やかなもの	B 1類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胴部文様帶(単帶)		B 2類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胴部地文帶	
		B 3類 口縁部文様帶(単帶) 頸部地文帶 胴部文様帶(単帶)		B 4類 口縁部文様帶(単帶) —— 胴部文様帶(単帶)	
		B 5類 口縁部文様帶(単帶) —— 胴部地文帶		B 7類 口縁部文様帶(複帶) 頸部無文帶 胴部無文帶	

第32図 深鉢形土器器形・文様帯分類(2)

文様帯のあるもの	B類 口縁部が内凹する が、胴部の屈曲の 緩やかなもの	B 8類 口縁部文様帯(複帯) 頸部地文帯 胴部文様帯(単帯)		B 9類 口縁部文様帯(複帯) — 胴部文様帯(単帯)	
		B 11類 口縁部文様帯(複帯) — 胴部地文帯		B 15類 口縁部地文帯 — 胴部文様帯(複帯)	
		B 16類 口縁部無文帯 — 胴部文様帯(単帯)			
		C 1類 口縁部文様帯(単帯) 頸部無文帯 胴部文様帯(単帯)		C 3類 口縁部文様帯(単帯) 頸部地文帯 胴部文様帯(単帯)	
C類 胴部が外傾し、口 縁部がやや内凹す るもの	C 4類 口縁部文様帯(単帯) — 胴部文様帯(単帯)			C 5類 口縁部文様帯(単帯) — 胴部地文帯	
		D 1類 口縁部文様帯(単帯) 頸部無文帯 胴部文様帯(単帯)		D 2類 口縁部文様帯(単帯) 頸部無文帯 胴部地文帯	
	D 3類 口縁部文様帯(単帯) 頸部地文帯 胴部文様帯(単帯)			D 4類 口縁部文様帯(単帯) — 胴部文様帯(単帯)	
		D 5類 口縁部文様帯(単帯) — 胴部地文帯		D 6類 口縁部文様帯(単帯) — 胴部無文帯	
	D 7類 口縁部文様帯(単帯) 頸部無文帯 胴部文様帯(単帯)			D 8類 口縁部文様帯(複帯) 頸部地文帯 胴部文様帯(単帯)	

第33図 深鉢形土器器形・文様帶分類(3)

文様帶のあるもの	D 類 口縁部が外傾するもの	D 9類 口縁部文様帶(複帶) —— 胸部文様帶(単帶)		D 10類 口縁部文様帶(複帶) —— 胸部文様帶(複帶)	
		D 11類 口縁部文様帶(複帶) —— 胸部地文帶		D 13類 口縁部文様帶～ 胸部文様帶	
		D 16類 口縁部無文帶 —— 胸部文様帶(単帶)		D 17類 口縁部無文帶 —— 胸部地文帶	
		E 1類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胸部文様帶(単帶)		E 2類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胸部地文帶	
	E 類 胸部から口縁部にかけて外傾するもの	E 3類 口縁部文様帶(単帶) 頸部地文帶 胸部文様帶(単帶)		E 4類 口縁部文様帶(単帶) —— 胸部文様帶(単帶)	
		E 5類 口縁部文様帶(単帶) —— 胸部地文帶		E 6類 口縁部文様帶(単帶) —— 胸部無文帶	
		E 7類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胸部文様帶(単帶)		E 9類 口縁部文様帶(複帶) —— 胸部文様帶(単帶)	
		E 10類 口縁部文様帶(複帶) —— 胸部文様帶(複帶)		E 11類 口縁部文様帶(複帶) —— 胸部地文帶	
		E 13類 口縁部文様帶～ 胸部文様帶		E 16類 口縁部無文帶 —— 胸部文様帶(単帶)	

第34図 深鉢形土器器形・文様帶分類(4)

文様のあるもの	E類 胸部から口縁部にかけて、外傾するもの	E 17類 口縁部無文帶 — 胸部地文帶			
	F類 口縁部が直立するもの	F 1類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胸部文様帶(単帶)		F 2類 口縁部文様帶(単帶) 頸部無文帶 胸部地文帶(単帶)	
		F 3類 口縁部文様帶(単帶) 頸部地文帶 胸部文様帶(単帶)		F 4類 口縁部文様帶(複帶) — 胸部文様帶(単帶)	
		F 5類 口縁部文様帶(単帶) — 胸部地文帶		F 6類 口縁部文様帶(単帶) — 胸部無文帶(単帶)	
		F 7類 口縁部文様帶(複帶) 頸部無文帶 胸部文様帶(単帶)		F 8類 口縁部文様帶(複帶) 頸部地文帶 胸部文様帶(単帶)	
		F 9類 口縁部文様帶(複帶) — 胸部文様帶(単帶)		F 10類 口縁部文様帶(複帶) — 胸部文様帶(複帶)	
		F 11類 口縁部文様帶(複帶) — 胸部地文帶		F 12類 口縁部文様帶(複帶) — 胸部無文帶	
		F 16類 口縁部無文帶 — 胸部文様帶(単帶)		F 17類 口縁部無文帶 — 胸部地文帶	
	G類 胸部から口縁部がおおきく内彎するもの	G 1類 口縁部文様帶(単帶) — 胸部地文帶		G 5類 口縁部文様帶(単帶) — 胸部地文帶	

第35図 深鉢形土器器形・文様帯分類(5)

文様帯のあるもの	G 類 胸部から口縁部が 大きく内湾するも の	G 13類 口縁部文様帯～ 胸部文様帯		G 16類 口縁部無文帯 —— 胸部文様帯(単帯)	
		G 17類 口縁部無文帯 —— 胸部地文帯			
地文・無文のみのもの		H 類 口縁部が内湾し、キ ヤリバー形のもの		I 類 口縁部が内湾する が、屈曲の緩やかな もの	
		J 類 口縁部が外傾するも の		K 類 口縁部が直立するも の	
		L 類 口縁部がやや内湾す るもの		M 類 口縁部が外反するも の	

胸部の横位区画沈・隆・隆沈線だけのものも胸部文様帯(単帯)とした。

第10表 深鉢形土器の器形・文様帶・口縁部文様相関

器形	文様帶構成	口縁部・胴部文様	器形	文様帶構成	口縁部・胴部文様
A類	文様帶1類	Ja・Jh・Js・J-・Lh・Ll・L- M-・Nh・Nk・Nr・Pa・Ph・Px P-・Qa・Qh・Qi・Qw・Q-・Ra Ru・R-・Sa・Se・St・Su・S- Ta・Te・Th・Tk・Tl・Tt・Tw T-・Va・Vc・Ve・Vu・Vv・Vx V-	D類	文様帶8類	Hi・Hl・Hm
	文様帶2類	L地・M地・R地・S地・T地	D類	文様帶9類	Hd・Hi・Hm
	文様帶3類	Dd・Ja・Jh・J-・L-・Mh・N- Oh・Ph・Qa・Q-・T-・Vc・Vv Yk	D類	文様帶10類	Hp
	文様帶4類	Ib・Ik・Ko・Nf・Nk・Oh・Q- Rh・Ul・Yd	D類	文様帶11類	H地
	文様帶5類	J地・K地・L地・M地・N地 P地・Q地・T地・Y地	D類	文様帶13類	Y・Z
	文様帶6類	M無・Y無	D類	文様帶16類	無g
	文様帶7類	Hp・Hw・Nw	D類	文様帶17類	無地
	文様帶8類	Hh・Ht・Hx・H-・Nd	E類	文様帶1類	Aa・Ae・Ah・Ar・At・Dw・Xk
	文様帶10類	Ht・Hp・Hq	E類	文様帶2類	Dr
	文様帶11類	H地	E類	文様帶3類	Ae・Bl・He・Hi
	文様帶13類	Z	E類	文様帶4類	Ed・Gi・Xh
	文様帶14類	無L	E類	文様帶5類	A地・B地・C地・E地・Y地
	文様帶15類	無地	E類	文様帶6類	Y無
	文様帶16類	H-	E類	文様帶7類	H-
	文様帶17類	IlD・Hf・Hi・Ht	E類	文様帶9類	Hf
	文様帶18類	無	E類	文様帶10類	H地
B類	文様帶1類	A-・X-	E類	文様帶11類	Z
	文様帶2類	X地・Y地	E類	文様帶13類	無L
	文様帶3類	Cd・Gf・Yt	E類	文様帶16類	無地
	文様帶4類	Nf・Xo・Yf	E類	文様帶17類	無地
	文様帶5類	Y地	F類	文様帶1類	X-・Yd
	文様帶7類	Hk・Hm・Ho・H-・Nf	F類	文様帶2類	Dt
	文様帶8類	Hf・Hp・Ht	F類	文様帶3類	E-
	文様帶9類	Ha・Hd・Hf・Hh・Hk・Hl・Hm H-	F類	文様帶4類	As・Cd・Ek・Gd・Gh・Hf
	文様帶11類	H地	F類	文様帶5類	C地・E地
	文様帶15類	Yi	F類	文様帶6類	H無
	文様帶16類	Yd	F類	文様帶7類	Hn
	文様帶1類	Pt・Re・Sh・Sr	F類	文様帶8類	Hn・H-
	文様帶3類	Ko・Pk	F類	文様帶9類	Hd・Hf・Hi・H-
	文様帶4類	Yh	F類	文様帶10類	Hi
	文様帶5類	K地・H地・	F類	文様帶11類	H地
D類	文様帶1類	Aa・Ad・Ah・Ax・Bk・Cr・Xh Xv・Xx・X-・Yw	F類	文様帶12類	H無
	文様帶2類	C地・E地	F類	文様帶16類	無e
	文様帶3類	Bt・Dw・Gk・Gh・Vt	F類	文様帶17類	無地
	文様帶4類	Gf・Xd	G類	文様帶1類	Y-
	文様帶5類	A地・C地・E地・Y地・W地	G類	文様帶5類	Y地
	文様帶6類	Y地	G類	文様帶13類	Z
	文様帶7類	Ha・Hm・Hn・H-	G類	文様帶16類	無n
			G類	文様帶17類	無地

第11表 深鉢形土器の器形・文様帯構成・口縁部文様分類(1)

A群 狹小な口縁部文様帯 (A~G)

A類	文様帯3類	Dd
B類	文様帯1類	A-
B類	文様帯8類	Cd・Gf
D類	文様帯1類	Aa・Ad・Ah・Ax・Bk・Cr
D類	文様帯2類	C地・E地
D類	文様帯3類	Br・Dw・Gk・Gh
D類	文様帯4類	Gf
D類	文様帯5類	A地・C地・E地

E類	文様帯1類	Aa・Ae・Ah・Ar・At・Dw
E類	文様帯2類	Dr
E類	文様帯3類	Ae・Bl
E類	文様帯4類	Ed・Gi
E類	文様帯5類	A地・B地・C地・E地
F類	文様帯2類	Dt
F類	文様帯3類	E-
F類	文様帯4類	As・Cd・Ek・Gd・Gh
F類	文様帯5類	C地・E地

B群 口縁部文様帯が複帯 (H)

A類	文様帯7類	Hp・Hw・Nw
A類	文様帯8類	Hh・Ht・Hx・H-・Nd
A類	文様帯10類	Hi・Hp・Hq
A類	文様帯11類	H地
B類	文様帯7類	Hk・Hm・Ho・H-・Nf
B類	文様帯8類	Hf・Hp・Ht
B類	文様帯9類	Ha・Hd・Hf・Hh・Hk・Hl・Hm H-
B類	文様帯11類	H地・
D類	文様帯7類	Ha・Hm・Hn・H-
D類	文様帯8類	Hi・Hl・Hm
D類	文様帯9類	Hd・Hi・Hm
D類	文様帯10類	Hp

D類	文様帯11類	H地
E類	文様帯7類	H-
E類	文様帯9類	Hd・Hf・Hl・Ht
E類	文様帯10類	Hf
E類	文様帯11類	H地
F類	文様帯7類	Hn
F類	文様帯8類	Hn・H-
F類	文様帯9類	Hd・Hf・Hl・H-
F類	文様帯10類	Hi
F類	文様帯11類	H地
F類	文様帯12類	H無
C群 単帯 (沈線系) (I)		
A類	文様帯4類	Ib・Ik・

D群 口縁部文様帯が単帯のもの (隆線系) (J~O)

A類	文様帯1類	Ja・Jh・Js・J-・Lh・Li・L- M-・Nh・Nk・Nr
A類	文様帯2類	L地・M地
A類	文様帯3類	Ja・Jh・J-・L-・Mh・N-・Oh
A類	文様帯4類	Ko・Nf・Nk・Oh

A類	文様帯5類	J地・K地・L地・M地・N地
A類	文様帯6類	M無
B類	文様帯4類	Nf
C類	文様帯3類	Ko
C類	文様帯5類	K地

E群 口縁部文様帯が単帯のもの (隆沈線系) (P~U)

A類	文様帯1類	Pa・Ph・Px・P-・Qa・Qh・Qi Qw・Q-・Ra・Ru・R-・Sa・Se St・Su・S-・Ta・Te・Th・Tk Tl・Tt・Tw・T-
A類	文様帯2類	R地・S地・T地
A類	文様帯3類	Ph・Qa・Q-・T-

A類	文様帯4類	Q-・Rh・Ul
A類	文様帯5類	P地・Q地・T地
C類	文様帯1類	Pt・Re・Sh・Sr
C類	文様帯3類	Pk

第12表 深鉢形土器の器形・文様帶構成・口脣部文様分類(2)

F群 口縁部文様帯が単帯のもの（沈刻状隆沈線系）(V)

A類	文様帶1類	Va・Vc・Ve・Vu・Vv・Vx・V-
A類	文様帶3類	Vc・Vu
D類	文様帶3類	Vt

G群 口～胴部展開 (y・z)

A類	文様帶13類	-z
D類	文様帶13類	-y・-z
E類	文様帶13類	-z
G類	文様帶13類	-z

H群 口縁部文様帯が横位連続格円文 (W)

D類	文様帶5類	W地
J群 口縁部文様帯その他 (Y)		
A類	文様帶3類	Yk
A類	文様帶4類	Yd
A類	文様帶5類	Y地
A類	文様帶6類	Y無
B類	文様帶2類	Y地
B類	文様帶3類	Yt
B類	文様帶4類	Yf
B類	文様帶5類	Y地
B類	文様帶15類	Yi
B類	文様帶16類	Yd
C類	文様帶4類	Yh
C類	文様帶5類	Y地
D類	文様帶1類	Yw
D類	文様帶5類	Y地
D類	文様帶6類	Y地
E類	文様帶5類	Y地
E類	文様帶6類	Y無
F類	文様帶1類	Yd
F類	文様帶4類	Yf
F類	文様帶6類	Y無
G類	文様帶6類	Y-
G類	文様帶5類	Y地

I群 山縁部文様帯が突起付無文 (X)

B類	文様帶1類	X-
B類	文様帶2類	X地
B類	文様帶4類	Xo
D類	文様帶1類	Xh・Xv・Xx・X-
D類	文様帶4類	Xd
E類	文様帶1類	Xk
E類	文様帶4類	Xh
F類	文様帶1類	X-

K群 口縁部文様帯が無文・地文

D類	文様帶16類	無g
D類	文様帶17類	無地
E類	文様帶16類	無l
E類	文様帶17類	無地
F類	文様帶16類	無c
F類	文様帶17類	無地
G類	文様帶16類	無n
G類	文様帶17類	無地

- A群 狹小な口縁部文様帯を持つもの
- B群 口縁部文様帯が複帯のもの
- C群 口縁部文様帯が単帯で沈線系のもの
- D群 口縁部文様帯が単帯で隆線系のもの
- E群 口縁部文様帯が単帯で隆沈線系のもの
- F群 口縁部文様帯が単帯で沈刻状隆線系のもの
- G群 文様が口縁部から胴部に展開するもの
- H群 口縁部文様帯が横位連続格円文のもの
- I群 口縁部文様帯が突起付無文のもの
- J群 その他の口縁部文様帯のもの
- K群 無文・地文のもの

2 條形土器分類 (第36図)

胴部上半から口縁部にかけて内彎し、最大径が胴部にあり全体形状が條形の土器である。口縁部が大きく内彎するもの（A類）と、内彎すると口縁部がやや立ち上がり外反気味のもの（B類）、口縁部がやや直立気味に立ち上がるるもの（C類）がある。口縁直下の幅のある横位隆線が特徴である。口縁部文様帯・胴部文様帯のありかたから第36図のようにそれぞれ細分した。

口縁部文様帯は横位隆線と横位隆線の上部の無文帯から構成されるが、A III類の破片資料（82図7）のように口縁直下に幅のある横位隆線を巡らさず、口縁部～胴部にかけて無文のものもある。A III類を除いた各類とも口縁直下に横位隆線を巡らしている。また横位隆線の上部に繩文を施文しているもの（171図10）もある。この横位隆線はほとんどが幅の広いものであるが、細い隆線を巡らすもの（54図1、99図9）もある。横位隆線はほとんどが1本であるが、2～3本巡らすもの（54図1、99図6～9、105図12、329図6）もある。この横位隆線上に連続する指頭等による圧痕を施すものや、横位・縦位の押圧繩文、繩文を施文するもの、横位隆線下に付加する押圧繩文等がある。

胴部文様帯はA II（213図1）・III類（82図7）を除いて全て繩文を施文している。LRの縦回転が大部分であるが、RLの縦回転のもの（373図2）や、LRLの縦回転（99図7）のものもある。

3 鉢形土器分類 (第37・38a図)

口径と器高の比が1未満1/2以上のものを鉢形土器とした。深鉢形土器のキャリバー形の口縁部のように大きく内彎するもの（A類）と、口縁部がやや立ち上がるものの（B類）、胴部からそのまま口縁部にかけて外傾するもの（C類）、胴部が内彎し口縁部が立ち上がるものの（D類）がある。口縁部文様帯・胴部文様帯のありかたから第37図のようにそれぞれ細分した。

A類の口縁部文様帯は、口縁部～胴部にかけて無文のA V類（292図6）とA II類の一部（56図4）を除いたA I～IV類は幅の広い文様帯を持っている。A III類（367図7）は複帯であるが、他はすべて単帯である。B類は、複帯のB II類が幅の広い文様帯であるが、B I類は狭小な単帯である。C類は、複帯のC I類の一部と無文のC II類を除いて、単帯で文様帯は狭小である。D類は、口縁直下の横位の隆線と胴部文様帯が連結して展開する。

A I・A V・B I・C I・C II類の胴部は無文である。A II・A III・B II類は繩文を施文している。A IV・C III類は繩文施文後に沈線や隆沈線で文様を展開している。

4 浅鉢形土器分類 (第39図)

口径と器高の比が1/2未満のものを浅鉢形土器とした。口縁部が大きく内彎するもの（A類）と、口縁部がやや立ち上がるものの（B類）、胴部からそのまま口縁部にかけて外傾するもの（C類）がある。口縁部文様帯・胴部文様

帶のありかたから第39図のようにそれぞれ細分した。

A II類は口縁部～胴部にかけて無文であるが、他の A 類は口縁部文様帯が一部を除き（156図3）いずれも幅の広い文様帯を持っている。B 類は口縁部～胴部にかけて無文である B III類を除きいずれも狭小な口縁部文様帯を持っている。口縁部～胴部にかけて無文の C III類を除いた C I・C II類はいずれも狭小な口縁部文様帯を持っている。C IV類は繩文を施文している。

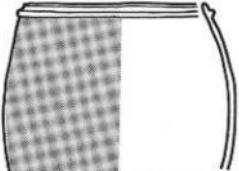
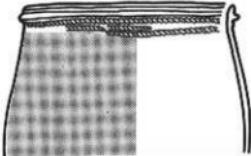
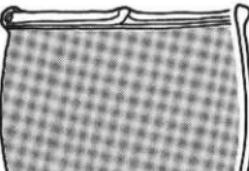
A I・A II類とも胴部は無文である。A III類の胴部には繩文が施文されるが、条線文のもの（138図8）もある。B II類は繩文を施文しているが、B I・B IIIとも無文である。C II類は繩文を施文しているが、C I・C III・C IV類とも無文である。

5 台付浅鉢分類（第38b図）

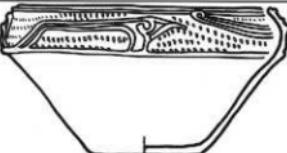
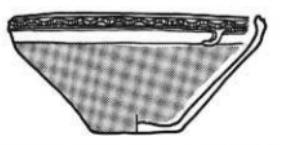
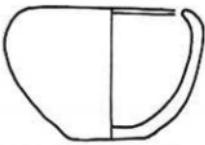
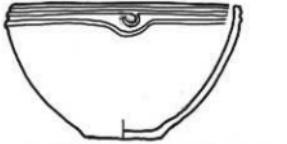
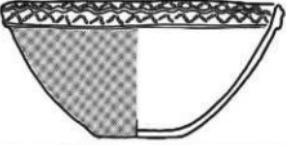
台部を除いた部分の口径と器高の比が1/2未満のものを台付浅鉢形土器とした。口縁部がやや立ち上がるもの（A 類）と、胴部からそのまま口縁部にかけて外傾するもの（B 類）とがある。口縁部文様帯・胴部文様帯のありかたから第38図のようにそれぞれ細分した。

A II類は口縁部～台部にかけて無文であるが、他の A I・B I・B II類とも狭小な口縁部文様帯を持っている。B II類は口縁部～台部にかけて繩文を施文しているが、他の A I・A II・B I類とも無文である。

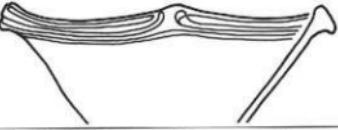
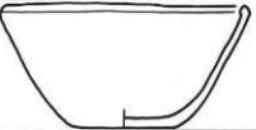
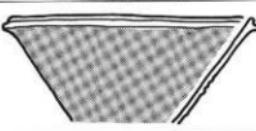
第36図 梅形土器分類

A類 胸部上半から口縁部が大きく内側するもの	A I類 口縁部文様帶は横位隆線で胸部文様帶は地文のもの	
A II類 口縁部文様帶は横位隆線で胸部文様帶は無文のもの		
	A III類 口～胸部文様帶が無文のもの	
B類 胸部上半から大きく内側するが口縁部がやや外反するもの	B I類 口縁部文様帶は横位隆線で胸部文様帶は地文のもの	
	B II類 口縁部文様帶の隆線から上が地文のもの	
C類 胸部上半から内側するが口縁部がやや直立気味のもの	C I類 口縁部文様帶は横位隆線で胸部文様帶は地文のもの	

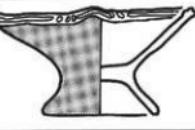
第37図 鉢形土器分類(1)

A類 口縁部が大きく内側するもの	A I類 口縁部文様帯を持ち胸部が無文のもの	
	A II類 口縁部文様帯を持ち胸部が地文のもの	
	A III類 口縁部文様帯と頸部無文帯を持ち胸部が地文のもの	
	A IV類 口縁部文様帯と頸部無文帯・胸部文様帯のもの	
	A V類 無文のもの	
B類 口縁部がやや立ちあがるもの	B I類 口縁部文様帯を持ち胸部文様帯が無文のもの	
	B II類 口縁部文様帯を持ち胸部文様帯が地文のもの	

第38a図 鉢形土器分類(2)

C類 胴部から口縁部にかけて外傾するもの	C I類 口縁部文様帯を持ち胴部文様帯が無文のもの	
	C II類 無文のもの	
	C III類 口縁部文様帯と胴部文様帯を持つもの	
D類 胴部が内彎し口縁部が立ち上がるるもの	D I類 口縁部文様帯と胴部文様帯が連続するもの	

第38b図 台付浅鉢分類

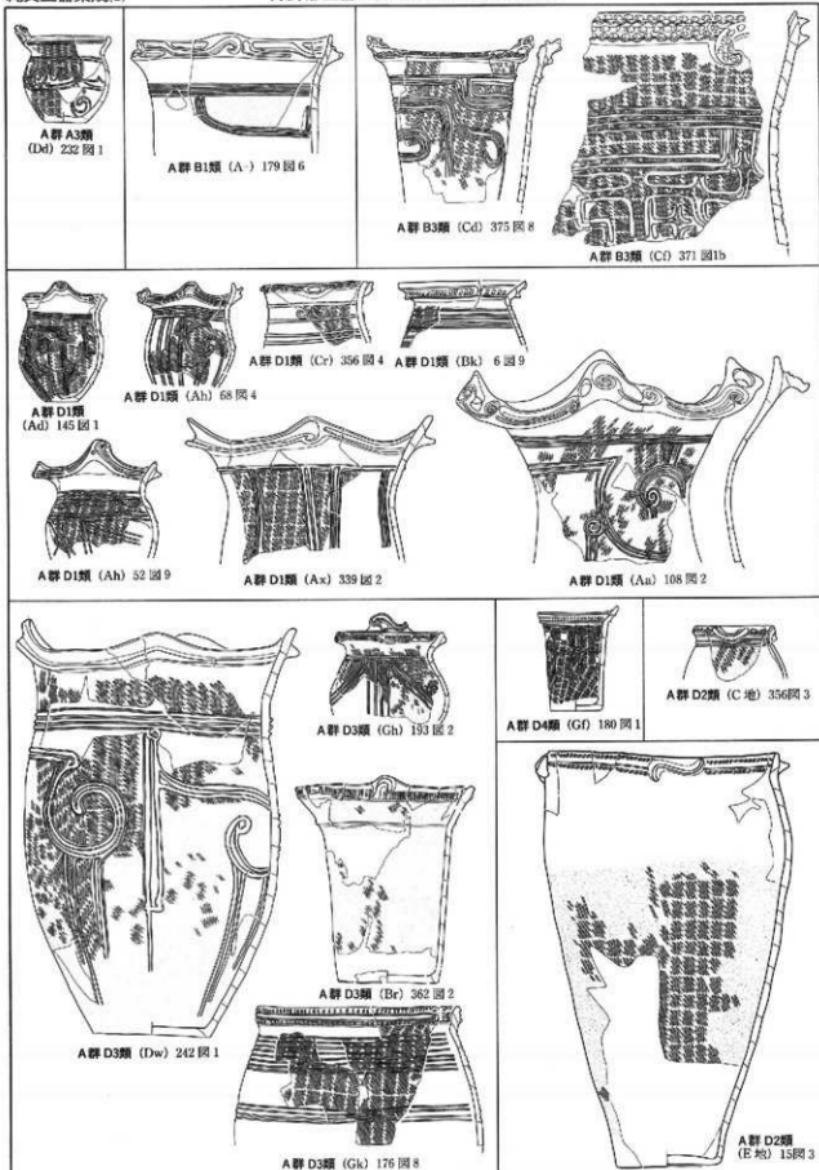
A類 口縁部がやや立ち上がるもの	A I類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	A II類 無文のもの	
B類 胴部から口縁部へとそのまま外傾するもの	B I類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	B II類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	

第39図 浅鉢形土器分類

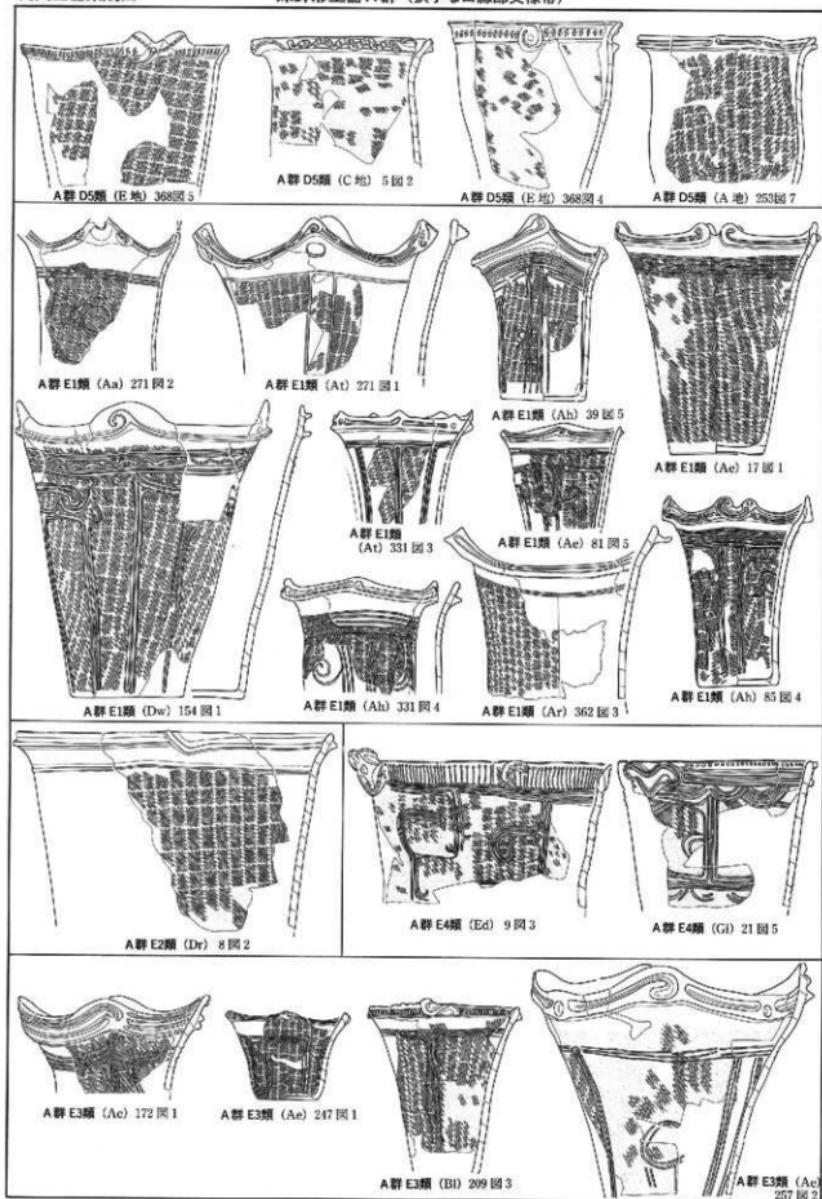
A類 口縁部が大きく内側するもの	A I類 幅の広い口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	A II類 無文のもの	
	A III類 幅の広い口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	
B類 口縁部がやや立ち上がるるもの	B I類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	B II類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	
	B III類 無文のもの	
	B IV類 口縁部が地文で胴部が無文のもの	
C類 胴部から口縁部へとそのまま外傾するもの	C I類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	C II類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	
	C III類 無文のもの	

縄文土器集成(1)

深鉢形土器 A群（狭小な口縁部文様帶）



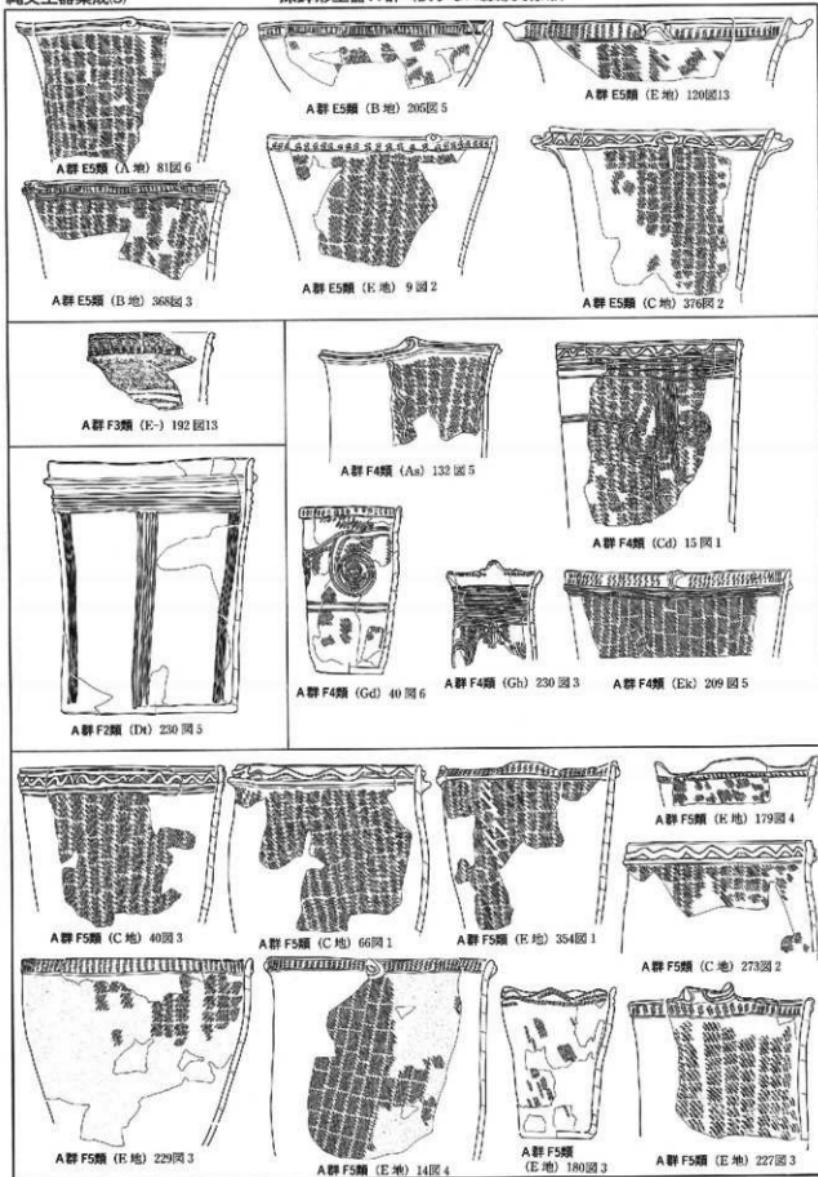
第40図 深鉢形土器 A群(1) (縮尺1/6)



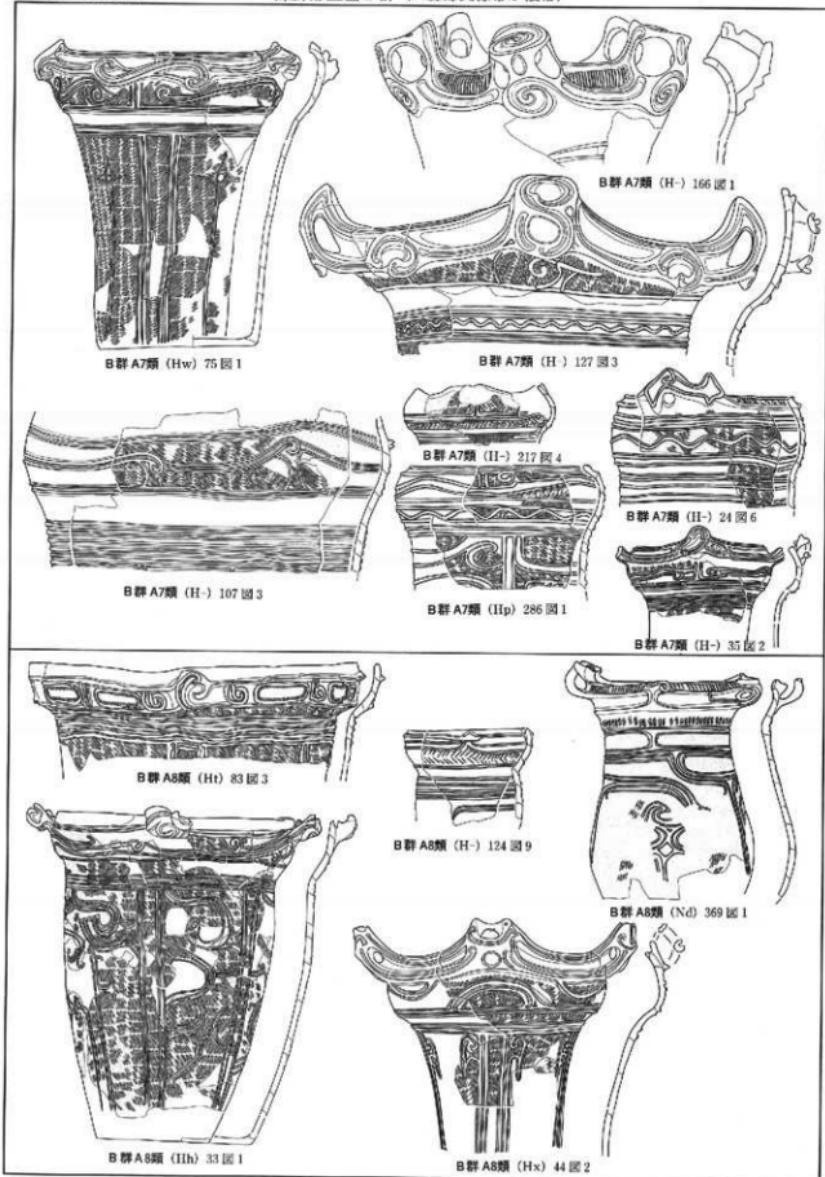
第41図 深鉢形土器 A群(2) (縮尺1/6)

縄文土器集成(3)

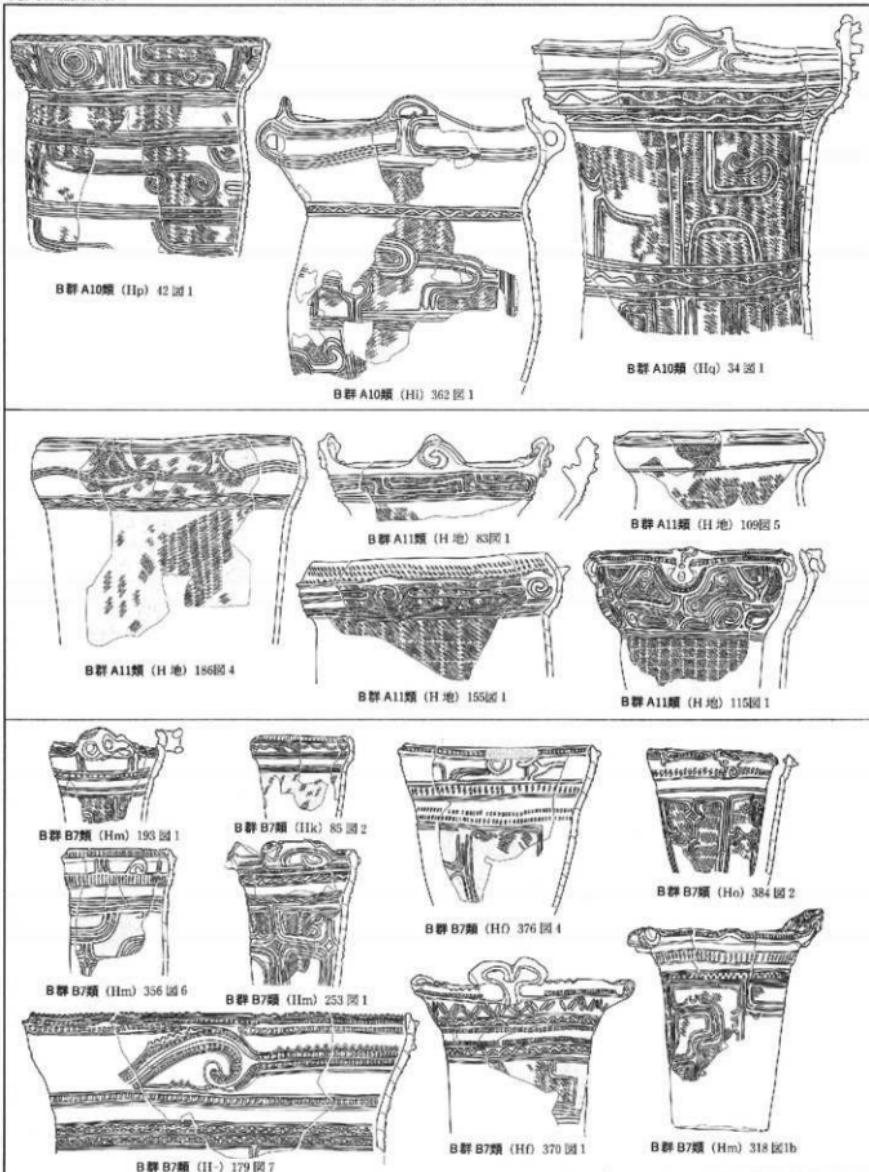
深鉢形土器 A群 (狭小さな口縁部文様帶)



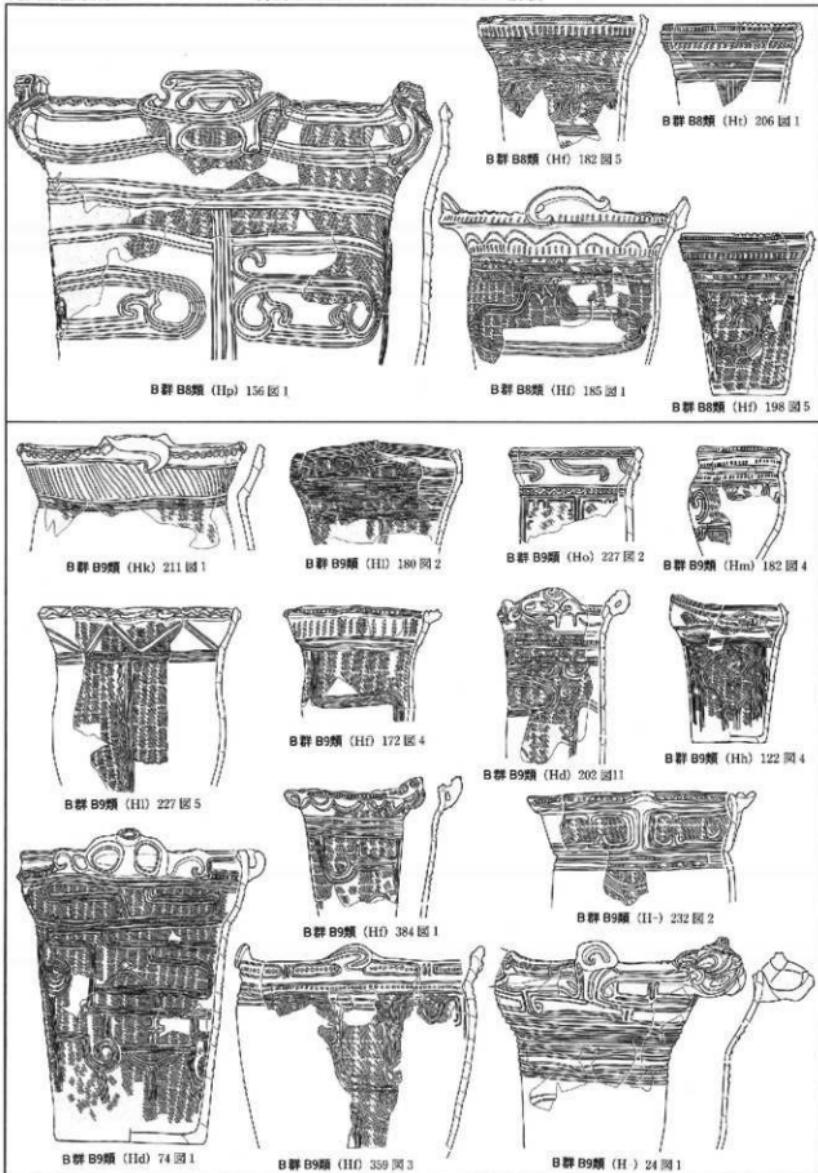
第42図 深鉢形土器 A群(3) (縮尺1/6)



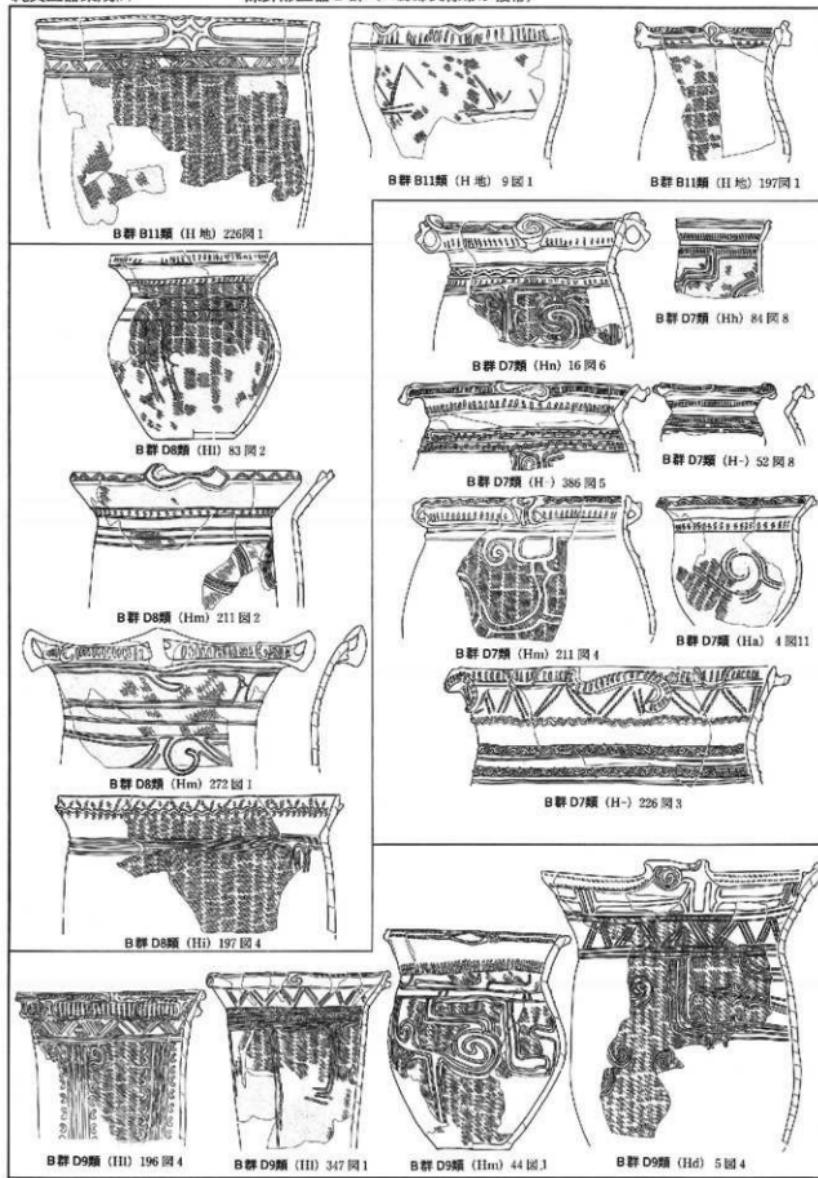
第43図 深鉢形土器B群(1) (縮尺1/6)



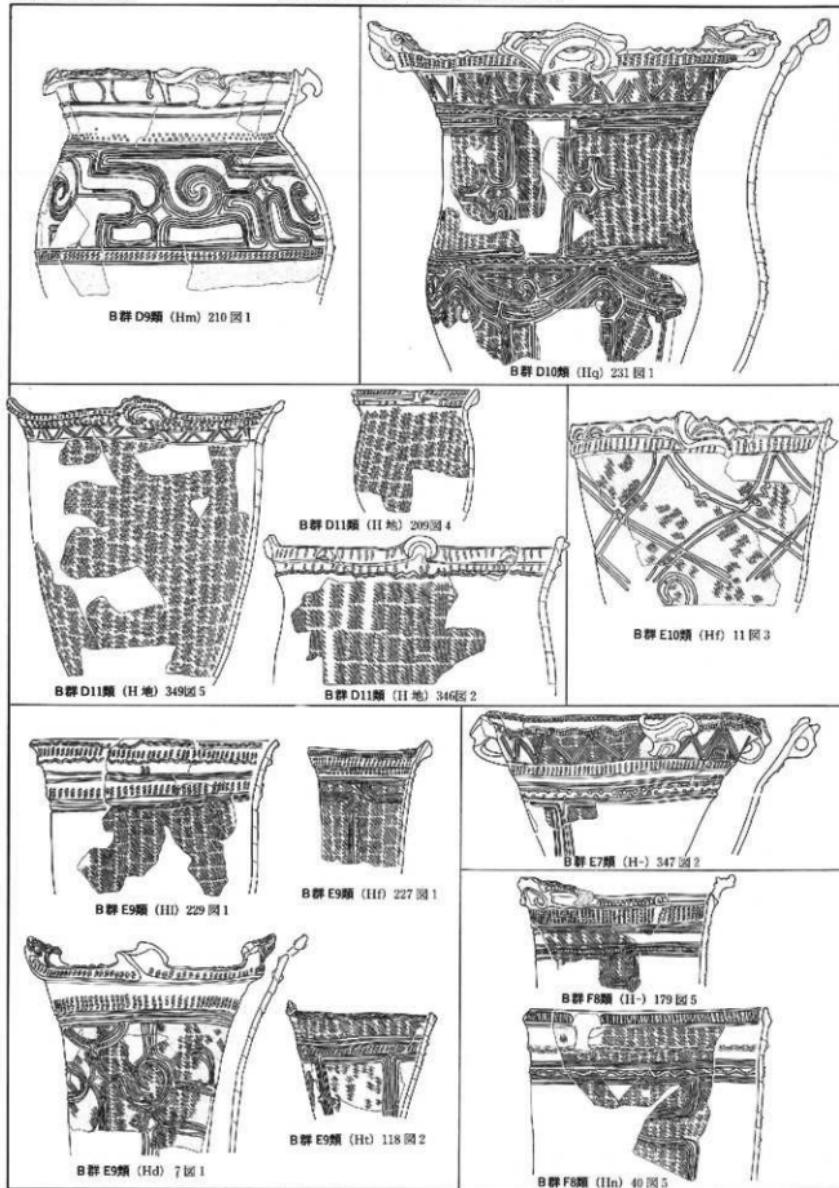
第44図 深鉢形土器B群(2) (縮尺1/6)



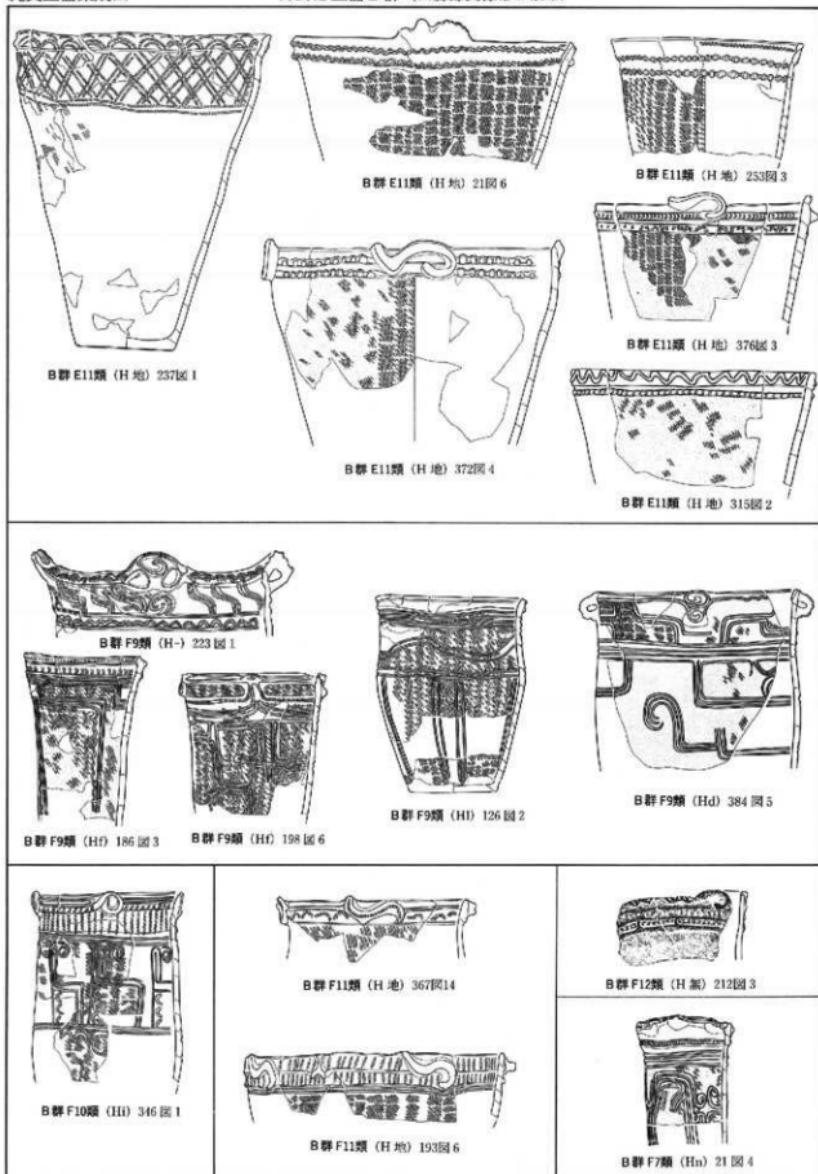
第45図 深鉢形土器B群(3) (縮尺1/6)



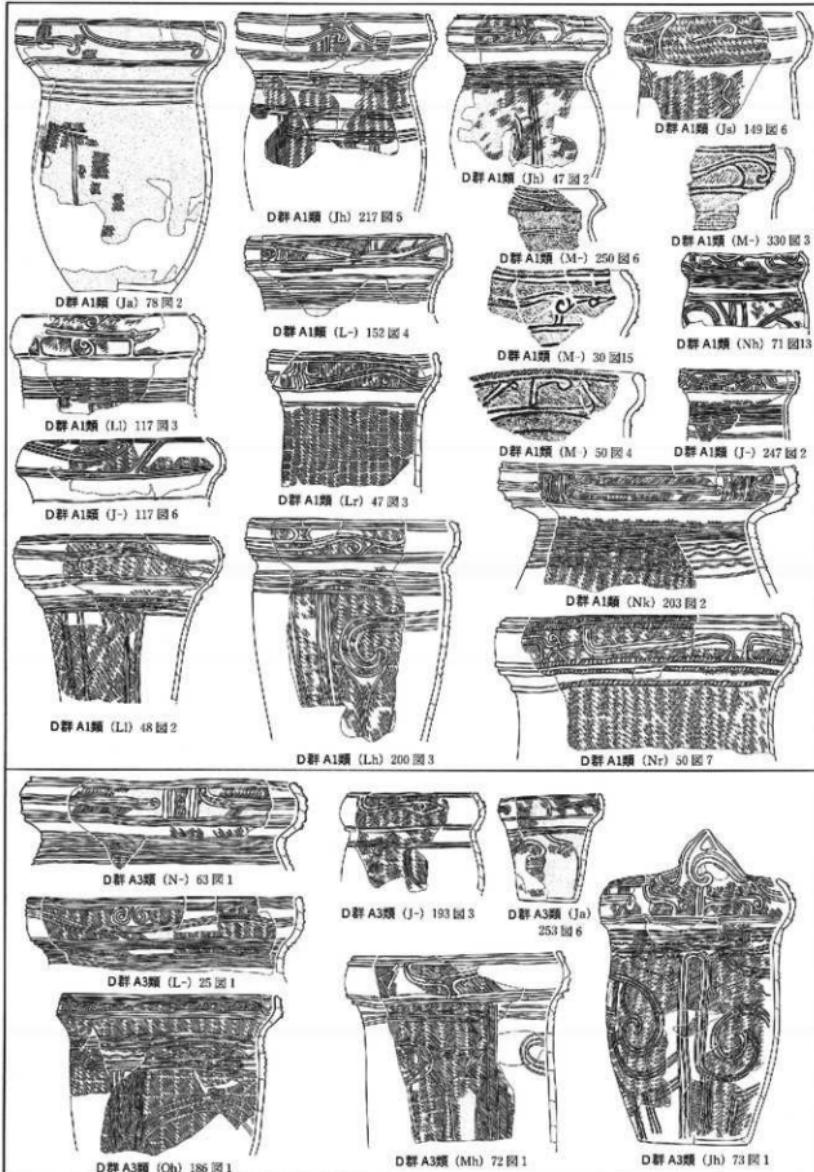
第46図 深鉢形土器B群(4) (縮尺1/6)



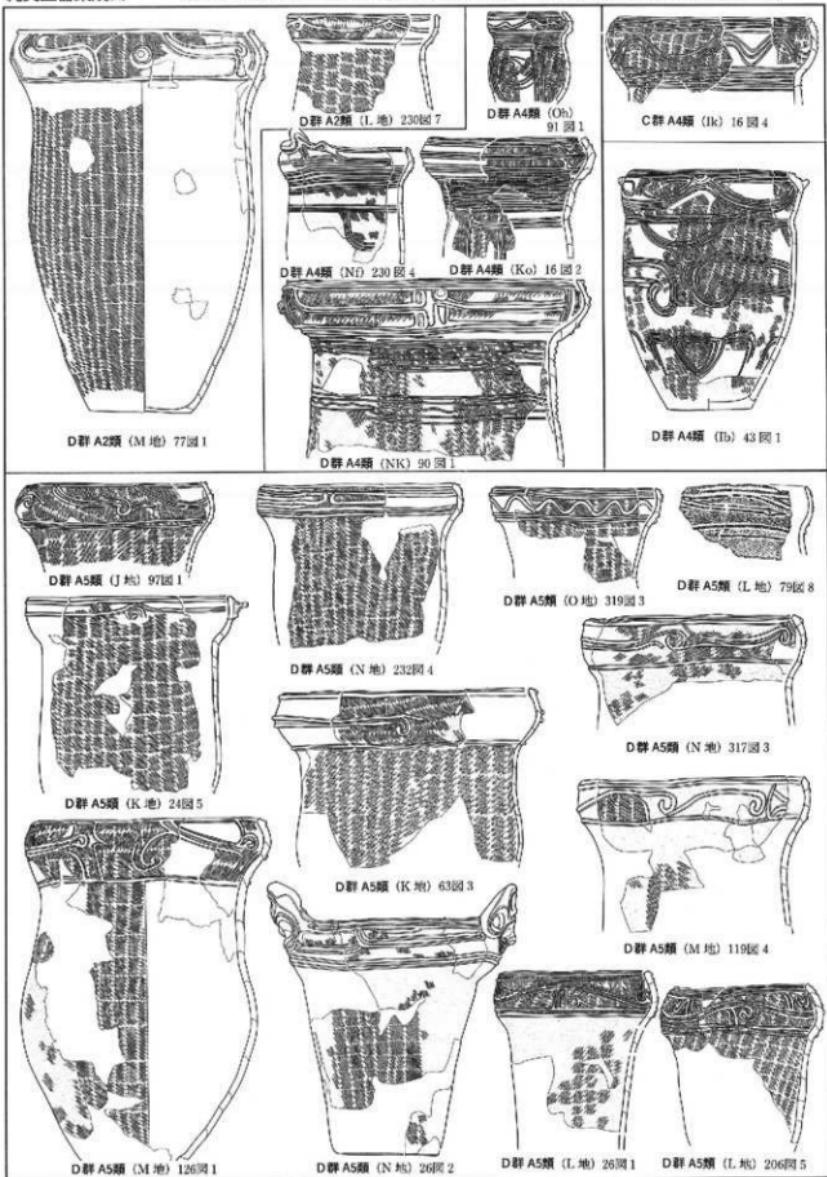
第47図 深鉢形土器B群(5) (縮尺1/6)



第48図 深鉢形土器B群(6) (縮尺1/6)



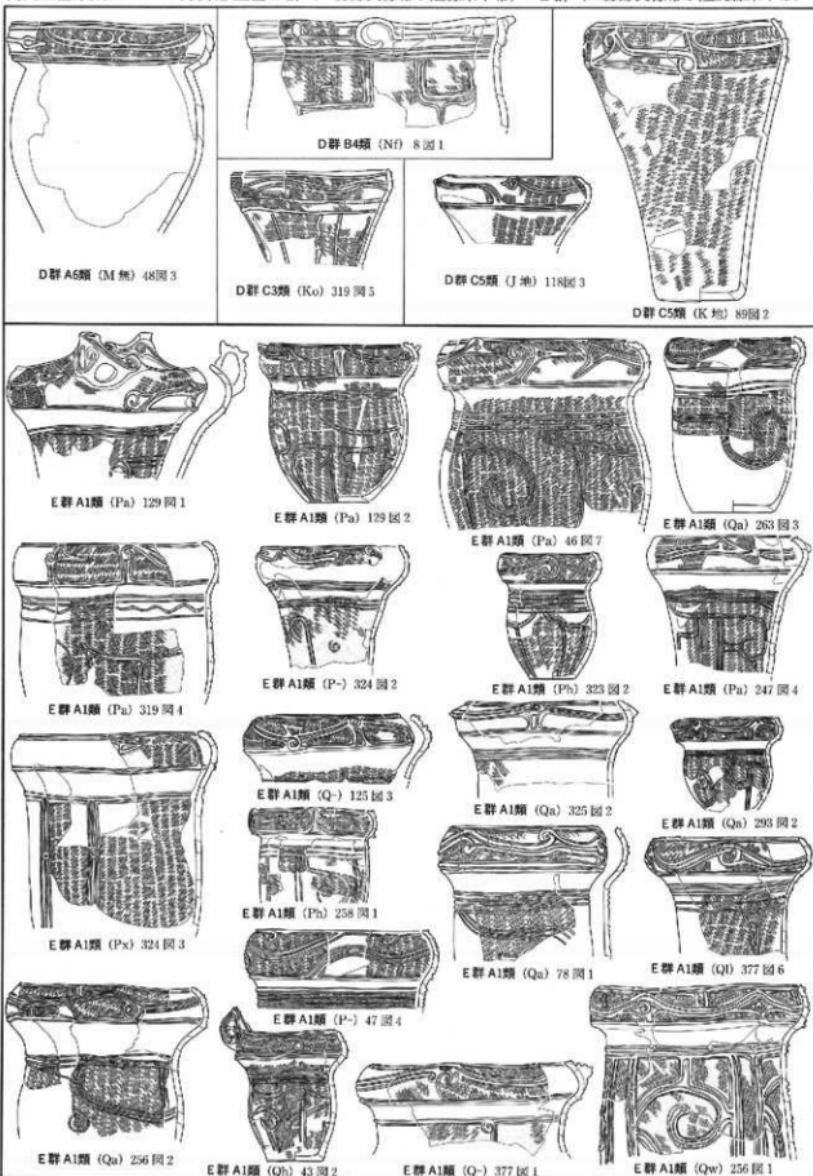
第49図 深鉢形土器 D群(1) (縮尺1/6)



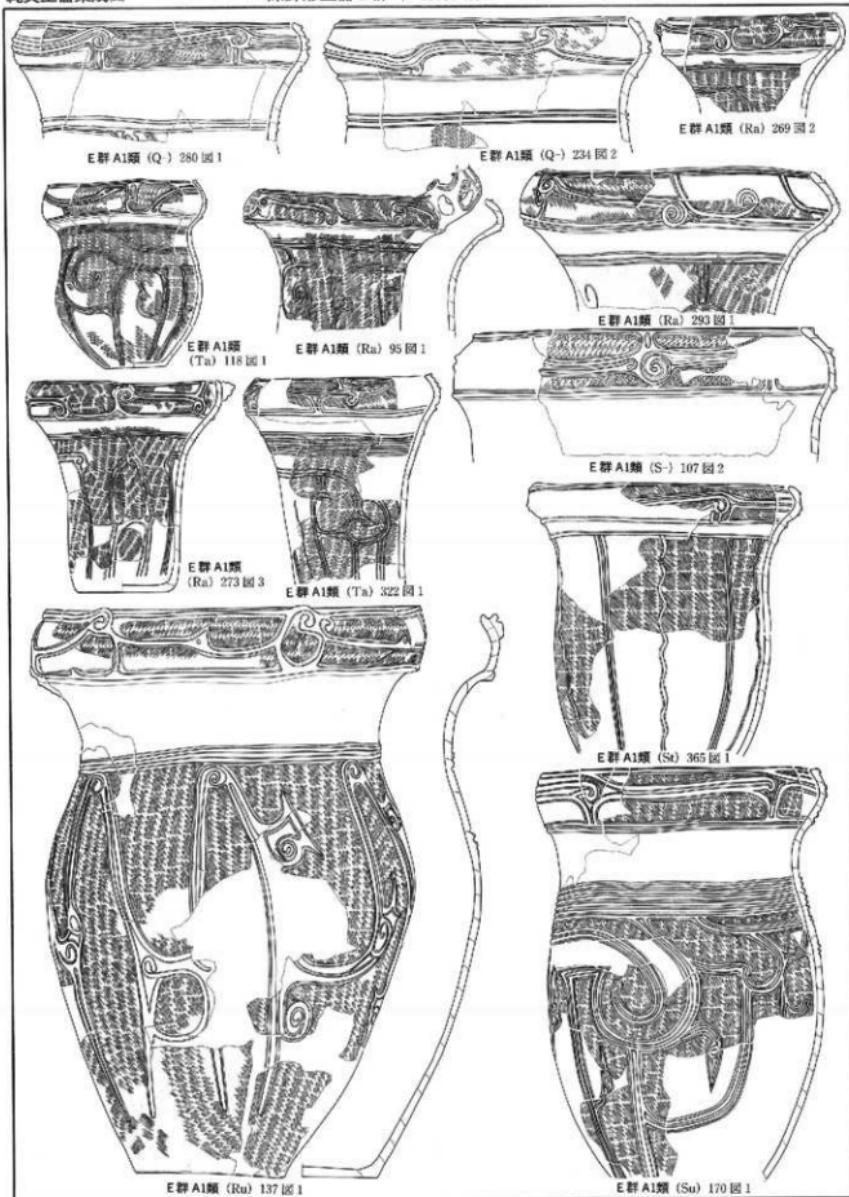
第50図 深鉢形土器 C群・D群(2) (縮尺1/6)

縄文土器集成(12)

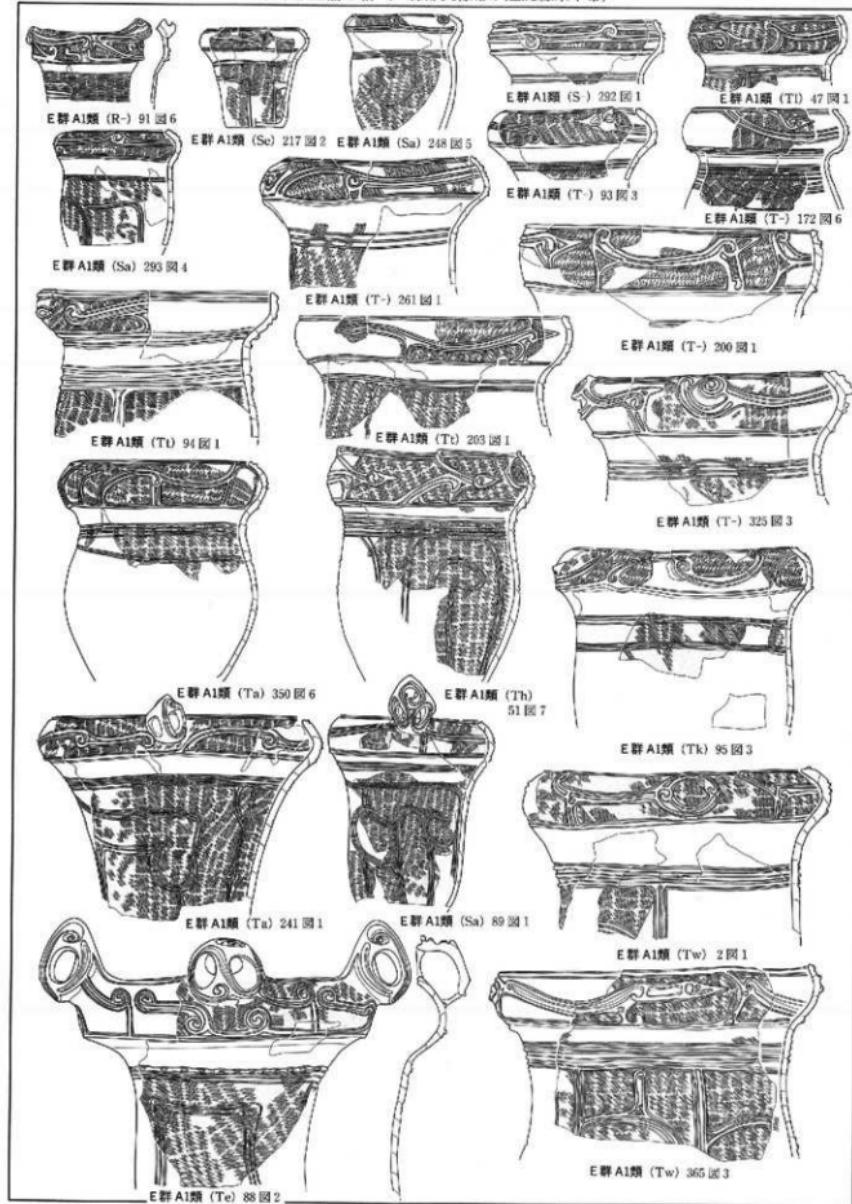
深鉢形土器 D 群 (口縁部文様帯が隆線系単帶) • E 群 (口縁部文様帯が隆沈線系単帶)



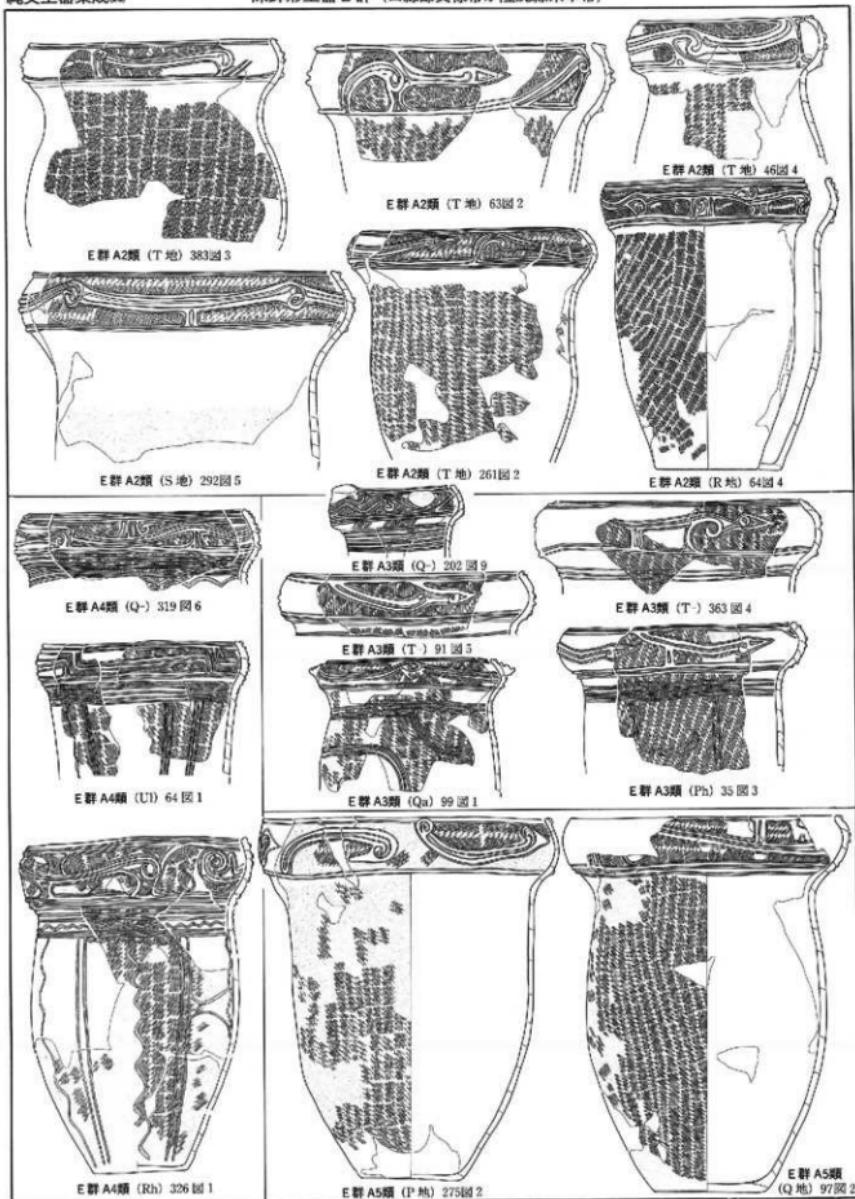
第51図 深鉢形土器 D 群(3) • E 群(1) (縮尺1/6)



第52図 深鉢形土器 E 群(2) (縮尺1/6)



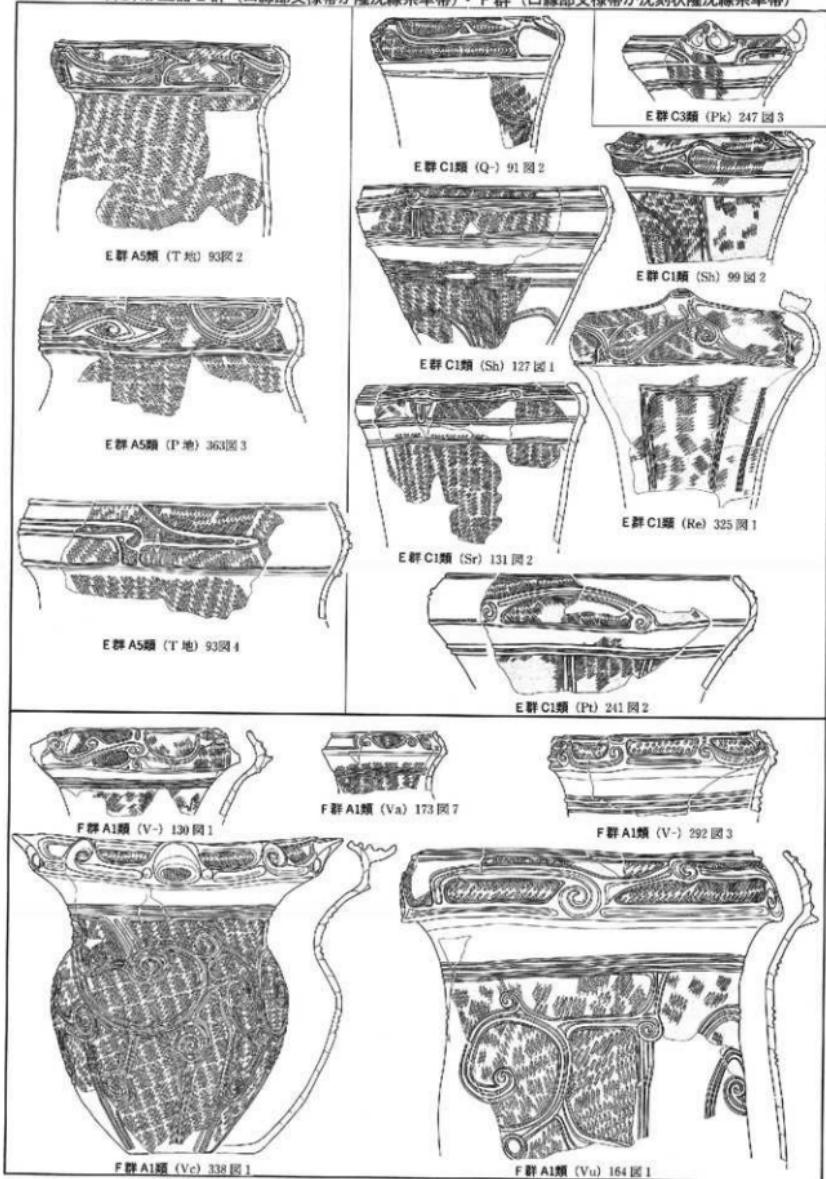
第53図 深鉢形土器 E群(3) (縮尺1/6)



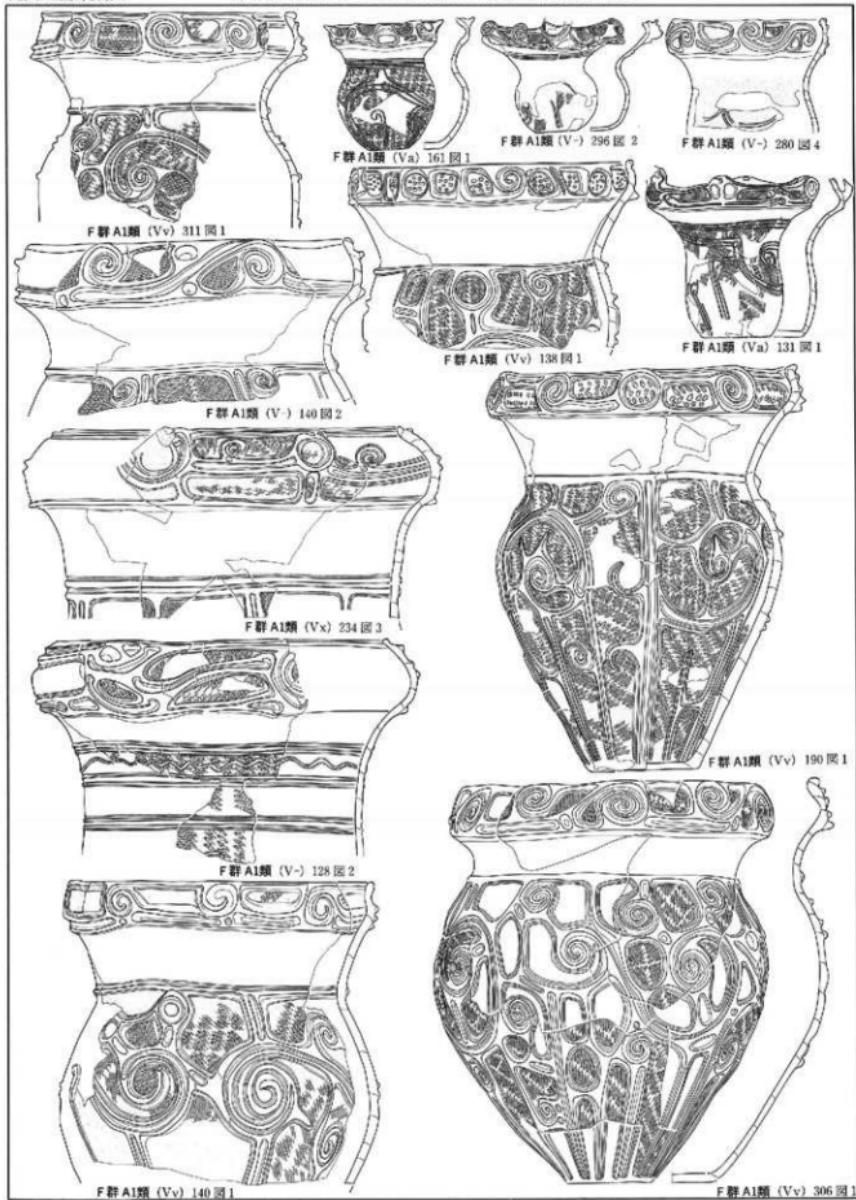
第54図 深鉢形土器 E群(4) (縮尺1/6)

縄文土器集成(16)

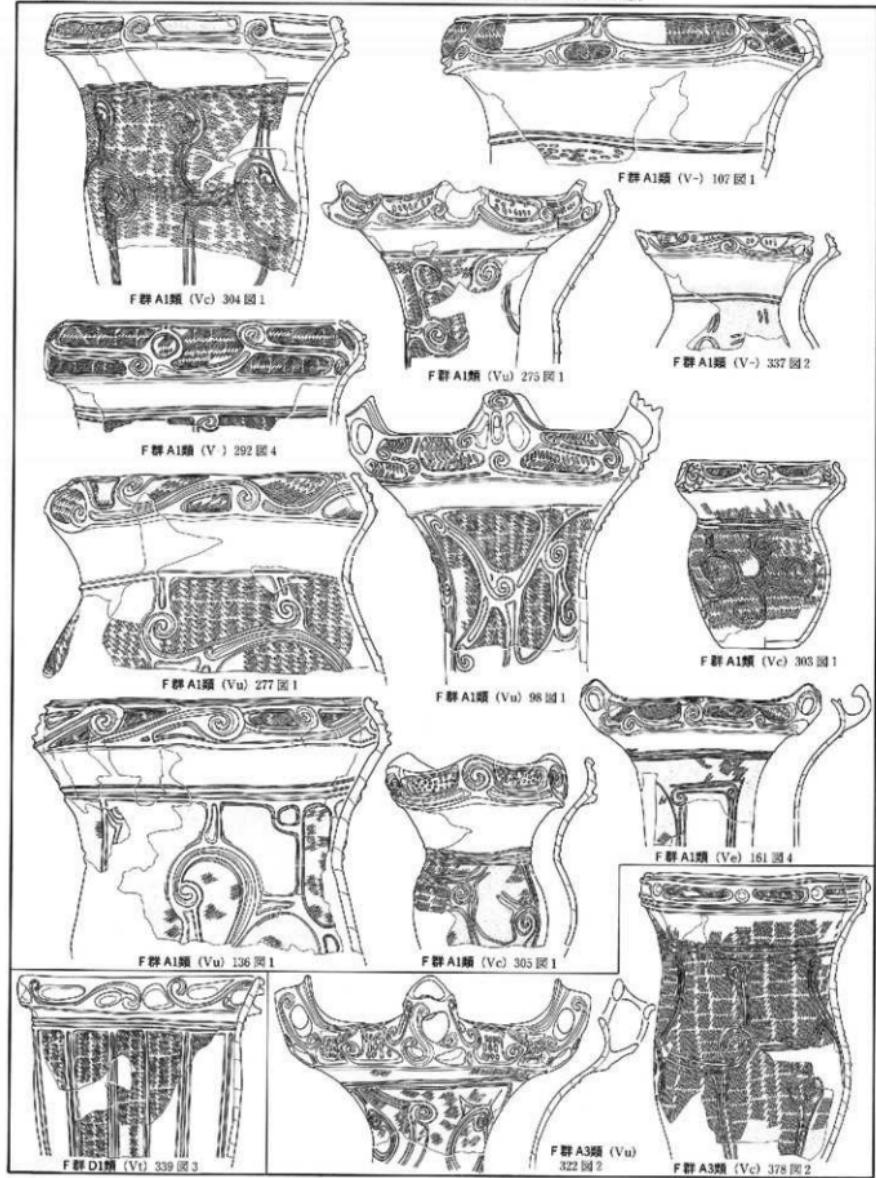
深鉢形土器 E 群 (口縁部文様帯が隆沈線系単帯)・F 群 (口縁部文様帯が沈刻状隆沈線系単帯)



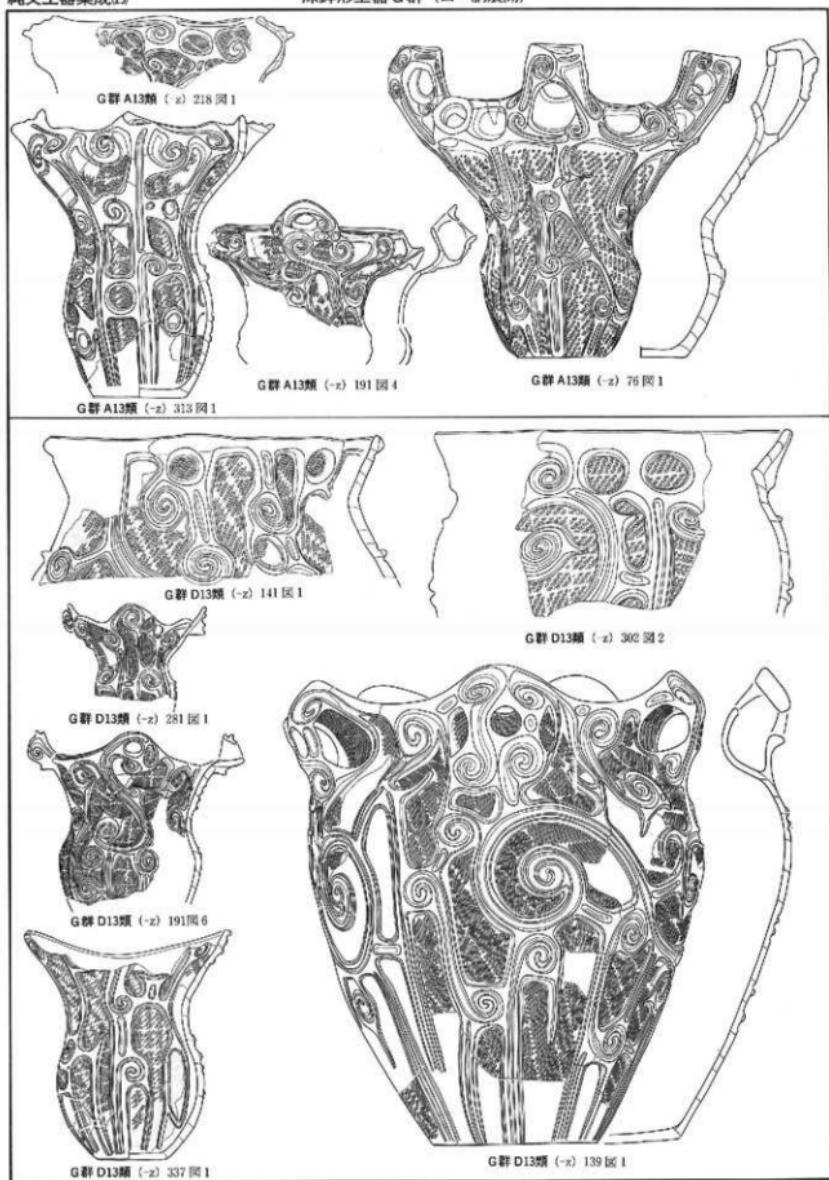
第55図 深鉢形土器 E 群(5)・F 群(1) (縮尺1/6)



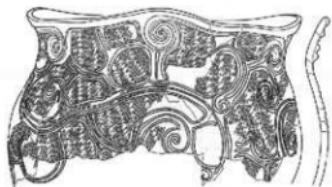
第56図 深鉢形土器 F 群(2) (縮尺1/6)



第57図 深鉢形土器 F 群(3) (縮尺1/6)



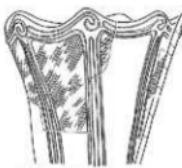
第58図 深鉢形土器 G群(1) (縮尺1/6)



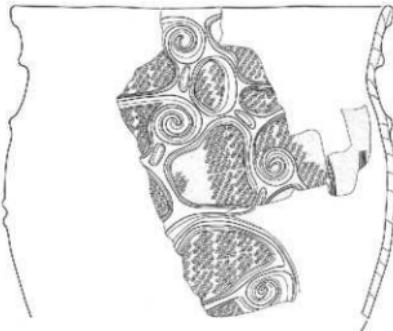
G群 D13類 (-y) 204図5



G群 G13類 (-x) 142図2



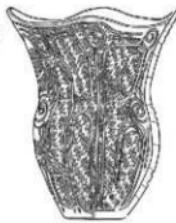
G群 E13類 (-z) 219図3



G群 D13類 (-x) 141図2



G群 D13類 (-y) 135図3



G群 D13類 (-y) 306図2



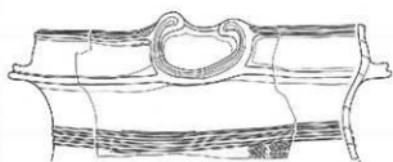
I群 B1類 (X) 288図5



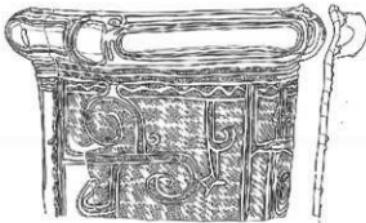
I群 B2類 (X地) 378図1



I群 B2類 (X地) 301図10

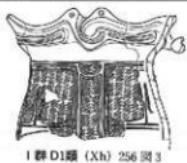


I群 B1類 (X) 153図5

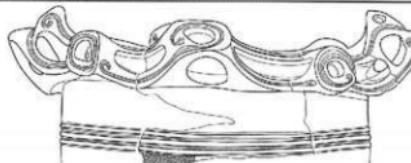


I群 B4類 (Xo) 19図1

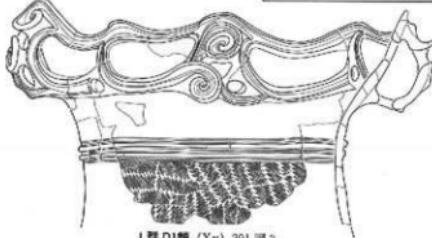
第59図 深鉢形土器 G群(2)・I群(I) (縮尺1/6)



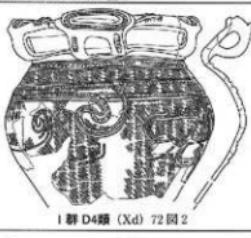
I群 D1類 (Xh) 256図3



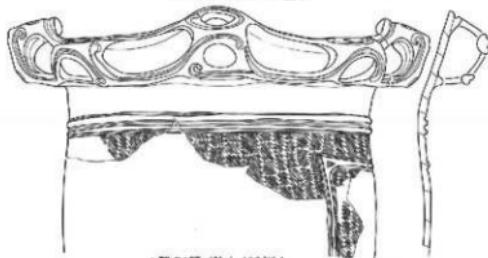
I群 F1類 (X-) 255図1



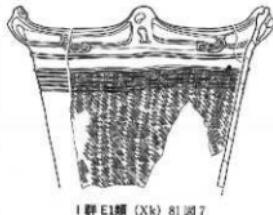
I群 D1類 (Xx) 291図3



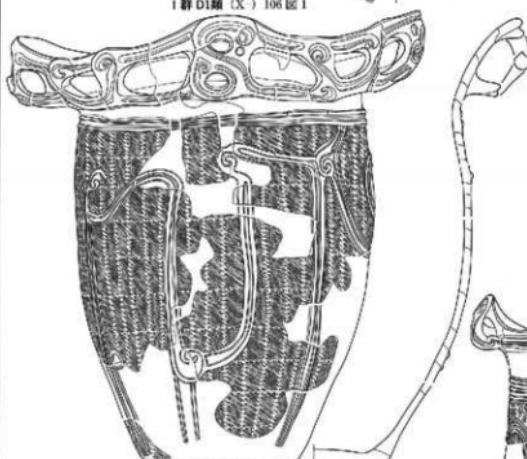
I群 D4類 (Xd) 72図2



I群 D1類 (X-) 106図1



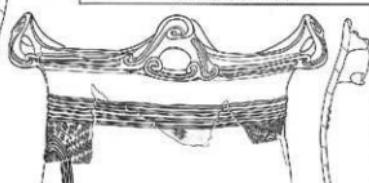
I群 E1類 (Xk) 81図7



I群 D1類 (Xv) 188図1



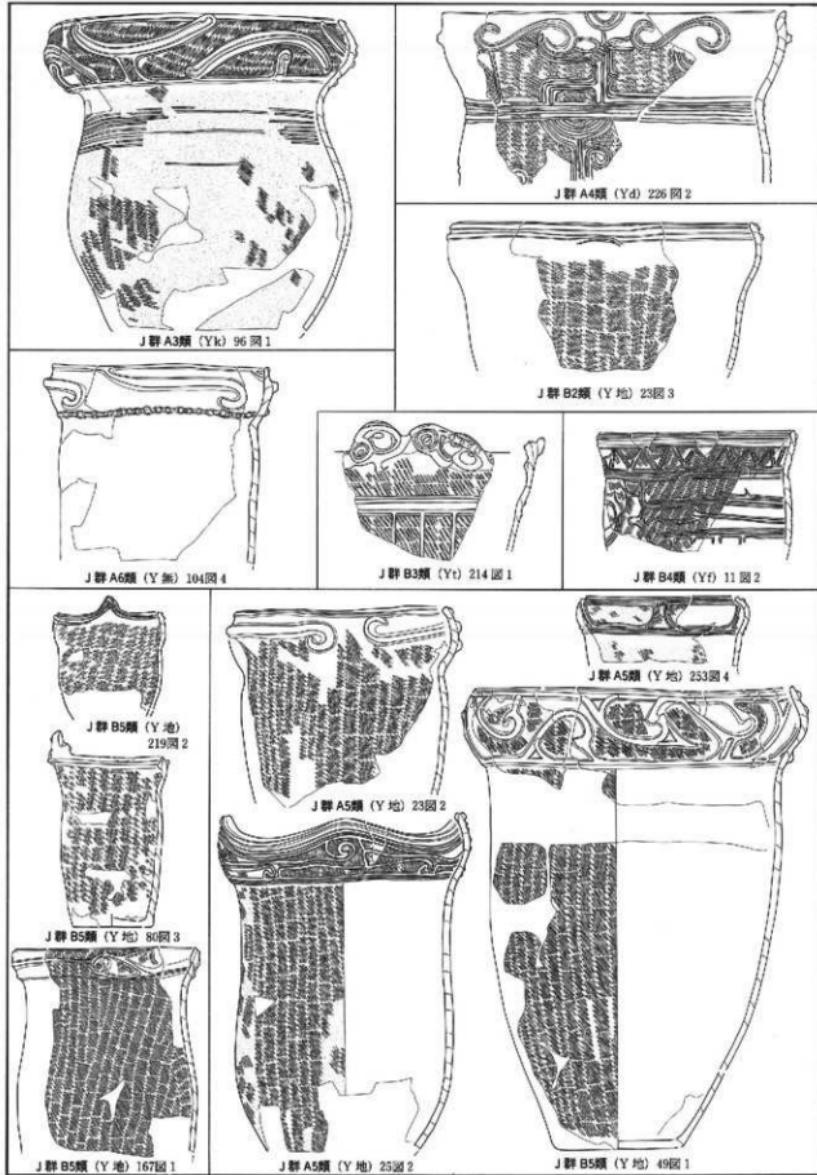
I群 E4類 (Xh) 18図1



I群 D1類 (X-) 236図10

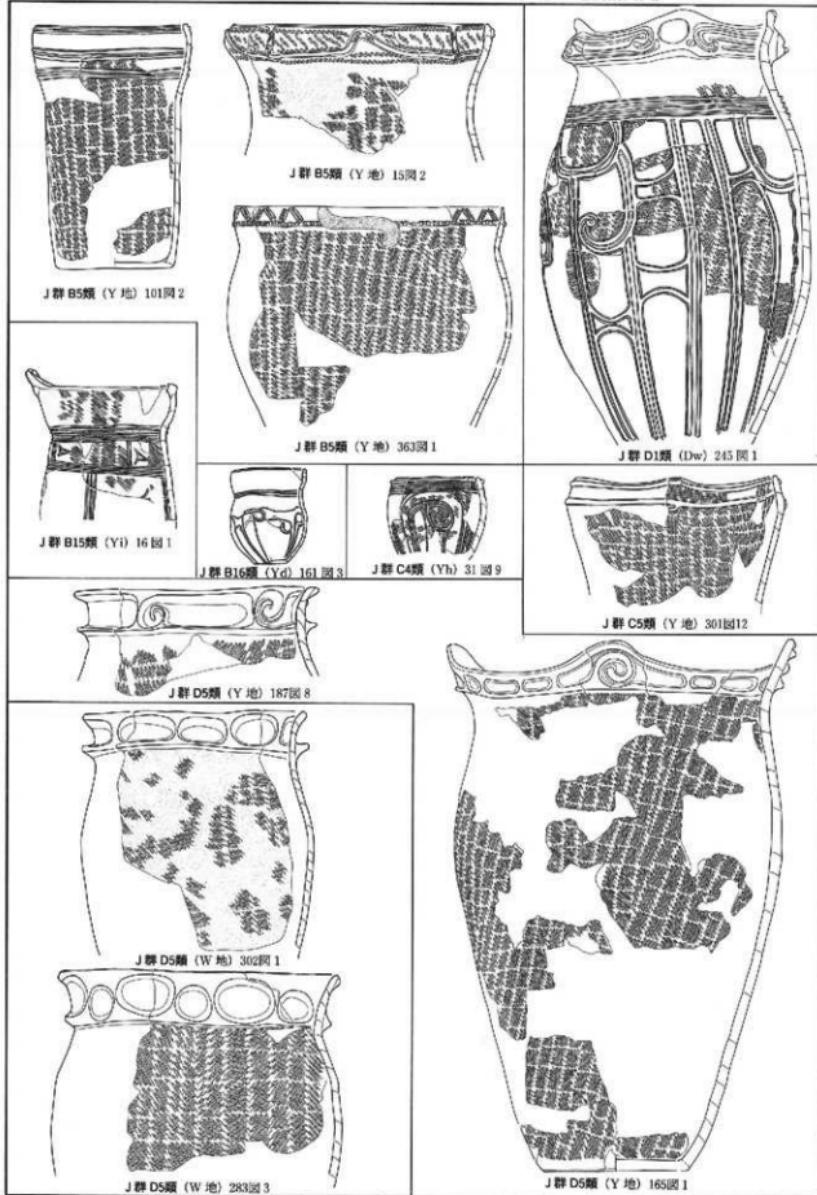
第60図 深鉢形土器 I 群(2) (縮尺1/6)

深鉢形土器 J群（口縁部文様帯がその他）

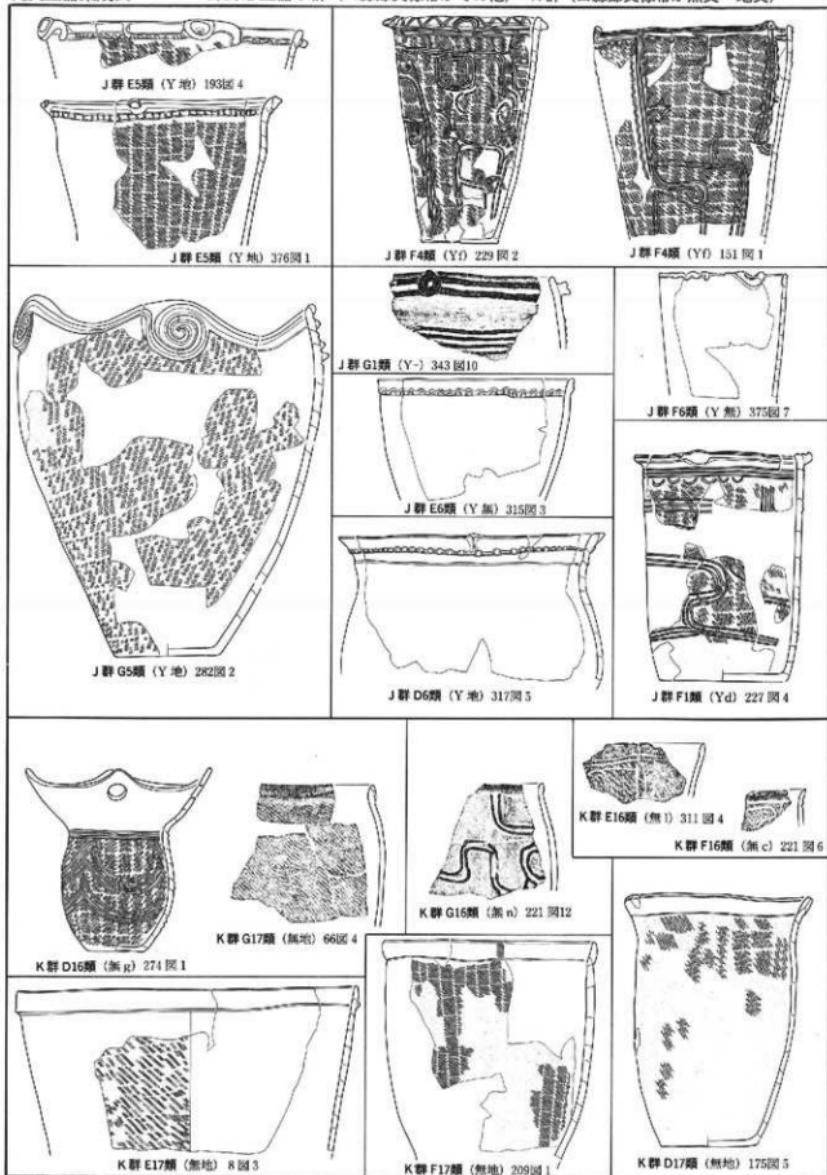


第61図 深鉢形土器 J群(1) (縮尺1/6)

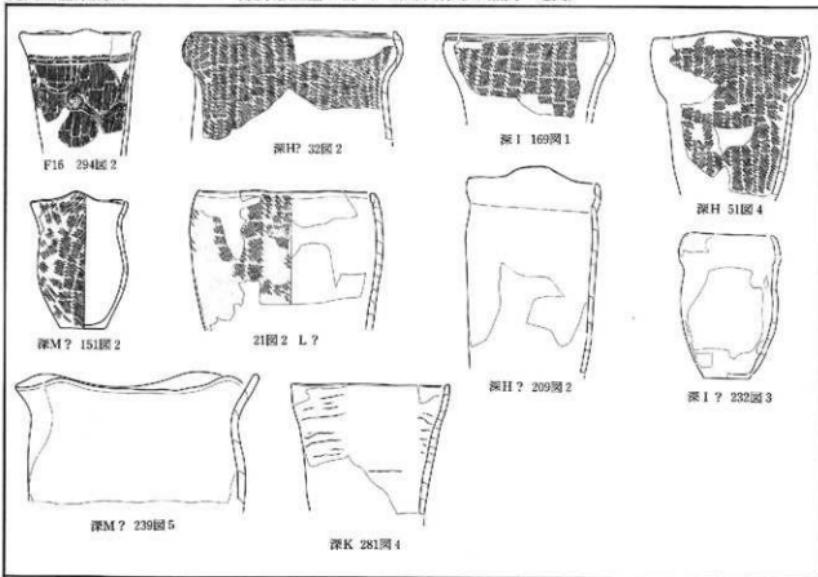
绳文土器集成(2) 深鉢形土器 J群 (口縁部文様帯がその他)・H群 (横位連続横円文)



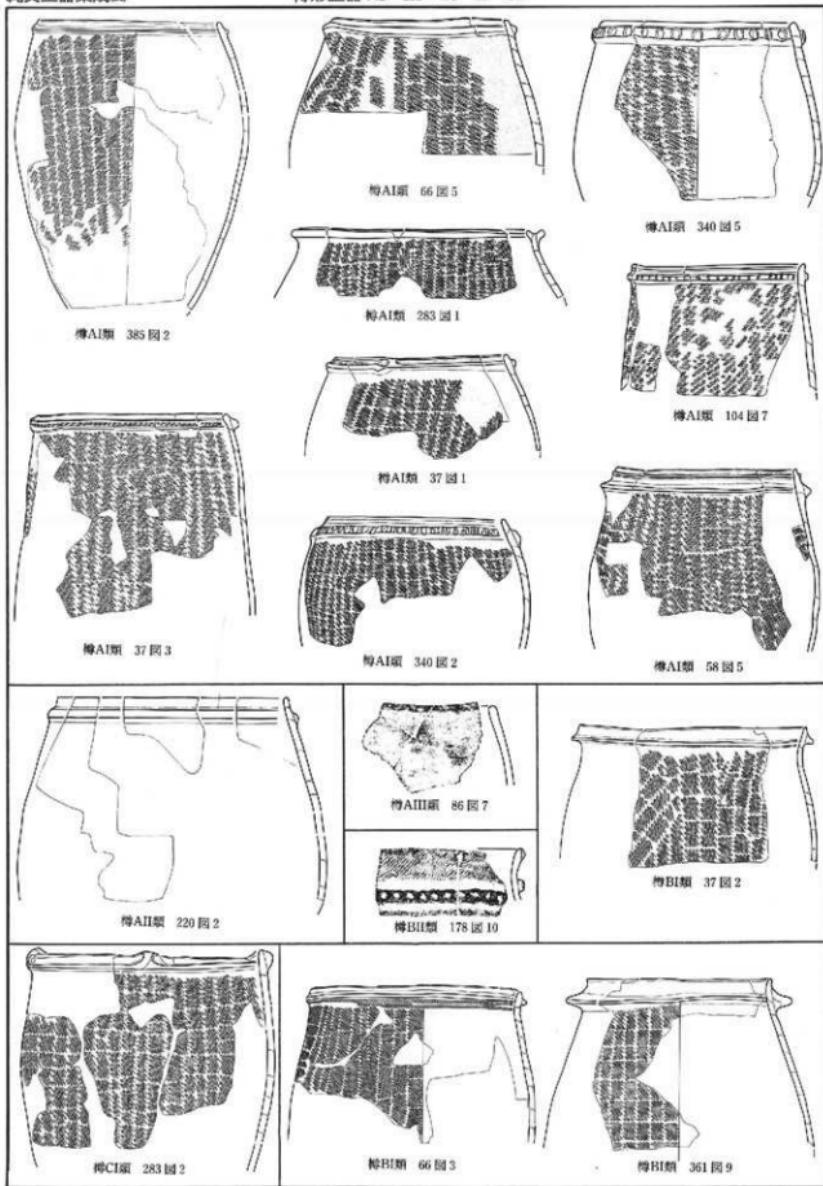
第62図 深鉢形土器 J群(2) (縮尺1/6)



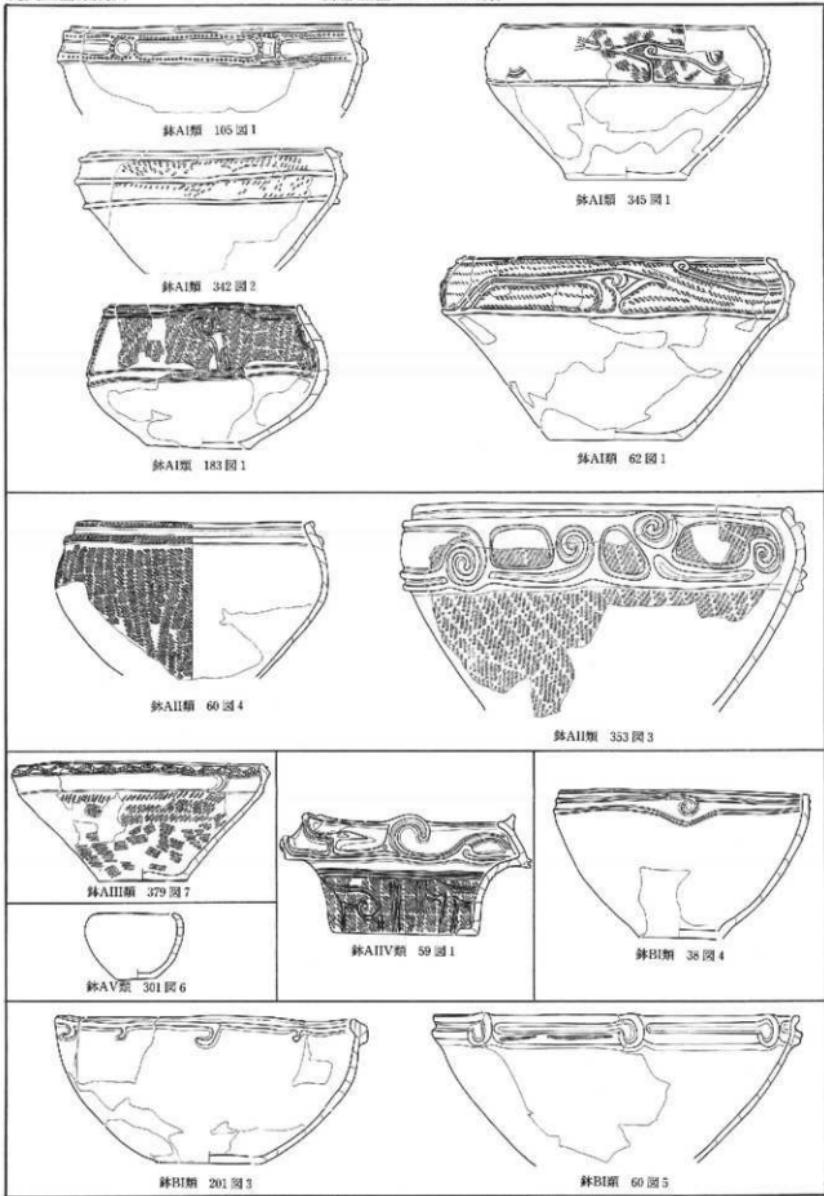
第63a図 深鉢形土器 J群(3)・K群(1) (縮尺1/6)



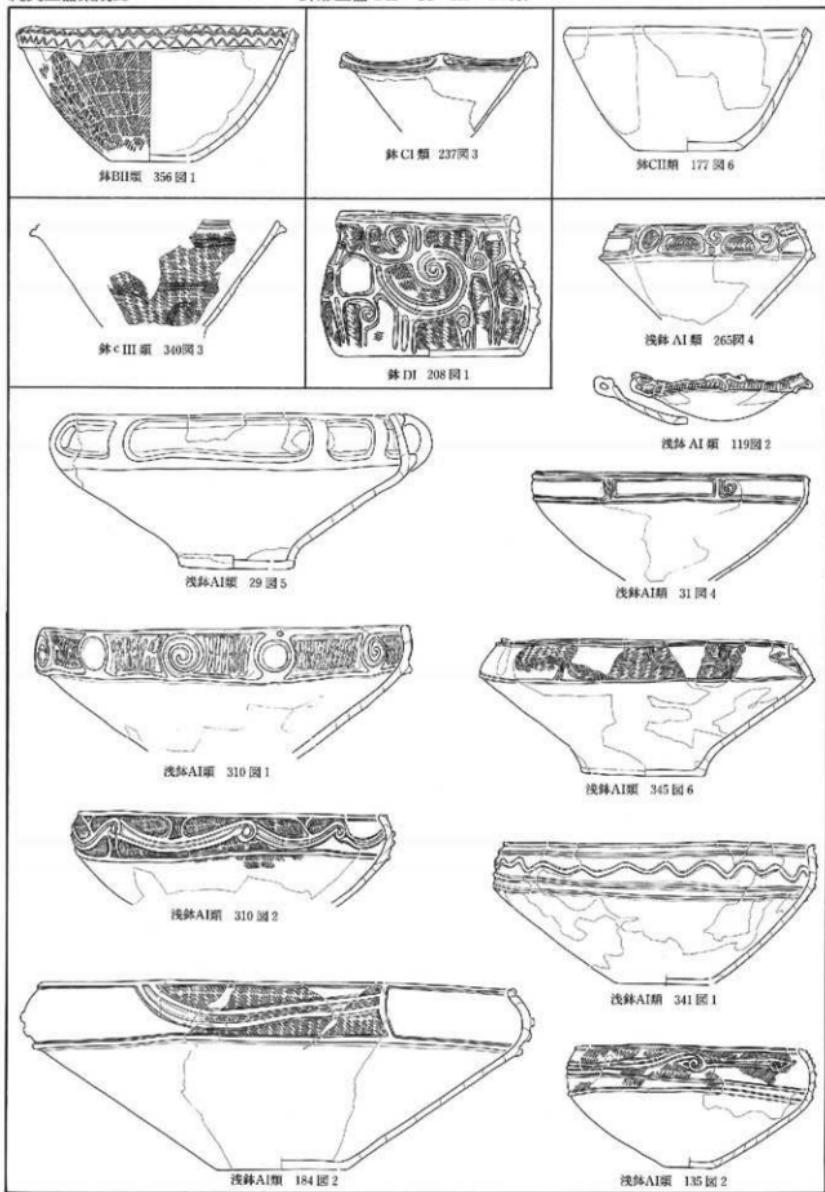
第63b 図 深鉢形土器K群(2) (縮尺1/6)



第64図 樽形土器 AI~III・BI~II・CI類 (縮尺1/6)

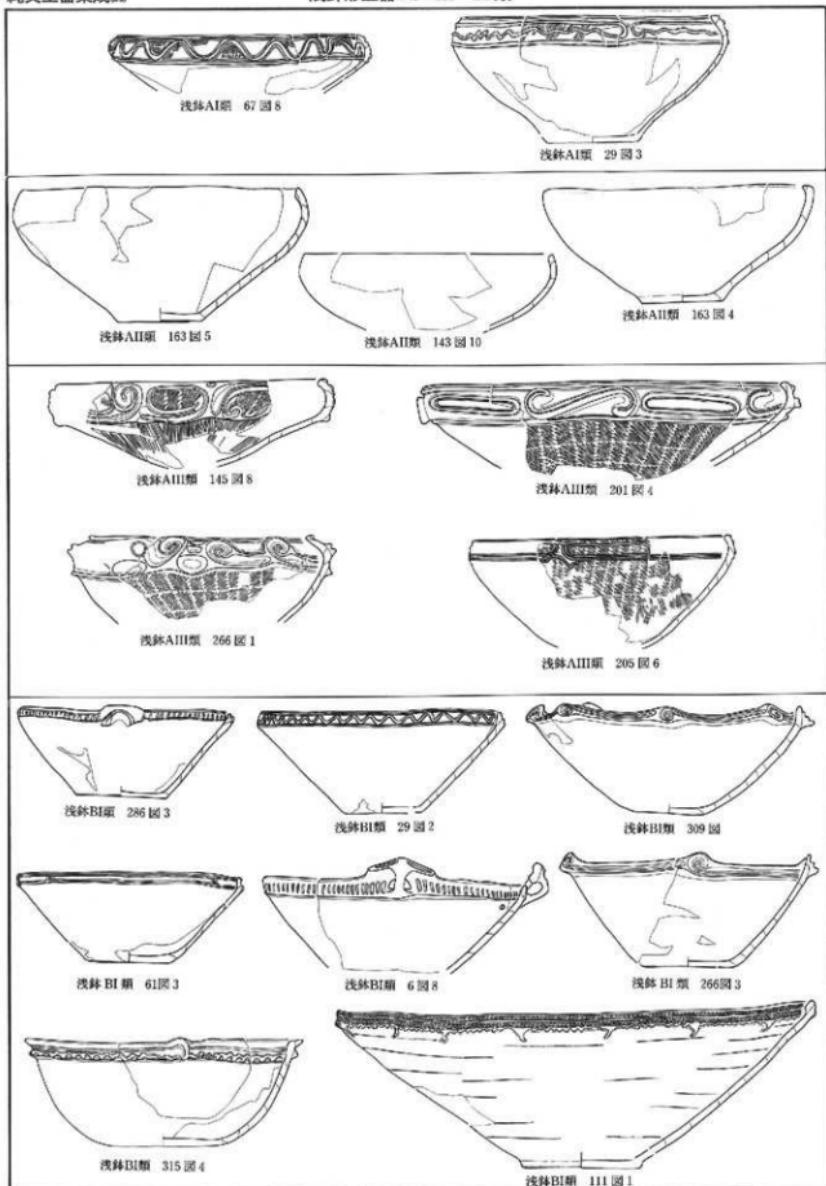


第65a図 鉢形土器 AI~V・BI類 (縮尺1/6)



第65 b 図 鉢形土器 BII・CI~III・DI 類、浅鉢形土器 AI 類 (縮尺1/6)

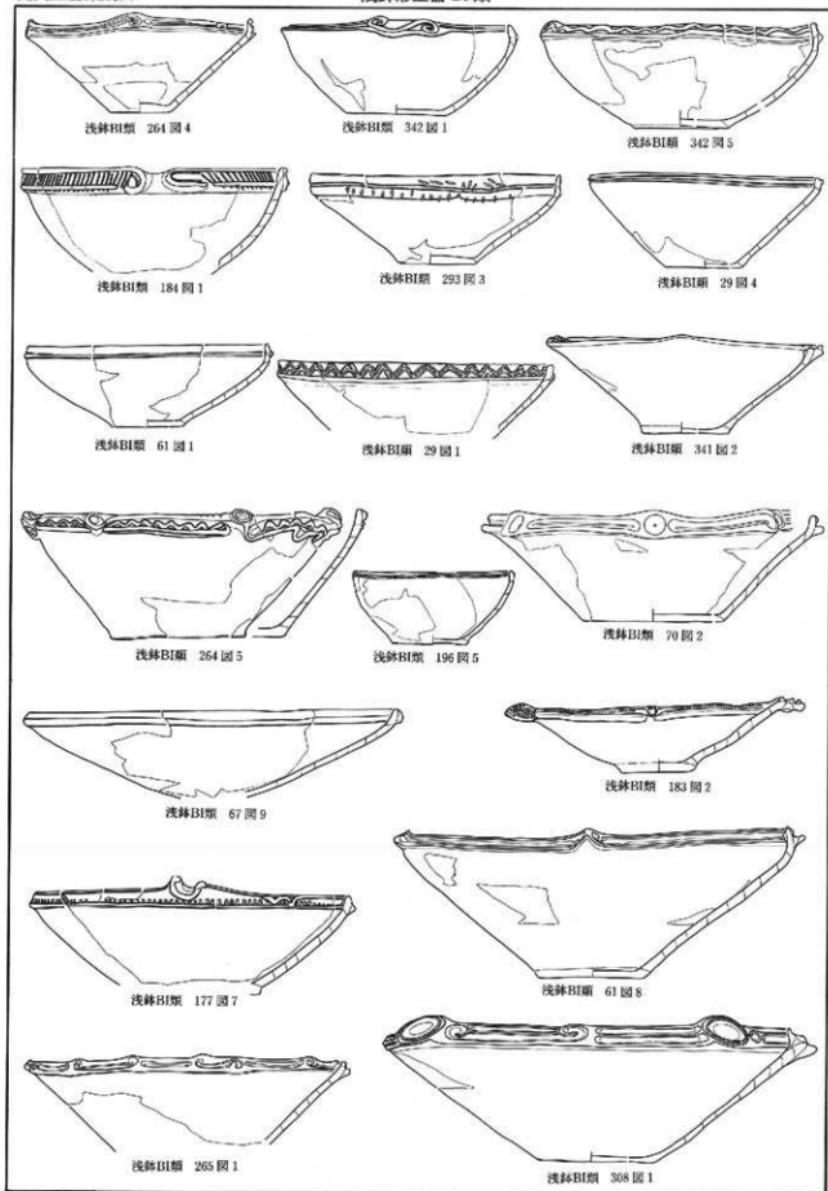
浅鉢形土器 AI~III・BI類



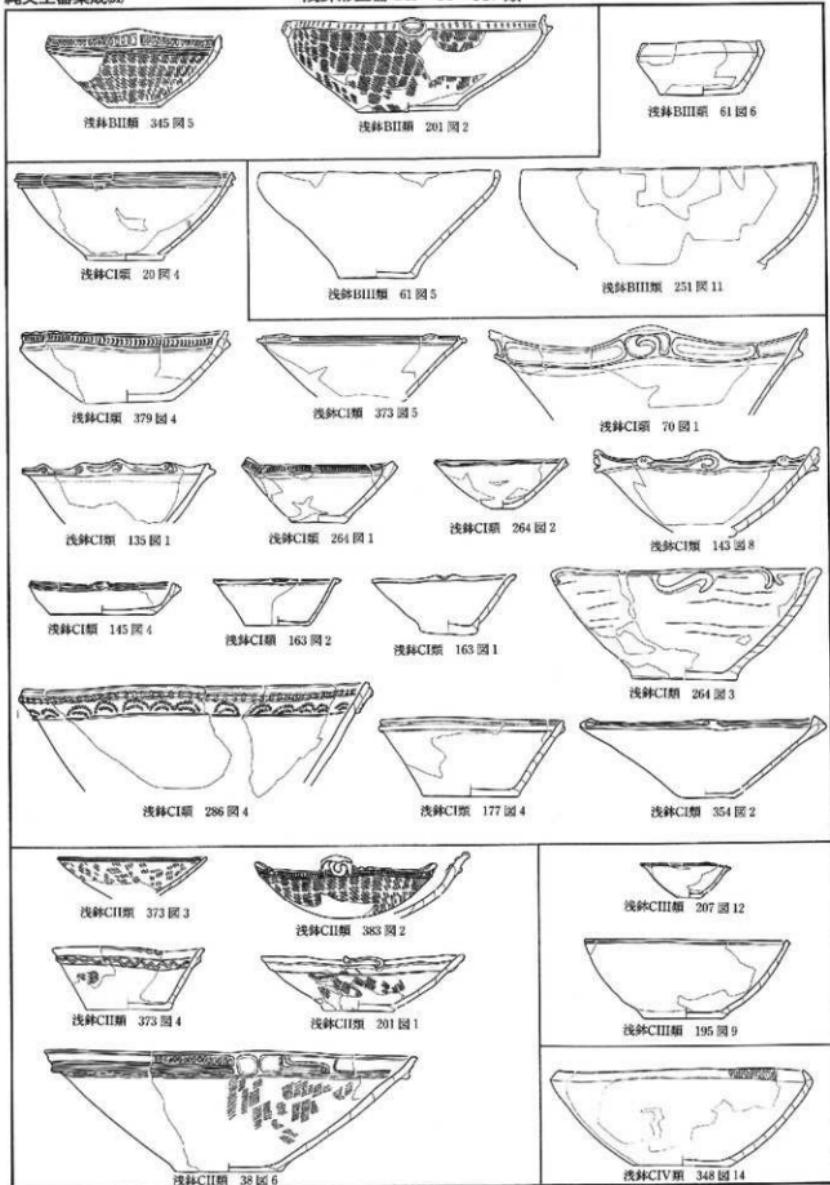
第65c図 浅鉢形土器 AI~III・BI類 (縮尺1/6)

縄文土器集成(3)

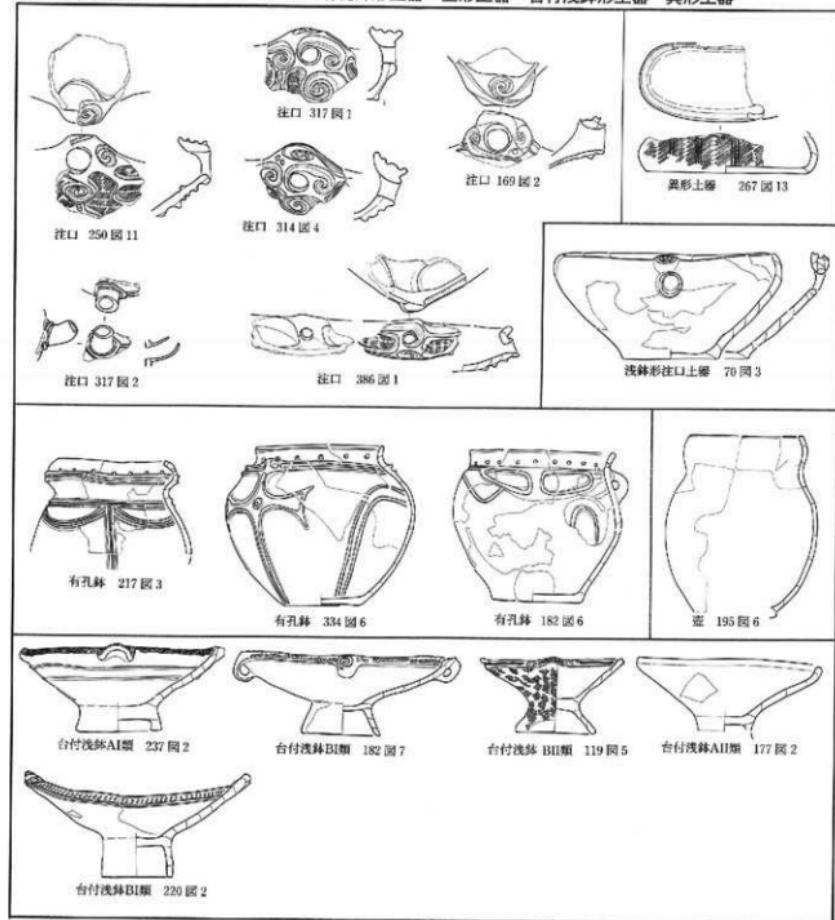
浅鉢形土器 BI類



第66a図 浅鉢形土器 BI類 (縮尺1/6)



第66b図 浅鉢形土器 BII・CI~IV 類 (縮尺1/6)



第66c図 注口土器・有孔鉢形土器・壺形土器・台付浅鉢形土器 (縮尺1/6)

B 土製品

高柳遺跡から出土した土器以外の土製品は422点で、内訳は土偶が63点、土笛2点、土製腕輪1点、土製耳飾1点、土製垂飾品5点、三角彫形土製品2点、男根形土製品1点、三脚形土製品4点、パイプ形土製品7点、円盤状土製品89点、その他不明土製品248点である。

以下各種類ごとに述べていく。

(1) 土偶 (第391図～第397図、第401図)

土偶は68点出土している。この内65点を図示した。いずれも遺物包含層から出土したもので、土器片や他の遺物などと一緒に出土しており、特殊な状態で出土したものはない。63点のなかで、完全なものはなく、いずれもどこかの部位を欠失している。したがって、ここでは頭部・腕部・胴部（胸部・腹部・臀部・背面）・脚部の各々の部位の特徴を明らかにすることによって全体像を探りながら、分類することにする。

[頭 部]

頭部が残存しているものは12点のみである。391図1は、隆線で眉と鼻、沈線で目をリアルに表現している。391図3も隆線で鼻、沈線で口を表現している。391図5は口のみが表現されているが目・鼻は省略している。391図7は動物の顔立ちに近い表現をしている。391図6は目・鼻・口が省略され、全体が小さな山形状を呈している。391図2・4は頭部を一部欠失しているが、391図6とおなじように突出した山形状と考えられる。401図2・4～7は、目・鼻が表現されず、全体形が円盤状のものでこれらも土偶9頭部と考えられる。以上頭部は大きく5つに類型化することができる。

- | | |
|----|-----------------------------------------------|
| a類 | 目・鼻等をリアルに表現し、全体的に整っているもの。
(391図1) |
| b類 | 目・鼻等の表現が簡略化し、後頭部がやや突出するもの。
(391図3・5) |
| c類 | 目・鼻等をリアルに表現しているが、獣面状のもの。
(391図7) |
| d類 | 目・鼻等が表現されず、全体が突出した山形状を呈しているもの。
(391図2・4・6) |
| e類 | 目・鼻等が表現されず、全体形が円盤状のもの。
(第401図2・4・5・6・7) |

[腕 部]

左右の腕部が残存しているもの・左右いずれかの腕部が残存しているものは21点である。胸部と境界が明瞭で左右に突出するように腕を表現しているものと、胸部と境界が明瞭でなく胸部から腕部全体が三角状を呈するものがある。

- | | |
|----|---------------------------------------------------------------------|
| a類 | 胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの
(392図1・2, 393図2・3・5・7, 394図1・2・8) |
| b類 | 胸部と境界が明瞭なもの
(391図2・4・5・6・7, 392図3・4・5, 393図1・4, 397図7・10) |

【胸 部】

胸部は胸部・腹部・臀部・背面から構成されている。腹部は正中線と臍とからなっている。胸部のいずれかが残存しているものは42点ある。

(胸 部)

- | | |
|----|----------------------------------------------------------|
| a類 | 乳房を表現していないもの
(391図2・4・7, 393図1・4) |
| b類 | 丸い隆起で乳房を表現しているもの
(391図8, 392図3・5, 393図2, 394図1・8) |
| c類 | 腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもの
(391図5・6, 392図1・2・4, 393図3・5・7) |
| d類 | W形の隆起で乳房を表現しているもの
(394図2) |

(腹 部)

腹部が残存しているものが27点ある。腹部は「正中線」と「臍」を中心に観察と細分を行った。

「正中線」

- | | |
|----|--------------------------------------------------------------------|
| a類 | 正中線を表現していないもの
(391図2・4・6・7, 392図5, 393図2・4・6, 396図1, 397図1・2・3) |
| b類 | 胸部から垂下する隆線を正中線として表現するもの
(391図5・8, 2-3, 4-5, 5-2, 6-8) |
| c類 | 胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの
(392図1・2・4, 393図1・3, 394図1・2・3・5) |

「臍」

- | | |
|----|--------------------------------------------------------------------|
| a類 | 臍を表現しないもの
(391図2・4・6・7, 392図4・5, 393図4, 396図1・8, 397図1・2・3) |
| b類 | 臍を丸、もしくは三日月状の隆起で表現するもの
(391図8, 392図3, 393図1, 395図2・3, 396図7・11) |
| c類 | 臍を沈線等で表現するもの
(392図1・2, 395図1・5) |

(臀 部)

臀部が残存し形態を観察できるものが、31点ある。

- | | |
|----|-----------------------------------------------------|
| a類 | 臀部を表現しないもの
(391図2・4・6・7, 393図4・6・10・11, 397図2・3) |
|----|-----------------------------------------------------|

- b類 出尻形に表現しているもの**
 (391図8, 392図1・2・3・4, 393図1・6, 394図6・7, 395図1・2・3・4・5・6・7, 396図1・2・5・8, 397図1)

(背 面)

背面が残存し形態を観察できるものが30点ある。

- a類 背すじを表現しないもの**
 (391図2・4・6・7, 392図2・3・5, 393図1・4, 395図4・7, 396図1・7・11, 397図1・2・3)
- b類 背すじを沈線で表現するもの**
 (391図5, 392図1・4, 393図2・3・6, 394図1・2, 395図1・3)
- c類 背すじ以外の沈線による文様をもつもの**
 (391図8, 396図10)

[脚 部]

脚部が残存しているものが32点ある。

- a類 腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のもの**
 (391図6・8, 392図3・4, 393図1・2・4, 396図8・10・11, 397図2)
- b類 腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、二脚のもの**
 (392図1, 393図1, 395図1・5, 396図3・4・9・12, 397図4・6・8・9)
- c類 腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、一脚のもの**
 (392図2, 393図6, 395図2・3・4・6・7, 396図1・2・5・7, 397図1・7・11)

以上、土偶の各部位の観察と細分をした。その結果、脚部形態と臀部形態に大きな特徴があることが判明した。すなわち、脚部形態にはa類【腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体】と、b類【腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので二脚】、c類【腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので一腳】が認められた。脚部形態が判明する35点の内訳は、a類11点・b類12点・c類12点で3種類のものがほぼ同数であった。

臀部形態ではa類【臀部を表現しないもの】とb類【出尻形に表現しているもの】とがあり、a類22点・b類9点でほぼ2:1の比率であった。

脚部形態と臀部形態を分類上の主な基準とし、胴部（胸部・腹部・背面）・腕部・頭部の形態を加味しながら分類したのが第13表である。各類の頭部～脚部までの全体像を想定することとする。

- [土偶A類]** A 1類 (391図1・3・5, 392図1, 393図3・5・7, 394図3・5・6・7, 395図1・5, 396図3・4・9, 397図4・5・6・7・9)
 A 2類 (397図8)
 A 3類 (393図1)

(頭 部) A 1類で頭部が判明するものはa類【目・鼻等をリアルに表現し、全体的に整っているもの】とb類

第13表 土偶残存部位・分類一覧表

分類	部位	頭					胸 部					腹 部					背 部					脚 部				
		a類	b類	c類	d類	e類	a類	b類	c類	a類	b類	c類	a類	b類	c類	a類	b類	c類	a類	b類	c類	a類	b類	c類		
A	A 1 頭	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	A 2 頭																									
	A 3 頭																									
	B 1 頭																									
	B 2 頭																									
	C 1 頭																									
	C 2 頭																									
	D 頭																									
	n類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	b類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	c類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	d類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	e類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	頭	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	胸 部	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	腹 部	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	背 部	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	脚 部	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

【目・鼻等の表現が簡略化し、後頸部がやや突出するもの】とがある。A 2・3類は不明。

(腕 部) A 1類は a 類「胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの」と b 類「胸部と境界が明瞭なもの」とがある。A 3類は a 類「胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの」で、A 2類は不明。

(胸 部) A 1類で胸部が判明するものはいずれも c 類「胸部から延びる隆線で乳房を表現しているもの」である。A 3類は a 類「乳房を表現していないもの」であるが、A 2類は不明。

(腹 部) A 1類の正中線は b 類「胸部から垂下する隆線を正中線として表現するもの」と c 類「胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの」とがある。A 3類は c 類「胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの」である。A 2類は不明。A 1・3類の臍は c 類「臍を沈線等で表現するもの」であるが、A 3類は b 類「臍を丸くしくは三日月状の隆起で表現するもの」である。

(臀 部) A 1・3類の臀部が判明するものはいずれも b 類「出尻形に表現しているもの」である。A 2類は不明。

(背 面) A 1類で背面が判明するものはいずれも b 類「背すじを沈線で表現するもの」である。A 3類は a 類「背すじを表現しないもの」で、A 2類は不明。

(脚 部) A 1～3類とも、b 類「腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、二脚のもの」であるが、A 1類は脚部の基部が合体する。A 2と A 3類は完全に二脚に分離している。

〔土偶A類全体像〕

〔土偶A 1類〕

全体的な大きさは、A 2・B・C類と比較して大振りである。

(頭部) 目・鼻等をリアルに表現し、全体的に整っているものと、目・鼻等の表現が簡略化し、後頸部がやや突出するものとがある。

(腕部) 胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するものと、胸部と境界が明瞭なものとがある。

(胸部) 腹部から延びる隆線で乳房を表現しているもののみのようである。

(腹部) 胸部から垂下する隆線を正中線として表現するものと、胸部から垂下する沈線を正中線として表現するものとがある。臍は沈線等で表現するものだけのようである。

(臀部) 出尻形に表現しているものだけのようである。

(背面) 背すじを沈線で表現するものだけのようである。

(脚部) 腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、二脚の脚部で基部が合体するものだけである。

〔土偶A 2類〕

全体的な大きさは不明であるが、脚部の大きさから想定してA 1類と同じくらいの大きさかと考えられる。

(頭部) 不明である。

(腕部) 不明である。

(胸部) 不明である。

(腹部) 不明である。

- (臀部) 不明である。
(背面) 不明である。
(脚部) 腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、完全に二脚に分離している。

【土偶A 3類】

- 全体的な大きさは、A 1より小さくB・C類と同じ位である。
(頭部) 不明である。
(腕部) 胸部と境界が明瞭なものとがある。
(胸部) 乳房を表現していない。
(腹部) 胸部から垂下する沈線を正中線として表現し、臍を丸い隆起で表現している。
(脚部) 出尻形を表現している。
(背面) 背すじを表現していない。
(脚部) 腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、完全に二脚に分離している。

【土偶B類】 B 1類 (392図2)

B 2類 (393図6, 395図2・3・4・6, 396図1・2・5・7, 397図1・11, 401図・2・4・5・6・7)

(頭 部) B 1類は不明であるが、B 2類はe類〔目・鼻が表現されず、全体形が円盤状のもの〕の可能性がある。

(腕 部) B 1類はa類〔胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの〕であるが、B 2類は不明である。

(胸 部) B 1類はc類〔腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもの〕である。B 2類は不明である。

(腹 部) B 1類の正中線はc類〔胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの〕である。B 2類はa類〔正中線を表現していないもの〕と、b類〔胸部から垂下する隆線を正中線として表現するもの〕とがある。B 1類はc類〔臍を沈線等で表現するもの〕であるが、B 2類はa類〔臍を表現しないもの〕と、b類〔臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するもの〕である。

(脚 部) B 1・2類とも脚部が判明するものはいずれもb類〔出尻形で表現しているものである〕

(背 面) B 1類はa類〔背すじを表現しないもの〕である。B 2類はa類〔背すじを表現しないもの〕と、b類〔背すじを沈線で表現するもの〕とがある。

(脚 部) B 1・2類とも、C類〔腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、一脚のもの〕である。

【土偶B類全体像】

【土偶B 1類】

- 全体的な大きさは、A 1類より小さく、B 2・C 1・2類より大きく、A 3類と同じ位の大きさと考えられる。
(頭部) 判明するものがいため不明である。
(腕部) 胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈している。

- (胸部) 脇部から延びる隆線で乳房を表現している。
- (腹部) 正中線が胸部から垂下する隆線を正中線として表現している。臍は沈線等で表現している。
- (臀部) 出尻形に表現している。
- (背面) 背すじを表現していない。
- (脚部) 腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので一脚のものもある。

【土偶B 2類】

- 全体的な大きさは、A 1・A 2・B 1類より小さく、C 1・C 2類と同じ大きさと考えられる。
- (頭部) 目・鼻が表現されず、全体形が円盤状の可能性がある。
- (腕部) 不明である。
- (胸部) 不明である。
- (腹部) 正中線を表現していないものと胸部から垂下する隆線を正中線として表現するものがある。臍は、表現しないものと、臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するものとがある。
- (臀部) すべて出尻形に表現している。
- (背面) 背すじを表現しないものと、背すじを沈線で表現するものとがある。
- (脚部) すべて腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので一脚のものである。

【土偶C類】 C 1類 (391図8, 392図3・4・5, 393図2, 394図1・2・3, 396図8)

C 2類 (391図2・4・6, 393図4, 396図10・11, 397図2・3・10)

(頭 部) C 1類で頭部が判明するものではなく不明であるが、C 2類では3点残存しておりいずれも目・鼻が表現されず、全体が突出した山形状を呈している。

(腕 部) C 1類はa類【胸部と境界が明瞭でなく、胸部から胸部全体が三角状を呈するもの】と、b類【胸部と境界が明瞭なもの】とがある。C 2類はすべてb類【胸部と境界が明瞭なもの】である。

(胸 部) C 1類はb類【丸い隆起で乳房を表現しているもの】が大部分であるが、c類【脇部から延びる隆線で乳房を表現しているもの】・d類【W形の隆起で乳房を表現しているもの】もある。C 2類はa類【乳房を表現していないもの】が多いがc類【脇部から延びる隆線で乳房を表現しているもの】もある。

(腹 部) C 1類の正中線はa類【正中線を表現していないもの】・b類【脇部から垂下する隆線を正中線として表現するもの】・c類【脇部から垂下する沈線を正中線として表現するもの】とがある。C 2類はa類【正中線を表現していないもの】だけである。C 1類の臍はa類【臍を表現しないもの】と、b類【臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するもの】とがあるが、C 2類もa類【臍を表現しないもの】とb類【臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するもの】とがある。

(臀 部) C 1類で臀部が判明するものはいずれもb類【出尻形に表現しているもの】であるC 2類は、a類【臀部を表現しないもの】だけである。

(背 面) C 1類はa類【背すじを表現しないもの】とb類【背すじを沈線で表現するもの】が大部分であるがc類【背すじ以外の沈線による文様をもつもの】もある。C 2類はa類【背すじを表現しないもの】が大部分であるが、c類【背すじ以外の沈線による文様をもつもの】もある。

(脚 部) C 1・2類ともすべて、a類【腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のもの】である。

【土偶C類全体像】

[土偶C 1類]

- 全体的な大きさは、A 1・A 3・B 1類より小さく、B 2・C 2類と同じ位の大きさと考えられる。
- (頭部) 不明である。
 - (腕部) 胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈しているものと、胸部との境界が明瞭なものとがある。
 - (胸部) 丸い隆起で乳房を表現しているものが大部分であるが、腕部から延びる隆線で乳房を表現しているものや、W形の隆起で乳房を表現しているものもある。
 - (腹部) 正中線を表現していないものと、正中線が胸部から垂下する隆線を正中線として表現しているものの、胸部から垂下する沈線を正中線として表現するものとがある。臍を表現しないものと、沈線等で表現しているものとがある。
 - (臀部) 出尻形に表現している。
 - (背面) 背すじを表現していないもの、背すじを沈線で表現するもの、背すじ以外の沈線による文様をもつものとがある。
 - (脚部) 腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のものである。

[土偶C 2類]

- 全体的な大きさは、A 1・A 3・B 1類より小さく、B 2・C 1類と同じ大きさと考えられる。
- (頭部) 判明するものが3点あるが、いずれも目・鼻が表現されず、全体が突出した山形状を呈している。
 - (腕部) 胸部との境界が明瞭なものだけである。
 - (胸部) 乳房を表現していないものが大部分であるが、腕部から延びる隆線で乳房を表現しているものもある。
 - (腹部) すべて正中線を表現していない。臍は、表現しないものと、臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するものとがある。
 - (臀部) すべて表現されていない。
 - (背面) すべて背すじを表現していない。
 - (脚部) すべて腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のものである。

[土偶D類全体像]

[土偶D類]

- 全体的な大きさは、A 1類より小さく、B 2・C 1・2類より大きく、A 3・B 1類と同じ位の大きさと考えられる。
- (頭部) 目・鼻をリアルに表現した顔面状のものである。
 - (腕部) 胸部と胸部の境界が明瞭なものである。
 - (胸部) 乳房を表現していない。
 - (腹部) 正中線や臍を表現していない。

- (脛部) 不明である。
- (背面) 背すじを表現していない。
- (脚部) 不明である。

(2) 土笛 (第398図1・2)

2点出土している。398図1は完形品で長さが7.0cm、幅が3.3cmある。吹口は直系1.1cmで内部は中空になっている。両側面にはRLの繩文が施されている。吹口の反対側にはわずかに3つの点があり、帆面状にも観察できる。側面からみると下部はふくらんでいるが、上面は平らになっている。

398図2は半分欠損しているが、全体の形状は398図1と同じで下部がふくらみ、上部が平らになると推定できる。398図1よりひとまわり大きく、長さは8.8cm、幅が5.0cm前後である。吹口の一部が残存しており、全体形状・成形技法とも398図1と同じと考えられる。398図1は内面を観察することができないが、398図2を観察すると、板状の粘土をはりあわせて作り、吹口の反対側を絞りこんでふさいでいる。内面には粘土を絞りこんだ時の皺が観察できる。

所属年代・類例・系譜等については、考察の項で述べる。

(3) 土製輪輪 (第398図3)

1点出土している。直径7.8cmの環状の輪輪である。断面が「ハ」字状になっている。最小内径が4.9cmで最大内径は6.9cmである。上面に沈線2本を巡らしている。

(4) 土製耳飾 (第398図7)

1点出土している。全体の形状は小鼓状で長さ3.0cm、幅2.5cmあり、中央に直径4mmの貫通孔がある。

(5) 土製垂飾品 (第398図4・5・6・8・9・10)

6点出土している。

398図4は円盤状の形状で、一部欠損しているが直径が4.7cmで、中央に直径6mmの小孔を穿っている。表面には3重、裏面には4重の沈線を巡らしているが、裏面は4箇所で途切れている。

398図5は円盤状のもので、長さが4.6cm、幅が3.5cm、厚さが0.8cmある。中軸線からややはずれ左右1個づつ直径4mmの貫通する小孔がある。

398図6は扁平な椿円形の形状で、長さが4.3cm、幅2.8cm、厚さ1.4cmあり長軸方向に貫通する小孔がある。表面には長軸方向に平行に7列の刺突による列点が配置され、裏面にも6列ほどの刺突による列点を配置している。

398図8は円盤状の形状で、一部欠損しているが直径3.1cmで、中央に直径8mmの孔を穿っている。表裏面と側面にそれぞれ1本の沈線を巡らしている。側面には沈線の上下にそれぞれ刺突による列点を配している。

398図9は一部残存しているだけであるが、全体の形状は398図4と同じで、円盤状のものと考えられる。推定直径は8cm程度で、398図4よりひとまわり大きい。中央に小孔を穿ち、表裏面に沈線を配しているが全体の構成は不明である。一部に小孔を配している。

398図10は全体形状がC字状に湾曲し勾玉状を呈しているが、尾部を欠損している。頭部に直径4mmの貫通孔がある。

(6) 三角構形土製品 (第399図1・2)

2点出土している。399図1は完形のもので、長さが9.4cm、幅6.6cm、厚さが4.8cmあり、5面で構成されている。摩滅しているが各面にRLの繩文を施している。表・裏面には沈線で同じ区画文を描いている。右側面は他の沈線より細い細沈線で文様を描いている。左側面には、側面を縁取るように表・裏面と同じ太さの沈線で描いている。右側面から底面にかけて斜めに貫通する小孔がある。底面には繩文以外に文様はない。表面には、加熱に

よると思われる剥落痕が中央にあり、裏面には摩滅によると考えられる凹痕がある。

399図2は破片であるが、全体形状は399図1と同様に5面で構成されていると思われる。表・裏面とも無文と思われるが、側面には縁取るように3本1組の沈線がある。

(7) 男根形土製品（第399図3）

1点出土している。長さ12.5cm、幅4.1cm、厚さ4.5cmある。先端部には刻目をいれている。基部下端に剥落痕が2ヶ所ある。恐らく袋状のもの2個が剥落したものと思われる。基部に直径7mmの貫通孔がある。

(8) 三角形土製品（第399図4・5・6・7）

4点出土している。「三脚形土製品」・「三脚状土製品」・「三角状土製品」と称されているものと同一のものである。いずれも全体的形状は三角形を基本にしている。

399図4は3辺が内側に湾曲し頂角部分がやや脚状になっている。表面が全体的にアーチ状に膨らんでいる。表面には中軸線と平行する沈線が2本ある。上辺には2本の沈線、左右側辺にはそれぞれ1本の沈線がある。裏面は無文である。基部が欠損しており、孔がある。

399図5の全体的形状は正三角形に近いが、3辺が内側にやや湾曲気味で3頂角とも丸みがある。表面は全体的にややアーチ状に膨らんでいる。表面には中軸線上に1本の沈線があり、これを囲むように左右側辺に平行にそれぞれ3本の沈線を配置している。上辺・左右側辺・裏面とも無文である。

399図6は2側辺が外側に張り出し丸みを持っているが、上辺はやや外側に張り出している。表面は全体的にややアーチ状に膨らんでいる。表面には中軸線に平行して2列の刺突による列点があり、それを囲むように側辺に平行に右側辺が3列、左側辺に2列の刺突による列点を配置している。上辺・左右側辺・裏面とも無文である。

399図7の全体形状は二等辺三角形状になっており、左右側辺はやや丸みを持って外側に張り出しが、上辺は直線状である。表面は全体的にアーチ状にわずかに膨らんでいる。表面には中軸線上に1列の刺突による列点があり、それを囲むように左右側辺に平行に2列づつの刺突による列点を配し、上辺に平行して1列の刺突による列点と1本の沈線がある。上辺には刺突による列点が1列あるが、左右側辺と裏面は無文である。

以上、三角形土製品の特徴をまとめると、全体的形状は三角形を基本としており正三角形状・二等辺三角形状のものがあるが、左右側辺が丸く張り出すものや、脚状に近いものもある。表面はアーチ状に膨らんでいる。表面と上辺に文様を配置するものが多い。文様には沈線のものと刺突による列点文がある。文様の配置は基準線を中心にしていている。

(9) パイプ形土製品（第400図1～7）

パイプ形土製品としたものは、400図2のように全体の形状がパイプに類似したもので、長い中空で筒状の胴部とこれに直角もしくは斜めの角度で接続する短い中空の頭部からなっている。筒状の胴部の内部は竹管で粘土をえぐりだして中空に作りだしミガキ等の調整を加えていないものがほとんどで、差し込んだ竹管の痕跡がそのまま残っている。そのため、他の土製品との判別が比較的容易である。全体形状が略判明するものを中心に7点を図示した。

400図1は、頭部全体と胴部の一部が残存している。頭部は胴部から斜めに立ち上がり、内外面とも丁寧にミガキ調整されている。

400図2は、胴部内面に竹管の痕跡がのこっている。頭部は胴部に略直角に接続しており、外面をミガキ調整している。

400図7は、胴部のみ残存しているが、剥落痕がありこの部分で頭部が接続していたと考えられる。

400図3・4・5・6はいずれも胴部破片である。

(10) 鞍形土製品 (第402図1)

1点出土している。全体の形状が鞆に類似しており、底面に直径4mmの貫通する小孔がある。表面はミガキ等の調整をしていないため、成形の際の粘土貼り合わせ痕が観察できる。

(11) 不明土製品 (第400図8～10、第401図1～9、第402図1～10、第403図1～18)

上記土製品の一部の可能性のあるものや、その他のものを不明土製品として一括して説明する。

400図8～10は、いずれも中軸線上に貫通する小孔があり、裾のやや開く基部と筒状の胴部から構成されている。

401図1・3は、裾の大きく開き底面が凹む基部と、胴部から構成されている。胴部は判然としないが、401図2は剥落状況から2個、401図3は4個に別れたものが付くようである。

401図2・4～7は、裾の開く基部と略直立する胴部から構成されている。基部底面は、401図2・4・6のようにやや内側に凹むものと、401図7のように平坦のものとがある。401図4は1個、401図6は2個基部の裾に貫通する小孔があり、401図7は基部底面に4個の盲孔がある。胴部全体が判明するものがなく401図4のように若干膨らむものもある。

以上401図2・4～7は土偶の頭部の可能性が高い。

401図9は半分程欠損しているが、復元すると直径3.8cmの球形のものと考えられ、土鈴の可能性がある。

402図2も土偶の可能性が高いが、判然としないため不明土製品としておく。

402図4は人面状のものであるが、剥落の状況から人面状把手の可能性がある。

402図1・5・6・7・9・10、403図1～18、404図2は、一部の破片資料で全体の形状が判明しないため不明のものや、いずれかの土製品の小破片のため判然としないものである。

403図8、404図1・3・4・5は縄文土器の把手が剥落したものである可能性もある。しかし、縄文土器の把手に類例が見あたらないため、不明土製品としておく。

404図6・7・8・9・10、は粘土塊をそのまま焼成したもので、404図10のように丸いものや、404図8のように細長いものなど様々な形状であり、粘土をよじった時の皺が観察できるものもある。

(12) 円板状土製品 (第405・406図)

「円盤状土製品」と称されているものと同一のものである。

包含層の各層から89点出土しているが、このうち75点を図示した。いずれも土器の破片を大きく打ち欠いて形を整え、周縁部を磨って仕上げたものである。

[素 材]

いずれも縄文土器の破片を利用している。土器の胴部破片を利用したものが大部分であるが、底部破片も少量ある。胴部破片を利用したものは文様のあるもの、地文だけのもの、無文のものがあるが、地文のものが多い。

[形 状]

橢円形のものや、隅丸方形のものもあるが大部分は円形である。

[大きさ]

8cm以上の大型のものや、3cm以下の小型のものもあるが、4～7cm位の大きさのものが大部分である。

[重 量]

10～20gの重量のものが大部分である。

C 剥片石器

遺物包含層を中心に合計19,104点の剥片石器・礫石器・磨製石器が出土している。点数の内訳は下に示した。ここではそれぞれの石器の属性の概要と、属性に基づいた分類について説明する。

石器の組成

剥片石器・礫石器・磨製石器 19104点																			
剥片石器とその素材 15564										礫石器 3451			磨製石器 89						
剥片石器 2045					加工・使用痕ある剥片 6860					素材 6659									
定形剥片・石器 792					二次加工剥片 265					微細剥離痕ある剥片 252									
石鏃	石匙	石錐	石簾	尖頭器	不定形石器	楔形石器	二次加工剥片	微細剥離痕ある剥片	剥片	石核	凹石	敲凹石	敲磨石	磨石	石皿	石棒	磨製石斧	石劍	
265	252	159	89	27	1015	238	3004	3856	5904	755	532	1379	303	550	291	396	7	81	1

剥片石器には、石鏃（A）・石匙（B）・石錐（D）・右簾（D）・石槍（E）等のように從来の繩文時代石器研究に基づいた定形石器と、形態的には不定であるが入念に二次加工のある不定形石器（F）、両極刻離痕のある楔形石器（G）、これらの素材としての石核（H）・剥片（K）とがある。剥片には、部分的に二次加工のある剥片（J）と、使用痕としての微細な剥離痕を持つ剥片（I）とがある。これらの石器のうち、本遺跡剥片石器群の特色を示していると考えられる。定形石器を中心化した。以下、それぞれの石器の特徴の概略と、観察した属性および分類基準を記す。

(1) 石 鏃 [A]

尖頭部と基部からなり、先端部が薄く扁平な小型の石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・長幅指数・ふくらみ度・えぐり度・石材）

長幅指数——基本的な平面形が、尖頭部先端と基部先端2点を結ぶ三角形で構成されている。長幅指数（幅／長さ）が平面形の基本となる三角形の度合いを知る手がかりとなるため計測した。その結果、長幅指数が120未満をa類正三角形型、120以上170未満をb類二等辺三角形型、170以下を鋭角三角形型として3類型に細分した。

えぐり度——基部の形態には、平状・凸状・凹状のものが認められる。特に凹状の度合いを客観化するため、え

ぐり度（えぐり最大長／基部先端2点長）を計測した。えぐり度が10未溝の平状のものを平基型、えぐり度が10以上のものを凹基型として分類し、凸基型を加えて3類型に細分した。

ふくらみ度——側縁形態も、平状・円状・凹状のものがある。ふくらみの度合いを客観化するため、ふくらみ度（ふくらみ最大長／尖頭部先端～基部先端長）を計測した。ふくらみ度が10未溝の平状のものを平側型、ふくらみ度が10以上の円状のものを円側型、凹状のものを凹側型として3類型に細分した。

以上3つの属性を中心に具体的な分類を行うが、3つの属性中、基部形態は矢柄への着柄のあり方と関わると考えられ、平面形を構成する三角形の形状と側縁形態は、重量とともに対象物への破壊力・殺傷力に関わると考えられる。石鎚の機能を考えると最も重要なのが破壊力と殺傷力であり、様々な形態と大きさは対象物によっての使い分けも想定される。しかし、同時期の他遺跡との比較分析上から、従来の縄文時代石鎚の研究で時期的な変遷をある程度とらえられている、えぐり度を中心とする基部形態の分類を優先させ、これに重複指標を中心とする三角形の形状と、ふくらみ度を中心とする側縁部形態を加味して分類した。

A類 平基（えぐり度が10未溝の基部が平坦なもの）

A I類 平側（ふくらみ度10未溝のもの）

A I c類 鋭角三角形型

A II類 平側（ふくらみ度10以上のもの）

A II a類 正三角形型

A II b類 二等辺三角形型

A II c類 鋭角三角形型

B類 凹基（えぐり度が10以上の基部が凹状のもの）

B I類 平側（ふくらみ度10未溝のもの）

B I a類 正三角形型

B I b類 二等辺三角形型

B I c類 鋭角三角形型

B II類 円側（ふくらみ度10以上のもの）

B II a類 正三角形型

B II b類 二等辺三角形型

B II c類 鋭角三角形型

B III類 凹側

B III b類 二等辺三角形型

B III c類 鋭角三角形型

B IV類 先端が突出

B IV a類 正三角形型

B IV b類 二等辺三角形型

C類 凸基（基部が凸状のもの）

C I類 平側（ふくらみ度10未溝のもの）

C I b類 二等辺三角形型

C I c類 鋭角三角形型

C II類 円側（ふくらみ度10以上のもの）

C II b類 二等辺三角形型

第67図 石鎚分類

平面形態 基部形態	側縁形態	a類 正三角形型 (長幅指数120未満)	b類 二等辺三角形型 (長幅指数120以上170未満)	c類 鋸角三角形型 (長幅指数170以上)
A類 平基 (えぐり度10未満)	A I類 平側(ふくら み度10未満)			A I c類
	A II類 円側(ふくら み度10以上)	A II a類 	A II b類 	A II c類
B類 凹基 (えぐり度10以上)	B I類 平側(ふくら み度10未満)	B I a類 	B I b類 	B I c類
	B II類も 円側(ふくら み度10以上)	B II a類 	B II b類 	B II c類
	B III類 凹側		B III b類 	B III c類
C類 凸基	B IV類 先端突出型	B IV a類 	B IV b類 	
	C I類 平側(ふくら み度10未満)		C I b類 	C I c類
C類 凸基	C II類 円側(ふくら み度10以上)		C II b類 	

(2) 石匙 [B]

両側縁からえぐりを入れることによって作出されたつまみ部があり、刃部と判断できる縁辺をもつ石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・つまみ度・刃部角度・石材）

つまみ角度——つまみ部と刃部の位置関係には縦状・横状・斜状のものが認められた。この位置関係を客観的に捉えるため、主要刃部の両端を結ぶ線と、つまみ部の軸線によってはさまれた角度を計測した。つまみ角度20未満のA類縦型と、20以上70未満をB類斜型、70以上をC類横型、の3類型に細分した。

刃部末端の形状——刃部末端の形状には尖るものI類と、尖らないでやや丸味をもつものII類がある。

刃部加工の状況——刃部の二次加工の状況を観察すると、片面の周縁を加工したa類と、両面の周縁を加工したb類、表裏面の周縁を加工したc類、片面全面を加工したd類、片面全面と裏面の周縁を加工したe類の5類型に細分した。

刃部とつまみ部の位置関係を示すつまみ角度を優先させ、これに刃部末端の形状と加工の状況を加味して19の類型に細分した。

A類 縦型

A I類 刃部先端が尖るもの

- A I a類** 片面の周縁を加工したもの
- A I b類** 両面の周縁を加工したもの
- A I c類** 表裏面の周縁を加工したもの
- A I d類** 片面の全面を加工したもの
- A I e類** 片面全面と裏面の全面を加工したもの

A II類 刃部先端が尖らないもの

- A II a類** 片面の周縁を加工したもの
- A II b類** 両面の周縁を加工したもの
- A II d類** 片面の全面を加工したもの
- A II e類** 片面全面と裏面の全面を加工したもの

B類 斜型

B I類 刃部先端が尖るもの

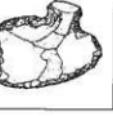
- B I a類** 片面の周縁を加工したもの
- B I b類** 両面の周縁を加工したもの
- B II類** 刃部先端が尖らないもの
- B II a類** 片面の周縁を加工したもの
- B II b類** 両面の周縁を加工したもの
- B II d類** 片面の全面を加工したもの

C類 横型

C I類 刃部先端が尖るもの

- C I a類** 片面の周縁を加工したもの
- C I b類** 両面の周縁を加工したもの

第68図 石匙分類

刃部とつまみ部の関係	刃部末端の形状	加工の状況				
		a類 片面の周縁	b類 両面の周縁	c類 表裏面の周縁	d類 片面全面	e類 片面全面と裏面の周縁
A類 縱型 刃部がつまみ部に対して縦に付くもの(つまみ角度20未満)	A I 類 刃部末端が尖るもの	A I a類 	A I b類 	A I c類 	A I d類 	A I e類 
	A II 類 刃部末端が尖らないもの	A II a類 	A II b類 		A II d類 	A II e類 
B類 斜型 刃部がつまみ部に対して斜に付くもの(つまみ角度20以上70未満のもの)	B I 類 刃部末端が尖るもの	B I a類 	B I b類 			
	B II 類 刃部末端が尖らないもの	B II a類 	B II b類 		B II d類 	
C類 横型 刃部がつまみ部に対して横に付くもの(つまみ角度70以上のもの)	C I 類 刃部末端が尖るもの	C I a類 	C I b類 			C I e類 
	C II 類 刃部末端が尖らないもの	C II a類 	C II b類 			

- C I e類 片面全面と裏面の全面を加工したもの
 C II類 刃部先端が尖らないもの
 C II a類 片面の周縁を加工したものです
 C II b類 両面の周縁を加工したものです

(3) 石錐 [C]

尖頭状の錐部をもち、錐部の断面形が三角形もしくは菱形状を呈する石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・石材・錐部長・錐部角度）

つまみ部と錐部の境界——つまみ部と錐部の境界が明瞭なものA類と、不明瞭なものB類とがある。

錐部の形状——錐部が長いものI類と、錐部が短いII類とに分けられる。

つまみ部の加工状況——つまみ部のほぼ全周を加工しているものa類と、一部を加工しているものb類とに分けられる。

つまみ部と錐部の境界の状態を優先させ、これに錐部の形状とつまみ部の加工状態を加味して8類型に細分した。

A類 つまみ部と錐部の境界が明瞭なもの

A I類 錐部が長いもの

A I a類 つまみ部のほぼ全周を加工したもの

A I b類 つまみ部の一部を加工したもの

A II類 錐部が短いもの

A II a類 つまみ部のほぼ全周を加工したもの

A II b類 つまみ部の一部を加工したもの

B類 つまみ部と錐部の境界が不明瞭なもの

B I類 錐部が長いもの

B I a類 つまみ部のほぼ全周を加工したもの

B I b類 つまみ部の一部を加工したもの

B II類 錐部が短いもの

B II a類 つまみ部のほぼ全周を加工したもの

B II b類 つまみ部の一部を加工したもの

(4) 石簾 [D]

全体形状が簾状を呈し、一端に長軸に直交する刃部を持つ石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・長幅指数・重量・石材）

全体形状——全体の形状が簾状のものA類と、長幅指数が高く全体の形状が細味のものB類と、全体の形状が撥形のものC類がある。

刃部形態——刃部が角張るものI類と、刃部が丸みを持つものII類とに分けられる。

二次加工の状況——二次加工の状況が表裏の全面に及ぶものa類と、片面の全面のものb類、片面の周縁のものc類、片面全面と裏面の周縁のものd類、表裏面の周縁のものe類がある。

全体の形状を優先させ、刃部の形態と二次加工の状況を加味して分類した。

第69図 石錐の分類

つまみ部と 錐部の境界 の状態	錐部の 形状	つまみ部の加工状態	
		a類 ほぼ全周を加工	b類 一部加工
A類 明瞭なもの	A I類 長いもの	A I a類	A I b類
	A II類 短いもの	A II a類	A II b類
B類 不明瞭なもの	B I類 長いもの	B I a類	B I b類
	B II類 短いもの	B II a類	B II b類

第70図 尖頭器分類

A類 尖頭部と 基部が明 瞭なもの	A I類 基部に えぐり をいれ るもの	A I a類 小型のも の	
	A I b類 大型のも の		
A II類 基部に えぐり をいれ ないも の			
B類 尖頭部と 基部が不 明瞭なも の	B I類 細味の もの	B I類	
	B II類 やや幅 広のも の		

A類 全体の形状が壺状のもの

A I類

- A I a類** 表裏面の全面を加工
- A I b類** 片面の全面を加工
- A I d類** 片面の全面と裏面の周縁

A II類

- A II a類** 表裏面の全面を加工
- A II b類** 片面の全面を加工
- A II c類** 片面の周縁を加工
- A II d類** 片面の全面と裏面の周縁
- A II e類** 表裏面の周縁

B類 全体の形状が細味のもの

B I類

- B I a類** 表裏面の全面を加工
- B I d類** 片面の全面と裏面の周縁

B II類

- B II a類** 表裏面の全面を加工
- B II d類** 片面の全面と裏面の周縁

C類 全体の形状が撥形のもの

C I類

- C I b類** 片面の全面を加工

C II類

- C II b類** 片面の全面を加工
- C II d類** 片面の全面と裏面の周縁

(5) 尖頭器 [E]

両側辺が直線的もしくは凸形の両面加工により一端が尖頭状の石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・長幅指数・重量・石材）

尖頭部と基部の形状を中心に、基部のえぐりの有無などから5類型に分類した。

A類 尖頭部と基部が明瞭なもの

A I類 基部にえぐりをいれるもの

- A I a類** 小型のもの

- A I b類** 大型のもの

A II類 基部にえぐりをいれないもの

B類 尖頭部と基部が不明瞭なもの

B I類 細味のもの

B II類 やや幅広のもの

第71図 石器分類

全体の形状	刃部形態	二次加工の状況				
		a類 表裏面全面	b類 片面全面	c類 片面の周縁	d類 片面全面と裏面 の周縁	e類 表裏面の周縁
A類 全体の形状 が籠状のもの	A I類 角張って いるもの	A I a類 	A I b類 		A I d類 	
	A II類 丸みを持 つもの	A II a類 	A II b類 	A II c類 	A II d類 	A II e類
B類 全体の形状 が細味のもの	B I類 角張って いるもの	B I a類 			B I d類 	
	B II類 丸みを持 つもの	B II a類 			B II d類 	
C類 全体の形状 が撥形のもの	C I類 角張って いるもの		C I b類 			
	C II類 丸みを持 つもの		C II b類 		C II d類 	

(6) 不定形石器 [F]

二次加工の施された石器の中で定形的なものをのぞいた石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・石材）

A類 スクレイパー・エッジを持つもの

A I類 刃部末端が尖るもの

A I a類 直刃と直刃

A I b類 凸刃と凸刃

A I c類 凸刃と凹刃

A I d類 凹刃と凹刃

A I e類 直刃と凸刃

A I f類 直刃と凹刃

A II類 刃部末端が尖らないもの

A II a類 凸刃

A II b類 凹刃

A II c類 直刃

A II d類 直刃と直刃

A II e類 直刃と凹刃

A II f類 凸刃と凹刃

A II g類 凸刃と凸刃

A II h類 直刃と凸刃

B類 円形状を呈する小型のもの

B I類 片面周縁二次加工のもの

B II類 両面周縁二次加工のもの

B III類 片面全面二次加工のもの

B IV類 両面全面二次加工のもの

C類 尖頭器状を呈する小型のもの

C I類 片面周縁二次加工のもの

C II類 両面周縁二次加工のもの

C III類 片面全面二次加工のもの

D類 粗い二次加工があるもの

D I類 ノッチを持つもの

D II類 鋸齒縁のもの

D III類 片面加工のもの

D IV類 両面加工のもの

(7) 橢形石器 [G]

対向する縁辺から、両極打法によったと思われる剝離面（両極剝離痕）が認められる石器

第72図 不定形石器分類(1)

A類 スクレイ バー・エ ッジを持 つもの	A I 類 刃部末 端が尖 るもの	A I a 類 直刃と直刃		A I b 類 凸刃と凸刃	
		A I c 類 凸刃と凹刃		A I d 類 凹刃と凹刃	
		A I e 類 直刃と凸刃		A I f 類 直刃と凹刃	
		A II a 類 凸刃		A II b 類 凹刃	
A II 類 刃部末 端が尖 らない もの		A II c 類 直刃		A II d 類 直刃と直刃	
		A II e 類 直刃と凹刃		A II f 類 凸刃と凹刃	
		A II g 類 凸刃と凸刃		A II h 類 直刃と凸刃	

第73図 不定形石器分類(2)

B類 円形状を 呈する小 型のもの	B I類 片面周縁二次加工 のもの		B II類 両面周縁二次加工 のもの	
	B III類 片面全面二次加工 のもの		B IV類 両面全面二次加工 のもの	
C類 尖頭器状 を呈する 小型のもの	C I類 片面周縁二次加工 のもの		C II類 両面周縁二次加工 のもの	
	C III類 片面全面二次加工 のもの			
D類 粗い二次 加工があ るもの	D I類 ノッチを持つもの		D II類 鋸歯縁のもの	
	D III類 片面加工のもの		D IV類 両面加工のもの	 This drawing is identical to the one in the D II class, showing a serrated edge.

観察した属性（長さ・幅・厚さ・長幅指数・重量・石材）

A類

- A I類 点状と点状
- A II類 点状と線状
- A III類 点状と平坦面
- A IV類 線状と線状
- A V類 線状と平坦面
- A VI類 平坦面と平坦面

B類

- B I類 線状と線状・線状と線状
- B II類 線状と線状・線状と平坦面

(B) 石 核 [H]

剥片を剥離する目的で整形された礫もしくは剥片

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・石材）

A類 打面作出型：平坦な打面を作出し、打面の周縁に沿って剥片剥離がなされたもの

- A I類 平坦打面のもの
- A II類 求心的に剥離を加えて打面を作出したもの

B類 求心型：作業面が表裏両面にだけ設定され、周縁から中心に向かって求心的に剥片剥離がなされたもの

- B I類 交互剥離によるためチョッピング・トゥル状を呈するもの
- B II類 剥片剥離が表裏の全面におよばないもの
- B III類 剥片剥離が表裏の全面におよぶもの
- B IV類 剥片剥離が表裏全面におよび全体の形状が円盤状のもの

C類 多面体型：複数の作業面・打面から剥片剥離がなされたもので全体の形状が多面体となるもの

第74図 石核分類

A類 打面作出型 平坦な打面を作出し 打面の周縁に沿って 剥片剥離のなされた もの	A I類 平坦打面のもの	
	A II類 求心的に剥離を 加え打面を作出 したもの	
B類 求心型 作業面が表裏両面に だけ設定され、周縁 から中心に向かって 求心的に剥片剥離の なされたもの	B I類 交互剥離による ためチョッピング ・トゥール状 を呈するもの	
	B II類 剥片剥離が表裏 の全面におよば ないもの	
	B III類 剥片剥離が表裏 の全面におよぶ もの	
	B IV類 剥片剥離が表裏 全面におよび全 体形状が円盤状 のもの	
C類 多面体型 複数の作業面・打面 から剥片剥離のなさ れたもの	C類 全体の形状が多 面体となるもの	

第75図 橢形石器分類

刃部の形状	
A類 一对の両 極剥離痕 を持つも の	A I類 点状と 点状
	A II類 点状と 線状
	A III類 点状と 平坦面
	A IV類 線状と 線状
	A V類 線状と 平坦面
	A VI類 平坦面 と平坦 面
B類 二対の両 極剥離痕 を持つも の	B I類 線状と 線状、 線状と 線状
	B II類 線状と 線状、 線状と 平坦面

D 磨製石器

各種石材を敲打等によって形を整え、最終的に研磨して製作した石器を磨製石器として扱うこととする。合計89点出土しているが最も多いのは磨製石斧が81点で、石棒が7点、石剣1点が出土している。以下各々について分類する。

(1) 磨製石斧 (第492図～第500図)

磨製石斧は81点出土している。この内61点を図示した。いずれも遺物包含層から出土した。これらのなかには頭部・肩部・刃部がそろう完全なものは少なく、いずれかの部位を欠失したものがほとんどであった。したがってここで、各々の部位を観察してその特徴を明らかにしながら、全体像を探りつつ分類することとする。

観察・計測した属性 (長さ・幅・厚さ・石材・頭部形態・肩部形態・刃部形態)

[頭部形態]

頭部形態が判明するものが43点ある。頭部の平面形態と上面形態を観察した結果、それぞれを以下のように細分した。

(頭部平面形態)

- | | |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| a類 | 丸みをもち、肩部側縁との境界が不明瞭なもの
(495図3, 498図3・6) |
| b類 | 丸みをもっているが、肩部側縁との境界が明瞭なもの
(492図1・2・7, 493図1・9・13, 496図4・5, 497図5, 498図4, 499図7) |
| c類 | 平坦で肩部側縁との境界が明瞭なもの
(492図3・5・6, 493図5・8・10・11・12, 494図1・2・3・5・6, 495図1・4・5, 496図3・6・7, 497図1・2・3・4・6, 498図1・2, 499図2・4, 500図1・6) |

(頭部上面形態)

- | | |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| a類 | ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの
(494図2, 497図2・4, 500図1) |
| b類 | ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの
(492図1・2・5・6, 493図8・9・11・13, 494図3・5, 495図1・5, 496図3・4・7, 497図1・6, 498図3, 499図4・7) |
| c類 | ほぼ並行な長方形で隅が丸いもの
(492図7, 495図3・5) |
| d類 | ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの
(492図1・5・10・12, 494図1・6, 495図4, 496図5・6, 499図2) |
| e類 | 格円気味のもの
(492図3, 498図1・6, 500図6) |
| f類 | 側縁との境界が明瞭でないもの
(498図4) |

[肩部形態]

胸部形態が判明するものが62点ある。胸部の平面形態と横断面形態を観察した結果、それぞれ以下のように細分した。

(胸部平面形態)

- | | |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| a類 | 胸部側縁がほぼ並行なもの
(492図8, 493図3・4・6・7・8・9・12, 494図3・4・5, 495図1・2, 496図2, 497図4・7, 499図3・5・6・9, 500図2・3・4) |
| b類 | 胸部上半より胸部下半の幅が大きいもの
(492図1・2・3・4・5・6・7, 493図1・5・10・11・13, 494図1・2・6, 495図3・4・5・6, 496図3・4・5・6・7, 497図1・2・3・5・6, 498図1・2・3・4・6, 499図2・4・7, 500図1・6) |

(胸部横断面形態)

- | | |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| a類 | ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの
(492図1・2・5・6・8, 493図1・3・4・8・11・13, 494図1・2・3・4・5・6, 495図1・2・4・5, 496図2・3・4・5, 497図1・2・3・4・5・6, 498図1・2・3, 499図3・4・5・6, 500図1・2・3・4・6) |
| b類 | ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの
(492図7, 493図9, 496図7, 498図4, 499図1) |
| c類 | ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの
(493図5・6・7・10・12, 496図6, 499図2) |
| d類 | 梢円形気味で隅が丸いもの
(492図3, 496図1, 498図6, 499図7) |
| e類 | 不定形で側縁との稜線が不明瞭なもの
(495図3・6) |

[刃部形態]

刃部形態が判明するものが29点ある。刃部の平面形態と側面形態を観察した結果、それぞれ以下のように細分した。

(刃部平面形態)

- | | |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| a類 | 刃縁が全体的に丸みをもつもの
(492図6, 493図1・2・3・4・7・8・10, 495図2・5・6, 496図1・2, 497図1, 498図5・8, 499図3・4・5・6, 500図2・3) |
| b類 | 刃縁が全体的に丸みをもつが、左右対称でないもの
(492図8) |
| c類 | 刃縁中央が直線的で両端に丸みをもつもの
(494図3, 495図7, 500図4) |

d類 刃縁が直線的なもの

(493図6・9)

(刃部側面形態)

a類 中心線が刃縁を通るもの

(492図1, 493図1・2・3・4・6・7・8・10, 494図3, 495図2・5・6, 496図1・2, 497図1, 498図5・8, 499図3・5, 500図2・3・4)

b類 中心線が刃縁を通らないもの

(493図9)

以上、磨製石斧の各部位の観察と細分をした結果、完形品の少ない磨製石斧の全体像があきらかになってきた。磨製石斧の機能を考える上で最も重要である刃部形態と脣部形態を基準とし、分類したのが第14表である。

長さが10cm以上の中型（A～H類）のものと、長さが10cm未満の小型（I類）の2つに大きく分類することができる。これらはそれぞれ更に、刃部の平面形態・側面形態と脣部の平面形態・横断面形態から、中型を8類、小型を4類に細分した。

以下、各類の刃部・脣部・頭部の特徴をまとめる。

(中型：A～H類)

[A類] (493図4, 494図4・5, 495図1・2, 496図2, 497図4, 499図3・5・6, 500図2・3)

(頭部) 脣部平面形態が判明するものは、いずれもc類（平坦で脣部側縁との境界が明瞭なもの）のみである

頭部上面形態が判明するものには、a類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）とb類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）がある。

(脣部) 脣部平面形態は、いずれもa類（脣部側縁がほぼ並行なもの）のみである。

脣部横断面形態もa類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。

(刃部) 刃部平面形態は、いずれもa類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。

刃部側面形態もa類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

[B類] (492図1・2・4・5・6, 493図1・11・13, 494図1・2・6, 495図4・5, 496図3・4・5, 497図1・2・3・5・6, 498図1・2・3, 499図4, 500図1・6)

(頭部) 頭部平面形態には、a類（丸みをもち、脣部側縁との境界が不明瞭なもの）とb類（丸みをもっていながら、脣部側縁との境界が明瞭なもの）c類（平坦で脣部側縁との境界が明瞭なもの）がある。

頭部上面形態が判明するものには、a類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）とb類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）、c類（ほぼ並行な長方形で隅が丸いもの）、d類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）、e類（梢円気味のもの）がある。

(脣部) 脣部平面形態は、いずれもb類（脣部上半より脣部下半の幅が大きいもの）のみである。

脣部横断面形態もa類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。

第14表 磨製石斧残存部位・分類一覧表

●残存部位 ○推定残存部位 ●横の数字は図番号

分類	頭 部						肘 部						刃 部							
	平面形態			上面形態			平面形態			横断形態			平面形態			側面形態				
	a類	b類	c類	a類	b類	c類	d類	e類	f類	a類	b類	c類	d類	e類	a類	b類	c類	d類	a類	b類
A類	497-1	●								495-1	●					492-1	●			
	494-1	●	●	●	●	●				495-2	●	●	●	●	●	490-1	●			
	495-1	●								496-2	●	●	●	●	●	490-2	●			
										497-1	●	●	●	●	●	490-3	●			
										498-1	●	●	●	●	●	490-4	●			
										499-1	●	●	●	●	●	491-1	●			
										497-2	●	●	●	●	●	491-2	●			
										500-1	●	●	●	●	●	491-3	●			
										494-1	●	●	●	●	●	491-4	●			
										492-5	●	●	●	●	●	492-1	●			
B類	493-5	●	●	●	●	●	●	●	●	493-1	●	●	●	●	●	493-2	●	●	●	●
	493-1	●	●	●	●	●	●	●	●	494-1	●	●	●	●	●	494-2	●	●	●	●
	495-1	●	●	●	●	●	●	●	●	495-2	●	●	●	●	●	495-3	●	●	●	●
	496-1	●	●	●	●	●	●	●	●	497-5	●	●	●	●	●	497-1	●	●	●	●
	497-1	●	●	●	●	●	●	●	●	498-1	●	●	●	●	●	498-2	●	●	●	●
	498-1	●	●	●	●	●	●	●	●	499-1	●	●	●	●	●	499-2	●	●	●	●
	499-1	●	●	●	●	●	●	●	●	497-2	●	●	●	●	●	497-3	●	●	●	●
	497-2	●	●	●	●	●	●	●	●	498-2	●	●	●	●	●	498-3	●	●	●	●
	498-2	●	●	●	●	●	●	●	●	499-2	●	●	●	●	●	499-3	●	●	●	●
	499-2	●	●	●	●	●	●	●	●	497-3	●	●	●	●	●	497-4	●	●	●	●
C類	490-9	●	●	●	●	●	●	●	●	492-1	●	●	●	●	●	493-1	●	●	●	●
	492-7	●	●	●	●	●	●	●	●	493-1	●	●	●	●	●	493-2	●	●	●	●
D類	493-10	●	●	●	●	●	●	●	●	493-1	●	●	●	●	●	494-1	●	●	●	●
	495-6	●	●	●	●	●	●	●	●	495-1	●	●	●	●	●	495-2	●	●	●	●
	499-2	●	●	●	●	●	●	●	●	496-1	●	●	●	●	●	496-2	●	●	●	●
E類	493-5	●	●	●	●	●	●	●	●	495-3	●	●	●	●	●	496-3	●	●	●	●
	498-6	●	●	●	●	●	●	●	●	496-1	●	●	●	●	●	496-2	●	●	●	●
F類	493-2	●	●	●	●	●	●	●	●	495-1	●	●	●	●	●	496-1	●	●	●	●
	495-2	●	●	●	●	●	●	●	●	496-2	●	●	●	●	●	496-3	●	●	●	●
G類	495-2	●	●	●	●	●	●	●	●	497-1	●	●	●	●	●	498-1	●	●	●	●
	497-2	●	●	●	●	●	●	●	●	498-1	●	●	●	●	●	498-2	●	●	●	●
H類	491-5	●	●	●	●	●	●	●	●	491-4	●	●	●	●	●	492-1	●	●	●	●
	491-4	●	●	●	●	●	●	●	●	492-1	●	●	●	●	●	492-2	●	●	●	●
I類	I1	493-2	●	●	●	●	●	●	●	493-1	●	●	●	●	●	494-1	●	●	●	●
	I2	493-22	●	●	●	●	●	●	●	493-2	●	●	●	●	●	494-2	●	●	●	●
	I3	493-23	●	●	●	●	●	●	●	493-2	●	●	●	●	●	494-3	●	●	●	●
	I4	493-24	●	●	●	●	●	●	●	493-2	●	●	●	●	●	494-4	●	●	●	●

(刃部) 刃部平面形態は、いずれも a 類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態も a 類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

【C類】(492図7, 493図2, 496図7, 498図4・5, 499図1)

(頭部) 頭部平面形態が判明するものは、b 類（丸みをもっているが、脣部側縁との境界が明瞭なもの）と c 類（平坦で脣部側縁との境界が明瞭なもの）がある。
頭部上面形態が判明するものには、b 類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）、c 類（ほぼ並行な長方形で隅が丸いもの）、f 類（側縁との境界が明瞭でないもの）がある。
(胴部) 脇部平面形態は、いずれも b 類（脇部上半より脇部下半の幅が大きいもの）のみである。
脇部横断面形態も b 類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）のみである。
(刃部) 刃部平面形態は、いずれも a 類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態も a 類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

【D類】(493図10, 496図6, 498図8, 499図2)

(頭部) 頭部平面形態が判明するものは、いずれも c 類（平坦で脇部側縁との境界が明瞭なもの）のみである。
頭部上面形態が判明するものには、d 類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）のみである。
(脇部) 脇部平面形態は、いずれも b 類（脇部上半より脇部下半の幅が大きいもの）のみである。
脇部横断面形態も c 類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）のみである。
(刃部) 刃部平面形態は、いずれも a 類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態も a 類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

【E類】(492図3, 496図1, 498図6, 499図7)

(頭部) 頭部平面形態が判明するものは、a 類（丸みをもち、脇部側縁との境界が不明瞭なもの）と b 類（丸みをもっているが、脇部側縁との境界が明瞭なもの）、c 類（平坦で脇部側縁との境界が明瞭なもの）の3種類ある。
頭部上面形態が判明するものには、b 類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）と e 類（楕円気味のもの）がある。
(脇部) 脇部平面形態は、b 類（脇部上半より脇部下半の幅が大きいもの）のみである。
脇部横断面形態も d 類（楕円形気味で隅が丸いもの）のみである。
(刃部) 刃部平面形態は、c 類（刃縁中央が直線的で両端に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態も a 類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

【F類】(495図3・6)

- (頭部) 頭部平面形態が判明するものは、a類（丸みをもち、脣部側縁との境界が不明瞭なもの）のみである。
頭部上面形態は不明である。
- (胸部) 胸部平面形態は、b類（胸部上半より胸部下半の幅が大きいもの）のみである。
胸部横断面形態も、e類（不定形で側縁との稜線が不明瞭なもの）のみである。
- (刃部) 刃部平面形態は、a類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もa類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

【G類】(492図8)

- (頭部) 頭部平面・上面形態は不明である。
- (胸部) 胸部平面形態は、a類（脣部側縁がほぼ並行なもの）である。
胸部横断面形態もa類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）である。
- (刃部) 刃部平面形態は、b類（刃縁が全体的に丸みをもつが、左右対称でないもの）である。
刃部側面形態もa類（中心線が刃縁を通るもの）である。

【H類】(494図3, 495図7, 500図4)

- (頭部) 頭部平面形態が判明するものは、c類（平坦で脣部側縁との境界が明瞭なもの）である。
頭部上面形態が判明するものには、b類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。
- (胸部) 胸部平面形態は、いずれもa類（脣部側縁がほぼ並行なもの）のみである。
胸部横断面形態もa類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。
- (刃部) 刃部平面形態は、c類（刃縁中央が直線的で両端に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もa類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

(小型：I類)

【I 1類】(493図3・8)

- (頭部) 頭部平面形態が判明するものは、c類（平坦で脣部側縁との境界が明瞭なもの）である。
頭部上面形態が判明するものには、b類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。
- (胸部) 胸部平面形態は、a類（脣部側縁がほぼ並行なもの）のみである。
胸部横断面形態もa類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。
- (刃部) 刃部平面形態は、いずれもa類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もa類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

【I 2類】(493図5・7・12)

- (頭部) 頭部平面形態が判明するものは、いずれもc類（平坦で脣部側縁との境界が明瞭なもの）のみである。

壇部上面形態が判明するものは、d類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）であった。

（胸部）胸部平面形態は、いずれもa類（胸部側縁がほぼ並行なもの）とb類（胸部上半より胸部下半の幅が大きいもの）がある。

胸部横断面形態もc類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）のみである。

（刃部）刃部平面形態は、いずれもa類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。

刃部側面形態もa類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

【I 3類】(493図-6)

（頭部）頭部平面・上面形態は不明である。

（胸部）胸部平面形態は、a類（胸部側縁がほぼ並行なもの）である。

胸部横断面形態は、c類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）である。

（刃部）刃部平面形態は、d類（刃縁が直線的なもの）である。

刃部側面形態は、a類（中心線が刃縁を通るもの）である。

【I 4類】(493図9)

（頭部）頭部平面形態は、b類（丸みをもっているが、胸部側縁との境界が明瞭なもの）である。

頭部上面形態は、b類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。

（胸部）胸部平面形態は、a類（胸部側縁がほぼ並行なもの）である。

胸部横断面形態は、b類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。

（刃部）刃部平面形態は、d類（刃縁が直線的なもの）である。

刃部側面形態は、b類（中心線が刃縁を通らないもの）である。

分類	頭 部			胸 部			刃 部		
	平面形態 a類 b類 c類	上面形態 a類 b類 c類 d類 e類 f類		平面形態 a類 b類	横断面形態 a類 b類 c類 d類 e類		平面形態 a類 b類 c類 d類	側面形態 a類 b類	
A類	● ●	● ●		●	●		●	●	
B類	● ●	● ●	● ●	● ●	● ●		●	●	
C類	● ●	● ●	● ●	● ●	● ●		●	●	
D類	●		●	●	●	●	●	●	
E類	● ● ●	● ●	●	● ●	● ●	●	●	●	
F類	●			●	●	●	●	●	
G類				●	●		●	●	
H類	●	●		●	●		●	●	
I類	I1 ● ●	● ●		● ●	● ●		● ●	● ●	
	I2 ● ●	● ●		● ●	● ●		● ●	● ●	
	I3 ● ●	● ●		● ●	● ●		● ●	● ●	
	I4 ● ●	● ●		● ●	● ●		● ●	● ●	

(2) 石棒 (第501図1~4)

7点出土しているが、小破片をのぞいた4点を図示した。いずれも大型の石棒で、敲打によって素材の形態を整えた後、研磨によって表面全体を仕上げている。501図3・4はいずれも石棒の上下端部であるが、501図3は略兵隊に整えられている。503図4は中央部が凹んでいる。凹んでいる部分が上端で、平坦なものは下端と考えられる。

(3) 石刀 (第503図7)

1点出土している。断面を観察すると、明瞭な刃部を形成してはいないが、一側縁が他の側縁よりも稜線がやや丸味を持っているので石刀としておく。上下端部を欠損しているが、残存部から判断すると、反りのない直線的な形状のものと推定される。

E 石製品

(1) 岩偶 (第503図6)

1点出土している。石材は凝灰岩で表裏面に線刻による文様が描かれている。大きく欠損しているため全体の文様構成は不明であるが、渦巻文と上下・左右に延びる直線から成っている。線刻は極めて細く、断面はV字形なので剣片等の鋭利な縁刃を描いたと想像される。岩板の可能性もあるが、下端直上の両側が張り出し、くびれてさらに張り出すため岩偶とした。

(2) 有孔石製品 (第502図16, 第503図4・8・9, 第504図2)

5点出土している。いずれも孔を有するものである。

502図16は、長軸4.0cm、短軸2.9cm、厚さ1.4cmの扁平な梢円形状のもので長軸上に表面から裏面に斜めに孔が貫通している。この孔は断面が長方形で8mm×10mmの大きさである。断面の形状及び、この石材の硬度や孔の大きさから考えて人口的な孔とは認められない。孔周辺には擦痕などは認められないが、こうした石材は遺跡周辺では見あたらず、しかも4層出土ということから考えて、何らかに利用したことは十分に考えられるので有孔石製品としてとりあげた。

503図4もこの石材の硬度と孔の大きさから考えて人工的な孔とは考えがたく、ボーリングシェルによって穿孔されたものであろう。しかし、表面は隕面であるが裏面は節理面に沿って割れており、この節理面には擦った時の擦痕が観察できる。したがって502図16と同様、4層出土ということから何らかに利用したと想像されるため有孔石製品として扱った。

503図8・9、504図2はいずれも石材は安山岩であり、中央もしくは一端に孔を有するものである。石材の比重が軽いことから浮きとしての用途も考えられる。

(3) 船形状石製品 (第503図1)

1点出土している。

(4) 石斧状有孔垂飾品 (第503図3)

1点出土している。長さ3.3cm・幅1.7cm・厚さ0.7cmあり、全体の形状が石斧状である。頭部直下に直径3mmの貫通する小孔があり刃部を鋭く作り出している。ペンダント状の垂飾品と考えられる。

(5) 軽石状石製品 (第504図1・3・4・6・7, 505図1~4・6)

いずれも石材は安山岩で、大部分のものは扁平な梢円状のものであるが、504図4のように大型のものや、505図2のような不整形のものもある。

(6) 砥石状石製品 (第504図5, 505図5・8)

3点出土している。いずれも石材は安山岩で、504図5は片面に溝が2条、505図5も片面に10条程、505図7も片面に7条ありこれらは砥石と考えられる。

(7) 篦状石製品 (第506図1・2・5・6・9~13, 507図2~4・6)

いずれも珪化木を素材としているものである。素材となる珪化木は計1863点と多量に出土しているが、珪化木という素材自体加工痕跡が判別しにくい面があるが、擦って形を箒状に整えた13点を図示した。いずれも板目に割れた素材を利用している。

いずれも全体の形状は箒状であるが、506図6のように下端付近が丸みをもつものや握り部をもつものもある。

(8) 棒状石製品 (第506図3・4・7・8・14, 第507図1・5)

箒状石製品と同じように珪化木を素材とし、棒状に形を整えたもの7点を図示した。

全体の形状は棒状であるが、断面形態は506図7のように扁平なものや、506図3・4のように楕円状のもの、507図1・5のように角がまるい長方形状のものがある。板目に割れた素材を利用するものが多いが、506図4のように征目を利用したものもある。

大きさは、506図3・7・8のように6cm前後の比較的小型のものと、506図4, 507図1のように10cm以上の大型のもの、507図5のように17cm以上の大型のものがある。

507図1の両端には上下両端に糸掛け状にわずかに抉ぐりを入れている。507図5も下端が欠損しているが、上端にはわずかに抉ぐりを入れており、恐らく下端にもあると考えられる。

F 碜石器

河原や段丘崖の蹠脛等で採集した蹠を使用した結果、蹠面上に様々な使用痕跡を持つ石器である。一部の石皿を除いた他の蹠石器には整形・加工した痕跡は認められない。使用痕跡には、凹痕・敲痕・敲凹痕・磨痕・敲磨痕・ワレ痕・ヒビ痕が認められた。これら蹠石器は多量に出土しているため、完形品を中心に666点を図化した。

観察した属性 (長さ・幅・厚さ・重量・石材・蹠素材の平・断面形態・使用痕跡)

【蹠素材の平・断面形態】

平面形態 一長幅指数が1.2未溝の円形基調のもの、長幅指数が1.2以上2.0未溝の楕円形基調のもの、長幅指数が2.0以上の大長幅円形のもの、これら以外の不定形のものの4種類が認められた。

断面形態 一幅厚指数が1.2未溝の円形のもの、幅厚指数が1.2以上2.0未溝の楕円形のもの、幅厚指数が2.0以上の扁平形のものとが認められた。幅厚指数が1.2以上2.0未溝のものには、楕円形以外に変型楕円形と四面体形、不定形のものとがあり、形6種類が認められた。

これら蹠素材の平面形態と断面形態の組み合わせは第15表のようにまとめられる。

【使用痕跡】

凹痕 一凹部の深さが2mm以上で凹部平面形が楕円ないしは円形で、V字・U字状の断面形態を呈している。また凹部の表面は、摩耗して光沢のあるものと、ザラザラしているものとがある。摩耗しているものの凹部平面形は均整のとれた円形もしくは楕円形であるが、ザラザラしているものは、不整気味で小さな敲打痕の集合体のような様相を呈している。凹部は素材の蹠の中心軸上に数個あるものが多い。

敲凹痕 一凹部の深さが2mm未溝で、凹部平面形は楕円ないしは円形を基本としているが、不整形のものが多い。凹部表面はザラザラしているものと摩耗しているものとが認められた。

敲打痕 一素材の蹠の末端等にあるものが大部分である。表面はザラザラしていて凹部を形成していない。

磨痕 一表面が摩耗している痕跡である。素材蹠表面の広い面積にわたるものが多いが、局所的に見られるものもある。磨痕及び磨痕範囲とも明瞭なものと、磨痕は明瞭であるが磨痕範囲がやや不明瞭なもの、磨痕・磨痕範囲が明瞭さにやや欠けるものとがあった。石材の緻密度と使用頻度に関係するものと思われた。磨面は擦痕を伴うものもある。磨痕のある部分の断面形態には、凸面状・平坦面・凹状・凹凸面状の4種類が認められる。

敲磨痕——粗い磨面をもつもので、特殊磨石とか平坦磨石・ザラ面を持つ磨石と呼ばれてきたものである。

ワレ痕——強い打撃によって割れた結果生じた痕跡

ヒビ痕——打撃によって生じたヒビ割れ痕跡。凹痕・敲凹痕・敲打痕・敲磨痕から派生しているものが多い。

これら礫石器の大部分は、凹痕・敲凹痕・敲打痕・磨痕・敲磨痕が複合して存在している。これら複合関係を整理して分類したのが第16表である。使用痕跡と礫素材との関係に関しては分析まで至らなかった。

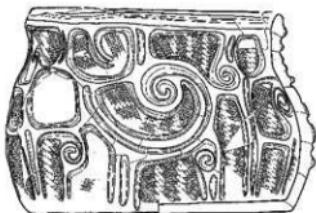
第15表 磚石器素材形態分類

平面形		断面形						
		A 円形	B1 楕円形	B2 菱形楕円形	C 扁平形	D 四面体形	E 不定形	
		幅 厚 <1.2	1.2 ≤ 幅 厚 <2.0		2.0 ≤ 幅 厚	1.2 ≤ 幅 厚 <2.0		
円基 長 幅 <1.2	○	円 A	円 B1	円 B2	円 C	円 D	円 E	
楕円基 長 幅 $1.2 ≤$ <2.0	○	楕円 A	楕円 B1	楕円 B2	楕円 C	楕円 D	楕円 E	
長楕円基 長 幅 $2.0 ≤$ <3.0	○	長楕円 A	長楕円 B1	長楕円 B2	長楕円 C	長楕円 D	長楕円 E	
不定形 円形・楕円形・長楕円形 以外の不定の平面形態 のもの	○	不定形 A	不定形 B1	不定形 B2	不定形 C	不定形 D	不定形 E	

第16表 磚石器分類

		凹痕 (A痕)	敲凹痕 (B痕)	敲打痕 (C痕)	敲磨痕 (D痕)	磨痕 (E痕)
A類凹石	A I類 (A)	○				
	A II類 (AB)	○	○			
	A III類 (AF)	○				○
	A IV類 (ABF)	○	○			○
B類敲凹石	B I類 (D)		○			
	B II類 (BF)		○			○
C類敲石	C類 (C)			○		
D類敲磨石	D I類 (D)				○	
	D II類 (AD)	○			○	
	D III類 (BD)		○		○	
	D IV類 (ABD)	○	○		○	
	D V類 (ABDF)	○	○		○	○
	D VI類 (ADF)	○			○	○
	D VII類 (BDF)		○		○	○
	D VIII類 (DF)				○	○
F類磨石	F類 (F)					○
E類石皿	E類 (ABF)	○	○			○

第V章 古代以降の遺構と遺物



第V章 古代以降の遺構と遺物

第1節 古代の遺構と遺物

1 穫穴遺構 (SI)

3基の竪穴遺構を検出している。いずれも住居跡としての積極的な根拠がみいだせないので竪穴遺構とした。

SI 1：長軸4.1m×短軸3.4mの方形の平面形である。SD 4・5と重複しているが、これらより古い。SI 2と重複するが新旧関係は不明である。底面で10個のピットを検出しているが、いずれも浅く配置も不規則で柱穴となるものはない。北西隅から方形の土壤を検出した。

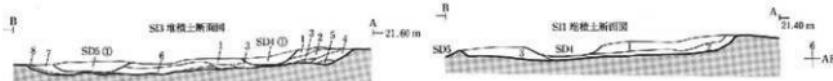
SI 2：長軸4.1m以上×短軸3.2mの方形の平面形である。SD 4・5と重複しているが、これらより古い。SI 2と重複するが新旧関係は不明である。底面で6個のピットを検出しているが、いずれも浅く柱穴となるものはない。

SI 3：長軸3.5m以上×短軸3.1mの方形の平面形である。SD 4・5と重複しているが、これらより古い。底面で8個のピットを検出しているが、いずれも浅く配置も不規則で柱穴となるものはない。

これら3基の竪穴遺構からの出土遺物は、いずれも細片のみであるが、土師器の特徴から平安時代のものと考えられる。

2 溝跡 (SD)

5基検出している。SD 6・7・8はいずれも幅30~50cmで浅い小規模のものである。SD 4・5は幅が1.0~1.5m程あり規模も大きい。SD 4とSD 5はほぼ並行しているが、調査区東端で大きくカーブするように観察される。これら3基の竪穴遺構からの出土遺物は、いずれも細片のみであるが、土師器の特徴から平安時代のものと考えられる。



SI1 遺構層注記

層No.	土色	土性	備考
1	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
2	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
3	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土

SI1 第1土壤層注記

層No.	土色	土性	備考
1	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
2	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土

SI3 遺構層注記

層No.	土色	土性	備考
①	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
2	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
3	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
4	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
5	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
6	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
7	褐色土 壁(IVR21)	シルト	しまり良・粘性带つ
8	褐色土壁(IVR21)	シルト	しまり良・粘性带つ

SD5 遺構層注記

層No.	土色	土性	備考
①	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土

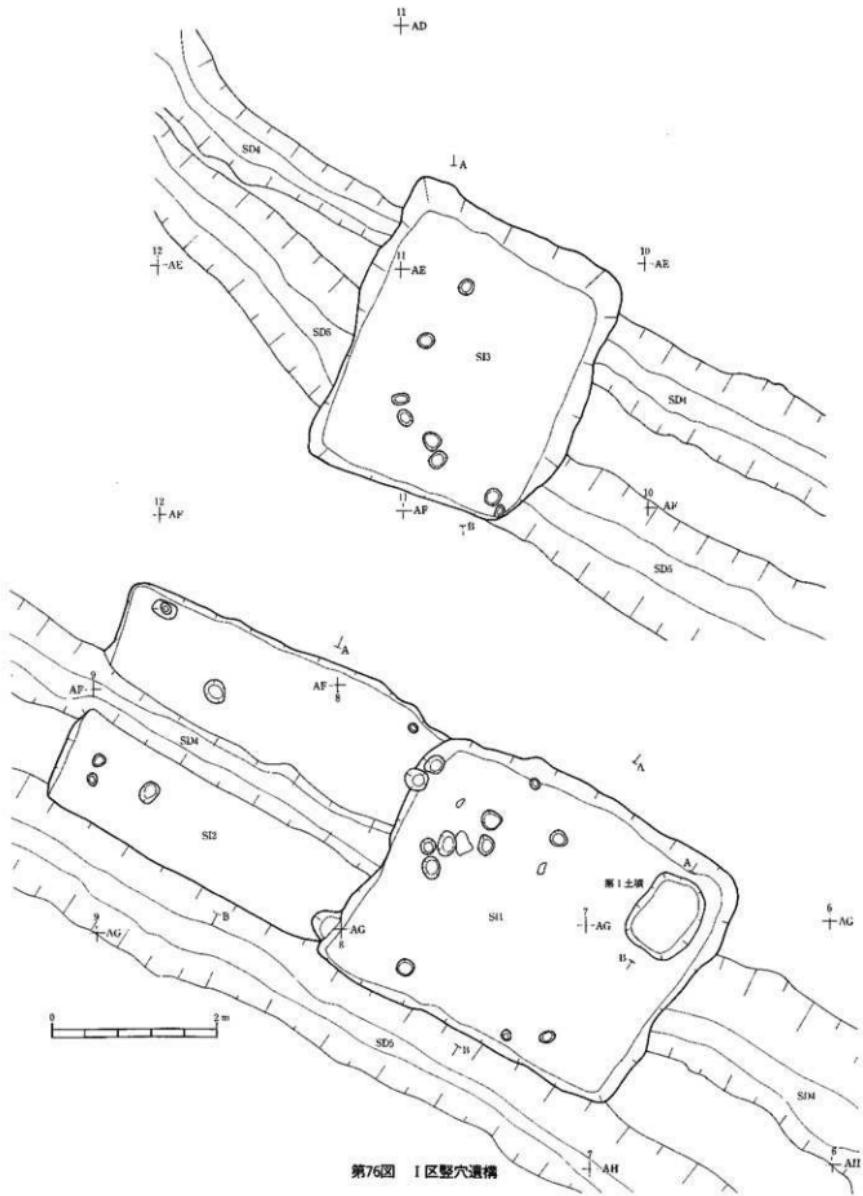
SD4 遺構層注記

層No.	土色	土性	備考
①	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土

SI2 遺構層注記

層No.	土色	土性	備考
1	褐色土壁(IVR21)	シルト	人手で土壁を立てるのに手間取る程度の粘性土
2	褐色土壁(IVR21)	シルト	しまり良・粘性带つ(硬さ?)

+



第76図 I区堅穴遺構

第2節 近世の遺構と遺物

1 墓壙 (SM)

II区南半から計34基の墓壙を検出している。個々の墓壙の特徴と出土遺物については、第17表にまとめた。ここでは墓壙群全体の特徴と遺物についてをまとめるところにする。

【検出状況】

II区北半の表土剥離中に、表土中から多数の河原石を検出した。これら河原石の分布は調査前の墓地のあった場所の分布と略一致しており、墓に伴う石組と判断した。これら河原石を露出させ詳細に観察したところ、31組の小さい石組の集合体であることが判明した。この段階では石組を伴う墓壙の輪郭は判明しなかった。石組をはずして2層上面まで下げたところで墓壙上端の輪郭を検出することが出来た。

【墓壙の配置状況】

墓壙の全体の配列は幅9m、長さ13m以上の長方形と想定される。

【平面形】

方形と円形の2種類がある。方形が20基、円形が14基である。墓壙平面形態と棺の形状には密接な関係があるためこれらの関係を下にまとめた。

□棺底が残存もしくは堆積土中で判明しているもの

	棺 桶 計16基	棺 箱 計18基
円 形 計14基	SM6・SM7・SM10・SM13・SM14・SM19・SM22・ SM26・SM32・SM33・SM35・SM36・SM38・SM41	
方 形 計20基	SM18・SM21	SM2・SM3・SM4・SM5・SM12・SM15・SM16・ SM17・SM20・SM24・SM25・SM27・SM34・ SM37・SM39・SM40・SM42・SM43

棺の形状が判明している14基中、墓壙平面形態が円形のもの8基はすべて棺桶であるが、方形のもの6基のうち4基は棺箱で、2基は棺桶である。墓壙の平面形は埋設する棺の形状と密接な関係にあり、棺箱を埋納する場合はすべて方形の墓壙を掘る、しかし棺桶の場合は円形の墓壙を掘るのが一般的であるが方形の場合もある。

【規模】

34基のなかで最大のものは、SM21(墓壙底面126×104cm)で面積が約1.3m²程あり、最小はSM20(墓壙底面50×58cm)で面積が約0.3m²である。全体の形状が判明する31基の平均面積は0.6cm²である。

【棺の形状と規模】

棺が残存していたり、墓壙内堆積土の痕跡から棺の形状が判明したものは、34基の内14基である。棺には棺箱と棺桶の2種類がある。内訳は棺箱が4基、棺桶が10基である。

【出土遺物と出土状況】

墓壙内の堆積土中からは縄文土器や石器等の縄文時代の遺物も数多く出土している。墓壙を掘る際に下部にある縄文時代の包含層を振り抜いて構築しており、掘った土をそのまま埋め戻したためと考えられる。縄文時代の遺物については第IV章で取扱こととし、ここでは、本墓壙群に伴う近世の遺物のみを取り上げることとする。

墓壙群から出土した遺物には、銭貨・煙管・鉄釘・和鏡・鉄・円形鉄製品・不明鉄製品・漆器・桶・数珠玉・陶磁器がある。

個々の墓壙から出土した遺物をみてみると、副葬品としての組み合わせも様々である。棺材を止めるために使用されたと考えられる鉄釘を除いた副葬品の組み合わせを下にまとめた。

全く副葬品を作わない墓壙が7基(21%)で、何らかの副葬品を伴うものが27基(79%)である。この27基中もっとも多いのが錢貨を副葬するもので24基(89%)ある。次が煙管を副葬するもので8基(30%)で漆器4基(15%

副葬品の組み合わせ一覧表

遺物無し	SM 5・SM10 SM16・SM18 SM21・SM35 SM38	錢貨+陶磁器 錢貨+漆器 錢貨+不明鉄製品 錢貨+煙管 錢貨+煙管+不明鉄製品 錢貨+煙管+漆器 錢貨+煙管+和鏡+櫛 錢貨+煙管+和鏡+鉄 錢貨+煙管+櫛+陶磁器	SM43 SM 4・SM20 SM27 SM19・SM40 SM ? 3 SM 6 SM37 SM 7 SM17 SM24
煙管のみ	SM10・SM39		
陶磁器のみ	SM33		
錢貨のみ	SM 2・SM12 SM12・SM13 SM14・SM15 SM22・SM32 SM34・SM36 SM41・SM42		

%)、陶磁器3基(11%)、櫛2基(7%)、和鏡2基(7%)、鉄1基(4%)、円形鉄製品1基(4%)、不明鉄製品1基(4%)、数珠玉と続く。錢貨はもっとも一般的な副葬品であった。

次に個々の遺物の出土状況と特徴を見していくことにする。

(錢貨)

錢貨が123点以上出土している。寛永通寶以外にはSM15から出土した1点のみである。錢貨の出土状態・枚数を下にまとめた。

錢貨の出土枚数と出土状態

	7枚	6枚	5枚	4枚	3枚	0枚
棺底板上もしくは底面付近	SM15 SM19	SM 2・SM 6 SM12・SM13 SM14・SM20 SM24・SM27 SM32・SM34 SM36・SM41 SM42	SM 7 SM22 SM40	SM37 SM43	SM 3・SM 4 SM 5・SM10 SM16・SM18 SM21・SM33 SM35・SM38 SM39	
堆積土中		SM20		SM19		

SM25・26は出土しているが枚数不明

34基中、銭貨が出土しているものが22基（65%）、出土していないものが12基（35%）である。

大部分のものは棺底板上もしくは底面付近（棺底板が残存していないもの）から出土しているが、SM19とSM20は堆積土中から出土している。

（釘）

釘は合計126点出土している。釘の出土と棺の形態は密接な関係にあるため釘の出土点数と棺の形態を下にまとめた。

釘の出土点数と棺の形態

	棺 箱	棺 桶
棺底板上もしくは 底面付近	SM2（1本）・SM37（14本）・SM39（2本）・SM40（19本）	
堆積土中	SM3（11本）・SM4（10本）・SM15（6本）・SM17（4本） SM20（5本）・SM27（18本）・SM40（19本）・SM42（15本）	SM18（1本） SM33（1本）

（煙管）

煙管は計8基の墓壙から計9点出土している。1本出土したものが7基、2本のものが1基である。いずれも棺底板上もしくは底面付近出土で、堆積土中出土のものはないので全て棺内に埋葬したものと考えられる。全体の形状をすべてとどめているものはない。

（和鏡）

SM7とSM17からそれぞれ1面づつ計2面出土している。

第87図9は、SM7の棺桶底板上から銭貨5枚・煙管1本・櫛1個とともに出土したものである。鏡面を下にし、鏡背の上に櫛歯をびっしりとさせた状態で出土した。外周の形が正円形の円鏡で直径が12cm、鏡胎は厚手で重量は483gある。縁の断面は鏡面とほぼ直角で、縁が高い直角式高縁である。界隈を二重にまわす二重縁である。

鏡背の中心には紐緒を通す鉤がある。亀をかたどったやや高内の亀形鉤で、背甲には亀甲紋を描いている。この亀形鉤を中心に亀鉤と双鶴の三者が接嘴している。

（鉄）

SM17から1点出土している。第87図8の和鏡と接着して出土している。石組直下、堆積土上面付近で出土しているので棺を埋葬後、堆積土上面付近に埋葬したものと考えられる。

全長11.6cmの和鉄である。握手部は全幅で2.5cmで、梢円形である。刃部は全幅で2.8cm、刃長3.5cmある。

（円形鉄製品）

SM37の底面付近から1点出土している。

（不明鉄製品）

SM3の底面付近から1点と、SM27の堆積土中から4点の計5点出土している。

（漆器）

SM4・6・20・37の4基から5点出土している。いずれも棺底板上もしくは底面付近出土のものである。保存状態が悪く、原形をとどめているものではなく図示できなかった。

（櫛）

SM7・24からそれぞれ1点づつ計2点出土している。いずれも保存状態が悪いため図示できなかった。

【墓壙の年代】

墓壙を検出した地点には、調査以前に墓石があり墓碑名の記録がされている。これら墓石は他の地点から運び込まれたり、調査以前に他に移動したものはない。墓碑名を年代順に整理して下にまとめた。これらのなかでもっとも古いものは、寛永3年(1626)のものが1基で、延寶2年以降のものが大半である。もっとも新しいものは安永4年(1775)である。出土遺物の年代とも矛盾はなく、この墓碑群の年代は17世紀後半から18世紀後半のものと考えられる。

墓碑名からみた被葬者

1620	
1630	
1640	
1650	
1660	
1670	1674年 (延寶2年) 〇 (7才) 1675年 (延寶3年) 〇 (7才) 1677年 (延寶4年) 〇 (7才) 1678年 (延寶5年) 〇 (7才) 1679年 (延寶6年) 〇 (7才) 1681年～ (天和〇年) 〇 (7才) 1683年
1680	1685年 1687年 1688年 1689年 1690
1690	1694年 (元禄7年) 〇 (7才) 1699年 (元禄12年) 〇 (7才) • 〇 (7才)
1700	1700年 (元禄13年) 〇 (7才)
1710	1711年 (正徳1年) 川島 作七 母 〇 (73才) 1713年 (正徳3年) 〇 (7才) 1714年 (正徳4年) 〇 (7才) 1715年 (正徳5年) 〇 (80才) 1716年 (享保4年) 川島 作七 父 久兵衛 (83才)
1720	1721年 (享保6年) 川島 八十兵 父 〇 (7才) 1725年 (享保10年) 〇 (59才)
1730	1730年 (享保15年) 川島 平右門 妻 〇 (7才) • 〇 (80才) 1736年～ (元文〇年) 〇 (7才) • 川島 千〇〇 〇 (73才)
1740	
1750	1746年 (延享3年) 〇 (7才) 1751年 (寛政4年) 〇 (61才) 1753年 (寛政3年) 〇 (72才)
1760	
1770	1764年～ (明和1年) 〇 (7才) 1771年
1780	1771年 (明和8年) 〇 (83才) 1774年 (安永3年) 川島 千右〇 父 平右〇〇 妻 (74才) 1775年 (安永4年) 川島 千右衛門 母 〇 (62才)

第17表 墓塚集式

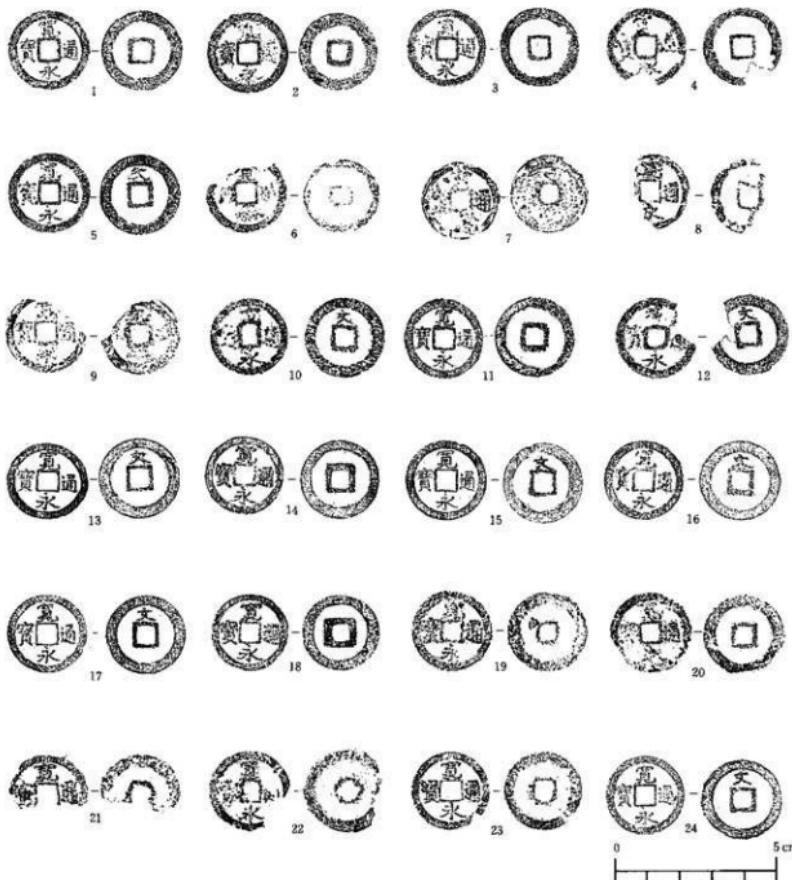
SM番号	平面形	規範(上側)	規範(下面)	深さ	直角關係	柱の形状と規模(底版)	出土遺物と出土状況
SM 1	久番	100×118 cm	80×80 cm	104 cm	直角無し	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鉄製天板(底面付底土) 内2枚底板 磁瓦1本(底面付底土)
SM 2	方形	118×118 cm	76×74 cm	65 cm	SM18より新 新旧不明	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鉄製天板(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土)
SM 3	方形	118×118 cm	76×74 cm	65 cm	SM18より新 新旧不明	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鉄製天板(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土)
SM 4	方形	148×150 cm	64×82 cm	96 cm	SM8より新 新旧不明	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鉄製天板(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土)
SM 5	方形	116×96 cm	90×78 cm	93 cm	SM6より新 SM2より新	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鉄製天板(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土)
SM 6	円形	116×118 cm	100 cm	SM 5より日 SM10より新	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鉄製天板(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土)
SM 7	円形	128×128 cm	90×86 cm	94 cm	SM 4より新 新旧不明	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鉄製天板(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土)
SM 8	久番						
SM10	円形	156×142 cm	110×116 cm	104 cm	SM16より日	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鐵管1本(底面付底土)
SM12	方形	125×144 cm	84×76 cm	100 cm	SM15より新	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鐵管1本(底面付底土) 内5枚底板 キミタガ付板
SM13	円形	120×128 cm	92×82 cm	102 cm	SM13より新 新舊無し	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鐵管1本(底面付底土)
SM14	円形	116×114 cm	80×70 cm	85 cm	SM13より新 新舊無し	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鐵管1本(底面付底土)
SM15	方形	116×122 cm	72×92 cm	102 cm	SM13より新 SM17より日	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鐵管1本(底面付底土) 磁瓦6本以上(底面付底土)
SM16	方形	134×126 cm	88×62 cm	64 cm	直角無し	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鐵管1本(底面付底土)
SM17	方形	132×122 cm	82×80 cm	94 cm	SM15より新 SM13より新 新舊不明	柱?: (底版) 鋼板?: (底版)	鐵管1本(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土) 磁瓦4本以上(底面付底土) ハサミ1本(底面付底土)
SM18	方形	126×136 cm	78×88 cm	129 cm	SM13・17より新 新舊不明	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土) 7枚分からて出る1・手筋 1枚(底面付底土)
SM19	円形	116×128 cm	82×96 cm	103 cm	SM17より日	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 磁瓦1枚(底面付底土)
SM20	方形	66×74 cm	50×58 cm	107 cm	SM21より新 SM26より新	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 磁瓦1枚(底面付底土)
SM21	方形	174×146 cm	126×104 cm	93 cm	SM21より新 SM26より新	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 磁瓦1枚(底面付底土)
SM22	円形	142×140 cm	92×88 cm	95 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 2つ分からて出る1
SM23	久番						
SM24	方形	108×122 cm	80×70 cm	109 cm	SM27より日	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管6本(底面付底土) 磁瓦1本(底面付底土) 磁瓦1枚(底面付底土)
SM25	方形	86×94 cm	68×64 cm	35 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管3本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM26	円形	128×114 cm	84×84 cm	102 cm	SM21より新	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管3本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM27	方形	142×106 cm	88×64 cm	76 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管3本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM28	久番						
SM29	久番						
SM30	久番						
SM31	久番						
SM32	円形	146×144 cm	76×80 cm	96 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土)
SM33	円形	116×124 cm	76×70 cm	87 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM34	方形	112×13 cm	83×56 cm	89 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM35	円形	138×134 cm	70×68 cm	98 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM36	円形	118×112 cm	72×74 cm	72 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM37	方形	108×104 cm	62×64 cm	104 cm	SM41より新	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM38	円形	98×76 cm	74×66 cm	34 cm	直角無し	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 3つ分からて出る1
SM39	方形	138×118 cm	70×70 cm	96 cm	SM14より新 新旧不明	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 木、鐵管付底土 木、鐵管付底土 木
SM40	方形	96×86 cm	70×64 cm	80 cm	SM 3より新	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 木、鐵管付底土 木、鐵管付底土 木
SM41	円形	(106)×94 cm	(88)×64 cm	84 cm	SM38より新	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 2枚2つ2種類(1枚)・磁瓦1本(底土)
SM42	方形	(36)×(44) cm	(52)×(26) cm	80 cm	SM 3より新	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 2枚2つ2種類(1枚)・磁瓦1本(底土)
SM43	方形	94×98 cm	30×40 cm	47 cm	SM37より日	柱?: (底板) 鋼板?: (底板)	鐵管1本(底面付底土) 2枚2つ2種類(1枚)・磁瓦1本(底土)



第77図 墓壙群平面図

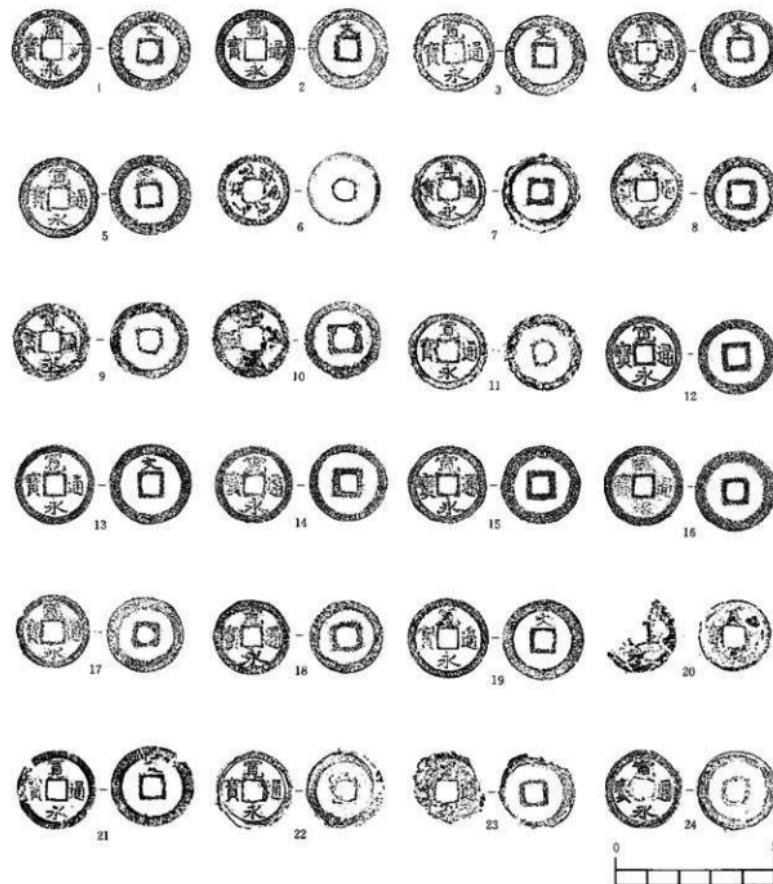


第78図 墓群断面図



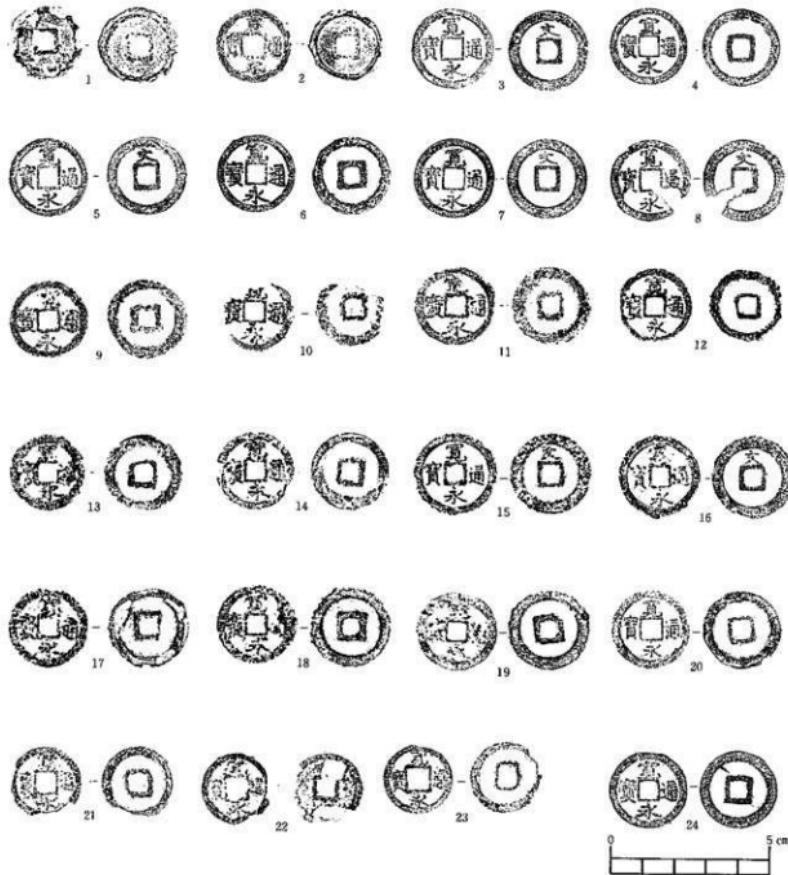
番号	造銭局	年 代	錢 名	外徑	穿孔	厚さ	重さ	参考	番号	造銭局	年 代	錢 名	外徑	穿孔	厚さ	重さ	参考
1	SM3	嘉慶	寶永通寶	25.1	5.4	1.5	3.5		13	SM12	乾隆	寶永通寶	25.2	6.2	1.1	3.4	
2	SM3	嘉慶	寶永通寶	25.2	6.0	—	—		14	SM12	乾隆	寶永通寶	24.8	5.8	1.1	2.6	
3	SM3	嘉慶	寶永通寶	25.0	5.5	1.6	2.6		15	SM13	嘉慶	寶永通寶	25.1	6.0	1.0	3.6	
4	SM3	嘉慶	寶永通寶	24.9	6.2	1.9	2.5		16	SM12	乾隆	寶永通寶	25.0	5.7	1.2	4.6	
5	SM3	嘉慶	寶永通寶	25.2	6.0	1.4	4.0		17	SM13	乾隆	寶永通寶	24.6	6.2	1.3	3.2	
6	SM3	嘉慶	寶永通寶	25.1	6.2	2.0	—		18	SM13	乾隆	寶永通寶	24.6	5.7	1.2	2.8	
7	SM3	嘉慶	寶永通寶	24.2	5.8	2.1	3.5		19	SM14	乾隆	寶永通寶	25.2	5.5	1.8	3.7	
8	SM3	嘉慶	寶永通寶	—	6.4	1.1	(1.6)		20	SM14	乾隆	寶永通寶	25.3	5.7	1.8	3.7	
9	SM3	嘉慶	寶永通寶	25.0	6.1	1.2	(2.6)		21	SM14	乾隆	寶永通寶	24.3	—	—	1.5 (1.7)	
10	SM7	嘉慶	寶永通寶	25.1	5.5	—	—		22	SM14	乾隆	寶永通寶	25.8	9.6	1.9	(2.0)	
11	SM12	嘉慶	寶永通寶	25.4	5.0	—	—		23	SM14	乾隆	寶永通寶	25.3	7.5	1.6	1.5	
12	SM12	嘉慶	寶永通寶	25.4	5.2	1.8	(3.3)		24	SM14	乾隆	寶永通寶	25.0	6.1	1.2	3.4	

第79図 墓域群出土遺物(I)



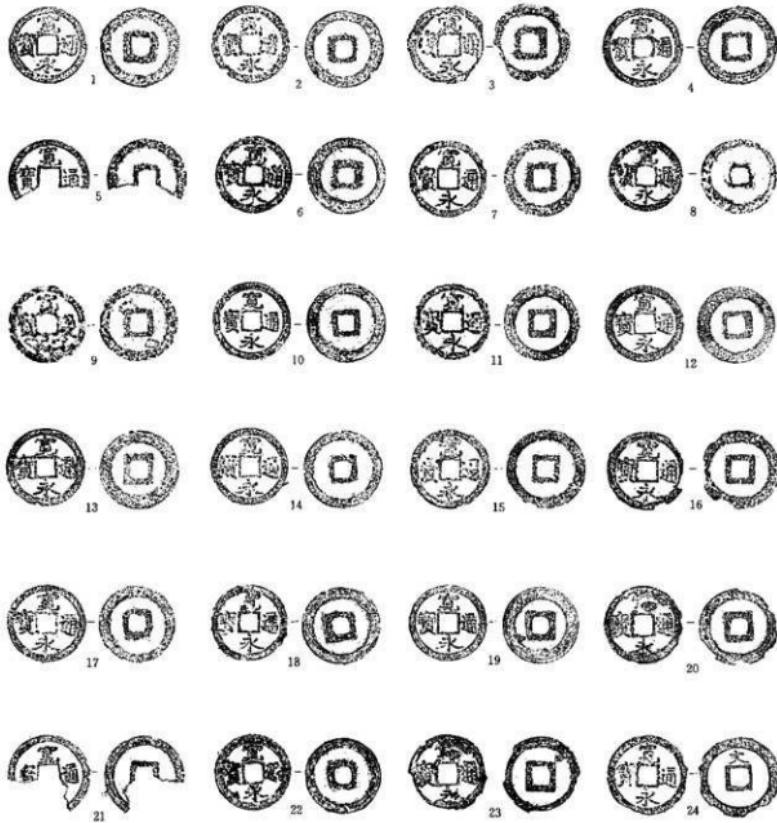
番号	銘柄名	發行	錢名	外徑	穿徑	厚さ	重量	備考	番号							
1	SM14	嘉慶	寶泉通永	25.1	6.2	1.1	3.6		13	SM19	道光	寶泉通永	25.3	6.0	1.5	3.9
2	SM15	道光	寶泉通永	25.2	6.2	1.2	3.5		14	SM20	道光	寶泉通永	24.7	5.7	1.3	3.4
3	SM16	道光	寶泉通永	25.3	6.1	1.0	3.7		15	SM17	道光	寶泉通永	25.0	6.1	1.0	4.0
4	SM18	道光	寶泉通永	25.0	6.2	1.5	4.5		16	SM19	道光	寶泉通永	25.3	5.4	1.7	4.5
5	SM19	道光	寶泉通永	25.0	6.1	1.5	3.9		17	SM20	道光	寶泉通永	25.0	5.2	1.6	4.0
6	SM20	道光	寶泉通永	25.1	6.1	1.4	3.8		18	SM19	道光	寶泉通永	25.0	6.2	1.3	3.1
7	SM17	道光	寶泉通永	25.5	5.2	1.3	3.2		19	SM19	道光	寶泉通永	25.2	6.1	1.1	2.4
8	SM18	道光	寶泉通永	25.0	6.2	1.2	2.3		20	SM19	道光	寶泉通永	25.0	5.4	—	—
9	SM17	道光	寶泉通永	24.5	6.5	1.4	2.4		21	SM19	道光	寶泉通永	25.6	6.8	1.3	1.9
10	SM17	道光	寶泉通永	24.8	6.9	1.5	3.5		22	SM20	1 塵	寶泉通永	23.8	6.5	1.6	3.0
11	SM19	道光	寶泉通永	25.5	5.8	—	—		23	SM20	1 塘	寶泉通永	23.2	6.0	1.1	1.7
12	SM19	道光	寶泉通永	24.0	6.0	1.5	3.2		24	SM20	1 塘	寶泉通永	24.7	6.1	1.6	4.0

第80図 墓壙群出土遺物(2)



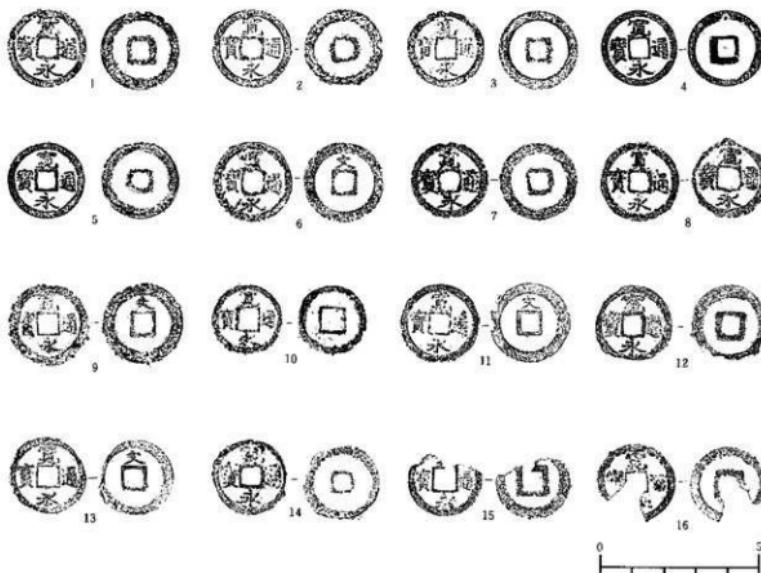
番号	通鑑名	規 格	材 名	外徑	穿孔	厚さ	重量	備 考	番 号	番号	通鑑名	規 格	材 名	外徑	穿孔	厚さ	重量	備 考	
1	SM28	1年	寛永通宝	24.5	6.7	—	—		13	AE21C	寛永通宝	24.1	5.9	1.9	3.9				
2	SM28	1年	寛永通宝	25.0	6.9	1.7	2.6		14	AE21C	寛永通宝	24.4	5.5	1.9	4.6				
3	SM29	無年	寛永通宝	25.0	6.4	1.9	2.7		15	SM22	唐銅	寛永通宝	25.0	6.2	1.9	3.4			
4	SM29	無年	寛永通宝	24.1	6.2	1.1	3.0		16	SM22	唐銅	寛永通宝	25.6	6.6	1.8	2.6			
5	SM29	無年	寛永通宝	25.0	6.2	1.0	3.6		17	SM22	唐銅	寛永通宝	25.1	6.7	1.8	3.0			
6	SM29	無年	寛永通宝	24.0	6.0	1.5	3.4		18	SM22	唐銅	寛永通宝	24.9	5.2	1.7	3.2			
7	SM29	無年	寛永通宝	25.0	7.0	1.1	2.8		19	SM22	唐銅	寛永通宝	25.5	6.0	1.7	4.1			
8	SM29	無年	寛永通宝	25.0	7.0	1.5	(2.2)		20	SM24	唐銅	寛永通宝	24.2	6.1	1.6	4.3			
9	AE21C	寛永通宝	25.0	5.9	1.5	4.2		21	SM24	唐銅	寛永通宝	22.8	6.6	1.2	2.3				
10	AE21C	寛永通宝	—	6.1	1.2	(2.0)		22	SM24	唐銅	寛永通宝	22.2	6.9	—	—				
11	AE21C	寛永通宝	25.1	5.6	1.4	3.9		23	SM24	唐銅	寛永通宝	21.9	6.8	1.3	2.0				
12	AE21C	寛永通宝	22.5	5.4	1.2	2.8		24	SM24	唐銅	寛永通宝	23.2	6.1	1.6	1.9				

第81図 墓塚群出土遺物(3)



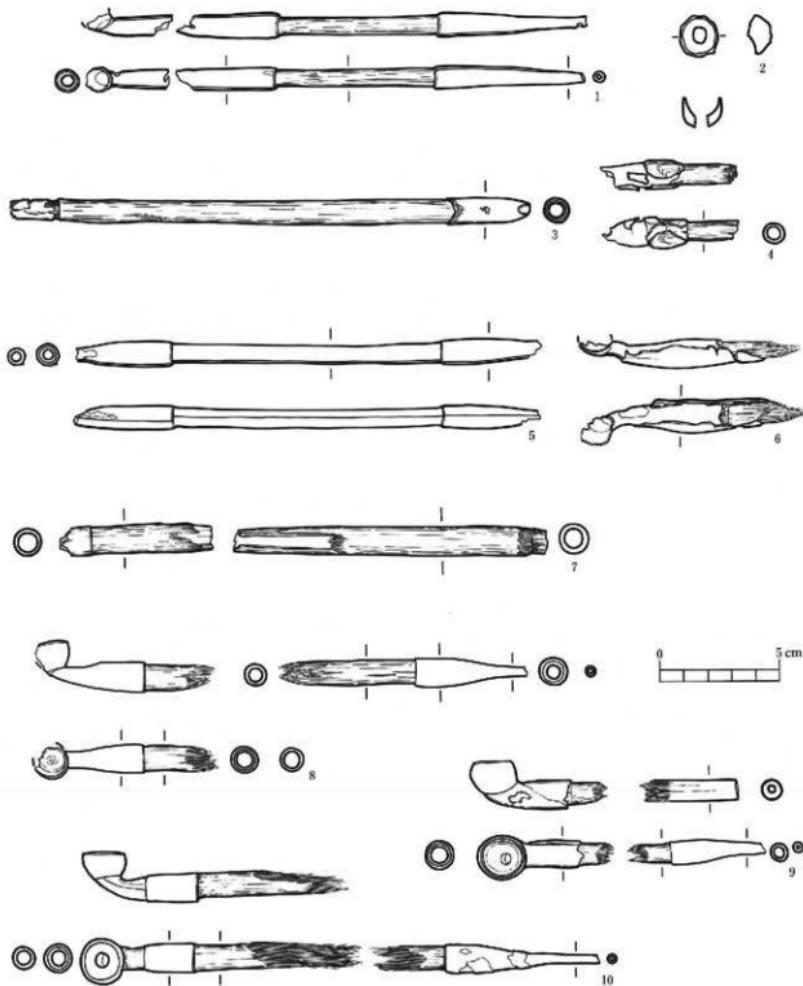
番号	通稱名	層位	直	名	外徑	穿徑	厚さ	重量	圖	考
1	SM12	通鑄	寶永通寶	24.2	6.2	1.1	3.9			
2	SM17	通鑄	寶永通寶	24.7	5.6	1.2	2.7			
3	SM17	通鑄	寶永通寶	25.2	6.9	1.4	2.8			
4	SM17	通鑄	寶永通寶	24.9	6.0	1.4	4.1			
5	SM17	通鑄	寶永通寶	24.8	6.0	1.4	(1.6)			
6	SM12	通鑄	寶永通寶	24.1	5.1	1.3	3.3			
7	SM12	通鑄	寶永通寶	24.1	6.0	1.3	3.3			
8	SM12	通鑄	寶永通寶	23.2	5.6	1.4	3.0			
9	SM12	通鑄	寶永通寶	24.8	6.0	1.3	2.6			
10	SM12	通鑄	寶永通寶	25.0	6.0	1.3	4.1			
11	SM14	通鑄	寶永通寶	24.0	5.6	1.3	3.3			
12	SM14	通鑄	寶永通寶	24.2	6.0	1.2	3.0			
13	SM14	通鑄	寶永通寶	24.9	6.6	1.3	4.3			
14	SM14	通鑄	寶永通寶	24.5	5.7	1.3	4.3			
15	SM14	通鑄	寶永通寶	25.1	5.9	1.4	2.9			
16	SM14	通鑄	寶永通寶	24.9	6.6	1.3	3.4			
17	SM11	通鑄	寶永通寶	24.5	5.3	1.3	3.5			
18	SM15	地下層	寶永通寶	24.3	5.6	1.3	3.6			
19	SM15	地下層	寶永通寶	24.1	6.3	1.3	2.5			
20	SM15	地下層	寶永通寶	24.2	6.0	1.6	3.6			
21	SM15	地下層	寶永通寶	25.2	6.7	1.5	(1.5)			
22	SM15	地下層	寶永通寶	24.0	5.7	1.3	3.8			
23	SM16	地下層	寶永通寶	23.8	6.1	1.7	3.7			
24	SM16	地層	寶永通寶	25.2	6.8	1.4	3.0			

第82図 墓墳群出土遺物(4)



番号	遺物名	層	位	標	外径	内径	厚さ	重量	備考
1	SM40 銭幣 貞永通宝	24.0	5.9	1.8	3.7				
2	SM40 銭幣 貞永通宝	24.4	5.8	1.3	3.3				
3	SM40 銭幣 貞永通宝	24.6	6.0	1.5	3.3				
4	SM41 銭幣 貞永通宝	24.0	6.6	1.3	1.9				
5	SM41 銭幣 貞永通宝	24.0	5.8	1.2	2.9				
6	SM41 銭幣 貞永通宝	25.2	6.2	1.4	3.5				
7	SM41 銭幣 貞永通宝	24.1	5.6	1.3	2.6				
8	SM41 銭幣 貞永通宝	25.1	6.0	-	-				
9	SM42 銭圓	25.8	7.0	1.4	3.0				
10	SM42 銭圓	24.6	7.1	1.1	1.6				
11	SM44 銭圓	25.0	6.0	1.5	2.8				
12	SM44 銭圓	24.1	6.6	1.2	2.6				
13	SM44 銭圓	24.0	6.5	1.4	3.6				
14	SM44 銭圓	24.2	6.0	1.5	3.0				
15	SM44 銭圓	23.2	6.5	1.9	(1.6)				
16	SM44 銭圓	23.2	-	1.5	(1.4)				

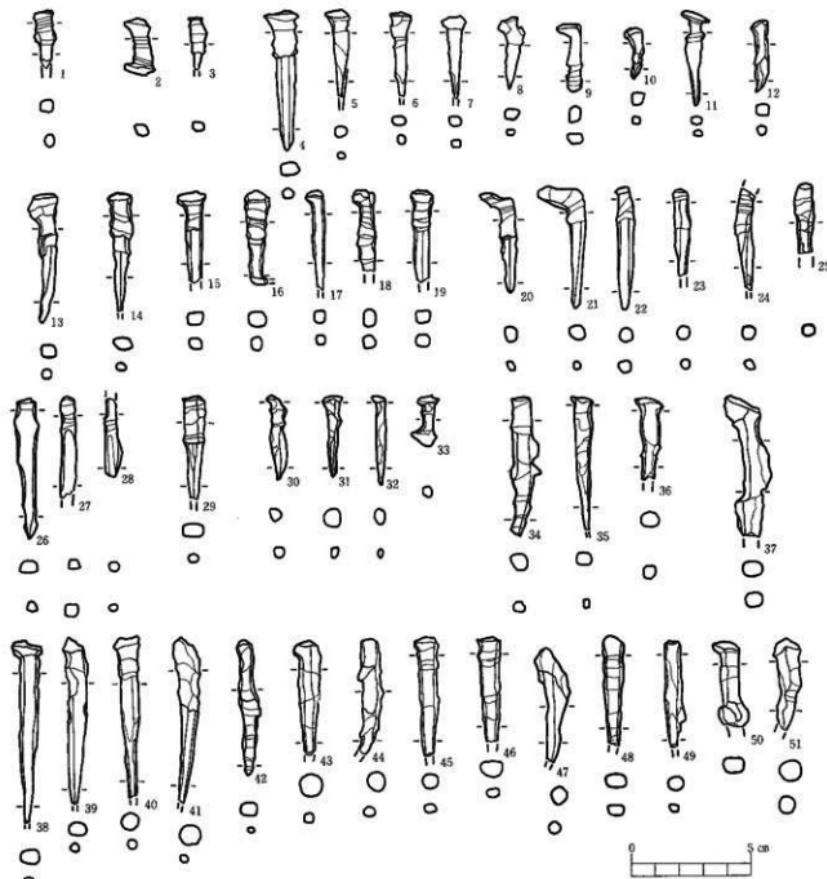
第83図 墓塚群出土遺物(5)



煙管觀察表

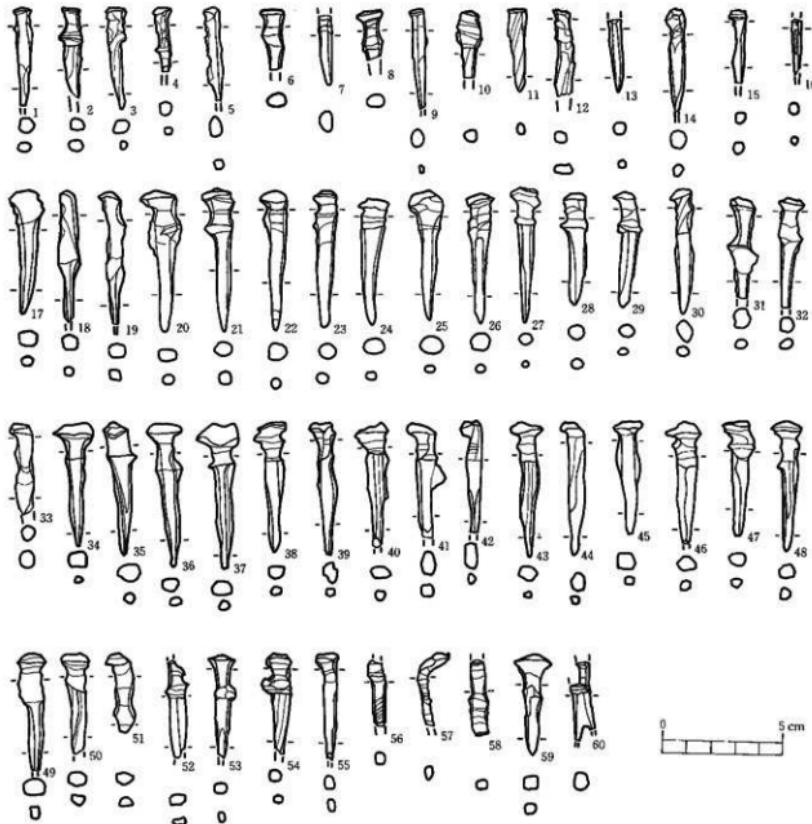
番号	通稱名	測位	長寸	火燭高	火燭圍	盤外	盤内	等身原版	番号	通稱名	測位	長寸	幅	火燭高	火燭围	盤外	盤内	等身原版
1	SM0	—	36.0	9.7	(0.7)	38.90	31.15		343-12									
2	SM3	1	—	—	(0.9)(0.98)	22.05												343-10
3	SM7	烟嘴	31.3	1.0	—	—	32.99											343-11
4	SM39	烟嘴	54.45	9.75	—	—	51.65		343-9									343-12
5	SM40	烟嘴	19.14	9.75	—	—	21.00		343-10									343-13
6	SM41	烟嘴	—	—	—	—	—			SM41	烟嘴	19.25	1.2	—	—	—	(1.2)	343-11
7	SM17	烟嘴	—	—	—	—	—			SM17	烟嘴	2	—	1.0	0.91	30.00	1.45	343-12
8	SM19	烟嘴	—	—	—	—	—			SM19	烟嘴	2	—	1.0	0.91	30.00	1.45	343-14
9	SM37	烟嘴	—	—	—	—	—			SM37	烟嘴	2	—	0.9	1.70	45.45	45.55	343-9
10	SM44	烟嘴	—	—	—	—	—			SM44	烟嘴	21.25	1.0	1.1	1.75	34.45	34.45	343-15

第84図 墓塚群出土遺物(6)



序号	遗物名	量	位	高	宽	厚	成形	情	号
1	SM2	齿冠	24.2	4.5	5.1	1.29			
2	SM3	齿冠	23.9	6.1	3.9	1.6			
3	SM3	齿冠	23.0	6.0	4.0	0.6			
4	SM3	1	37.1	7.7	7.3	4.0			
5	SM3	2	35.4	5.1	2.9	1.3			
6	SM3	1	23.0	4.0	4.0	1.4			
7	SM3	1	33.3	4.1	5.2	1.3			
8	SM3	1	30.0	4.8	4.0	1.0			
9	SM3	1	37.5	7.7	4.0	1.3			
10	SM3	1	19.2	3.3	3.7	0.9			
11	SM3	1	41.2	2.8	2.8	1.1			
12	SM3	1	29.8	6.2	3.0	1.4			
13	SM4	1	32.8	7.0	3.5	2.6			
14	SM4	1	46.2	7.6	5.4	2.0			
15	SM4	1	36.3	6.0	6.2	2.1			
16	SM4	1	32.8	7.1	6.0	2.3			
17	SM4	1	40.0	4.2	3.0	1.2			
序号	遗物名	量	位	高	宽	厚	成形	情	号
18	SM15	1	33.6	6.5	6.1	2.5			
19	SM14	1	33.1	6.2	6.0	2.0			
20	SM15	1	41.2	6.9	6.6	2.6			
21	SM16	1	49.3	6.5	6.0	3.4			
22	SM15	1	50.5	7.1	6.8	2.4			
23	SM16	1	39.0	7.0	5.8	1.9			
24	SM15	1	33.0	6.8	5.5	1.5			
25	SM15	1	32.8	6.1	6.0	1.8			
26	SM17	1	52.2	7.6	7.0	2.9			
27	SM17	1	34.1	6.9	5.8	1.7			
28	SM17	1	33.2	6.8	5.1	1.2			
29	SM18	1	41.2	7.8	6.7	2.0			
30	SM20	1	34.8	9.8	5.5	1.3			
31	SM20	1	39.4	6.6	5.2	1.6			
32	SM20	1	36.5	6.2	4.1	1.1			
33	SM20	1	20.6	3.8	4.0	1.1			
34	SM27	1	57.1	7.8	5.0	1.4			
35	SM27	1	324.0	6.9	6.0	2.9			
36	SM27	1	332.9	7.0	6.5	2.7			
37	SM39	1	356.7	7.5	6.5	8.0			
38	SM27	1	374.2	7.7	6.0	2.9			
39	SM27	1	368.2	7.0	5.2	4.1			
40	SM27	1	365.7	7.0	7.0	3.0			
41	SM27	1	(67.8)	8.2	7.4	4.8			
42	SM27	1	54.0	6.6	5.1	2.7			
43	SM27	1	(66.7)	9.6	9.0	4.5			
44	KM27	1	(47.2)	7.1	7.0	3.7			
45	SM27	1	(48.6)	6.0	5.7	3.5			
46	SM27	3	(45.0)	8.2	6.2	2.7			
47	SM27	3	(46.1)	3.0	6.5	4.0			
48	SM27	3	(45.9)	8.2	9.1	2.5			
49	SM27	3	(47.4)	6.0	5.3	3.0			
50	SM27	3	(36.0)	4.0	5.8	3.0			
51	SM27	3	(46.9)	8.0	8.2	4.1			

第85图 嘉塘群出土遗物(7)



訂観表

番号	遺物名	層位	高さ	幅	厚さ	重量	備考
1	SM47	陶器	32.0	6.6	1.1	1.4	
2	SM47	陶器	38.0	6.8	1.0	1.7	
3	SM47	陶器	41.1	7.8	4.9	1.9	
4	SM47	陶器	36.0	5.0	2.2	1.2	
5	SM47	陶器	38.0	5.8	3.0	1.4	
6	SM47	陶器	24.20	7.2	5.0	1.4	
7	SM47	陶器	30.0	6.5	8.1	1.4	
8	SM47	陶器	22.0	7.0	4.7	1.4	
9	SM47	陶器	40.0	4.9	6.8	1.7	
10	SM47	陶器	27.50	4.6	4.5	1.5	
11	SM47	陶器	33.5	3.3	4.2	1.4	
12	SM47	陶器	33.2	7.2	3.7	1.6	
13	SM47	陶器	30.0	4.8	4.0	0.9	
14	SM47	陶器	41.0	6.8	5.7	2.3	
15	SM47	陶器	39.0	4.1	4.6	2.0	
16	SM49	陶器	22.0	4.3	4.6	1.0	
17	SM49	1	51.0	7.0	6.2	3.4	
18	SM49	1	54.1	4.7	3.3	2.8	
19	SM49	1	50.4	7.0	5.2	2.4	
20	SM49	1	51.7	3.8	6.1	4.1	
21	SM40	1	58.2	7.0	5.8	3.9	
22	SM40	1	55.2	6.2	4.9	3.4	
23	SM49	1	55.1	6.0	5.2	2.9	
24	SM40	1	52.0	6.6	4.2	2.9	
25	SM40	1	57.0	5.0	2.2	3.5	
26	SM40	1	54.0	7.0	5.5	3.8	
27	SM40	1	54.0	5.1	5.2	2.3	
28	SM40	1	45.0	6.1	5.9	2.5	
29	SM40	1	46.0	6.0	5.8	2.0	
30	SM40	1	50.6	7.0	5.8	2.9	
31	SM40	1	46.43	6.6	2.2	2.9	
32	SM40	1	49.17	6.2	4.5	2.7	
33	SM40	1	56.7	7.2	7.0	3.6	
34	SM40	陶器	49.5	6.1	6.2	3.7	
35	SM40	陶器	54.9	7.0	8.1	3.7	
36	SM40	陶器	58.0	6.5	5.2	3.6	
37	SM40	陶器	52.2	6.1	5.1	2.7	
38	SM40	陶器	58.8	6.2	6.9	3.0	
39	SM40	陶器	55.0	6.6	4.7	2.6	
40	SM40	陶器	54.0	7.6	7.2	3.3	
41	SM40	1	45.5	5.8	9.0	4.4	
42	SM40	陶器	44.8	6.2	7.8	2.9	
43	SM40	陶器	54.0	5.9	4.8	2.8	
44	SM40	陶器	54.2	6.8	6.0	3.1	
45	SM40	陶器	45.9	7.3	6.2	2.6	
46	SM40	陶器	40.8	7.8	6.0	2.5	
47	SM40	陶器	46.8	7.0	5.2	2.3	
48	SM40	陶器	52.6	6.5	5.4	2.7	
49	SM40	陶器	47.8	6.6	6.5	3.4	
50	SM40	陶器	51.20	7.2	5.7	2.4	
51	SM40	陶器	29.8	6.3	4.3	1.5	
52	SM40	陶器	38.0	7.2	5.9	1.7	
53	SM42	1	41.8	6.1	6.2	2.4	
54	SM42	1	41.6	6.1	6.2	2.1	
55	SM42	1	42.20	6.7	4.5	1.7	
56	SM42	1	37.4	6.2	5.2	2.3	
57	SM42	1	30.5	7.0	3.0	1.5	
58	SM42	1	30.0	6.2	5.2	1.4	
59	SM42	1	40.2	6.5	5.2	2.4	
60	SM42	1	32.0	7.0	5.0	1.3	

第86図 墓塞群出土遺物(8)



器号	造形名	柄 長	口 径	底 径	高 度	備 考	可測部位	器物名稱	物 產 地	原 口 径	備 考	原 直 徑	
1	SM27	1	(5.39)	1.2	0.76	(19.35)				—	2.8	1.4	11.3
2	SM27	1	(2.58)	(1.49)	(1.22)	(1.96)				(3.17)	0.56	0.55	(4.6)
3	SM27	1	(1.25)	(1.28)	(0.85)	(1.11)				—	7.3	0.15	44.6
4	SM27	1	—	—	(4.30)								242-1
5	SM27	1	—	—	(2.85)								242-2
6	SM27	—	—	—	—								242-18
7	SM40	1	—	—	—								
8	SM27	1	—	—	—								
9	SM27	—	—	—	—								
10	SM24	—	—	—	—								

第87図 墓場群出土遺物(9)

2 井戸 (SE)

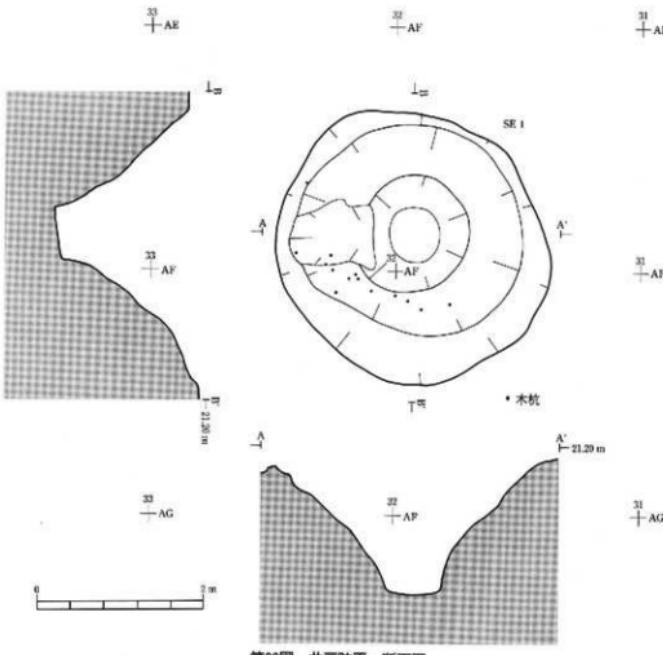
III区AF32区で1基検出している。素掘井戸で平面形は略円形で、上端直径3.4m、底径0.7m、深さ1.6mの規模であり、断面形状は円錐形状を呈している。側壁に木杭14本検出しているが、用途等は不明である。出土遺物には、若干ではあるが、陶・磁器が出土しており、井戸(SE 1)の年代は近世と考えられる。

3 掘立柱建物跡 (SB)

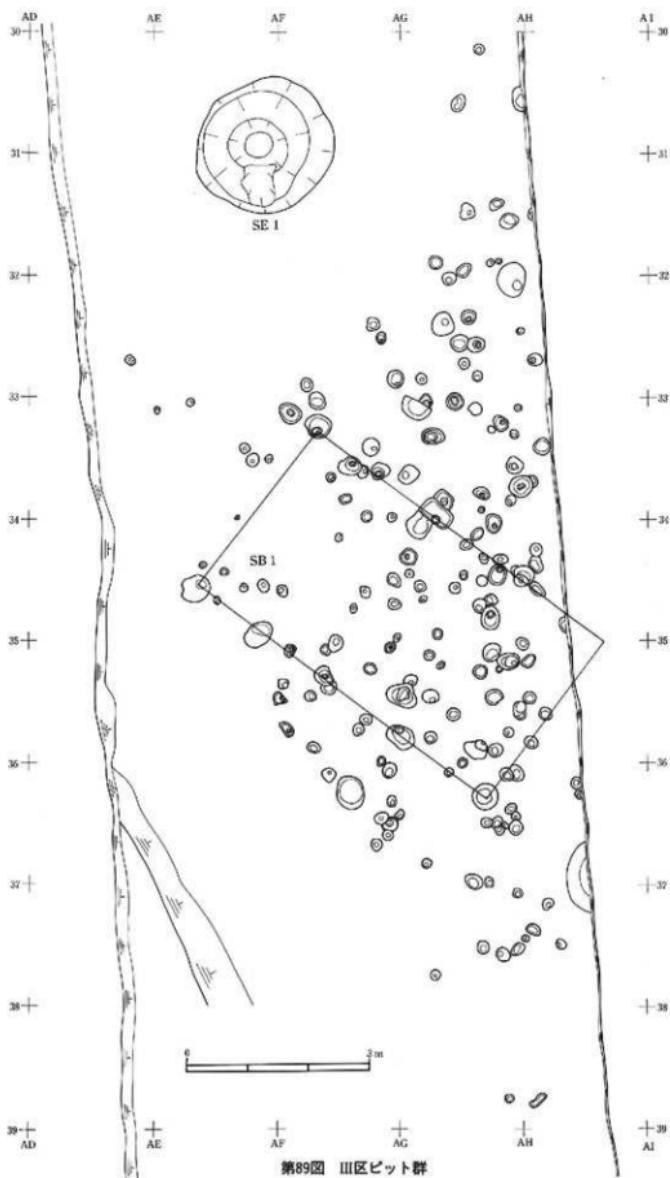
III区の井戸(SE 1)の南側に約170個程のピット群を検出した。これらのピット群のなかには柱痕跡を確認出来るものもあり、配置等を検討した結果、1棟確認することが出来た。この掘立柱建物跡(SB 1)は、梁間1間(2.3m)、桁間4間(4.4m)の建物である。出土遺物には、柱穴掘方から若干ではあるが、近世の陶・磁器が出土しており、掘立柱建物跡(SB 1)の年代は近世と考えられる。

4 1・2層出土遺物

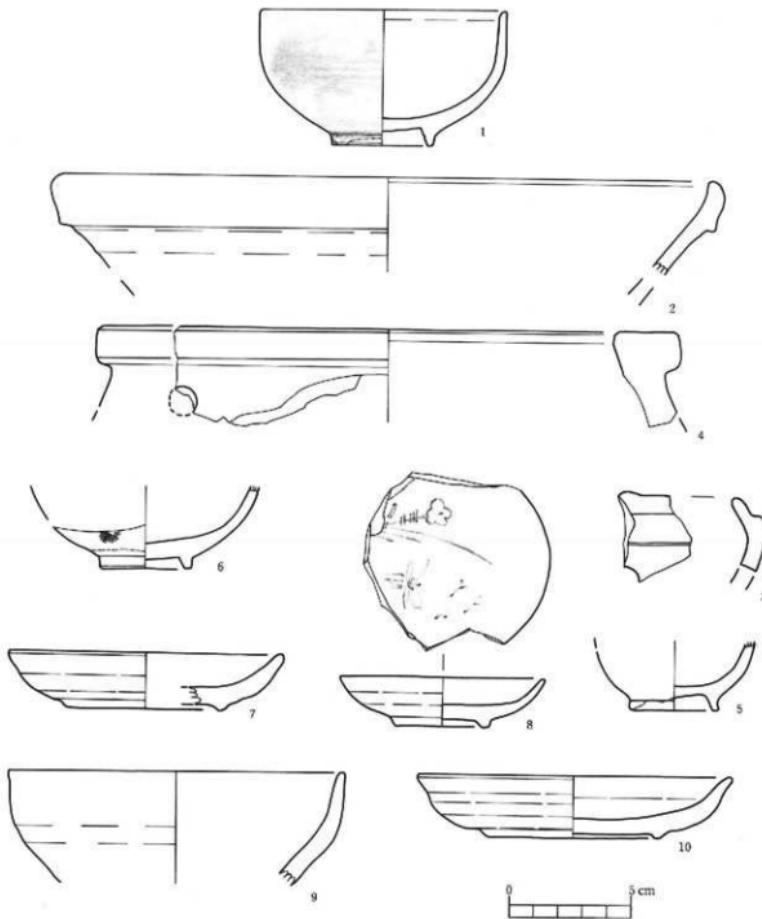
縄文土器以外の主な出土遺物である陶磁器について第90・91図に図示した。90図5は青磁の蓮弁文碗で中国龍泉窯系のもので、13世紀後半から14世紀前半のものである。図示していないが他に中世陶器の破片が数点出土している。調査区では中世の遺構を検出してないが周辺に中世に係わる遺構が存在する可能性がある。90図9は完形の尿瓶である。地元の堤築で19世紀のものかと考えられる。これら近世の陶磁器は、本調査で検出した掘立柱建物・墓塙群・井戸に関わるものと考えられる。



第88図 井戸跡平・断面図

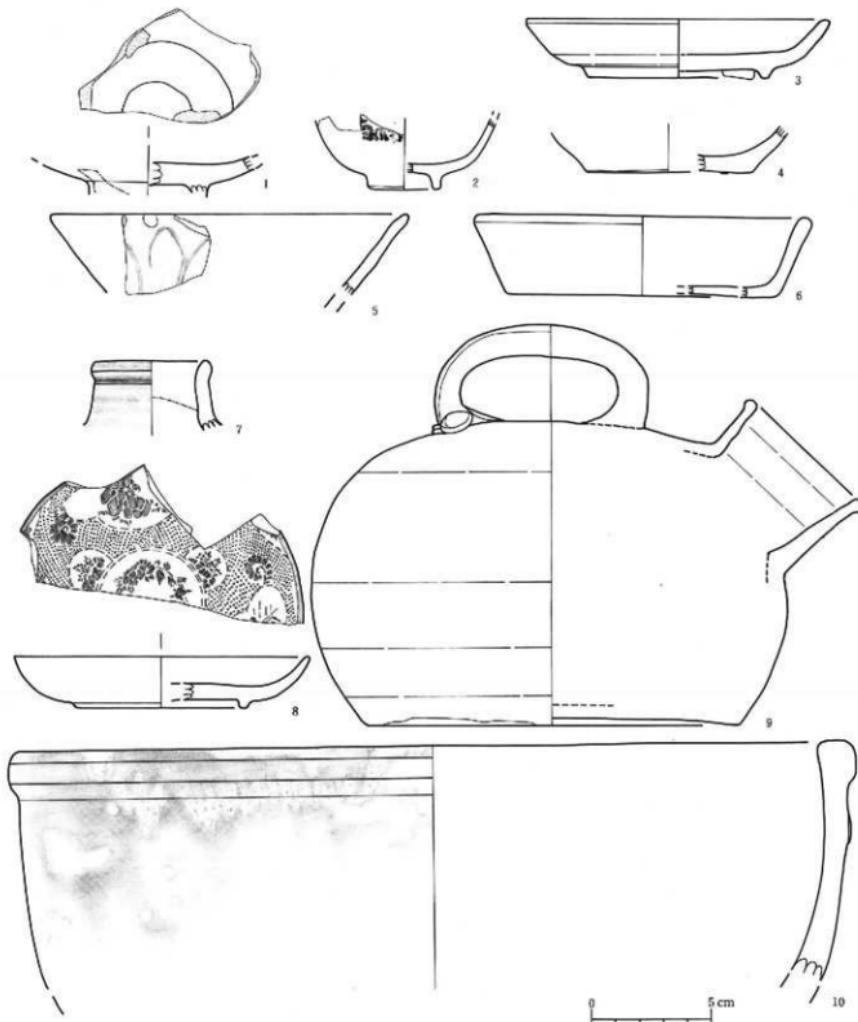


第89図 III区ビット群



番号	地区名	層位	器種	産地	製作年代	備考	写真番号	番号	地区名	層位	器種	産地	製作年代	備考	写真番号
1	AD-28	1層	灰陶碗	大連地區	13世紀	買入あり	344-3	6	AD-20	1層	灰陶盤	大連地區	13世紀~		
2	AG-29	1層	陶馬頭像	崖	13世紀	釉むらあり		7	AG-26	1層	灰陶馬頭像	黃島	13世紀~	買入あり	
3	AF-30	1層	陶器分類	所在地?	13世紀~	口縁部に蓋受けの跡あり		8	AE-31	1, 2層	灰陶盤	瀋陽地區	13世紀	買入あり	
4	AG-30	2層	甕か?	崖	13世紀?	有孔		9	AE-37	1層	帶柄灰陶盤	瀋陽	13世紀	單花式	
5	AG-30	1, 2層	口縁特徴	大連渤海	13世紀~			10	AE-37	1層	灰陶丸盤	大連	13世紀~	単花式	

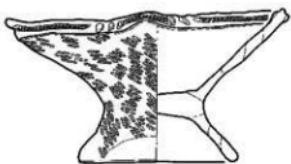
第90図 1・2層 出土遺物(1)



第91図 1・2層 出土遺物(2)

番号	地名	層	施	種	厚	地	製作年代	標	号	参考番号
1	—	表二	施田付	圓盤	11mm	中堅	南行町第一石器小窓对立點有			
2	AG-7	2層	施田付	圓盤	10mm	中堅	19世紀後半			
2	AF-8	2層	施田付	圓盤	11mm	中堅	19世紀後半			
4	AE-22	2層	土附土着	地元付	近似		西石内口出土有有。貢入有			
5	AG-27	1層	施田付	圓盤	10mm	中堅	19世紀後半			
6	AP-25	1層		圓盤	29mm	中堅	19世紀後半			
7	AG-27	1層	施田付(?)	圓盤	1mm	中堅	19世紀後半			
8	AE-24	1層	施田付	圓盤	1mm	中堅	19世紀後半			
9	AG-25A	2層	施田付	圓盤	19mm	中堅	19世紀後半	標無	光澤あり	344-1
10	—		施田付	圓盤	19mm	中堅	19世紀後半	なまこ物		

第VI章 考察



第VI章 考 察

第1節 第II群土器の編年的位置

1 県内出土土器群との比較

第I群土器についてはすでに編年的位置付けを第IV章で行った。ここでは遺物包含層から大量に出土した第II群土器の編年的位置付けについて検討してみたい。

県内で第II群土器と類似する土器群が出土しているのは、登米郡南方町青島貝塚（加藤・後藤他：1975）・同町長者原貝塚（南方町教委：1978）・同郡中田町浅根貝塚（東北大文学部：1982）・遠田郡小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1977）・同郡涌谷町長根貝塚（宮城県教委：1969）・黒川郡大郷町大松沢貝塚（加藤孝：1956・東北大文学部：1982・宮城県教委：1982）・同郡大和町勝負沢遺跡（宮城県教委：1982）・宮城郡七ヶ浜町大木畠貝塚（加藤孝：1956・宮城県教委：1982）・同郡松島町幡谷貝塚（東北大文学部：1982）・塩釜市桂島貝塚（加藤・後藤：1966、宮城県教委：1982、丹羽：1989）・仙台市太白区山口遺跡（仙台市教委：1981）同市太白区上野遺跡（仙台市教委：1989）・柴田郡川崎町中ノ内B遺跡（宮城県教委：1987）・刈田郡七ヶ宿町小柴川遺跡（宮城県教委：1987）等から出土している。これらのなかで比較的まとまって出土している遺跡のものを中心検討してみたい。

【青島貝塚出土土器群】（加藤・後藤他：1975）

登米郡南方町の青島貝塚は、昭和44・45年に南方町史編纂事業の一環として調査がおこなわれ、中期中葉の土器群がまとまって出土した。中期中葉の第6類土器・第7類土器・第8類土器を中心に検討する。

第6類土器は、Eトレンチ3・4層、FトレンチI～III区4層、V～VII区5層から比較的まとまって出土している。深鉢形土器は、底部から口縁部にかけて直線状または、「く」の字状に外反するもの、胸部でわずかに膨らみ頸部でしまり口縁部が外反するもの、口縁部が原始的なキャリバー状のものがある。浅鉢形には、口縁部が直行するものと、外傾するものがあり、これら第6類は、大木8a式としている。

第7類土器は、FトレンチI～III区から比較的特徴的に出土している。深鉢形土器のみであるが、胸部でわずかに膨らみ口縁部近くで直立もしくは外反する土器群である。第7類土器は、大木8a式から大木8b式の過渡的なものと位置付けている。

第8類土器の深鉢形土器は、aキャリバーを呈する土器群と、b胸部でおおきく膨らみ頸部でしまり口縁部が外反する土器群がある。深鉢形土器は口縁部が内反している。これら第8類土器は、大木8b式に位置付けられている。

青島貝塚第6類と高柳遺跡の深鉢形土器の器形・文様帶構成の分類と比較すると、口縁部が内彎し、キャリバー形（A類）には、口縁部と胸部文様帶が単帯・頸部が地文帶（A3類）のもの、口縁部文様帶が複帯・頸部が地文帶（A11類）がある。口縁部が外傾するもの（D類）には、口縁部文様帶が単帯・頸部が地文帶・胸部が単帯（D3類）のものと、口縁部文様帶が単帯・胸部地文帶（D6類）のもの、口縁部文様帶が複帯・頸部無文帶・胸部文様帶が複帯（該当なし）のものとがある。

口縁部文様帶は、狭小な口縁部文様帶（A群）で、押圧繩文系継位押圧繩文（E）のものと、口縁部文様帶が複帯（B群）で、沈線系・押圧繩文系（H）のもの、口縁部文様帶が単帯（D群）で、隆線系直折隆線文（N）のものがある。

胸部文様帶には、曲流横位溝巻沈線文（a）と横位区画内展開隆線文（d）がある。浅鉢形土器は、口縁部がやや立ち上がる（B類）で、狹小な口縁部文様帶をもち、胸部が無文（B I類）である。

第7類と比較すると、胸部から口縁部に大きく内彎する（G類）は、口縁部文様帶が単帶・胸部が複帶（該当なし）である。

口縁部文様帶は、狹小な口縁部文様帶（A群）で、胸部文様帶は縱・横位区画内展開隆線文（P）である。

第8類と比較すると、口縁部が内彎し、キャリバー形（A類）には、口縁部文様帶が単帶・頸部が無文帶・胸部が単帶（A1類）と、口縁部文様帶・胸部文様帶とも単帶（A4類）のもの、口縁部文様帶が単帶・胸部地文帶のもの（A5類）がある。

口縁部文様帶は、隆線系単帶（D群）で波状連続横位溝巻隆線文（L）のものや、隆沈線系単帶（E群）で連続横位溝巻沈線（R）のもの、沈刻状隆沈線系単帶（F群）で横位沈刻状隆沈線文（V）のものがある。

胸部文様帶は、曲流横位溝巻沈線文（a）である。

鉢形土器は、口縁部が大きく内彎する（A類）で、口縁部文様帶を持ち胸部が無文（A I類）である。

青島貝塚出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較の結果を下にまとめた。

青島 貝塚	6類		7類	8類		
	深鉢	浅鉢		深鉢	深鉢	鉢
高柳 遺跡 分類	A群 D 3類・A群 D5類・B群1類 (Ea) (E地) (Hq)	B I類	A群 G-1類 (Ap)	D群 A5類・E群 A4類 (L地) (Ra)	F群 A1類・ (V-)	A I類
	B群 A11類・D群 A3類 (H地) (Nf)					

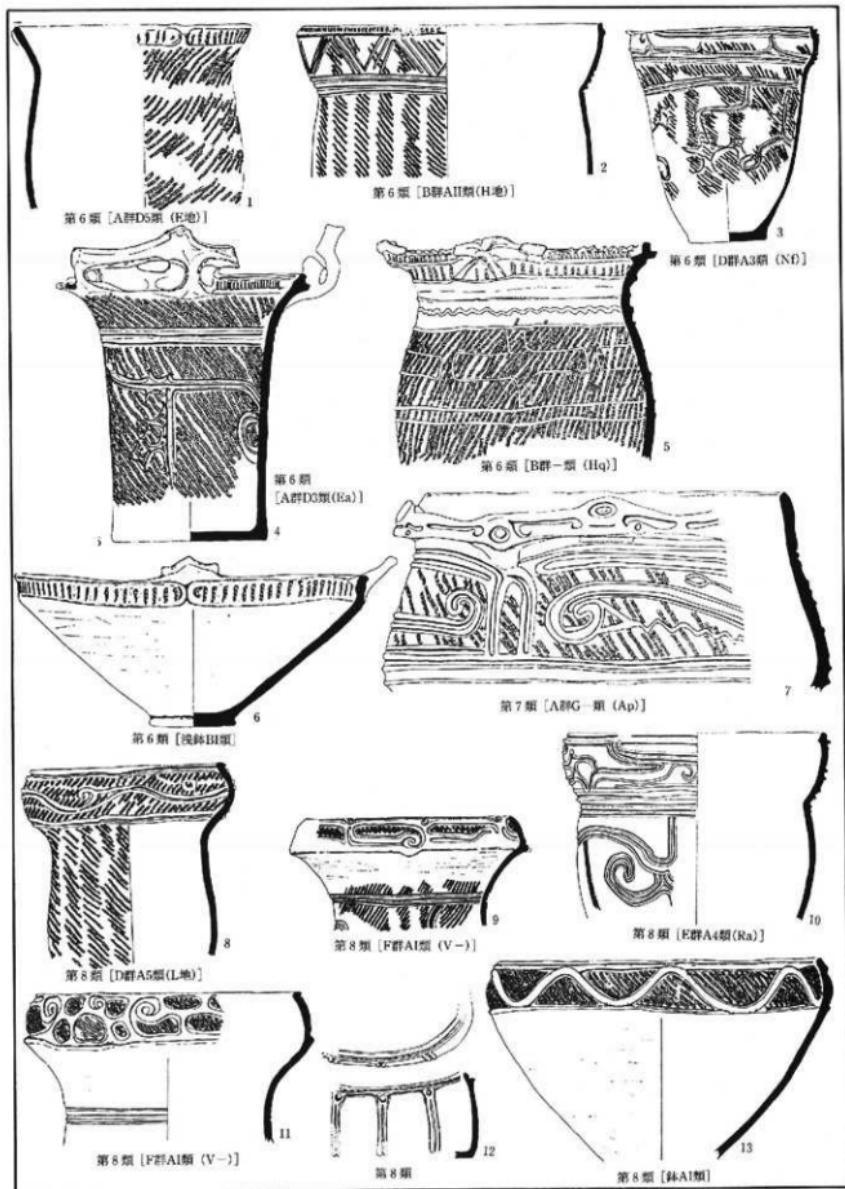
【長者原貝塚出土土器群】（南方町教委：1978）

登米郡南方町の長者原貝塚では第1号住居跡からまとまった資料が出土している。第1号住居跡の堆積土は第I層と第II層以下とに大別される。第II層以下出土の土器群（第I類）の深鉢形土器は、a. 口唇部に文様帶を持つもの、b. 口縁部文様帶を持ち胸部が地文のみのもの、c. 口縁部と胸部に文様帶を持つもの、d. 地文だけのものとに細分され、浅鉢形土器はa. 口唇部に文様帶を持つもの、b. 口縁部に文様帶をもつもの、c. 口縁部と口縁部内面に文様帶を持つもの、d. 口縁部内面に文様帶を持つもの、e. 文様帶を持たない無文のものとに細分される。第I層出土の土器は少量であるが、いずれも深鉢形土器で肥厚する口唇部に隆沈線によって横位溝巻文が施文されているもの（第II類）がある。第1号住居跡より古い2a住居跡の床面からは口縁部文様帶を持ち胸部が地文のものと、口縁部文様帶と胸部文様帶を持つ深鉢形土器と、文様帶を持たない無文の浅鉢形土器が出土している。第2a住居跡より古い、第2b住居跡の床面からは口縁部文様帶と胸部文様帶を持つ土器が発見されている。

第1号住居跡の第I類と第2a・b住居跡床面出土の第1群は、登米郡南方町青島貝塚第6類の土器群と類似しているので大木8a式としている。ただし青島貝塚第6類は口縁部に押圧繩文を多用し、胸部に隆線によって文様を施文するものが多いが、口縁部文様帶・胸部文様帶とも沈線による文様が多いことから、青島貝塚第6類より新しい要素をふくんでいるので、大木8a式の新しい段階のものとしている。

また第1号住居跡の第II類と第4住居跡床面出土の第2群は、黒川郡大松沢貝塚出土土器群や青島貝塚第8類の土器群と類似しているので大木8b式としている。

資料としてのまとまりがある第1群（第1号住居跡第I類のみ）と、高柳遺跡出土土器群と比較検討してみる。深鉢形土器の器形・文様帶構成を比較すると、口縁部が内彎しキャリバー形（A類）には、口縁部文様帶と胸部文



第92図 青島貝塚出土土器群（加藤・後藤他：1975）

様帶とも単帶・頭部地文帶の（A3類）と、口縁部文様帶と脣部文様帶が単帶（A4類）のもの、単帶の口縁部文様帶・脣部地文帶（A5類）のもの、口縁部～脣部が地文のみのもの（A18類）がある。口縁部が内側し脣部の屈曲の緩やかな（B類）も、口縁部文様帶と脣部文様帶とも単帶・頭部地文帶の（B3類）と、単帶の口縁部文様帶・脣部地文帶（B5類）と、口縁部文様帶と脣部文様帶がともに複帶（B10類）のもの、複帶の口縁部文様帶・脣部地文帶（B11）がある。脣部から口縁部にかけて外傾するもの（E類）は、単帶の口縁部文様帶・脣部地文帶（E5類）である。脣部から口縁部が大きく内側する（G類）は、口縁部～脣部が地文のみのもの（A18類）である。

口縁部文様帶には、狭小な口縁部文様帶（A群）で、横位隆線文（D）・縱位押圧繩文（E）・刺突文（G）のものと、口縁部文様帶が複帶（B群）で、押圧繩文・刺突文系（H）のもの、口縁部文様帶が単帶（D群）で、直線状横縫溝巻隆線文（K）・直折沈線文（N）・横位波状隆線文（O）のもの、口縁部文様帶が突起付無文のもの（I群）で、突起付無文帶（X）のもの、口縁部文様帶が地文（K群）のものがある。

脣部文様帶には、曲流横位溝巻沈線文（a）・連結直折溝巻沈線文（d）・連結直折沈線文（f）・縱位区画内展開沈線文（h）・縱横位区画内展開沈線文（i）・横位区画沈線文のみ（k）のものがある。

浅鉢形土器には、口縁部が大きく内側する（A類）で、幅の広い公園帶を持ち脣部地文のもの（A III類）と、口縁部がやや立ち上がる（B類）で、狭小な口縁部文様帶を持ち脣文が無文（B I類）と、狭小な口縁部文様帶を持ち脣部が地文（B II類）のもの、口縁部・脣部とも無文（B III類）のものがある。また、脣部から口縁部へとそのまま外傾するもの（C類）は、狭小な口縁部文様帶を持ち脣部が無文（C I類）である。

これら長者原貝塚出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較を下にまとめた。

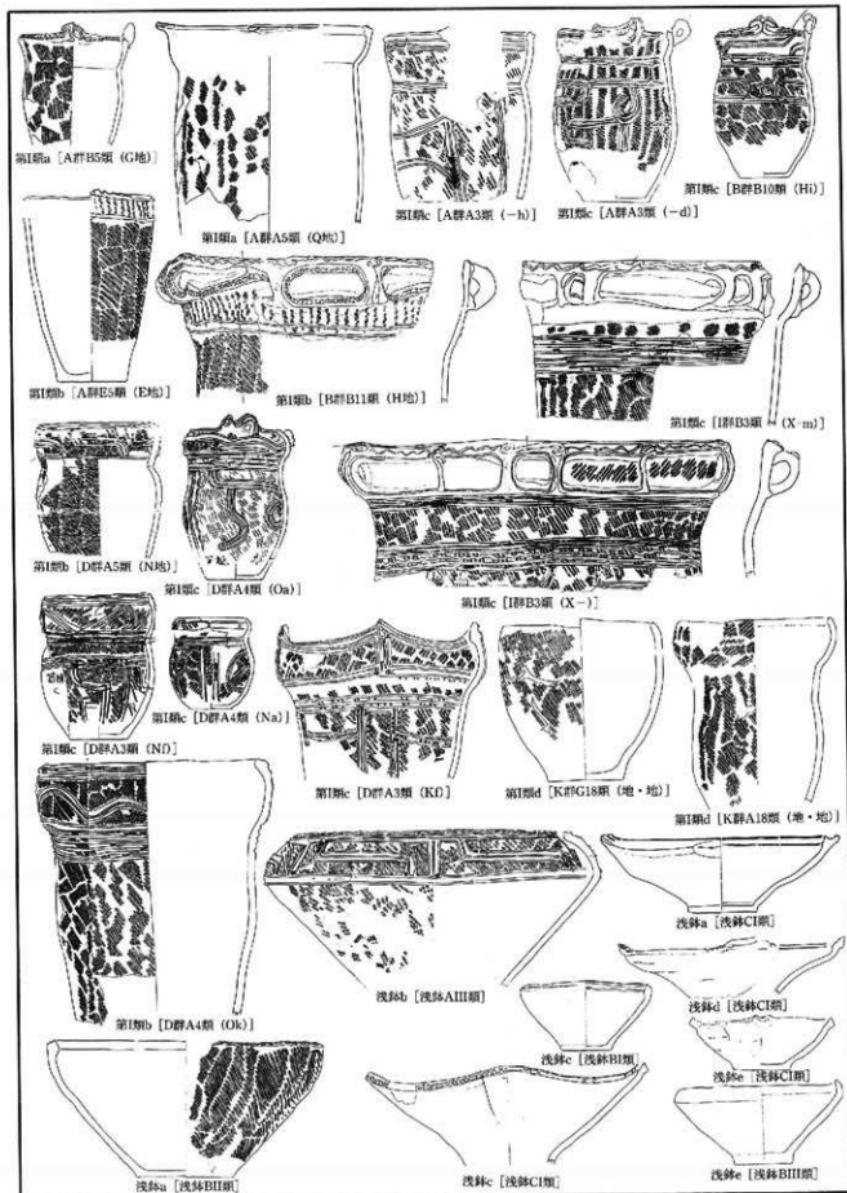
長者原 貝塚	深鉢				
	第I a	第I b	第I類 c	第I d	
高柳遺 跡分類	A群 A5類 (D地)	A群 E5類・D群 A4類 (E地) (Ok)	A群 A3類・D群 A3類・D群 A4類 (-h) (Nf) (Na)	K群 A18類 (地地)	
	A群 B5類 (G地)	B群 B11群・D群 A5類 (H地) (N地)	A群 A3類・D群 A3類・I群 B3類 (-d) (Kf) (X-) B群 B10類・D群 A4類 (Hi) (Oa)	K群 G18類 (地地)	

長者原 貝塚	浅鉢				
	浅鉢 a	浅鉢 b	浅鉢 c	浅鉢 d	浅鉢 e
高柳遺 跡分類	B II類 C I類	A III類 C I類	B I類 C I類	C I類 B III類	

【上野遺跡出土土器群】（仙台市教委：1989）

仙台市太白区の上野遺跡は、送電用鉄塔の改築工事のため、昭和62年調査が行われた。調査の結果、中期中葉の土壌23基と多数の遺物が発見された。各土壌の出土土器を、高柳遺跡の分類をあてはめてみることにする。

深鉢形土器の器形・文様帶構成では、口縁部が内側しキャラバ一形（A類）のものには、単帶の口縁部文様帶・頭部無文帶・単帶の脣部文様帶（A1類）のみである。口縁部が内側するが、脣部の屈曲の緩やかなもの（B類）には、単帶の口縁部文様帶・頭部無文帶・単帶の脣部文様帶（B1類）と、単帶の口縁部文様帶・脣部無文帶（B6類）の



第93図 長者原貝塚出土土器群（南方町教委：1978）

もの、複帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胸部文様帯 (B7 類) のもの、複帯の口縁部文様帯・副部地文帯 (B11 類) のものがある。胸部が外傾し、口縁部がやや内彎 (C 類) のものには、単帯の口縁部文様帯・単帯の胸部文様帯 (C4 類) がある。口縁部が外傾 (D 類) するものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胸部文様帯 (D1 類) と、単帯の口縁部文様帯・胸部地文帯 (D5 類) のものと、口縁部文様帯と胸部文様帯が接続する (D13 類) ものがある。胸部から口縁部にかけて外傾 (E 類) するものには、口縁部文様帯と胸部文様帯が接続する (E13 類) ものがある。口縁部が直立 (F 類) するものには、複帯の口縁部文様帯・副部地文帯 (F11 類) のものがある。胸部から口縁部が大きく内彎 (G 類) するものには、単帯の口縁部文様帯・胸部地文帯 (G5 類) のものと、地文のみ (G18 類) がある。

口縁部文様帯には、狭小な口縁部文様帯 (A 群) で、横位沈刻状渦巻沈線文 (A)・縦位短沈線文 (B) のもの口縁部文様帯が複帯 (B 群) のもの、口縁部文様帯が単帯で沈刻状降沈線系 (F 群) のもの、口縁部文様帯と胸部文様帯が連結 (G 群) するもの、横位連続横円文 (H 群) のもの口縁部文様帯が地文・無文 (K 群) とがある。

胸部文様帯は、曲流横位渦巻沈線文 (a)・曲流横位変形渦巻沈線文 (b)・連結曲流渦巻隆沈線文 (v)・口・胸部連結曲流渦巻沈線文 (y)・口・胸部連結曲流横位渦巻隆沈線文 (z) がある。

鉢形土器には、口縁部が大きく内彎する (A 類) のものと、口縁部がやや立ち上がる (B 類) のものとがあるが、A 類は口縁部文様帯と胸部文様帯が接続して展開しており、B 類も口縁部文様帯と胸部文様帯を持っておりいずれも高柳遺跡には類例がない。

浅鉢形土器は、胸部から口縁部へとそのまま外傾する (C 類) ので、狭小な口縁部文様帯をもち胸部が無文 (C I 類) である。

これら上野遺跡出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較を下にまとめた。

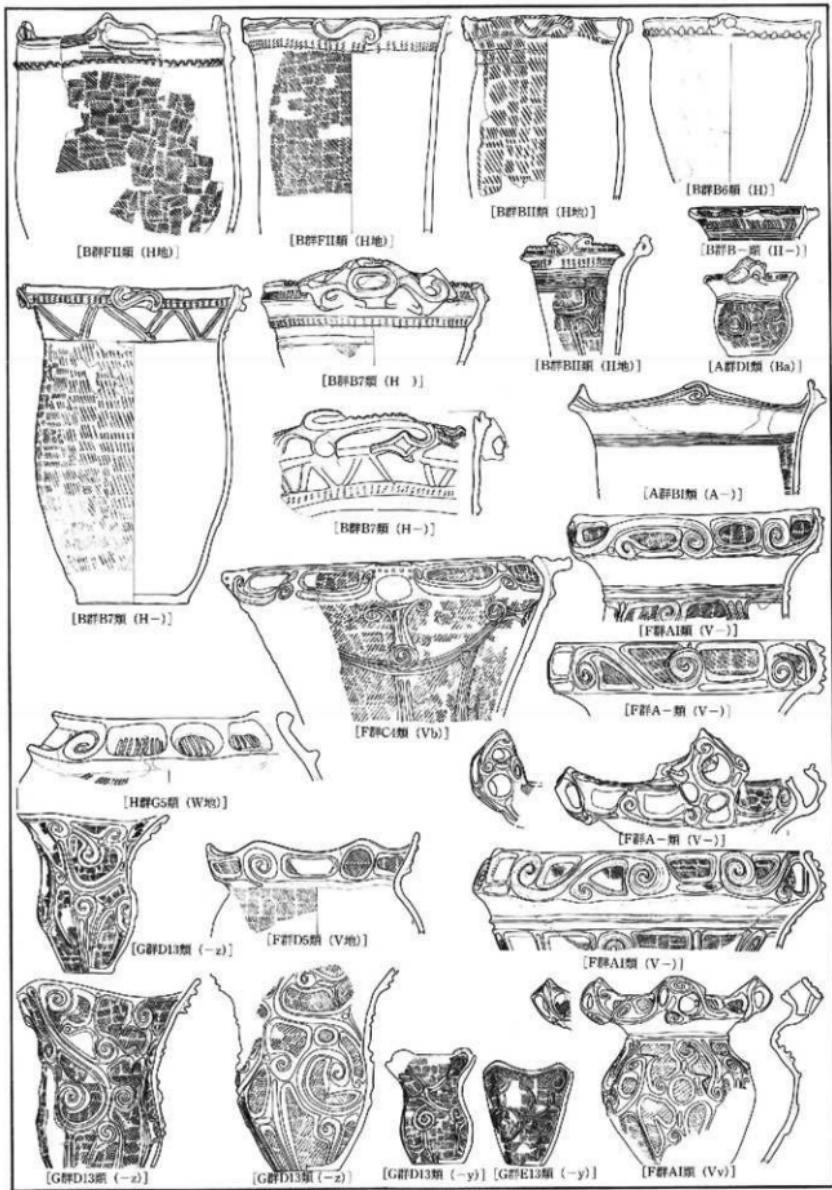
上野遺跡 分類	深 鉢						鉢	浅鉢
	A 群 B1 類	B 群 B7 類	F 群 A1 類	F 群 C4 類	G 群 D13 類	K 群 G18 類		
高柳遺跡 分類	(A-)	(H-)	(Vv)	(Vb)	(-y)	(地地)	A-類	C I 類
	A 群 D1 類	B 群 B11 類	F 群 A1 類	F 群 D5 類	G 群 E13 類		B-類	
	(Ba)	(H 地)	(V-)	(V 地)	(-y)			
	B 群 B6 類	B 群 F11 類	F 群 A-類	G 群 D13 類	H 群 G5 類			
	(H 無)	(H 地)	(V-)	(-z)	(W 地)			

【大木圓貝塚出土土器群】(加藤孝: 1956・宮城県教委: 1982)

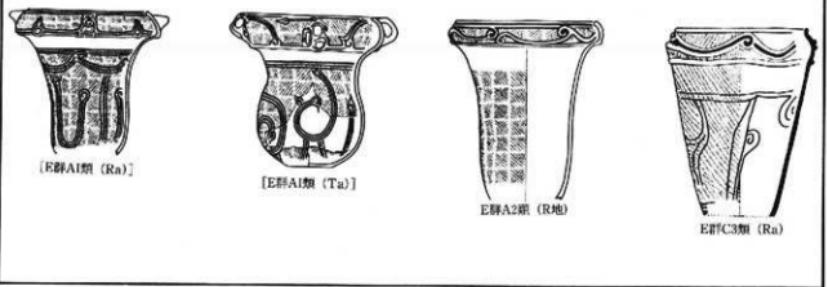
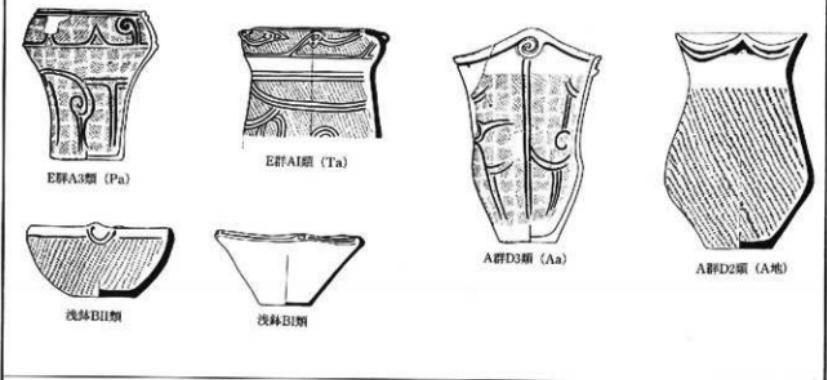
加藤孝氏の報告 (加藤: 1956) に基づき観察と検討を行った資料 (宮教委: 1982) を、高柳遺跡出土土器群と比較検討してみる。

深鉢形土器の器形・文様帯構成では、口縁部が内彎しキャリバー形 (A 類) のものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胸部文様帯 (A1 類) と、単帯の口縁部文様帯・頸部地文帯・単帯の胸部文様帯 (A3 類) がある。口縁部が外傾する (D 類) には、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・胸部地文帯 (D2 類) のものと、単帯の口縁部文様帯・頸部地文帯・単帯の胸部文様帯 (D3 類) のものがある。口縁部文様帯は、狭小な口縁部文様帯 (A 群) で、横位沈刻状渦巻沈線文 (A) のものと、口縁部文様帯が隆沈線系単帯 (E 群) で、独立横位渦巻隆沈線文 (P) と、小単位連続横位渦巻隆沈線文 (T) がある。胸部文様帯には、曲流横位渦巻沈線文 (a) がある。

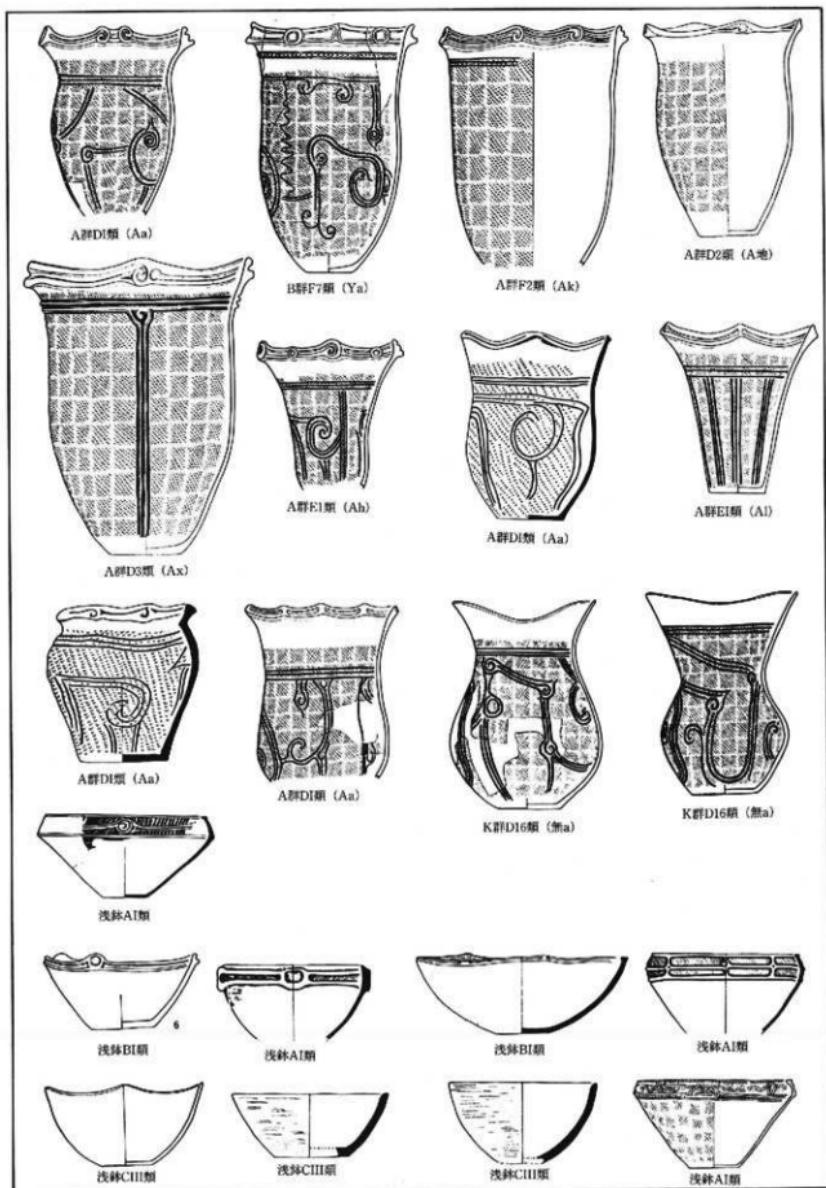
浅鉢形土器は、口縁部がやや立ち上がる (B 類) で、狭小な口縁部文様帯をもち胸部が無文 (B I 類) と、狭小な口縁部文様帯をもち胸部が地文 (B II 類) がある。これらを下にまとめた。



第94図 上野遺跡出土土器群(1) (仙台市教委：1989)



第95図 上野遺跡出土土器群(2)・大木圓貝塚出土土器群・大松沢貝塚出土土器群(1) (宮城県教委 : 1982)



第96図 大松沢貝塚出土土器群(2)（宮城県教委：1982）

大木沢貝塚	深鉢				浅鉢
高柳遺跡 分類	A群D2類・A群D3類・E群A1類・E群A3類 (A地)	(Aa)	(Ta)	(Pa)	B1類・BII類

【大松沢貝塚出土土器群】(加藤孝: 1956・東北大学文学部: 1982・宮城県教委: 1982)

加藤孝氏の報告(加藤: 1956)に基づき観察と検討を行った資料(宮教委: 1982)を、高柳遺跡出土土器群と比較検討してみる。

深鉢形土器の器形・文様帯構成では、口縁部が内彎しキャリバー形(A類)のものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胸部文様帯(A1類)と、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・胸部地文帯(A2類)がある。胸部が外傾し口縁部がやや内彎(C類)するものには、単帯の口縁部文様帯・頸部地文帯・単帯の胸部文様帯(C3類)のものがある。口縁部が外傾(D類)するものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胸部文様帯(D1類)と、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・胸部地文帯(D2類)と、単帯の口縁部文様帯・頸部地文帯・単帯の胸部文様帯(D3類)のもの、口縁部無文帯・単帯の胸部文様帯(D16類)がある。また、胸部から口縁部にかけて外傾(E類)するものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胸部文様帯(E1類)がある。口縁部が直立(F類)するものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・胸部地文帯(F2類)と、複帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胸部文様帯(F7類)がある。

口縁部文様帯には、狭小な口縁部文様帯(A類)で、横位沈刻状渦巻沈線文(A)のものや、複帯の口縁部文様帯(B群)や、口縁部文様帯が単帯の隆沈線系(E群)で、連結構渦巻隆沈線文(R)や小単位連結構横位渦巻隆沈線文(T)のものがある。口縁部文様帯が無文(K群)のものもある。

胸部文様帯には、曲流横位渦巻沈線文(a)、縱位区画内展開沈線文(h)、横位区画沈線文のみのもの(k)、縱横位区画沈線文のみのもの(l)、縱横位区画隆沈線文のみのもの(x)がある。

浅鉢形土器は、口縁部が大きく内彎する(A類)もので、幅の広い口縁部文様帯をもち胸部が無文のもの(AI類)、幅の広い口縁部文様帯をもち胸部が地文のもの(AIII類)と、口縁部がやや立ち上がる(B類)もので、狭小な口縁部文様帯をもち胸部が無文のもの(BI類)と、胸部から口縁部へとそのまま外傾するもの(C類)もので、口縁部と胸部が無文のもの(CIII類)がある。

これら、大松沢貝塚出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較を下にまとめた。

大松沢 貝塚	深鉢					浅鉢	
高柳遺跡 分類	A群D1類・A群D3類・A群E1類・B群F7類・E群A1類・E群C3群 (Aa)	(Ax)	(Ah)	(Ya)	(Ta)	(Ra)	AI類・B I類
	A群D2類・A群E1類・A群F2類・E群A1類・E群A2類・K群D16類 (A地)	(Al)	(Ak)	(Ra)	(R地)	(無 a)	A III類・C III類

【勝負沢遺跡出土土器群】(宮城県教委: 1982)

黒川郡大利町の勝負沢遺跡は、東北縦貫自動車道の建設に伴い昭和47年に宮城県教育委員会が調査をおこなった。調査の結果、縄文時代中期の大木8a式期の堅穴住居跡2軒と、遺物包含層、埋設土器遺構2基が発見されている。出土した遺物は少量の第I群土器と、遺物包含層から主体的な出土した第II群土器がある。第I群土器は大木8b式

に、第II群土器は大木8b式に位置付けられている。ここでは第II群土器を中心に比較検討してみることにする。第II群土器は、器形と文様帶の配置・文様の種類から以下のように分類されている。

<p>[深鉢形土器]</p> <p>深鉢 A：口縁部が内彎し、キャリバー形のもの</p> <p>第1類：口縁部の口唇部分が肥厚するもの</p> <p>第2類：口縁部が内傾するもの</p> <p>a類：非連結・大単位連結文様</p> <p>b類：小単位一部連結文様</p> <p>c類：小単位各部分連結文様</p> <p>第3類：口縁部が直立気味のもの</p> <p>深鉢 B：口縁部が内彎し、胴部の屈曲が緩やかなもの</p> <p>第1類：口縁部から胴部へ連続する文様をもつもの</p> <p>a類：下垂渦巻文様</p> <p>b類：各部分連結曲流渦巻文様</p> <p>第2類：口縁部地文帯と胴部文様帯をもつもの</p> <p>深鉢 C：口縁部が直立ないしは外傾するもの</p> <p>第1類：横状把手を連結させているもの</p> <p>第2類：口縁部文様帯と胴部文様（地文・無文）帯からなるもの</p> <p>a類：横位渦巻文様</p> <p>b類：変形横位渦巻文様</p> <p>第3類：口縁部地文帯と胴部文様帯からなるもの</p> <p>第4類：口縁部無文帯と胴部文様帯からなるもの</p> <p>a類：縦位沈線文様</p> <p>b類：連結曲流渦巻文様</p> <p>第5類：口縁部から胴部に連続する文様帯をもつもの</p> <p>a類：非連結・一部連結曲流渦巻文様</p> <p>b類：各部分連結曲流渦巻文様</p>	<p>深鉢 D：口縁部が外反するもの</p> <p>第1類：口縁部の口唇部分が強く肥厚するもの</p> <p>a類：縦位沈線文様</p> <p>b類：非連結・大単位連結曲流渦巻文様</p> <p>c類：小単位一部連結曲流渦巻文様</p> <p>第2類：口縁部が強く外反し、胴部が球形のもの</p> <p>第3類：口縁部が外反し、胴部が僅かに膨らむもの</p> <p>深鉢 E：地文のみのもの</p> <p>第1類：口縁部が直立ないしは外傾するもの</p> <p>a類：口縁部が2段肥厚するもの</p> <p>b類：口縁部が1段肥厚するもの</p> <p>c類：口縁部が単純口縁のもの</p> <p>第2類：口縁部が外反するもの</p> <p>a類：口縁部が単純外反のもの</p> <p>b類：口縁部が「く」の字状に外反するもの</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

これら各類型を、大木園貝塚・大松沢貝塚と比較した結果、4つのグループからなることを明らかにした。

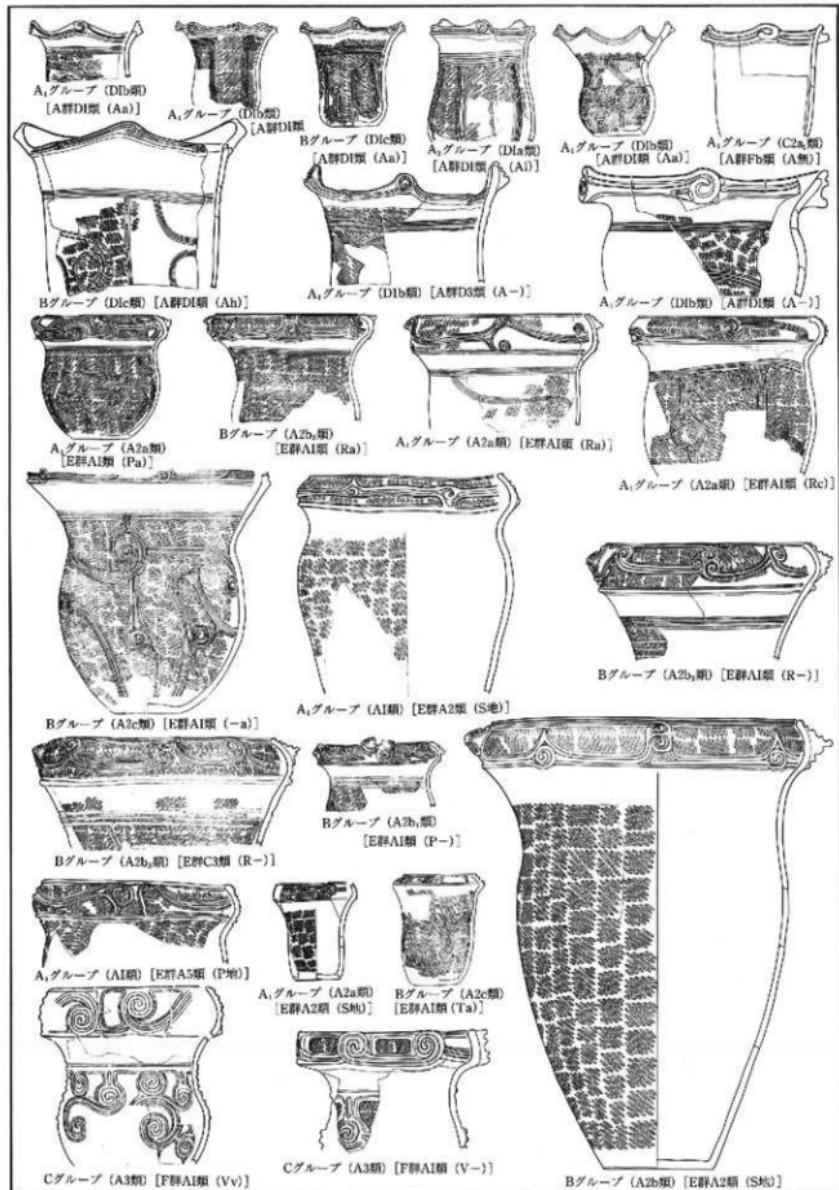
【A₁グループ】（大木園貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通するもの）

深鉢 A 第1類・第2a類・深鉢 C 第2a類・第2b類・深鉢 D 第1b類・浅鉢 A 第1a類

【A₂グループ】（大木園貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通するが文様表現技法が相違するもの）

深鉢 B 第2類・深鉢 C 第3類・第4a類・第5a類・深鉢 D 第1a類・第2類・深鉢 E 第1類・2類・浅鉢 B 第2類・第3類・樽・小把手付・脚台

【B グループ】（大木園貝塚・大松沢貝塚出土土器と器形・文様配置の点で共通するが、文様細部・文様表現技法等において相違するもの）



第97図 勝負沢遺跡出土土器群1(宮城県教委:1982)